栗林小学校校舎等建設事業等に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

栗林田中遺跡

—第一分冊—

二〇一九年三月　高松市教育委員会

高松市埋蔵文化財調査報告　第 201 集

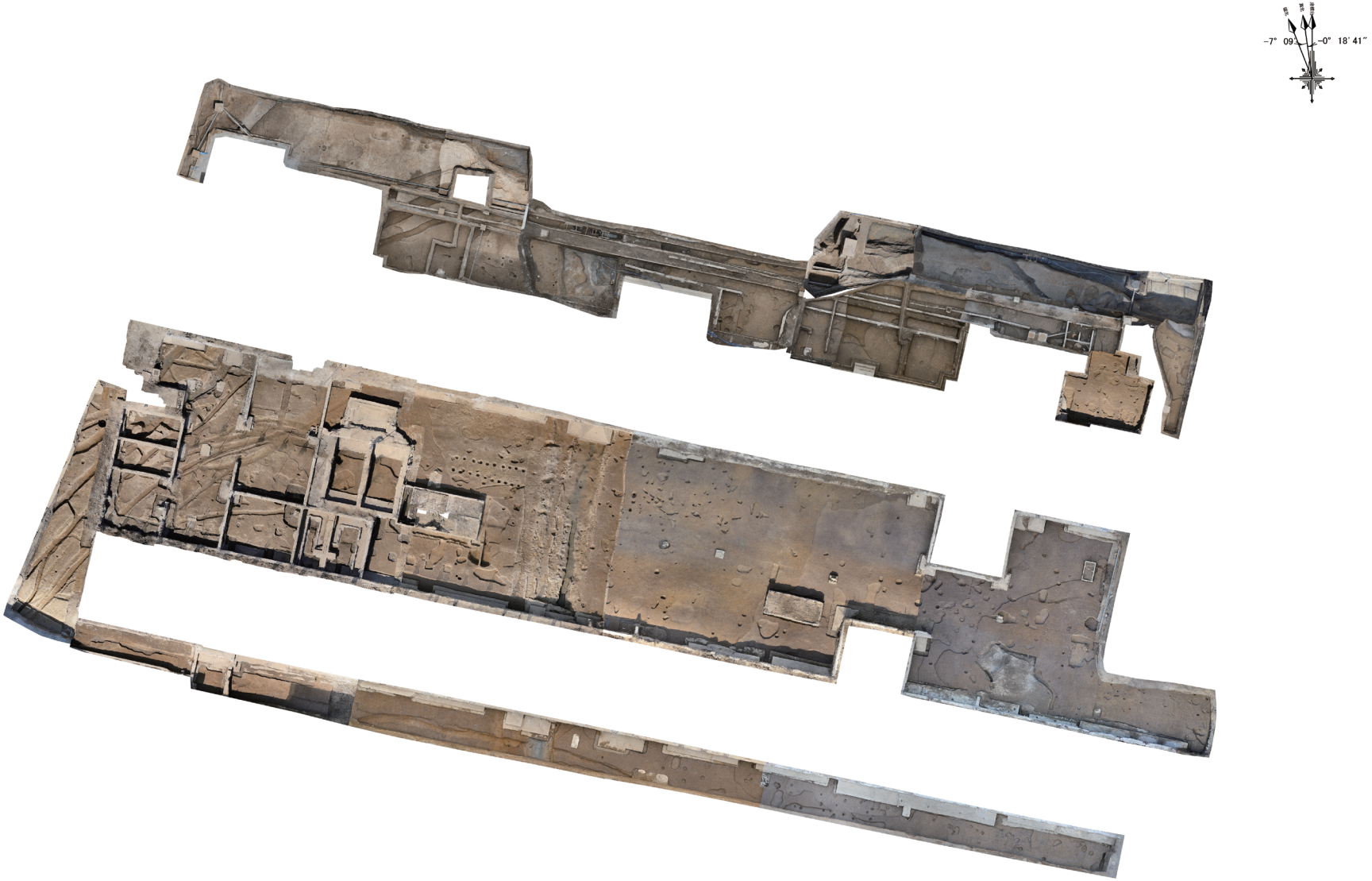
栗林小学校校舎等建設事業等に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

栗林田中遺跡

—第１分冊—

2019 年 3 月

高松市教育委員会



調査区全景（オルソ）

巻頭図版 1

巻頭図版 2

小型仿製鏡

出土遺物

例　　言

1　本書は、香川県高松市栗林町二丁目に所在する栗林田中遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、高松市立栗林小学校校舎等建設事業、市道拡幅工事、放課後児童クラブ棟建設工事に伴うものである。

3　調査は、高松市教育委員会が実施した。

4　調査期間と面積は以下のとおりである。

第１次調査：2014 年 6 月 17 日～ 2014 年 7 月 25 日（約 400 ㎡）（北西工区・第１～３調査区）
第２次調査：2015 年 1 月 28 日～ 2015 年 4 月 9 日（約 500 ㎡）（北東工区・第４～９調査区）
第３次調査：2015 年 9 月 4 日～ 2015 年 11 月 23 日（約 1480 ㎡）（中央工区・第 10 ～ 18 調査区）
第４次調査：2017 年 12 月 22 日～ 2017 年 12 月 28 日（約 300 ㎡）（第 19 調査区）
第５次調査：2018 年 4 月 16 日～ 2018 年 4 月 20 日（約 300 ㎡）（第 20 調査区）
第６次調査：2018 年 4 月 13 日～ 2018 年８月 22 日（約 750 ㎡）（工事立会）

5　現地調査は高松市創造都市推進局文化財課文化財専門員　舩築 紀子、
同課非常勤嘱託職員　磯崎 福子、上原 ふみ、中西 克也、森原 奈々が担当した。

6　本報告書の執筆・編集は、舩築 ・磯崎が行った。

7　現地調査と整理作業にあたっては、下記の方々の御協力と御指導・助言を賜った。記して感謝する次第である。（順不同・敬称略）

機関：香川県教育委員会
個人：大久保 徹也、森下 章司、吉田 広

8　以下の業務については、委託業務として行った。

基準点打設業務委託：株式会社 イビソク（第１～３次調査）
空中写真測量業務委託：株式会社 イビソク（第１～３次調査）
掘削業務委託：株式会社 増田地質工業（第１次調査）
東讃建設株式会社（第２次調査）
株式会社 北村組（第３次調査）
遺物写真撮影業務委託：西大寺フォト
自然科学分析：パリノ・サーヴェイ株式会社
出土鏡の保存処理及び実測：公益財団法人 元興寺文化財研究所
出土鉄器の保存処理及び実測：株式会社 文化財サービス

凡　例

1　本書で使用した座標系は平面直角座標系第Ⅳ系（世界測地系）、標高は東京湾平均海水面を基準とした。
土層注記及び遺物観察表（土器・土製品）の色調表示は、『新版　標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人 日本色彩研究書　色票監修）によった。

2　遺構名の表記は、原則として以下の規則により、調査区名－遺構種別（ＳＤ・ＳＫ・ ＳＸ・ＳＰ・柵列）個別番号の数字の組み合わせで統一した。個別番号に関しては、原則として調査当時に付した番号を踏襲している。

3　遺構種別については、付属施設を伴う柵列は漢字表記、単体の遺構はＳＤ（溝）、ＳＫ（土坑）、ＳＸ（性格不明遺構）、ＳＰ（ピット）といった遺構記号とする。
ex）. 第１調査区の溝１は「１－ＳＤ１」（１＋ＳＤ+1）。

4　出土遺物の実測図は、土器と瓦と木製品は 1/4、鉄器と石器は 1/2、鏡と銭貨は 1/1、遺構の縮尺については図面ごとに示している。また、写真図版における遺物の縮尺はすべて任意である。

本　文　目　次

第Ⅰ章　調査の経緯と経過 1
第１節　調査に至る経緯 1
第２節　調査の経過 1
第Ⅱ章　地理的環境・歴史的環境 5
第１節　地理的環境 5
第２節　歴史的環境 5
第Ⅲ章　調査の成果 9
第１節　調査の方法 9
第２節　基本層序 9
第３節　遺構と遺物 10
第Ⅳ章　科学分析 184
第１節　栗林田中遺跡の自然科学分析 184
第２節　栗林田中遺跡の自然科学分析（その 2） 194
第３節　小型仿製鏡　保存処理 204
第４節　小型仿製鏡　遺物報告書 206
第５節　小型仿製鏡　螢光 X 線分析について 207
第Ⅴ章　調査のまとめ 209
第１節　遺構の変遷 209
第２節　栗林田中遺跡の立地と土地利用 216
第３節　小型仿製鏡について 217

挿　図　目　次（1）

図 1　高松市域及び市域における位置図 5
図 2　栗林田中遺跡周辺遺跡分布図 7
図 3　調査区配置図（S ＝ 1 /1000） 8
図 4　基本層序模式図 9
図 5　第 1 面調査と工事立会調査図 11
図 6　2 - 水田畦畔　平面図 12
図 7　16- 水田畦畔　平・断面図 13
図 8　17- 水田水口　平面図 14
図 9　水田層　北東・北西と西側　出土遺物実測図 15
図 10　水田層　中央～東側　出土遺物実測図 16
図 11　水田層　出土石器・鉄器実測図 17
図 12　洪水砂層　出土遺物実測図 18
図 13　2 ・ 3 -SD13・17　平面図、遺物出土状況図 19
図 14　2 ・ 3 -SD13　断面図 20
図 15　3 -SD13　最下層出土遺物実測図 21
図 16　2 ・ 3 -SD13　出土遺物実測図 21
図 17　3 -SD13　出土木器実測図 22
図 18　4 ・ 6 ・ 8 -SD 1　平・断面図 23
図 19　8 -SD 1　断面図 24
図 20　4 ・ 8 -SD 1　上層出土遺物実測図 25
図 21　4 -SD 1　下層出土遺物実測図 25
図 22　4 ・ 7 -SD 1　出土遺物実測図 26
図 23　9 -SD80　平・断面図、遺物出土状況 27
図 24　9 -SD80　上層出土遺物実測図 29
図 25　9 -SD80　下層出土遺物実測図 29
図 26　9 -SD80　出土遺物実測図 30
図 27　9 -SD80　出土木製品実測図 30
図 28　12-SD 1 ・ 2 ・ 3　平・断面図 31
図 29　12-SD 2　中層出土遺物実測図 32
図 30　12-SD 2　出土遺物実測図 33
図 31　13-SD 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4　平面図 34
図 32　13-SD 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4　a 断面図 35
図 33　13-SD 1 ・ 2 ・ 3　b 断面図 36
図 34　13-SD 2　遺物出土状況図 37
図 35　13-SD 3　中層出土遺物実測図 37
図 36　13-SD 3　最下層出土遺物実測図 38
図 37　13-SD 3　出土遺物実測図 38
図 38　13-SD 1　出土遺物実測図 38
図 39　13-SD 2　上層出土遺物実測図 39
図 40　13-SD 2　中層出土遺物実測図① 40
図 41　13-SD 2　中層出土遺物実測図② 41
図 42　13-SD 2　下層・最下層出土遺物実測図 41
図 43　13-SD 4　出土遺物実測図 42
図 44　13-SD 2　出土遺物実測図 42
図 45　13-SD 1～3　上層出土遺物実測図 43
図 46　7 -SK63　平・断面図 46
図 47　10-SD 2　平・断面図 47
図 48　11-SD 1　平・断面図 47
図 49　14-SD 1 ・ 2　平・断面図 48
図 50　14-SD 1　出土遺物実測図 48
図 51　北西工区　近世出土遺物実測図 49
図 52　第 4 調査区　近世出土遺物実測図 49
図 53　第 1 調査区第 2 面　平面図 (S= 1 ／ 100) 52
図 54　第 2 ・ 3 調査区第 2 面　平面図 (S= 1 ／ 100) 53
図 55　1 -SD12　平・断面図 54
図 56　1 -SD11・SX13・14　平・断面図 55
図 57　2 -SX10　平面図 56
図 58　北西工区　奈良時代の遺構出土遺物実測図 57
図 59　2 -SD23　平・断面図 58
図 60　2 ・ 3 -SD25・26・29　平・断面図 59
図 61　2 ・ 3 -SD24・25・26・29・30　平面図 60
図 62　2 -SD29　出土遺物実測図 60
図 63　2 ・ 3 -SD13・17・24・26・29　断面図 61
図 64　2 -SD20　平・断面図、遺物出土状況図 62
図 65　2 -SK21・22・27・28　平・断面図 63
図 66　北西工区　弥生時代の遺構出土遺物実測図 64
図 67　北西工区の第 2 面包含層出土遺物実測図 64
図 68　第 4 調査区　平面図 (S= 1 ／ 100) 66
図 69　第 5 調査区第 2 面　平面図 (S= 1 ／ 100) 67
図 70　第 6 調査区　平面図 (S= 1 ／ 100) 68
図 71　第 7 調査区　平面図 (S= 1 ／ 100) 69
図 72　第 8 調査区　平面図 (S= 1 ／ 100) 70
図 73　第 9 調査区第 2 面　平面図 (S= 1 ／ 100) 71
図 74　第 15 調査区　平面図 (S= 1 ／ 100) 72
図 75　5 -SD24　平・断面図 73
図 76　5 -SK23・SX25・SK26　平・断面図 74
図 77　5 -SX30・SK33・40　平・断面図、水田層 75
図 78　5 -SK27・28・29　平・断面図 77
図 79　5 -SK36・37・39・SP38　平・断面図 78
図 80　6 -SK47・54・55・SD56　平・断面図 79
図 81　7 -SK61・SX62・SK63　平・断面図 80
図 82　5 -SK35・ 7 -SK69・ 8 -SK73・ 9 -SX85　平・断面図 81
図 83　9 -SK86・87・88・89・96・108・110・116・117・121
平・断面図 82
図 84　9 -SD95・SP111・SX112・SX114・SP115　平・断面図 83
図 85　9 -SK90・SX100・SP101・102・106・107　平・断面図 84
図 86　15-SK13・16・17・24・25　平・断面図 85
図 87　15-SP 1～5・SP 7～11　平・断面図 86
図 88　北東工区　弥生時代の遺構出土遺物実測図 87
図 89　第 4 調査区　包含層出土遺物実測図 87
図 90　北側工区　その他出土遺物実測図 88
図 91　第 10 調査区　平面図 (S= 1 ／ 100) 90
図 92　第 14 調査区　平面図 (S= 1 ／ 100) 91
図 93　第 19 調査区　平面図 (S= 1 ／ 100) 92
図 94　第 20 調査区　平面図 (S= 1 ／ 100) 93
図 95　10-SX 3　平面図、遺物出土状況図 95
図 96　10-SX 3　鏡出土状況図 95
図 97　10-SX 3　出土遺物実測図 96
図 98　10-SD 1　平・断面図 97
図 99　10-SD 1 ・24　出土遺物実測図 97
図 100　10-SD21・ 4　出土遺物実測図 97
図 101　10-SD24・ 5　平・断面図 98
図 102　10-SD 4(21)　平・断面図、遺物出土状況図 99
図 103　10-SD23・14-SD 7　平・断面図 100
図 104　14-SD 7　出土遺物実測図 101
図 105　基幹水路群　断面図 102
図 106　基幹水路群　平面図 103
図 107　14-SD 8 ・16　遺物出土状況図 104

挿　図　目　次（2）

図 108　14-SD 8　出土遺物実測図 104
図 109　14-SD15　出土遺物実測図 105
図 110　14-SD16　出土遺物実測図 105
図 111　10-SD 9・12・13・14・19・25・40・46　平・断面図 106
図 112　10-SD 7　平・断面図 108
図 113　14-SD12　出土遺物実測図 108
図 114　14-SD12・13・14・19-SD 7・8　平・断面図 109
図 115　10-SD15　平・断面図 110
図 116　14-SD 4・5・6　平・断面図 111
図 117　14-SD 6　出土遺物実測図 112
図 118　14-SD 5　出土遺物実測図 112
図 119　14-SD10・11・18・19　平・断面図 113
図 120　19-SD 1・4　平・断面図 116
図 121　19-SD 1　出土遺物実測図① 117
図 122　19-SD 1　出土遺物実測図② 118
図 123　19-SD 3　出土遺物実測図 118
図 124　19-SD 3・5　平・断面図 119
図 125　10-SD 8・34・14-SD17　平・断面図 120
図 126　10-SK28・29・30・39　平・断面図 121
図 127　10-SK42・43　平・断面図 123
図 128　19-SK 9・14-SP 3　平・断面図 123
図 129　10-SX35・36・38　平・断面図 125
図 130　20-SD 1・2・5・SP 3・4　平・断面図 126
図 131　20-SD 7・8・9・10　平面図、遺物出土状況図 127
図 132　20-SD 7・8・9・10　断面図 128
図 133　第 20 調査区　出土遺物実測図 129
図 134　立会調査　平・断面図 131
図 135　立会調査 - 溝２　出土遺物実測図 132
図 136　第 11 調査区　平面図 (S= 1／100) 134
図 137　第 12 調査区　平面図 (S= 1／100) 135
図 138　第 13 調査区　平面図 (S= 1／100) 136
図 139　11-SD 4・5・6　平・断面図 137
図 140　12-SD 5・6・10・11　平・断面図 138
図 141　11・12-SD 5・12-SD 6・10　出土遺物実測図 139
図 142　12-SD 8・SK 9・12・13・18・20・21　平・断面図 140
図 143　11-SD 3・SP 2・12-SK 4　平・断面図 141
図 144　13-SD20・21・SX52・60・63　平・断面図 142
図 145　13-SK 5・6・7・8・10・26・33・50・SP53　平・断面図 144
図 146　13-SK10　出土遺物実測図 145
図 147　13-SK40・47　平・断面図 145
図 148　第 16 調査区　平面図 (S= 1／100) 149
図 149　第 17 調査区　平面図 (S= 1／100) 150
図 150　第 18 調査区　平面図 (S= 1／100) 151
図 151　16-SX 3・4　平・断面図 152
図 152　16-SK 1・2・9・35・45・50・51・52・SX49　平・断面図 153
図 153　16-SK 5・6・7・8・10・15・20・46・48・SX47　平・断面図 155
図 154　16-SP22・44　平・断面図 157
図 155　第 16・17 調査区 SK・SX　出土遺物実測図 157
図 156　17-SK 1・9・41・42　平・断面図 158
図 157　17-SK11・14・20・25・30・38・39　平・断面図 159
図 158　17-SK40・45・SD13　平・断面図 161
図 159　17・18-SX101　平面図 162
図 160　17-SX101　出土遺物実測図 163
図 161　17-SK59・60・65・74・75　平・断面図 164
図 162　17-SK 2・3・4・5・6・7・8・10・12・15・17　平・断面図 165
図 163　17-SK29・43・SD16・SK73　平・断面図 168
図 164　17-SP36・47・51・71・72　平・断面図 169
図 165　18-SX10・19・20・31・37・38　平・断面図 171
図 166　18-SK 1・6・13・23・29・30・35・36・39・40　平・断面図 172
図 167　18-SK48・59・80・88・102・107　平・断面図 173
図 168　18-SK110・114・118・119・120・121　平・断面図 175
図 169　18-SX103　平・断面図 177
図 170　18- 柵列１～３　平・断面図 179
図 171　18-SP31・63・75・105・122　平・断面図 181
図 172　中央工区　出土遺物実測図 181
図 173　分析試料採取状況 185
図 174　植物珪酸体含量 187
図 175　土壌薄片画像 188
図 176　土壌薄片画像部分（その１） 189
図 177　土壌薄片画像部分（その２） 190
図 178　植物珪酸体 191
図 179　分析試料採取状況 195
図 180　分析地点の柱状図 196
図 181　植物珪酸体含量 197
図 182　土壌薄片画像 198
図 183　土壌薄片顕微鏡画像 (その１) 199
図 184　土壌薄片顕微鏡画像 (その２) 200
図 185　ボーリング柱状図 201
図 186　植物珪酸体 202
図 187　栗林田中遺跡出土小型仿製鏡の分析箇所（Ａ、Ｂ：XRF、Ｃ：拡大像） 207
図 188　鏡面付着有機物（分析箇所Ｃ）の拡大像 207
図 189　小型仿製鏡（分析箇所Ａ）の蛍光Ｘ線分析スペクトル 208
図 190　小型仿製鏡（分析箇所Ｂ）の蛍光Ｘ線分析スペクトル 208
図 191　変遷図（弥生時代前期） 210
図 192　変遷図（弥生時代後期） 211
図 193　変遷図（古墳時代） 212
図 194　変遷図（奈良時代） 213
図 195　変遷図（中世） 214
図 196　変遷図（近世） 215
図 197　遺跡の立地と古・高松湾と周辺遺跡の位置図 216

挿　表　目　次

表１　植物珪酸体含量 …… 186
表２　植物珪酸体含量 …… 197
表３　土器観察表（１） …… 218
表４　土器観察表（２） …… 219
表５　土器観察表（３） …… 220
表６　土器観察表（４） …… 221
表７　土器観察表（５） …… 222
表８　土器観察表（６） …… 223
表９　土器観察表（７） …… 224
表 10　土器観察表（８） …… 225
表 11　土器観察表（９） …… 226
表 12　土器観察表（10） …… 227
表 13　土器観察表（11） …… 228
表 14　土器観察表（12） …… 229
表 15　土器観察表（13） …… 230
表 16　土器観察表（14） …… 231
表 17　土器観察表（15） …… 232
表 18　土器観察表（16） …… 233
表 19　土器観察表（17） …… 234
表 20　土器観察表（18） …… 235
表 21　土器観察表（19） …… 236
表 22　土器観察表（20） …… 237
表 23　土器観察表（21） …… 238
表 24　土器観察表（22） …… 239
表 25　土器観察表（23） …… 240
表 26　土器観察表（24） …… 241
表 27　陶磁器観察表 …… 242
表 28　土製品観察表 …… 243
表 29　金属製品・鉄製品観察表 …… 243
表 30　瓦観察表 …… 244
表 31　木製品観察表 …… 244
表 32　石器・石製品観察表（１） …… 245
表 33　石器・石製品観察表（２） …… 246
表 34　貝・骨類観察表 …… 247

巻　頭　図　版　目　次

巻頭図版１　調査区全景（オルソ）
巻頭図版２　小型仿製鏡
巻頭図版３　出土遺物

図　版　目　次

写真図版 1
第１調査区第１面　全景（東から）
第１調査区第２面　全景（南東から）

写真図版 2
第２調査区北側第１面　全景（西から）
第２調査区南側第１面　全景（北東から）

写真図版 3
第２調査区北側第２面　全景（南西から）
第２調査区南側第２面　全景（南西から）

写真図版 4
第３調査区　全景（南西から）
第４調査区　全景（南西から）

写真図版 5
第５調査区西側第１面　全景（南東から）
第５調査区東側第２面　全景（南から）

写真図版 6
第５調査区西側第２面　全景（東から）
第６調査区　全景（西から）

写真図版 7
第７調査区東側　全景（南東から）
第７調査区西側　全景（南西から）

写真図版 8
第８調査区　全景（南から）
第９調査区東側第１面　全景（南西から）

写真図版 9
第９調査区東側第２面　全景（南西から）
第９調査区西側　全景（西から）

写真図版 10
第 10 調査区　全景（南西から）
第 11 調査区　全景（西から）

写真図版 11
第 12 調査区第１面　全景（東から）
第 12 調査区第２面　全景（東から）
第 13 調査区第１面　全景（東から）

写真図版 12
第 13 調査区第２面　全景（南から）
第 14 調査区　全景（北から）

写真図版 13
第 15 調査区　全景（西から）
第 16 調査区第１面　全景（東から）
第 16 調査区第２面　全景（東から）

写真図版 14
第 17 調査区第１面　全景（西から）
第 17 調査区第２面　全景（南から）

写真図版 15
第 18 調査区第１面　全景（西から）
第 18 調査区第２面　全景（北西から）

写真図版 16
第 19 調査区　全景（北東から）
第 20 調査区東部　全景（北から）

写真図版 17
第 20 調査区北部　全景（東から）

第20調査区南部　全景（北東から）

写真図版18

第５調査区　水田層断面（北から）
第９調査区　水田層断面（西から）
第12調査区　水田畦畔（北西から）
第12調査区　水田畦畔断面（北から）
第16調査区　水田畦畔（北東から）
第16調査区　水田畦畔（北西から）
第17調査区　水田水口部分（南から）
第18調査区　水田畦畔（南東から）

写真図版19

２-SD17　断面（西から）
３-SD13　断面（西から）
３-SD13　遺物出土状況（南東から）
４-SD１　遺物出土状況（南から）
４-SD１　断面（西から）
６-SD１　断面（西から）
８-SD１　断面（東から）
９-SD１　完掘状況（東から）

写真図版20

９-SD80　断面西側（南東から）
９-SD80　断面東側（南から）
９-SD80　土器出土状況①（西から）
９-SD80　骨出土状況（西から）
９-SD80　土器出土状況②（西から）
９-SD80　東肩土器出土状況（北から）
９-SD80　掘削状況（西から）
12-SD１　断面（北から）

写真図版21

12-SD２　断面（北から）
12-SD２　土器出土状況（北西から）
13-SD１・３　a断面（南から）
13-SD２　a断面（南から）
13-SD１・２・３　b断面（南から）
13-SD３　土器出土状況①（西から）
13-SD３　土器出土状況②（南から）
13-SD３　土器出土状況③（東から）

写真図版22

１-SD11　断面（南西から）
１-SD12　断面（北東から）
１-SX13・14　断面（南から）
２-SD20　断面（西から）
２-SD20　石器出土状況（西から）
２-SD23　断面（西から）
２-SD24　断面（西から）
２-SD25　断面（南西から）

写真図版23

２-SD26　断面（南西から）
２-SD26・29　断面（南西から）
２-SK21　断面（西から）
２-SK22　断面（東から）
２-SK22　石器出土状況（東から）
２-SK27　断面（南から）
２-SK28　断面（東から）
５-SK23　断面（西から）

写真図版24

５-SX25・SK26　断面（南東から）
５-SD24　断面（南から）
５-SK27　断面（南から）
５-SK28　断面（南から）
５-SK29　断面（西から）
５-SK30　断面（北から）
５-SK40　断面（北から）
５-SK33　断面（南西から）

写真図版25

５-SK36　断面（東から）
５-SK37　断面（東から）
５-SP38　断面（北から）
５-SK39　断面（東から）
６-SK47　断面（東から）
６-SK54　断面（北から）
６-SK55　断面（北東から）
６-SD56　断面（西から）

写真図版26

７-SK61　断面（北から）
７-SX62・SK63　断面（南西から）
８-SK73　断面（西から）
９-SK86　断面（北から）
９-SK87　断面（東から）
９-SK88　断面（西から）
９-SK89　断面（南から）
９-SK90・SX100　断面（西から）

写真図版27

９-SD95　断面（西から）
９-SK96　断面（南から）
９-SK108　断面（南から）
９-SK110　断面（北から）
９-SP111　断面（南から）
９-SX112　断面（北から）
９-SX114　断面（南から）
９-SK116　断面（東から）

写真図版28

９-SK117　断面（北から）
９-SK121　断面（南から）
15-SK13　断面（南から）
15-SK16　断面（南西から）
15-SK17　断面（西から）
15-SK24　断面（南から）
15-SK25　断面（南から）
10-SD２　a断面（南から）

写真図版29

10-SD２　b断面（南から）
10-SD２　c断面（南から）
11-SD１　断面（北から）
14-SD１　断面（南から）
14-SD２　断面（南から）
10-SD１　断面（南から）
10-SX３　土器出土状況（西から）
10-SX３　鏡出土状況（南東から）

写真図版30

10-SX３・SD４　a断面（南から）
10-SD21　土器出土状況（西から）
10-SD21　b断面（北から）
10-SD５　断面（西から）
10-SD７　断面（南西から）
10-SD８　a断面（西から）
10-SD８　b断面（西から）
10-SD９　c断面（西から）

写真図版31

10-SD９　e断面（南西から）
10-SD10　b断面（南から）
10-SD10　c断面（南西から）
10-SD12・13　a断面（西から）
10-SD12・13　d断面（西から）
10-SD13・25　f断面（南から）
10-SD15　断面（南西から）
10-SD19　b断面（西から）

写真図版32

10-SD23　断面（南東から）
10-SD24　断面（西から）
10-SK28　断面（北から）
10-SK29　断面（北から）
10-SX30　断面（北から）
10-SD34　断面（東から）
10-SX35　断面（西から）
10-SX36　断面（東から）

写真図版33

10-SX38　断面（西から）
10-SK39　断面（南東から）
10-SD40　a断面（西から）
10-SK42　断面（西から）
10-SK43　断面（西から）
11-SP２・SD３　断面（北から）
11-SD４　a断面（東から）

11-SD ５・６　b 断面（西から）

写真図版 34

14-SD ３　断面（東から）
14-SD ４・５　断面（東から）
14-SD ６　断面（東から）
14-SD ７　e 断面（北東から）
14-SD ８　f 断面（南から）
14-SD10　断面（南東から）
14-SD11　断面（東から）
14-SD12・13・14　a 断面（南から）

写真図版 35

14-SD15　g 断面（北から）
14-SD15　土器出土状況（北から）
14-SD16　土器出土状況（東から）
14-SD17　断面（東から）
14-SD18　断面（南から）
14-SD19　断面（東から）
19-SD １　断面（北東から）
19-SD １　土器出土状況（北東から）

写真図版 36

19-SD ２　j 断面（東から）
19-SD ３　k 断面（西から）
19-SD ４　断面（西から）
19-SD ５　h 断面（南から）
19-SD ６・７　i 断面（南から）
19-SD ８　c 断面（北東から）
19-SK ９　断面（東から）
20-SD １　断面（西から）

写真図版 37

20-SD ２　断面（西から）
20-SP ４　断面（南から）
20-SD ５　断面（北西から）
20-SD ７　断面（西から）
20-SD ８　a 断面（西から）
20-SD ９　断面（南から）
20-SD10　c 断面（西から）
20-SD10　土器出土状況①（西から）

写真図版 38

20-SD10　土器出土状況②（北西から）
20-SD10　土器出土状況③（北から）
12-SK ４　断面（西から）
12-SD ５・６・10　a 断面（東から）
12-SD10　土器出土状況（北から）
12-SD10・11　b 断面（東から）
12-SD ８・SK ９　断面（南から）
12-SK12　断面（南から）

写真図版 39

12-SK13　断面（南から）
12-SK18　断面（南から）
12-SK20　断面（北から）
12-SK21　断面（西から）
13-SK ５　断面（南から）
13-SK ６　断面（東から）
13-SK ７　断面（南から）
13-SK ８　断面（西から）

写真図版 40

13-SK10　断面（南から）
13-SK10　土器出土状況（南から）
13-SD20　断面（西から）
13-SD21　断面（東から）
13-SK26　断面（東から）
13-SK33　断面（南西から）
13-SK40　断面（南から）
13-SK47　断面（南から）

写真図版 41

13-SK50　断面（東から）
13-SX52　断面（北東から）
13-SX60　断面（西から）
13-SX63　断面（西から）
16-SK １　断面（北から）
16-SK ２　断面（東から）
16-SX ３・４　断面（東から）

16-SK ５　断面（南から）

写真図版 42

16-SK ６　断面（西から）
16-SK ７　断面（北西から）
16-SK ８　断面（南から）
16-SK ９　断面（南から）
16-SK10　断面（南西から）
16-SK15　断面（南西から）
16-SK20　断面（東から）
16-SK35　断面（南から）

写真図版 43

16-SK45　断面（北西から）
16-SK46　断面（北東から）
16-SX47　断面（南から）
16-SK48　断面（西から）
16-SX49・SK50・51　断面（南東から）
16-SK52　断面（南東から）
17-SK １　断面（西から）
17-SK ２　断面（北から）

写真図版 44

17-SK ３　断面（西から）
17-SK ４　断面（西から）
17-SK ５　断面（西から）
17-SK ６　断面（南から）
17-SK ７　断面（南から）
17-SK ８　断面（東から）
17-SK ９　断面（南から）
17-SK10　断面（北西から）

写真図版 45

17-SK11　断面（東から）
17-SK12　断面（南から）
17-SD13　断面（南から）
17-SK14　断面（西から）
17-SK15　断面（東から）
17-SD16　断面（東から）
17-SK17　断面（北西から）
17-SK20　断面（北西から）

写真図版 46

17-SK25　断面（西から）
17-SK29　断面（南東から）
17-SK30　断面（西から）
17-SK38　断面（東から）
17-SK39　断面（東から）
17-SK40　断面（南から）
17-SK41　断面（西から）
17-SK42　断面（南西から）

写真図版 47

17-SK43　断面（西から）
17-SK45　断面（南から）
17-SK59　断面（南から）
17-SK60　断面（東から）
17-SK65　断面（北から）
17-73 風倒木痕　断面（南から）
17-SK74　断面（東から）
17-SK75　断面（南から）

写真図版 48

18-SK １　断面（南から）
18-SK ６　断面（南から）
18-SX10　断面（南から）
18-SK13　断面（南西から）
18-SX19　断面（南から）
18-SX20　断面（南から）
18-SK23　断面（南から）
18-SK29　断面（南から）

写真図版 49

18-SK30　断面（西から）
18-SX31　断面（西から）
18-SP31　断面（南から）
18-SK35　断面（南から）
18-SK36　断面（北から）
18-SX37　断面（西から）
18-SX38　断面（西から）

18-SK39　断面（南から）

写真図版 50

18-SK40　断面（西から）
18-SK48　断面（西から）
18-SK59　断面（南から）
18-SP63　断面（東から）
18-SP75　断面（西から）
18-SK80　断面（南から）
18-SK88　断面（西から）
18-SK102　断面（南から）

写真図版 51

18-SP105　断面（南から）
18-SK107　断面（北から）
18-SK110　断面（西から）
18-SK114　断面（北から）
18-SK118　断面（南から）
18-SK119　断面（西から）
18-SK120　断面（南から）
18-SK121　断面（北西から）

写真図版 52

18-SP122　断面（北西から）
18-SX103　断面（北西から）
18-SX103　断面（西から）
18-柵列１SP43　断面（南から）
18-柵列１SP44　断面（南から）
18-柵列１SP45　断面（南から）
18-柵列１SP46　断面（南から）
18-柵列１SP47　断面（南から）

写真図版 53

18-柵列２SP50　断面（西から）
18-柵列２SP51　断面（西から）
18-柵列２SP52　断面（西から）
18-柵列２SP53　断面（西から）
18-柵列３SP54　断面（西から）
18-柵列３SP55　断面（西から）
18-柵列３SP56　断面（西から）
18-柵列３SP57　断面（西から）

写真図版 54

立会１　全景（南から）
立会-5/22　全景（北から）
立会１-SD ２　土器出土状況（西から）
立会-5/22　畦畔断面（西から）
立会-5/25　畦畔平面（南から）

写真図版 55

立会-5/25　全景（東から）
立会-5/28　全景（西から）
立会-5/29　全景（西から）
立会-5/25　畦畔断面（南から）
立会-5/28　畦畔断面（南から）
立会-5/29　畦畔平面（北から）
立会-5/29　畦畔断面（北から）

写真図版 56

立会-5/31　全景（北から）
立会-8/16　全景（西から）
立会-5/31　畦畔平面（西から）
立会-8/16　畦畔検出状況（南から）
立会-8/17　全景（北西から）
立会-8/17　断面（南から）

写真図版 57

水田層　出土遺物（弥生土器）
水田層　出土遺物（土師器）
水田層　出土遺物（須恵器）
洪水砂層　出土遺物
大型水路　出土遺物（弥生土器）
大型水路　出土遺物（須恵器）

写真図版 58

大型水路　出土遺物（土師器杯・皿）
大型水路　出土遺物（土師器その他）

写真図版 59

大型水路下層　出土遺物
大型水路下層　出土遺物（土師器杯）
大型水路下層　出土遺物（須恵器）
大型水路下層　出土遺物（土師器その他）

写真図版 60

大型水路中層　出土遺物（弥生土器）
大型水路中層　出土遺物
大型水路中層　出土遺物（土師器杯）
大型水路中層　出土遺物（土師器その他）
大型水路中層　出土遺物（黒色土器杯）
大型水路中層　出土遺物（移動式竈）

写真図版 61

大型水路上層　出土遺物（土師器杯・皿）
大型水路上層　出土遺物（土師器その他）
大型水路上層　出土遺物（須恵器）

写真図版 62

大型水路上層　出土遺物（須恵器・瓦器）
14-SD １　出土遺物
１-SD12　出土遺物
10-SD24　出土遺物
１-SD11　出土遺物
第１調査区第２面掘削　出土遺物

写真図版 63

10-SD ４・21　出土遺物
14-SD ８　出土遺物
14-SD15　出土遺物
14-SD16　出土遺物

写真図版 64

14-SD ７　出土遺物
14-SD ５　出土遺物
14-SD12　出土遺物
14-SD ６　出土遺物

写真図版 65

19-SD １　出土遺物

写真図版 66

19-SD ３　出土遺物
立会１SD ２　出土遺物
20-SD10　出土遺物
20-SD10　出土遺物

写真図版 67

12-SD ５・６　出土遺物
12-SD ６　出土遺物
12-SD10　出土遺物
13-SK10　出土遺物
遺構外　出土遺物

写真図版 68

出土遺物（土製品）
出土遺物（瓦）
出土遺物（陶磁器）

写真図版 69

出土遺物（石鏃）
出土遺物（打製石斧・石庖丁）
出土遺物（その他の石器）

写真図版 70

第 20 調査区　出土遺物（石器）
出土遺物（砥石・火打石）
出土遺物（鉄製品）
出土遺物（銭貨「寛永通宝」）
出土遺物（銭貨「乾隆通宝」）

写真図版 71

出土遺物（木製品）
出土遺物（骨・貝類）

第Ⅰ章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

平成 25 年度に、高松市栗林町二丁目 10 － 7（高松市立栗林小学校内）において、栗林小学校校舎建設工事が計画され、事業課（教育委員会総務課）から高松市教育委員会に埋蔵文化財包蔵地の有無の照会があった。周辺での調査の蓄積がほとんど無い地域であり、埋蔵文化財包蔵地として登録されていなかったが、事業面積が広大であることから、事前の試掘調査を実施した。試掘調査は平成 25 年８月 17 ～ 18 日に校舎北側と東側を、11 月２～４日に運動場の調査を、実働５日で実施することとなった。校舎北側と東側では５本のトレンチを、運動場では 10 本のトレンチを設定した。

試掘調査の結果、対象地全域で埋蔵文化財の包蔵が確認できたため、事業課に対して、当該地において保護層が確保できない掘削工事を行う場合は、事前に埋蔵文化財に対する保護が必要である旨を伝え、協議を行った。

事業課から平成 26 年５月 30 日付で文化財保護法 94 条第１項に基づく埋蔵文化財発掘の通知が高松市教育委員会に提出された。この通知を香川県教育委員会に進達したところ、６月 16 日付けで事前に発掘調査を行う旨の行政指導があったため、発掘調査を実施することとなった。

第２節　調査の経過

調査は、仮設校舎建設に必要な進入路となる北西工区（第１～３調査区）を平成 26 年６月 17 日から７月 25 日まで、解体工事の工事ヤードとして必要な北東工区（第４～９調査区）について平成 27 年１月 28 日～４月９日まで調査を実施した。校舎の解体が終了後、平成 27 年９月１日～ 11 月 21 日までを中央工区（第 10 ～ 18 調査区）の調査を、体育館の解体工事後、放課後児童クラブ棟建設予定地（第 19・20 調査区）について、平成 29 年 12 月 22 日～ 28 日と、平成 30 年４月 16 日～４月 20 日に実施した。そのほか、運動場のスプリンクラー等付帯施設設置工事等に伴い、立会調査を平成 30 年４月 13 日～８月 22 日に行った。

整理作業は、平成 28 年度から平成 30 年度にかけて実施した。

調査日誌抄録

平成 26 年度（北西工区）

６月 17 日　第１調査区　重機掘削開始
６月 23 日　第１調査区　第１遺構面遺構検出・掘削
　　中世の水田跡を確認。第１遺構面高所写真撮影
６月 25 日　第１調査区　第２遺構面遺構検出・掘削
６月 26 日　第１調査区　遺構掘削
　　第２調査区　重機掘削
６月 27 日　第１調査区　遺構掘削
　　第２調査区　第１遺構面遺構検出・掘削
６月 29 日　第１調査区　遺構掘削
　　第２調査区　第１遺構面遺構検出・掘削
　　第２調査区 (南東側)　第１遺構面高所写真撮影
６月 30 日　第１調査区　空撮・検測・埋戻し
　　第２調査区　第２遺構面遺構検出・掘削
７月１日　第２調査区　遺構掘削・重機掘削
７月４日　第２調査区　第１遺構面水田覆土・土坑掘削
７月９日　第２調査区　第１遺構面水田覆土掘削
　　水田畦畔を確認
７月 11 日　第２調査区 (北側)　第１遺構面高所写真撮影
　　第２調査区 (南側)　第１遺構面遺構掘削
　　パリノ・サーヴェイ現地調査
　　栗林小学校６年生現場見学
７月 12 日　第２調査区 (北側)　第２遺構面遺構検出
７月 13 日　第２調査区 (北側)　第２遺構面遺構検出・掘削
７月 14 日　第２調査区 (北側)　第２遺構面遺構掘削
　　第２調査区 (南西側)　第１遺構面高所写真撮影
７月 15 日　第２調査区 (南側)　第２遺構面遺構検出
７月 16 日　第２調査区 (南側)　第２遺構面遺構検出・掘削
　　栗林小学校６年生現場見学
７月 17 日　第２調査区　空撮
７月 19 日　第３調査区　重機掘削
７月 20 日　第３調査区　第１遺構面遺構検出・掘削
　　近世洪水砂によって最終埋没した溝を確認
７月 21 日　第３調査区　３-SD13 掘削
７月 23 日　第３調査区　第１遺構面高所写真撮影
　　第２遺構面の遺構検出・掘削
７月 24 日　第３調査区　遺構掘削
７月 25 日　第３調査区　空撮・撤収

平成 26 年度（北東工区）

１月 28 日　第４調査区　重機掘削・遺構検出・掘削
２月６日　第４調査区　遺構掘削・空撮
２月７日　第４調査区　記録作業・埋戻し
２月 11 日　第５調査区　重機掘削
　　(南東側) 第１遺構面 (水田面) 確認できず
２月 13 日　第５調査区　重機掘削
　　発掘調査体験準備

第１遺構面 (水田面) 確認
２月 14 日　発掘調査体験 21 名・遺跡見学 30 名
２月 16 日　第５調査区　第１遺構面遺構検出・掘削
２月 17 日　第５調査区　第１遺構面高所写真撮影
第２遺構面遺構検出・掘削
２月 18 日　第５調査区　第２遺構面遺構掘削
２月 23 日　第５調査区　空撮
２月 24 日　第５調査区　埋戻し
２月 27 日　第５調査区 (西側)　重機掘削
３月２日　第５調査区 (西側)　撹乱・水田覆土砂層掘削
第６調査区　重機掘削
３月３日　第５調査区 (西側)　第１遺構面高所写真撮影
第６調査区　第１遺構面の遺構検出
水田面に洪水砂による覆土なし
第７調査区　重機掘削
３月４日　第５調査区 (西側)　第２遺構面遺構検出・掘削
第６調査区　第１遺構面 (水田層) 掘削
第７調査区　重機掘削
３月５日　第５調査区 (西側)　第２遺構面遺構検出・掘削
第６調査区　第２遺構面遺構検出・掘削
３月６日　第５・６調査区　空撮
第７調査区　遺構検出・掘削
３月７日　第５調査区 (西側)　図面作成
３月 10 日　第７調査区　遺構検出・掘削
３月 12 日　第７調査区　空撮
３月 18 日　第６調査区 (西側)・第８調査区　重機掘削
第６調査区 (西側) は、既設配管が多く、調査不可能
３月 19 日　第８調査区　重機掘削
３月 20 日　第８調査区　遺構検出・掘削
３月 24 日　第８調査区　空撮
３月 27 日　第９調査区　重機掘削
３月 28 日　第９調査区　重機掘削・撹乱・第１遺構面覆砂掘削
３月 30 日　第９調査区　撹乱・第１遺構面覆砂掘削
３月 31 日　第９調査区　９-SD80 掘削
４月２日　第９調査区　９-SD80 掘削
(東側) 第１遺構面高所写真撮影
４月６日　第９調査区　第２遺構面遺構検出・掘削
４月９日　第９調査区　空撮・９-SD80 土層断面図作成
調査完了

平成 27 年度（中央工区）
９月１日　第 10 調査区　重機掘削・撹乱掘削
第 11 調査区　重機掘削・撹乱掘削
９月５日　第 10 調査区　重機掘削・遺構検出・撹乱掘削
９月７日　第 10 調査区　重機掘削・遺構検出・掘削・撹乱掘削
10-SX ３より鏡出土
９月８日　第 10 調査区　重機掘削・遺構検出・掘削・撹乱掘削
第 11 調査区　第１遺構面遺構検出・掘削・撹乱掘削
９月 10 日　第 10 調査区　遺構検出・掘削・撹乱掘削
第 11 調査区　第１遺構面遺構検出・掘削・撹乱掘削
９月 11 日　第 10 調査区　遺構検出・掘削・撹乱掘削
第 11 調査区　第１遺構面遺構掘削・高所写真撮影
９月 12 日　第 10 調査区　遺構検出・掘削・撹乱掘削
９月 13 日　第 10 調査区　遺構検出・掘削・撹乱掘削
第 11 調査区　第２遺構面遺構検出・撹乱掘削
９月 14 日　第 10 調査区　撹乱掘削
第 11 調査区　第２遺構面遺構掘削
９月 18 日　第 10 調査区　撹乱掘削
第 11 調査区　空撮
９月 19 日　第 10 調査区　撹乱掘削
第 12 調査区　重機掘削
９月 20 日　第 10 調査区　遺構検出・掘削・撹乱掘削
第 12 調査区　重機掘削・撹乱掘削
９月 21 日　第 10 調査区　撹乱掘削
第 12 調査区　第１遺構面遺構検出・掘削
９月 22 日　第 10 調査区　遺構検出・掘削・撹乱掘削
第 12 調査区　第１遺構面遺構検出・掘削
９月 23 日　第 10 調査区　遺構検出・掘削・撹乱掘削
９月 26 日　第 10 調査区　遺構検出・掘削・撹乱掘削
第 13 調査区　重機掘削
９月 27 日　第 10 調査区　遺構掘削
第 13 調査区　重機掘削
９月 28 日　第 10 調査区　空撮
第 12 調査区　第１遺構面検出
第 13 調査区　撹乱掘削
９月 29 日　第 12 調査区　第１遺構面遺構検出・掘削
水田畦畔を確認
第 13 調査区　撹乱掘削
９月 30 日　第 12 調査区　第１遺構面遺構掘削
12-SD ２より土師器杯出土。基幹水路と考えられる
第 13 調査区　重機掘削・撹乱掘削・第１遺構面検出
10 月１日　第 12 調査区　第１遺構面高所撮写真影
第 13 調査区　撹乱掘削・第１遺構面検出
10 月２日　第 12 調査区　第１遺構面掘削・第２遺構面遺構検出
第 13 調査区　撹乱掘削・第１遺構面遺構検出・掘削
10 月４日　第 12 調査区　第１遺構面掘削
第２遺構面遺構検出・掘削
第 13 調査区　重機掘削・第１遺構面遺構検出・掘削
第 12 調査区から続く基幹水路を検出
調査範囲を拡張
10 月５日　第 12 調査区　第１遺構面掘削
第２遺構面遺構検出・掘削
第 13 調査区　第１遺構面遺構検出・掘削
10 月９日　第 12 調査区　第２遺構面遺構掘削
第 13 調査区　第１遺構面遺構検出・掘削
第 14 調査区　重機掘削・撹乱掘削
10 月 10 日　第 12 調査区　空撮
第 13 調査区　第１遺構面の遺構検出・掘削
第 14 調査区　撹乱掘削・遺構検出
第 15 調査区　重機掘削

10 月 11 日　第 13 調査区　第 1 遺構面遺構検出・掘削
第 14 調査区　重機掘削・遺構掘削
10 月 12 日　第 13 調査区　第 1 遺構面の遺構検出・掘削
第 14 調査区　遺構掘削
10 月 13 日　第 13 調査区　第 1 遺構面高所写真撮影
第 1 遺構面掘削
第 15 調査区　重機掘削
10 月 14 日　第 13 調査区　第 1 遺構面掘削
第 2 遺構面遺構検出
第 15 調査区　遺構検出・掘削
10 月 16 日　第 13 調査区　遺構掘削・第 1 遺構面掘削
第 2 遺構面遺構検出
第 14 調査区　清掃
10 月 17 日　第 13 調査区　遺構掘削・第 1 遺構面掘削
第 2 遺構面の遺構検出
第 14・15 調査区　空撮
10 月 18 日　第 13 調査区　遺構検出・掘削
第 6 調査区西側　重機掘削
既設配管が多く、調査不可能
10 月 19 日　第 13 調査区　遺構検出・掘削
第 17 調査区　重機掘削
10 月 20 日　第 13 調査区　遺構検出・掘削
第 16 調査区　撹乱掘削・第 1 遺構面検出
第 17 調査区　重機掘削
現地説明会 (10 月 24 日) 報道発表
10 月 21 日　第 13 調査区　遺構掘削
第 16 調査区　撹乱掘削・第 1 遺構面検出
水田畦畔確認
四国新聞・朝日新聞・読売新聞・NHK 取材
10 月 22 日　第 13 調査区　清掃
第 16 調査区　第 1 遺構面検出
10 月 23 日　第 13 調査区　空撮
第 16 調査区　第 1 遺構面空撮
10 月 24 日　現地説明会
10 月 25 日　第 16 調査区　第 1 遺構面掘削
第 2 遺構面遺構検出
第 17 調査区　撹乱掘削
10 月 26 日　第 16 調査区　第 1 遺構面掘削
第 2 遺構面遺構検出・掘削
第 17 調査区　撹乱掘削・第 1 遺構面検出
パリノ・サーヴェイ現地調査
10 月 28 日　第 16 調査区　第 2 遺構面・遺構検出・掘削
第 17 調査区　撹乱掘削・第 1 遺構面検出
第 1 遺構面高所写真撮影
10 月 29 日　第 16 調査区　第 2 遺構面遺構掘削
第 17 調査区　第 1 遺構面掘削
第 2 遺構面遺構検出
10 月 30 日　第 16 調査区　第 2 遺構面遺構掘削・高所写真撮影
第 17 調査区　第 1 遺構面掘削
第 2 遺構面遺構検出
第 18 調査区　重機掘削
10 月 31 日　第 16 調査区　空撮
第 17 調査区　第 1 遺構面掘削
第 2 遺構面の遺構検出・掘削
第 18 調査区　重機掘削
11 月 1 日　第 17 調査区　第 2 遺構面の構掘削
第 18 調査区　重機掘削
11 月 3 日　第 17 調査区　第 2 遺構面遺構掘削
第 18 調査区　重機掘削・撹乱掘削
11 月 4 日　第 17 調査区　第 2 遺構面遺構掘削
第 18 調査区　撹乱掘削・第 1 遺構面検出
11 月 7 日　第 17 調査区　第 2 遺構面遺構掘削
第 18 調査区　第 1 遺構面高所写真撮影
第 1 遺構面掘削
11 月 8 日　第 17 調査区　第 2 遺構面遺構掘削
第 18 調査区　第 1 遺構面掘削
11 月 9 日　第 17 調査区　清掃
第 18 調査区　第 1 遺構面掘削
11 月 11 日　第 17 調査区　空撮
第 18 調査区　第 1 遺構面掘削
第 2 遺構面遺構検出
11 月 12 日　第 18 調査区　第 1 遺構面掘削
第 2 遺構面の遺構検出・掘削
11 月 21 日　第 18 調査区　空撮・調査終了
11 月 22・23 日　片付け、撤収

平成 29 年度（放課後児童クラブ棟）
12 月 22 日　第 19 調査区　調査範囲位置出し・重機掘削・遺構検出・掘削・撹乱掘削
12 月 23 日　第 19 調査区　重機掘削・遺構検出・掘削・撹乱掘削
12 月 26 日　第 19 調査区　遺構掘削
12 月 27 日　第 19 調査区　遺構掘削・高所写真撮影
12 月 28 日　第 19 調査区　記録作業・埋戻し・調査完了

平成 30 年度（放課後児童クラブ棟）
4 月 16 日　第 20 調査区　重機掘削・撹乱掘削・遺構検出
4 月 17 日　第 20 調査区　撹乱掘削・遺構検出・掘削
4 月 19 日　第 20 調査区　遺構掘削
4 月 20 日　第 20 調査区　高所写真撮影・埋戻し
調査完了・撤収

工事立会
4 月 13 日　栗林小学校敷地南東隅より北へ約 6 m地点
盛土のみ検出
4 月 16 日　敷地南東隅より西へ約 7m 地点
盛土から戦災層上面検出
5 月 8 日　第 20 調査区北西隅の西側、14 × 1.5m
溝 4 条検出。溝 2 から弥生土器壷出土

5月9日　8日の調査範囲の南4.6 mまで
平面観察不可能、断面に遺構確認できず

5月10日　さらに南へ4.5 m
全面撹乱・西壁に一部地山と包含層を検出

5月11日　敷地南西隅から北へ4.5 m、幅1.2 m、深さ90㎝で、全面撹乱

5月14日　9日調査範囲を再度観察
8日検出の溝1が西壁の外へ続く

5月22日　敷地南東隅より西へ23mから北へ15 m、幅1.7 m、深さ50㎝。盛土直下に旧耕作土と床土を検出
新校舎南辺より南へ約10 m地点から東西約40 m、幅70㎝、深さ50～40㎝。盛土直下に戦災層・旧耕作土・床土・近世洪水砂を検出
続いて東端から新校舎そばの桝までの北北東に約15 × 0.7 m。新校舎から南2 mまで撹乱
戦災層・近世洪水砂・水田層・水田畦畔を検出

5月24日　敷地南東隅より北へ5 m、西へ1.5 m地点から5 × 3.5 m。深さ1.3 mで旧河道と思われる遺構面を検出
敷地南辺15 × 1.8 m、深さ65㎝。盛土・洪水砂・水田層の下に地山上面を検出。南側に遺構埋土を検出したが、撹乱と湧水で確認できず

5月25日　新校舎南辺より南へ約10 m地点から東西23m、幅60㎝、深さ30㎝。撹乱・洪水砂・水田層を検出

5月26日　敷地南辺17 × 2 m。2/3は撹乱。地山と弥生の包含層。1 × 0.5 mの炭混じりの埋土を検出したが、性格不明

5月28日　敷地南辺16 × 2 m。全面撹乱
運動場中央。東西41.8 m、幅0.6 m、深さ25㎝
撹乱・戦災層・洪水砂・水田畦畔と水田面を検出
2本の東西暗渠東端をつなぐ南北20 m、幅60㎝、深さ50㎝。戦災層・洪水砂を検出

5月29日　運動場南側。東西46 m、幅60㎝、深さ30㎝
撹乱・洪水砂・畦畔3条を検出

5月31日　運動場東側。南北39 m、幅60㎝、深さ60㎝
撹乱・戦災層・旧耕作土・洪水砂・水田層を検出
畦畔1条を平面検出

6月1日　運動場南側。南北12 m、幅55㎝、深さ40㎝
旧耕作土直下の水田層が撹乱に切られる
敷地南辺、南門より東。8 × 2 m
盛土・旧耕作土・洪水砂・水田層・地山が撹乱に切られる。5月24日に検出した遺構埋土の続きを検出したが、撹乱と湧水で観察できず

6月4日　南門北側。6 × 3.5 m、深さ70㎝
撹乱・洪水砂を検出
運動場東側。南北45 m、東西20 m、幅1.3～0.7 m、深さ25㎝。撹乱層・戦災層を検出
運動場中央。東西50 m、幅50㎝、深さ25㎝、盛土・撹乱・戦災層・整地層・洪水砂を検出

6月7日　南門北側を再度確認。盛土・洪水砂が撹乱に切られる
運動場北東隅。約3 × 3 m、深さ75㎝
盛土・戦災層・洪水砂を検出
運動場南側。東西約42 m、幅50㎝、深さ25㎝
撹乱・旧耕作土の床土に洪水砂上面を検出

6月8日　敷地南西隅より東へ約22 × 2.5 m、深さ1 m
全面撹乱

8月16日　運動場西側。東西33 m、幅60㎝
撹乱・洪水砂・水田層を検出
水田畦畔1条を平面検出

8月17日　敷地南辺。ビオトープ用地
約6 × 3 mと約7 × 2 m。一部1.2 mまで掘削
造成土・洪水砂・水田層①・水田層②・包含層・地山を検出した

8月22日　運動場南西側。東西42.5 m、南北20 m、幅60㎝、深さ30㎝。撹乱・洪水砂・水田層・包含層を検出
洪水砂層に2条の幅約50㎝の水田面を平面検出

第Ⅱ章　地理的環境・歴史的環境

第１節　地理的環境

高松市は香川県のほぼ中央東寄りに位置する県都で、大部分を低い山塊に囲まれた高松平野が占める。高松平野は、完新世に入ってから形成されたものである。讃岐山脈から流下し、瀬戸内海へと注ぐ香東川をはじめ、本津川、春日川、新川などによって搬出された堆積物により緩やかな傾斜の扇状地を形成している。現在、石清尾山山塊の西を直線に北流する香東川は、17 世紀に人工的に固定されたもので、それ以前には石清尾山山塊の南側を回り込んで平野中央部を東北流する流路も存在していた。この旧流路は、現在では水田及び市街地の地下に埋没してしまっているが、空中写真等から、林町から木太町へかけての分ヶ池、下池、長池、大池、ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られている。本遺跡のすぐ西側にも旧流路があったといわれる。

本遺跡が所在する高松市街は中心に近づくにしたがい傾斜が緩やかになっており、ここには海岸線に沿って東西方向に延びる微高地の砂堆が形成されており、海の影響を受けていたと考えられる。ボーリングデータによれば、栗林公園付近から松縄町、久米池より北側では海成層の存在が確認されている。本遺跡に近接する桜町中学校でのボーリングデータでは、現地表面下３ｍまではシルト質砂、３～７ｍは粘土、７～８ｍはシルト質砂、８ｍ以下は礫となっている。この現地表面下８ｍが沖積層と洪積層の境であり、これより上が最終氷河期末以降の堆積物である。

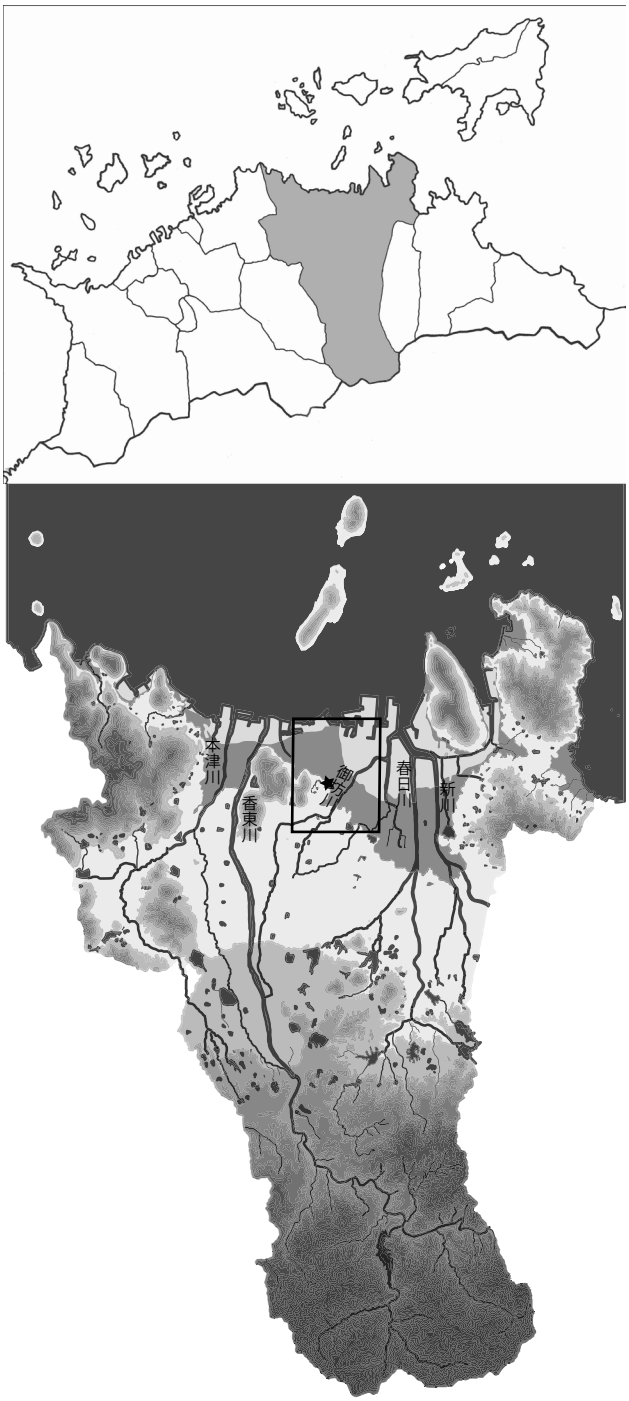


図１　　高松市域及び市域における位置図

第２節　歴史的環境

周辺部に位置する最古の遺跡として、縄文時代晩期中葉頃の居石遺跡がある。旧河道から突帯文以前の土器及び土掘り具を中心とした石器、伐採具と考えられる木製品が出土しており、安定した平野部では開墾・農耕の初現が見られる。近接する東中筋遺跡の第２次調査では、旧河道から縄文時代晩期後葉頃の突帯文土器がまとまって出土している。

弥生時代になると遺跡数は飛躍的に増加する。環濠集落が確認された天満・宮西遺跡、集落と小区画水田が検出された浴・長池遺跡、弘福寺領田図北地区比定地遺跡など、続々と報告されている。後期に

はさらに増え、古墳時代初頭まで続く。

古墳時代になると石清尾山山塊で多くの積石塚古墳群が造営される。前期に稲荷山姫塚古墳などの前方後円墳や、猫塚古墳などの双方中円墳が築造され、100 年以上の断絶を経た後、横穴式石室を持つ円墳が盛行する。平野部では希薄になっていた集落が、中期後半以降から出現する。

古代においては、屋島で古代山城が築かれ、平野部では松縄下所遺跡で見られるような条里区画が認められるようになる。古代寺院跡では坂田廃寺、山下廃寺、拝師廃寺、高野廃寺などが点在していた。

古代末～中世では、石清尾山の北東部から旧市街地に至る地域が野原庄に比定されており、その海浜部にあたる高松城跡（丸の内地区）では、９～ 10 世紀代の生活痕が確認され集落の所在が明らかになっている。さらに高松城跡（西の丸地区）では、12 ～ 13 世紀代の湊と考えられる礫敷きの港湾遺構が検出されている。平野部では多くの城館が所在していたことが知られている。

近世になると、大規模な土木工事が行われるようになる。特に西嶋八兵衛による香東川の付け替えと木太町周辺の干拓と新田開発、松平頼重によってさらに北側の干拓がなされ、ほぼ現在の海岸線となった。高松城の築造、それに伴う城下町の形成、藩主の別荘として栗林公園が造営されていく。本遺跡周辺は、金毘羅街道と仏生山街道が分岐貫通していたので『讃岐国名勝図会』に「商業軒を並べ旅舎等もあり、繁華の地」といわれ、旧香東川筋の伏流水に恵まれて手漉き和紙の生産地でもあった。

明治に入り、学制発布に伴い小学校教育が普及する。国民皆学の理念のもと、寺院や個人の居宅を利用した私家塾並みのものがほとんどであったが、明治６年６月に中ノ村で栗林小学校が公立で開校している。しかし、しばらくは統廃合を繰り返し、明治 17 年に改めて栗林小学校が栗林公園東門南前に開校する。明治 40 年の義務制で児童数の増加に伴い、副築・増築では追いつかず、大正 10 年頃から現在地に学校移転工事が始まった。昭和 20 年に高松空襲において校舎は焼け落ちたが講堂は焼け残った。昭和 27 年 12 月に出火で校舎を焼失。昭和 29 年 6 月に鉄筋三階建校舎落成式を行う。昭和 39 年に体育館落成。昭和 41 年にプール竣工。平成 30 年に新校舎完成となった。

【参考文献】

高松市教育委員会　1992・1996『讃岐国府弘福寺領の調査Ⅰ・Ⅱ』

香川県教育委員会　1992 ～ 96『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告　第１～６冊』

高松市教育委員会　1993 ～ 95『一般国道高松東道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告　第１～７冊』

高松市教育委員会　1998『宮川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　木太本村Ⅱ遺跡』

高松市教育委員会　1998 ～ 2001『太田第２土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第１～４冊』

高松市教育委員会　1999 ～ 2000『都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告　第１～２冊』

高松市教育委員会　2001・2004『都市計画道路東浜港花ノ宮線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　東中筋遺跡　第１～２冊』

高松市教育委員会　2015『店舗新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　東中筋遺跡』

香川県教育委員会　2006『栗林公園東門周辺再整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　栗林公園』

香川県教育委員会　2003『高松城跡（西の丸地区）Ⅱ』

香川県教育委員会　2003『高松城跡（丸の内地区）』

高松市　1988『高松百年史　上巻』

栗林郷土誌編集員会　1996『栗林郷土誌』　栗林地区地域おこし事業推進委員会

1　栗林田中遺跡　2　特別名勝栗林公園　3　東中筋遺跡　4　奥ノ池遺跡　5　西ハゼ土居遺跡
6　松並・中所遺跡　7　松縄下所遺跡　8　境目・下西原遺跡　9　天満・宮西遺跡　10　鹿原遺跡
11　石清尾山古墳群（稲荷山姫塚古墳）　12　楠川城跡　13　松縄城跡　14　佐藤城跡
15　キモンドー遺跡　16　室山城跡　17　中ノ村城跡　18　藤井城跡　19　雑賀城跡
20　史跡高松城跡　21　片原町遺跡　22　紺屋町遺跡　23　亀井戸跡　24　大井戸跡

図 2　　栗林田中遺跡周辺遺跡分布図

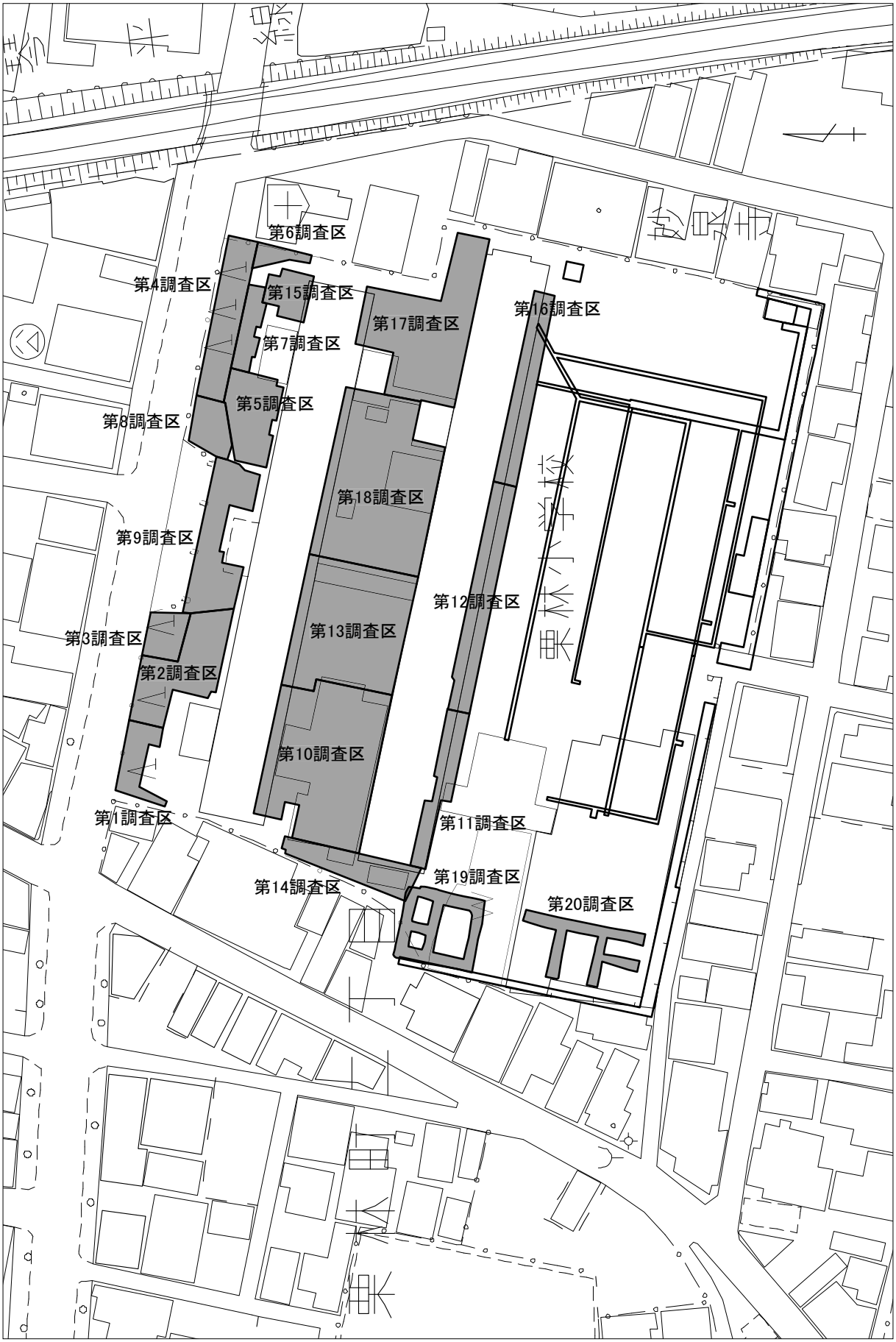


図３　　調査区配置図（S ＝ 1/1000）

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　調査の方法

調査区番号と遺構番号、遺物の取上げ

調査区は調査を開始した順番で、第１～２０調査区と番号を与えた。

遺構番号は遺構の種類に関係なく、検出した順番に１から番号を与えた。遺構の種類は、現地での調査所見をもとに性格を判断し、番号の前に遺構の略号を冠した。

遺物の取上げは、遺構単位で、かつ出土層位が明らかな場合は、層位も記載して取上げた。

記録作成

図化作業の際に使用する基準点と水準点は、株式会社イビソクに委託して設置し、世界測地系第Ⅳ系・４級水準点を用いた。

第１～ 18 調査区では断面図と切り合い関係のある遺構平面図、遺物出土状況図は手測りで記録を作成し、その他の平面図については、空中写真測量を実施した。第 19・20 調査区においては、全面手測りで記録作業を行った。

第２節　基本層序

基本層序は、造成土、戦災層、旧耕作土層、洪水砂層、水田層、包含層、地山となる。第１遺構面は、水田層上面、第２遺構面は地山面上面である。第 14・19・20 調査区では、旧耕作土層と洪水砂層、水田層が確認できず、造成土直下が第２遺構面となる。

造成土は、戦前の栗林小学校が焼失したのちに校舎を建設した際の造成土、戦災層は、空襲で焼失した戦前の校舎や周辺の建物の残骸を処分・整地した層、旧耕作土は、戦前の栗林小学校の建設以前の水田層と考えられる。

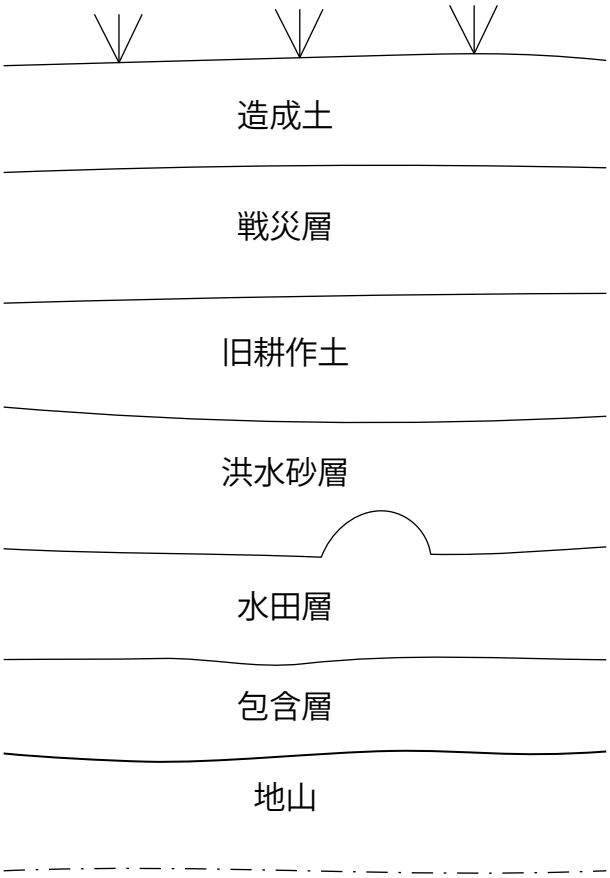


図４　　基本層序模式図

第３節　遺構と遺物

第１面の調査

第１面は、旧耕作土の下層で確認した遺構面である。確認できた主な遺構は、水田層及び水田畦畔、大型水路、溝である。

第１面水田層（図５～12）

第１面は、盛土と旧耕作土及びその床土を除去したのち、水田層を覆う洪水砂層下面で検出した。洪水砂層は、調査範囲の西側の第 10・11・14・19・20 調査区を除く調査区で確認できた。また、洪水砂層の堆積が非常に薄い、ないし確認できなかった第 10・11 調査区の一部でも水田層を確認した。

試掘調査段階で、水田層とそれを覆う洪水砂の存在を把握していたため、重機掘削を水田層上面の洪水砂で止め、人力掘削により水田畦畔の検出に努めた。なお、洪水砂層については、上面からの掘り込みを検出・掘削したのちに砂を除去したが、砂層に砂層の堆積であったため、明確な掘り込みを確認できなかったものについては、近世遺物の混入が認められる。

水田畦畔は、洪水砂が厚く堆積していた第１・３・16 ～ 18 調査区及び工事立会で確認できた。

水田層は土層の観察から、２時期に及ぶと考えられる。第Ⅳ章の自然科学分析で詳細に述べる。

遺物は第１調査区から須恵器蓋（１）、須恵器杯 B 底部（５～７）、土師器甑口縁部（10）が出土した。このほか図化できなかったが、土師器片と須恵器片、二次加工のある剥片が出土した。

第２調査区から土師器不明（９）、須恵器杯 B（４）、須恵器杯蓋（２）、スクレイパー（92・93）が出土した。このほか、図化できなかったが、須恵器壺・須恵器杯 A・須恵器高杯・須恵器片、土師器甕・土師器皿・土師器片、移動式竈？、弥生土器片、焼土塊、サヌカイト剥片が出土した。

第３調査区からは、図化できなかったが、須恵器片、土師器片、サヌカイトチップが出土した。

第５調査区からは須恵器杯身（８）、石鏃（83）が出土した。このほか図化できなかったが、須恵器壺・須恵器杯 A・B・須恵器片、土師器甕・土師器片、黒色土器 A、足釜脚部、瓦質土器片？、弥生土器片、サヌカイト剥片が出土した。

第６調査区からは図化できなかったが、須恵器高杯・須恵器片、土師器杯・土師器片、陶器片、移動式竈？、弥生土器片、サヌカイト剥片が出土した。

第８調査区からは、図化できなかったが、須恵器蓋・須恵器片、土師器片、焼土塊が出土した。

第９調査区からは須恵器蓋（３）が出土した。このほか図化できなかったが、須恵器壺・須恵器片、土師器甕・土師器杯・土師器片、二次加工のある剥片、サヌカイト剥片が出土した。

第 10 調査区からは石鏃（87）、土師器甑口縁部（21）が出土した。このほか図化できなかったが、須恵器蓋・須恵器杯 A・B・須恵器片、土師器片、弥生土器片、二次加工のある剥片、サヌカイト剥片が出土した。

第 11 調査区からは弥生土器甕上半部と底部（24）が出土した。このほか図化できなかったが、須恵器片、土師器高杯・土師器片、弥生土器甕・弥生土器片、陶器片が出土した。

第 12 調査区からは須恵器蓋（12）、須恵器皿（13）、須恵器杯 A（14・15）、須恵器杯 B 底部（19）、土師器椀（20）、土師器甕口縁部（22）、打製石斧（95）、使用痕ある剥片（97）、が出土した。このほか図化できなかったが、須恵器高杯・須恵器片、土師器杯・土師器片、弥生土器底部、二次加工のある剥片、サヌカイト剥片が出土した。

第 13 調査区からは、須恵器蓋口縁部（11）、須恵器杯 B 底部（17・18）、土師器甕口縁部（23）、須恵器杯（16）が出土した。このほか図化できなかったが、須恵器壺・須恵器片、土師器把手・土師器機種不明・土師器片、黒色土器 A、陶器片、瓦、弥生土器片、サヌカイト剥片が出土した。

第 16 調査区からは須恵器蓋（77・78）、須恵器杯（79）、須恵器杯 A（80）、須恵器皿（81）、土師器飯蛸壺（82）、石鏃（84）が出土した。このほか図化できなかったが、須恵器壺・須恵器杯身・須恵器片、土師器壺・土師器片、移動式竈、弥生土器甕・弥生土器片、サヌカイト剥片が出土した。

第 17 調査区からは須恵器杯蓋口縁部（68・69）、須恵器杯 A（70 ～ 71）、須恵器杯 B 底部（72）、須恵器杯口縁部（73）、土師器杯（74）、土師器甕口縁部（75・76）が出土した。このほか図化できなかったが、須恵器杯身・須恵器壺・須恵器甕・須恵器片、土師器壺・土師器鉢？・土師器片、黒色土器 A、陶器片、弥生土器片、焼土塊、サヌカイト剥片が出土した。

第 18 調査区からは須恵器蓋（25 ～ 35）、須恵器杯 A（36 ～ 39）、須恵器皿（40 ～ 43）、須恵器

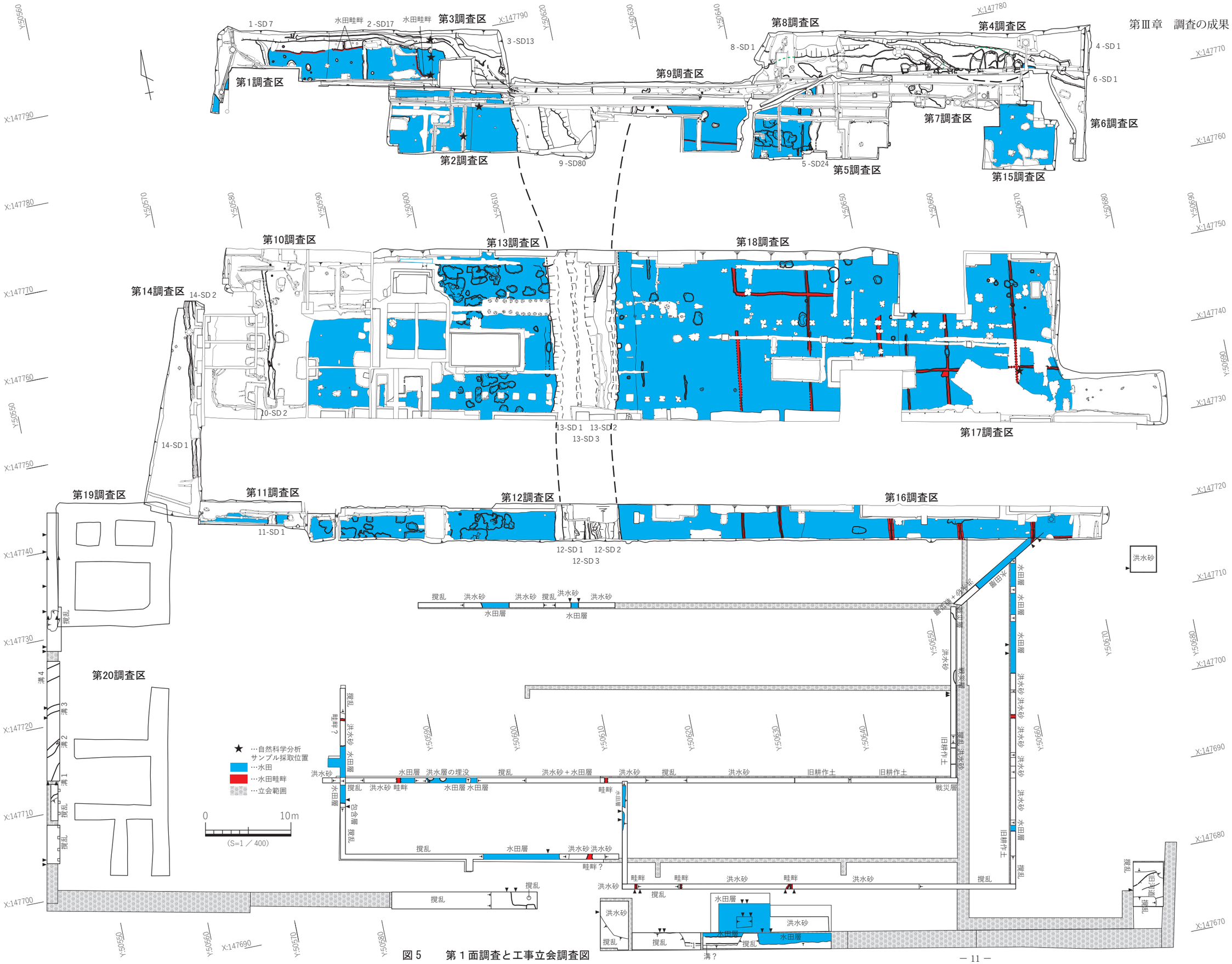


図５　第１面調査と工事立会調査図

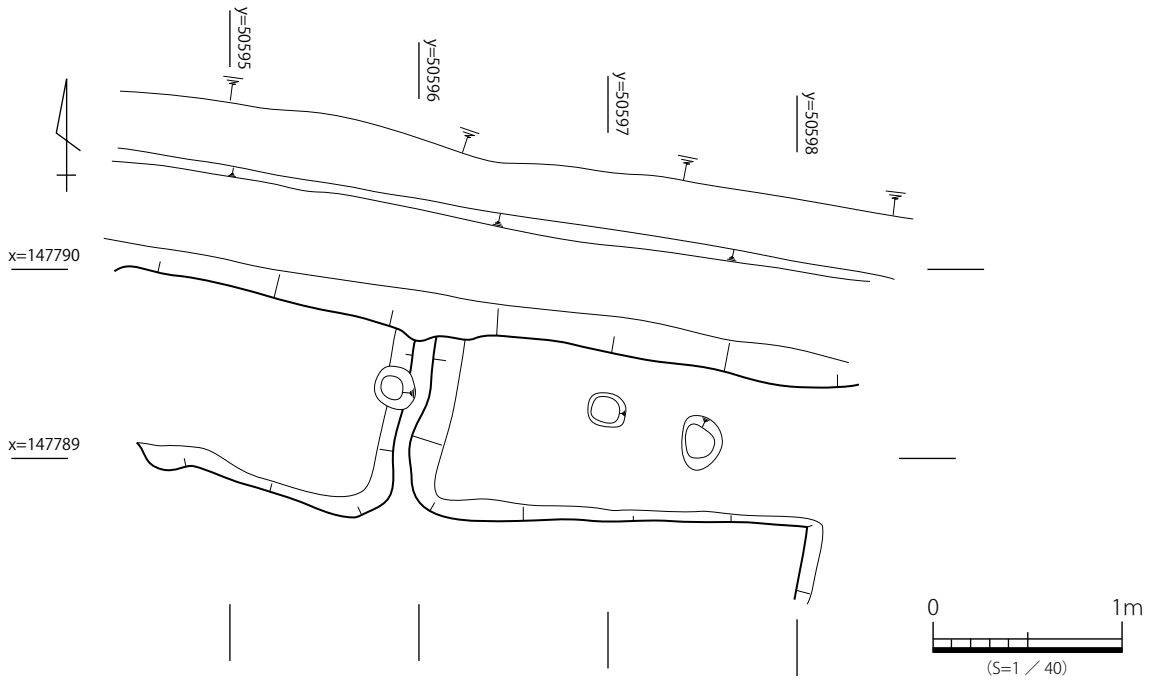


図 6　　2－水田畦畔　平面図

杯口縁部（44・45）、須恵器壺口縁部（46）、須恵器甕口縁部（47）、須恵器高杯脚部（48）、須恵器壺底部（49）、須恵器杯又は蓋口縁部（50）、須恵器杯身（51 ～ 53）、黒色土器 A 椀口縁部（54）、黒色土器 A 杯（55）、土師器高台付杯底部（56）、土師器面取高杯脚部（57）、土師器甕口縁部（58 ～ 62）、土師器甑取手（63）、飯蛸壺（64 ～ 66）、土製品土錘（67）、石鏃（85・86）、二次加工ある剥片（89 ～ 91）、スクレイパー（94）、打製石斧（96）、不明鉄器（98）、が出土した。このほか図化できなかったが、須恵器杯 B・須恵器擂鉢？・須恵器片、土師器壺・土師器杯・土師器片、羽釜、黒色土器 B、移動式竈？、瓦、陶器片、弥生土器片、焼土塊、サヌカイト剥片、染付（青花）が出土した。

第 20 調査区からは、石鏃（88）が出土したほか、須恵器蓋・須恵器片、土師器片、弥生土器甕・弥生土器片、サヌカイト剥片が出土した。

水田層を覆う洪水砂層からは、第 1 調査区から図化できなかったが、須恵器杯 A・須恵器杯 B・須恵器蓋・須恵器片、土師器片が出土した。

第 2 調査区から鉄製品不明（116）、火打石（113）、須恵器杯 B 底部（102）が出土した。このほか図化できなかったが、須恵器壺・須恵器杯 A・須恵器片、土師器皿・土師器片、土師質土器鍋、移動式竈？、弥生土器片、黒色土器 A、陶器片、染付が出土した。

第 3 調査区からは図化できなかったが須恵器壺・須恵器杯 B、土師器杯、移動式竈、弥生土器片、陶器片、染付が出土した。

第 5 調査区からは図化できなかったが須恵器片、土師器片、陶器片、磁器片、青磁片、瓦、焼土塊、火打石が出土した。

第 9 調査区からは土錘（111）が出土したほか、須恵器壺・須恵器杯 B・須恵器片、土師器杯・土師器甕・土師器羽釜・土師器片、磁器片、陶器擂鉢・陶器片、染付、土製品（土人形※混入か？）、焼土塊、二次加工のある剥片、火打石が出土した。

第 10 調査区からは須恵器壺（105）が出土したほか、図化できなかったが、須恵器杯 B・須恵器片、土師器片、陶器片、青磁片、灯明皿、瓦質土器片、移動式竈、染付、瓦、鉄器、弥生土器片、サヌカイト剥片が出土した。

第 11 調査区からは土師器羽釜口縁部（108・109）が出土したほか、図化できなかったが、須恵器杯 B・須恵器杯蓋・須恵器片、土師器杯・土師器片、陶器片、弥生土器片、鉄器、染付（混入）が出土した。

第 12 調査区からは須恵器杯身（99）、須恵器長頸壺（103）が出土したほか、図化できなかったが須恵器杯・須恵器杯 B・須恵器片、土師器杯・土師器器種不明・土師器片、移動式竈？、弥生土器底部・弥生土器片、陶器擂鉢・陶器片、鉄器、サヌカイト

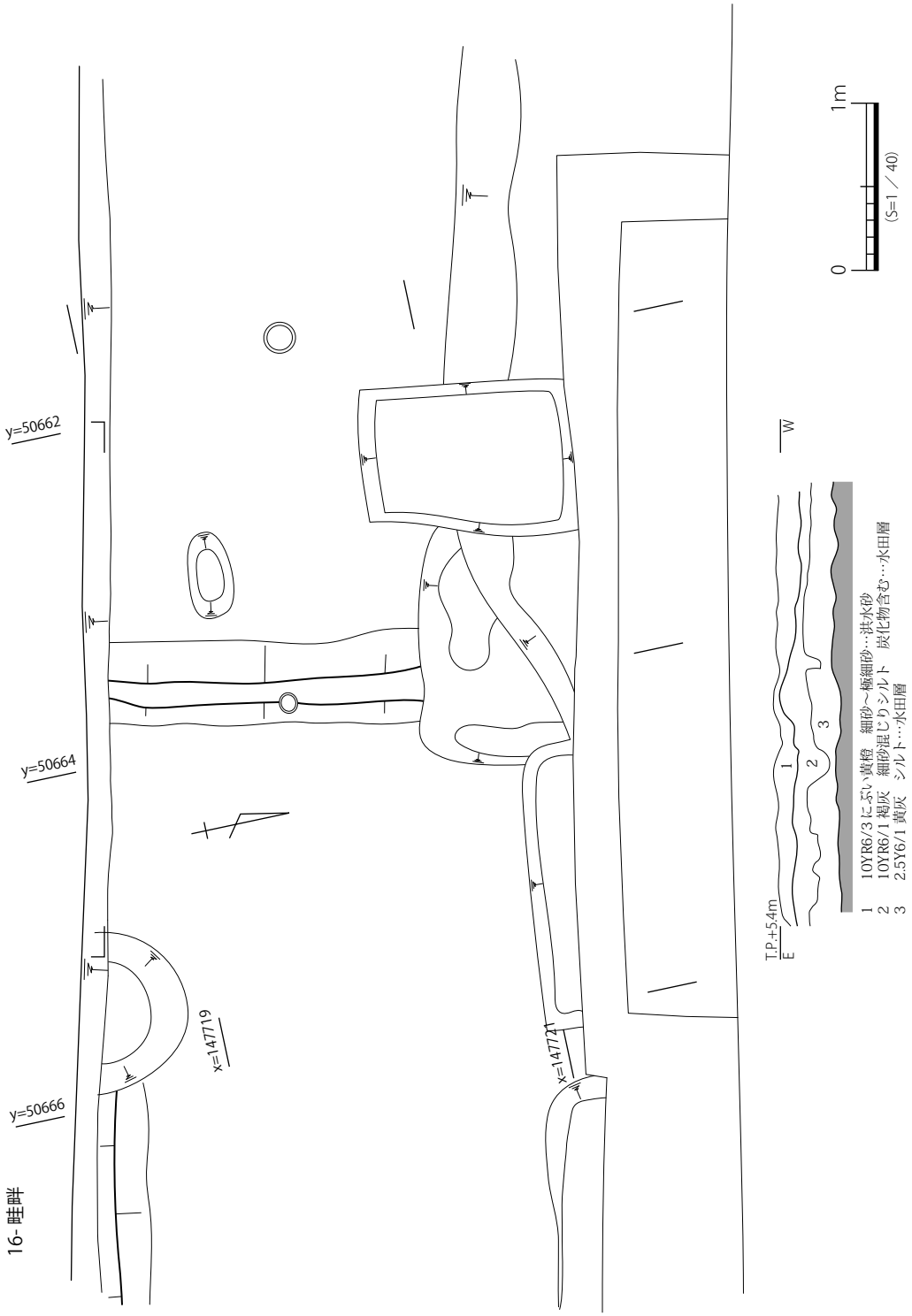


図７　16- 水田畦畔　平・断面図

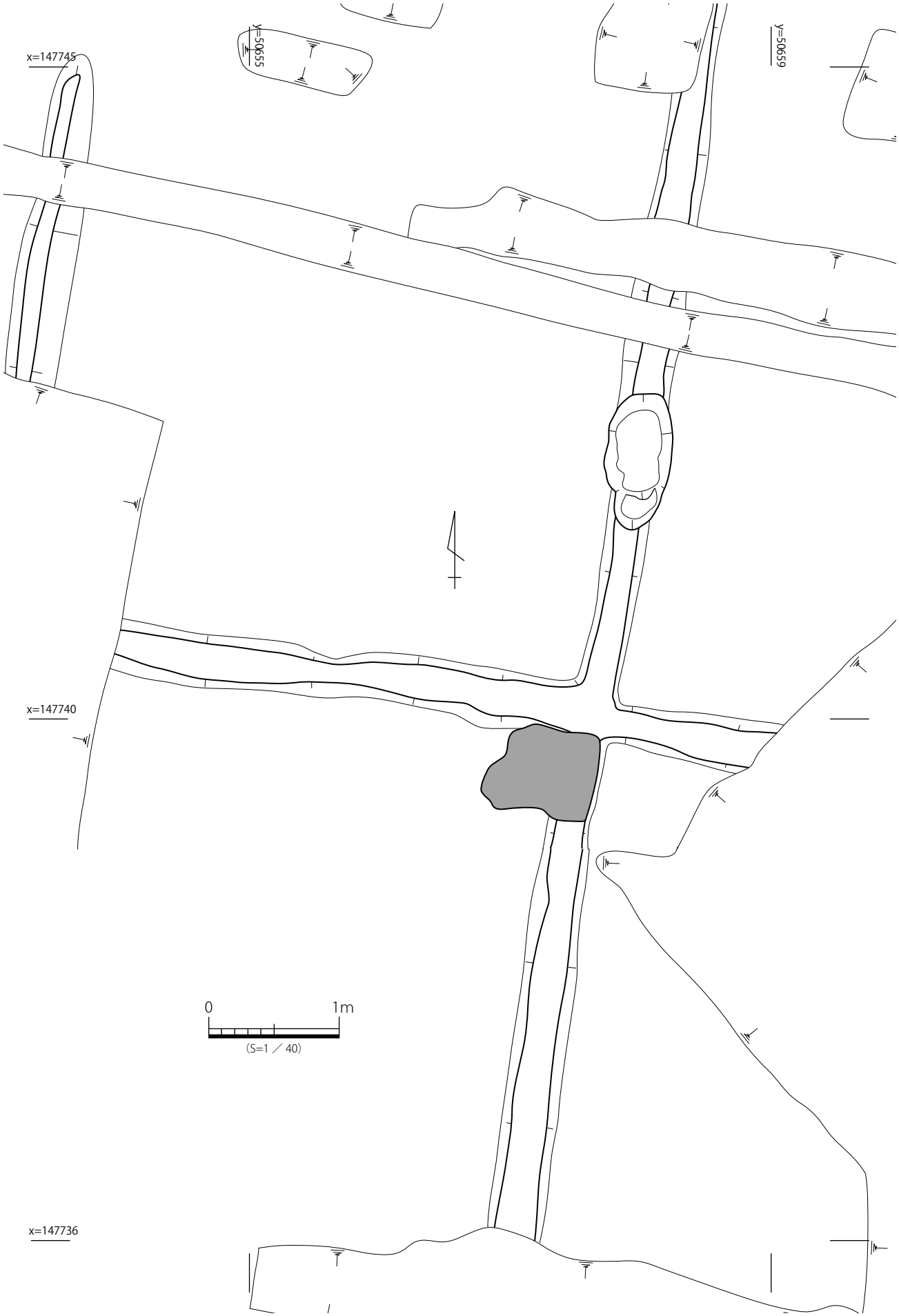


図 8　　17- 水田水口　平面図

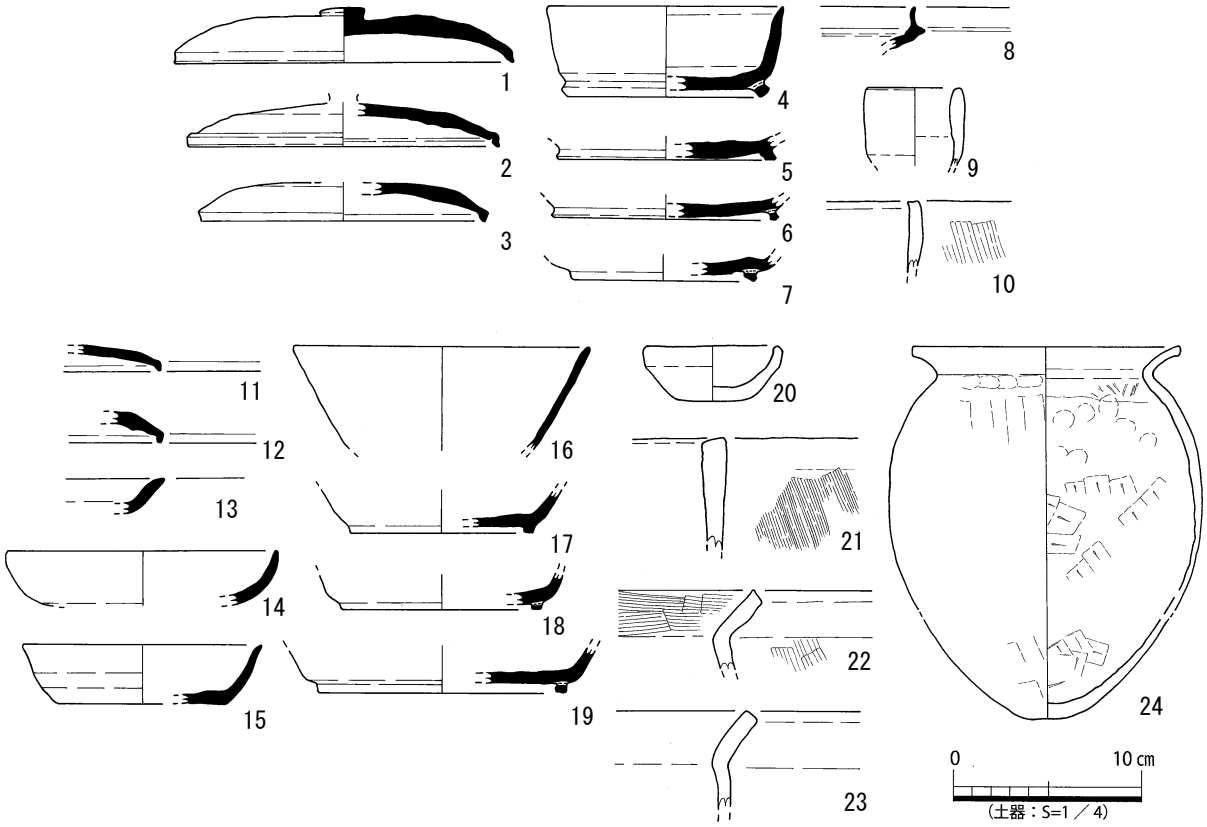


図９　　水田層　北東・北西と西側　出土遺物実測図

剥片、染付が出土した。

第 13 調査区からは管状土錘（112）、火打石（114）、須恵器壺口縁部（104）、須恵器皿（101）が出土したほか、図化できなかったが、須恵器蓋・須恵器杯 B・須恵器片、土師器杯・土師器片、羽釜・羽釜脚部、陶器皿・陶器擂鉢・陶器片、黒色土器 B、瓦質土器片、弥生土器片、瓦、鉄器、サヌカイト剥片、焼土塊、染付が出土した。

第 15 調査区からは図化できなかったが、須恵器片、土師器片、弥生土器片、瓦、石英塊、染付、針金が出土した。

第 16 調査区からは瓦質土器鉢口縁部（106）、土師器羽釜口縁部（107）が出土したほか、図化できなかったが、須恵器片、土師器甕・土師器鉢・土師器片、陶器甕・陶器擂鉢、瓦質土器羽釜、移動式竈、陶器片、弥生土器片、瓦、焼土塊、染付が出土した。

第 17 調査区からは、図化できなかったが、須恵器片、土師器片、弥生土器片、鉄器、染付が出土した。

第 18 調査区から土錘（110）、巻貝（495）、火打石（115）、須恵器杯（100）が出土した。このほか図化できなかったが、須恵器高杯・須恵器片、土師器椀・土師器片、弥生土器片、瓦、瓦質土器炮烙片、陶器片、磁器片・染付、サヌカイト剥片、土製品土人形が出土した。

２－水田畦畔（図６）

第１遺構面の洪水砂の下層で、検出した南北方向の水田畦畔である。近世の溝である 2-SD17 に切られるため、水田１筆の面積は不明である。主軸方位 N-10°-E、検出面の標高は約 5.30m である。畦畔は約 0.13m 程度水田面より盛り上げて構築し、東西に水田を区画する。

16 ー水田畦畔（図７）

第１遺構面で洪水砂の下層で水田畦畔を南北方向３条、東西方向１条検出した。主軸方位 N-10°-E と N-80°-W、検出面の標高は 5.30 ～ 5.40 m である。畦畔は残存状況にもよるが、約 0.40 ～ 0.50 m程度水田面より盛り上げて構築される。

水田層は２層に分層でき、このうち上層で畦畔が確認できる。水田層の上層が褐灰細砂混じりシルト、下層が黄灰シルトである。

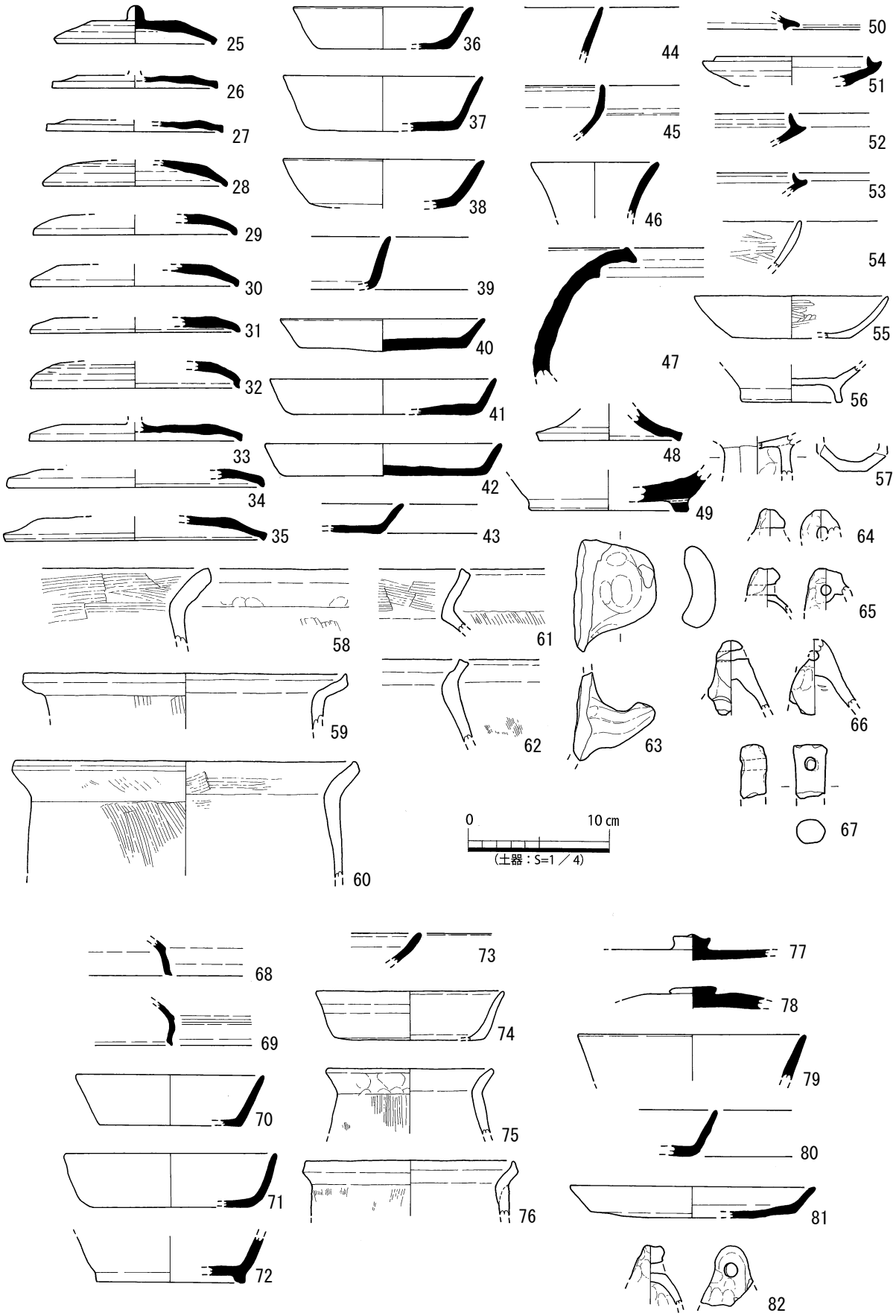


図 10　水田層　中央～東側　出土遺物実測図

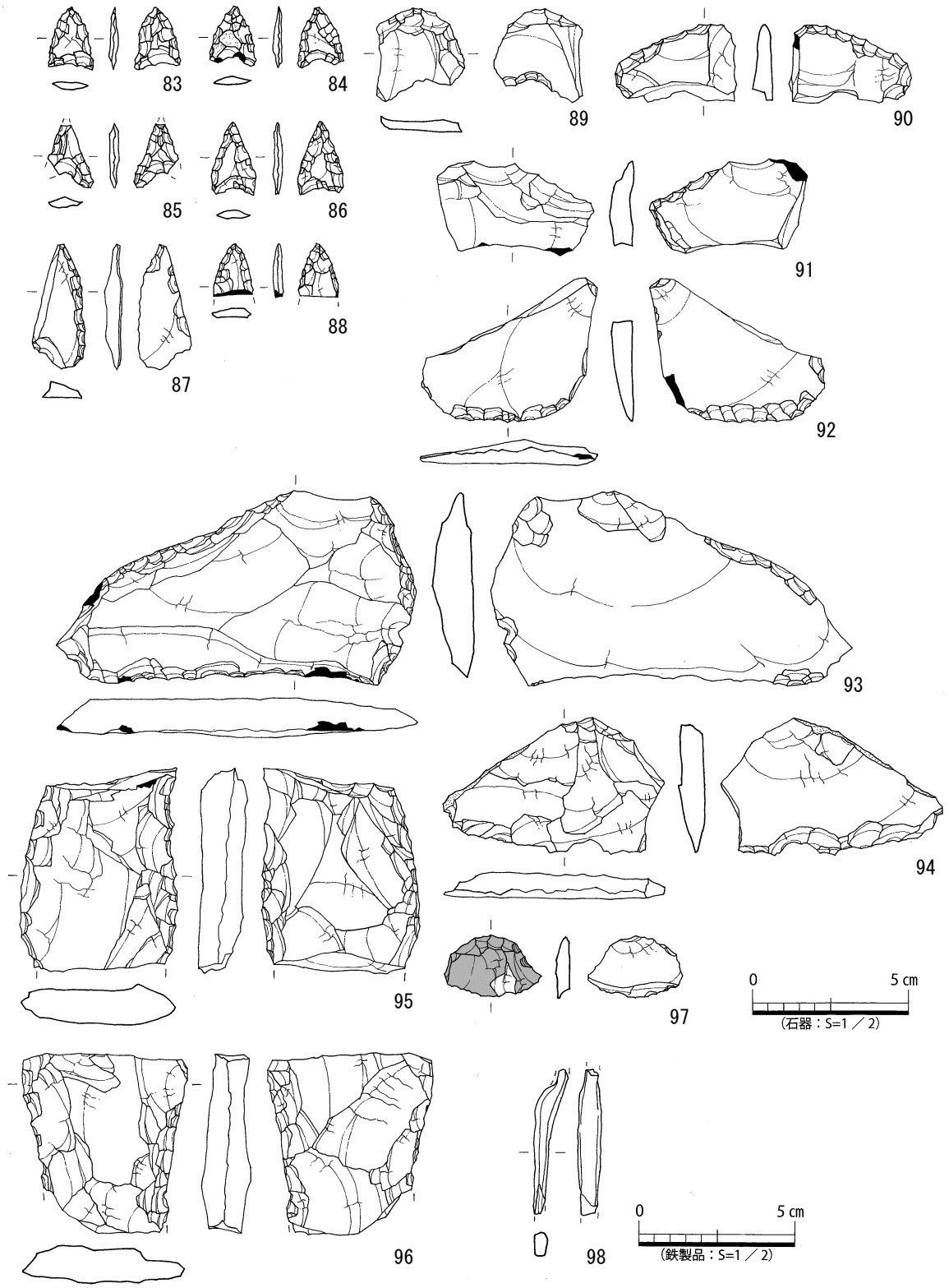


図 11　水田層　出土石器・鉄器実測図

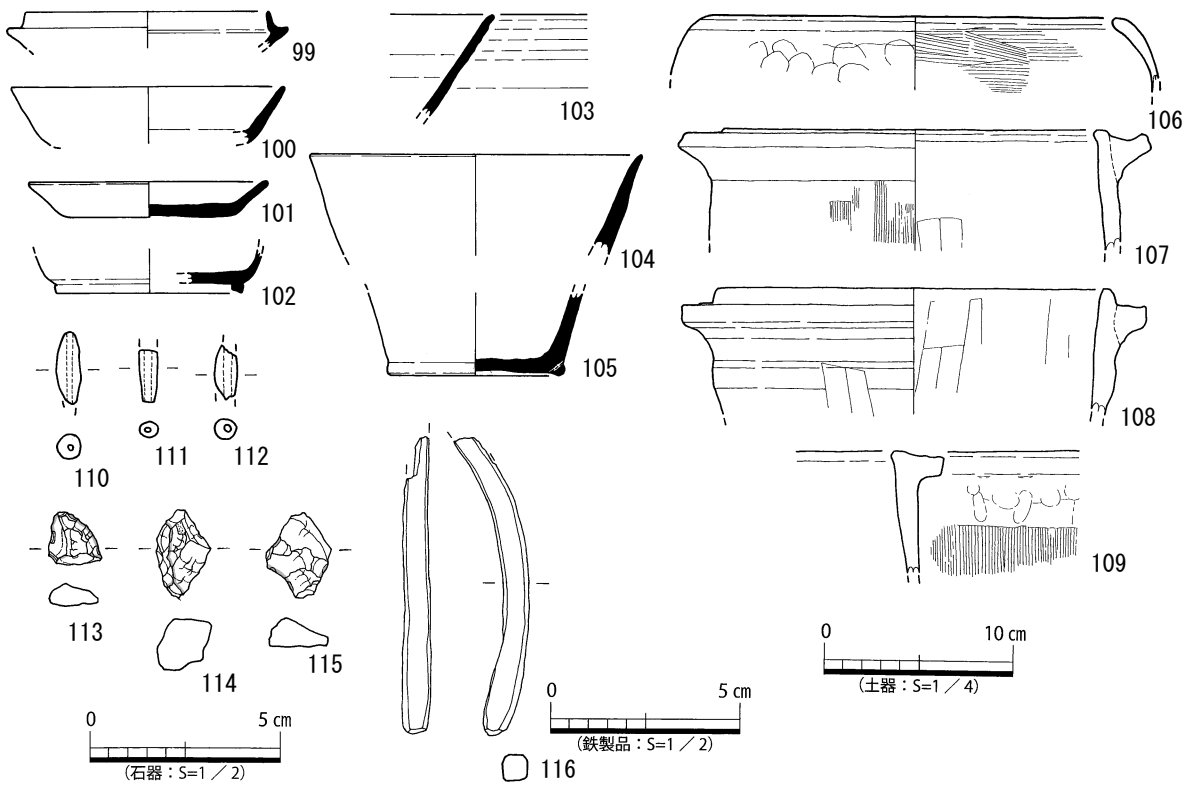


図 12　洪水砂層　出土遺物実測図

17 －水田水口（図８）

第 17 調査区第１面で検出した水田畦畔の水口である。幅約 0.20 ～ 0.30m、長さ約 10.58m の南北方向の畦畔と幅約 0.20 ～ 0.30m、長さ約 5.35 mの東西方向の畦畔とが交差する箇所で、長さ約 0.80m、幅約 0.17m、深さ約 0.05m の規模で畦畔が途切れる箇所があることが判明した。周辺の地形は南西側が高く、北東側が低いことから、田越しに東側へ水を送っていた可能性が想定できる。

大型水路（図 13 ～ 45・63）

大型水路は、第２～４・８・９・12・13 調査区の第１面で検出した大型水路と考えられる溝である。２・３-SD13、４・６・８-SD １、９-SD80、12-SD １～３、13-SD １～４の溝である。水田層を覆う洪水砂によって上面が被覆され、複数回にわたる洪水砂による堆積により埋没し、その稼働範囲を狭めていったことが窺える。調査では、洪水砂による堆積の範囲が確認できた単位ごとに遺構番号を付して遺物の取上げを行った。

遺構は南北方向の溝（９-SD80、12-SD １～３、13-SD １～４）と、東西方向の溝（２・３-SD13、４・６・８-SD １、９-SD80）が確認でき、第３調査区の東側、第９調査区の北側の調査範囲外の箇所で合流し、東側へと延びると考えられる。

南北方向で検出した範囲は、第９～ 12 調査区までで長さ約 53 m、東西方向は第２調査区から第４・６調査区までで長さ約 80 mである。

２・３－ SD13（図 13 ～ 17・63）

第２調査区北東側、第３調査区北東側で検出した大型水路である。西へ直行し、８-SD １へと続く。北側は調査区外へと続くため、全体の形状は不明である。１-SD7・２-SD17 に切られる。主軸方位 N-80°-W、検出面の標高は 5.50 mである。

長さ約 13.30 mを検出し、幅は約 6.00 m、深さは約 1.70 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は 16 層に分層でき、堆積状況からⅠ期（23 ～ 26 層）、Ⅱ期（22 層）、Ⅲ期（18 ～ 21 層）、Ⅳ期（14 ～ 17 層）、Ⅴ期（12･13 層）、Ⅵ期（11 層）の順に６時期にわたり堆積したことが確認できる。Ⅳ期とⅤ期の堆積状況から、この時期に一度浚渫が行われたと考えられる。

Ⅵ期の埋土は単層で、灰黄褐シルト～極細砂である。

Ⅴ期の埋土は２層に分層でき、灰黄褐細粒砂と灰

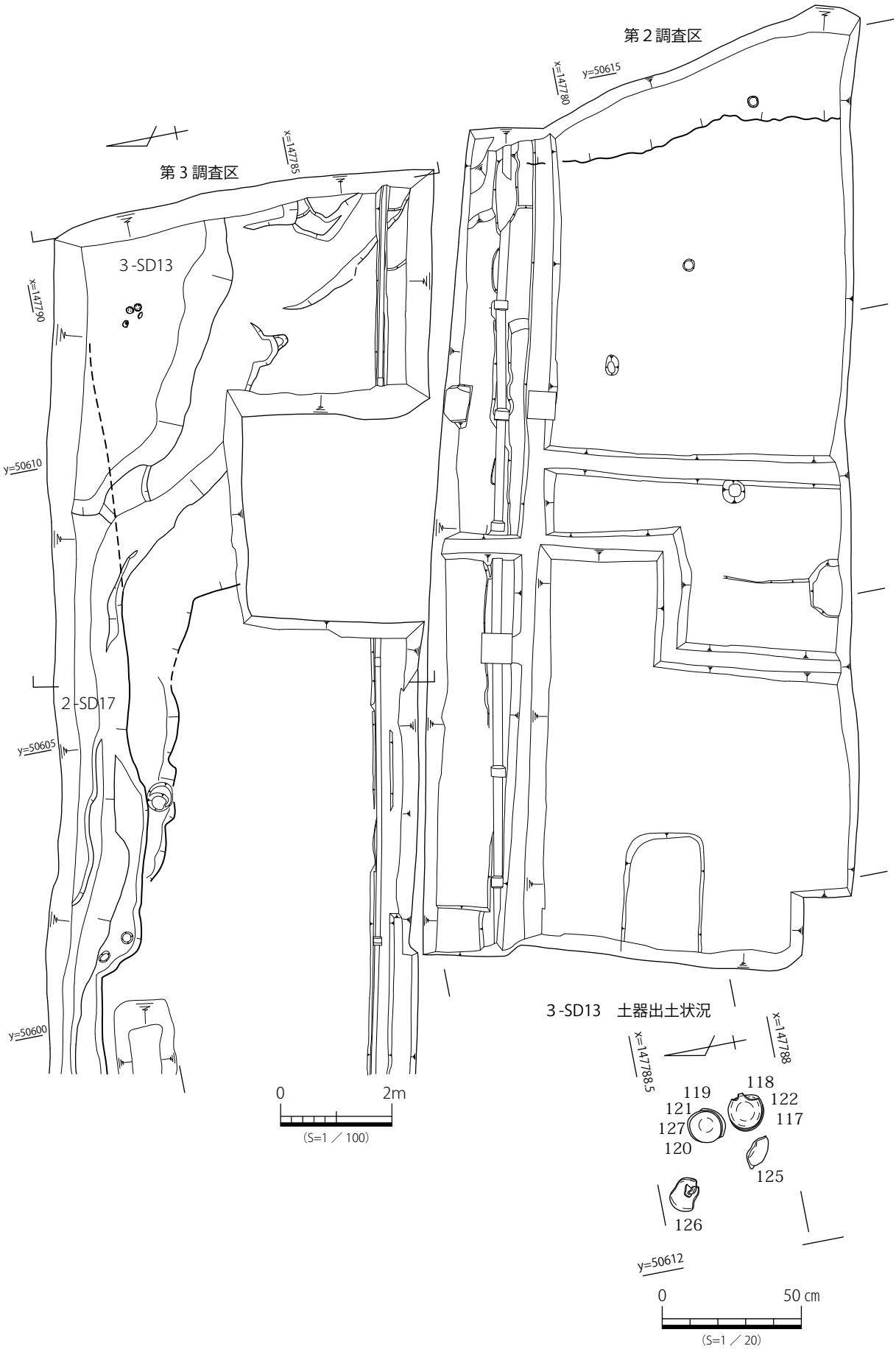
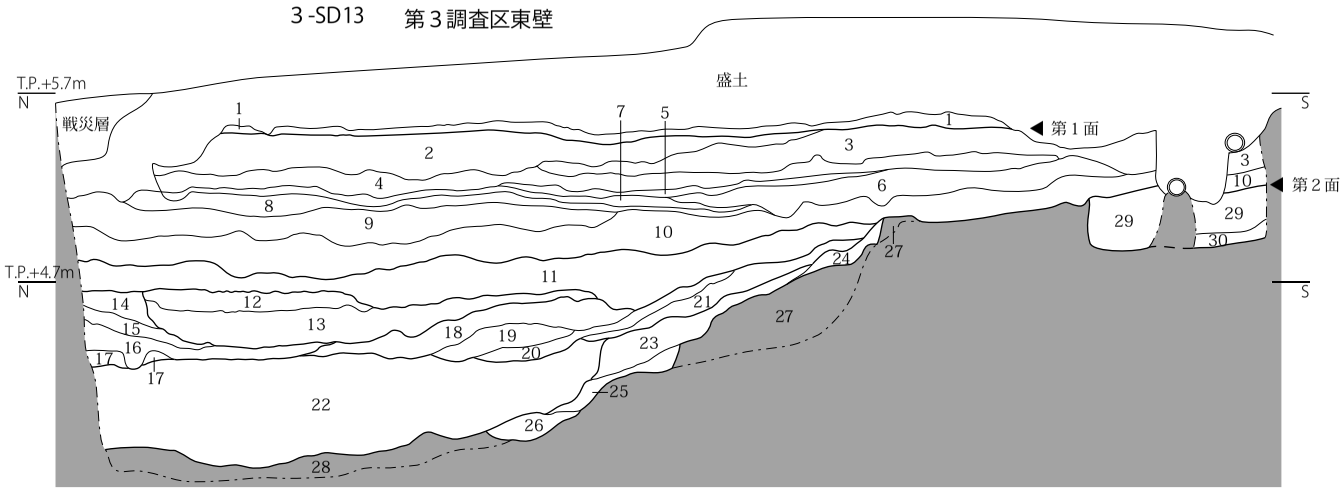


図 13　２・３-SD13・17　平面図、遺物出土状況図



1　10YR7/2 にぶい黄橙　細砂混じりシルト…床土？
2　10YR7/1 灰白　シルト～極細砂
3　10YR7/3 にぶい黄橙　シルト～極細砂　２層より粒形　細かい
4　10YR6/3 にぶい黄橙　粗砂混じりシルト～極細砂　炭化物含む
5　10YR6/4 にぶい黄橙　シルト
6　10YR6/4 にぶい黄橙　シルト　５層に比べやや粒形粗い
7　10YR7/3 にぶい黄橙 +7.5YR5/8 明褐　シルト～極細砂　Fe 沈着
8　10YR6/3 にぶい黄橙　シルト～極細砂　７層より粒形細かい
9　10YR5/2 灰黄褐　シルト　炭化物含む
10　10YR5/2 灰黄褐　シルト　８・９層より粒形細かい
11　10YR5/2 灰黄褐　シルト～極細砂　細粒砂ブロック含む
12　10YR4/2 灰黄褐　細粒砂　中粒砂ブロック状に含む
13　10YR4/2 灰黄褐　粘土混じりシルト　ラミナ中粒砂～シルト　径５㎝程度の地山ブロック含む
14　10YR4/2 灰黄褐　粘土～シルト　弱いラミナ構造あり　ラミナ中粒砂
15　10YR4/2 灰黄褐　粘土混じりシルト～極細砂　径３㎝程度の地山ブロック含む
16　10YR4/1 褐灰　シルト　弱いラミナ　ラミナ極細砂～細砂
17　10YR4/2 灰黄褐　粘土～シルト
18　10YR5/3 にぶい黄褐　細砂　径５～ 15 ㎝程度の地山ブロック亜角礫状に 5%
19　10YR4/2 灰黄褐　シルト～極細砂
20　10YR4/1 褐灰　粘土～シルト
21　10YR4/1 褐灰　シルト～細粒砂
22　10YR3/1 黒褐　粘土
23　10YR3/2 黒褐　粘土～シルト　径３㎝程度の地山ブロック含む
24　10YR4/1 褐灰　粘土　炭化物含む
25　10YR5/1 褐灰　細粒砂混じりシルト
26　2.5Y5/1 黄灰　粘土混じり細砂
27　10YR4/3 にぶい黄褐　細粒砂混じりシルト　よくしまる…ベース
28　5Y3/1 オリーブ黒　シルト混じり中粒砂～極粗砂　径５～ 10 ㎝程度の礫含む…ベース
29　10YR6/2 灰黄褐　シルト～細粒砂　径３～５㎝程度の灰色粘土ブロック含む…2-SD26
30　10YR6/4 にぶい黄橙　中粒砂～粗砂…2-SD26

0　1m
(S=1／40)

図 14　２・３-SD13　断面図

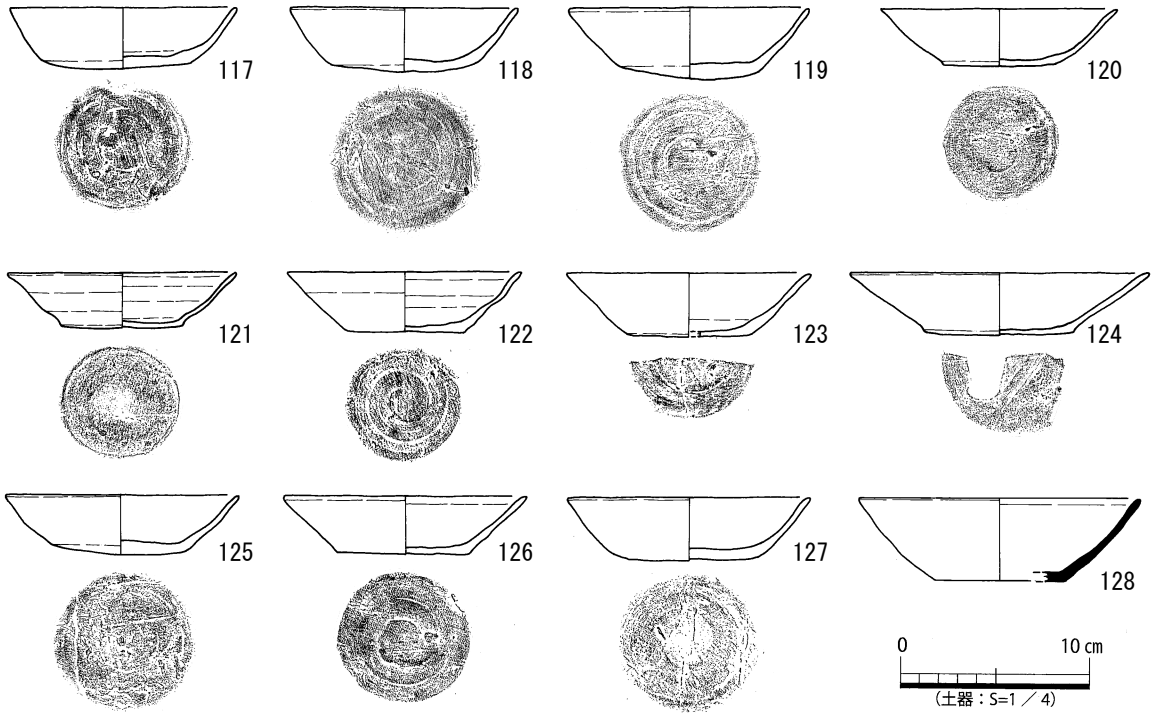


図 15　３-SD13　最下層出土遺物実測図

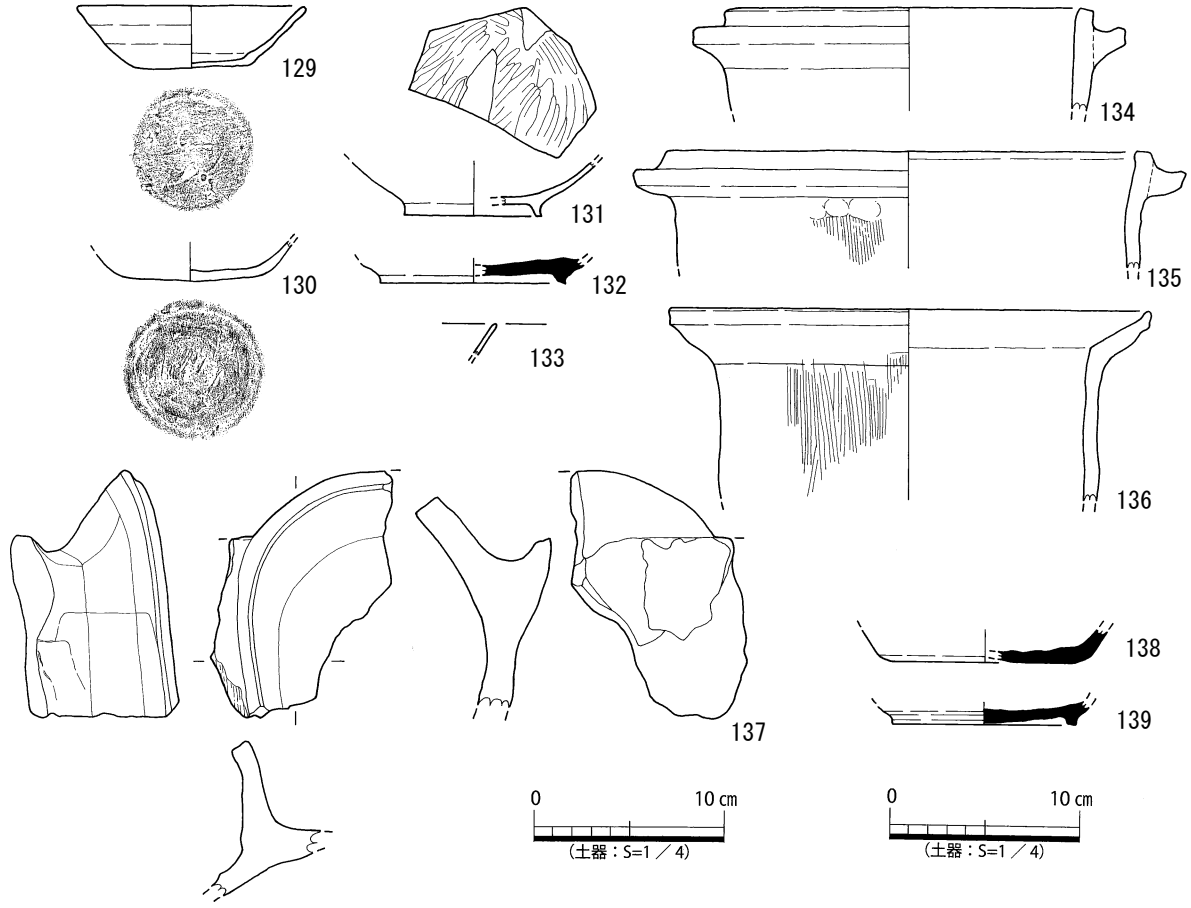


図 16　２・３-SD13　出土遺物実測図

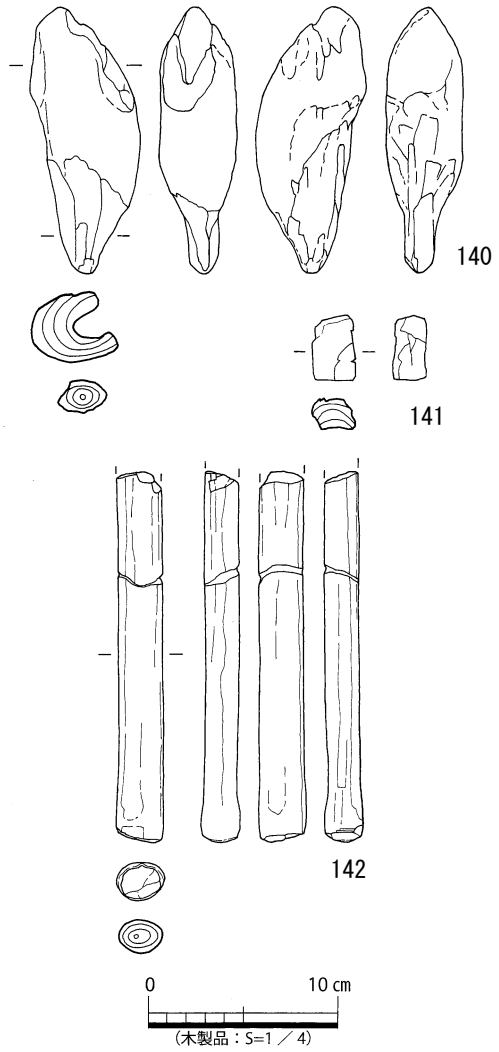


図 17　３-SD13　出土木器実測図

黄褐粘土混じりシルト（ラミナ中粒砂～シルト）で、下層では流水があったと想定できる。

Ⅳ期の埋土は４層に分層でき、灰黄褐粘土～シルト（弱いラミナ）と灰黄褐粘土混じりシルト～極細砂、褐灰シルト（弱いラミナ）、灰黄褐粘土～シルトで、ラミナ層と極細砂～粘土層との交互堆積が確認できる。

Ⅲ期の埋土は４層に分層でき、亜角礫状の地山ブロック土を含むにぶい黄褐細砂層の下層に灰黄褐シルト～極細砂と褐灰粘土～シルト、褐灰シルト～細粒砂が堆積している。下層３層が堆積したのちに、何らかの人為的な水路の再構築が行われた可能性がある。

Ⅱ期の埋土は黒褐粘土の単層で、ヘドロ状の堆積が確認できた。植物遺存体も多く残存しており、湿地状の環境であったものと推定できる。また、土師器杯（117 ～ 127）が一定の範囲にまとまり、杯の口縁を上にして重ねられた状態で出土した。水に関わる祭祀が行われた可能性が高い。

Ⅰ期の埋土は４層に分層でき、黒褐粘土～シルトと褐灰粘土、褐灰細粒砂混じりシルト、黄灰粘土混じり細砂である。流路掘削後、南側からの土砂の流れ込みによって堆積したと考えられる。

遺物は３-SD13 最下層から土師器杯（117 ～ 127）、須恵器杯Ａ（128）、木製品（142）、土師器片、巻貝が、3-SD13 中層から木製品（140・141）と須恵器片が出土した。

このほか、３-SD13 から土師器杯（129・130）、黒色土器Ａ椀（131）、須恵器杯Ｂ（132）、緑釉陶器椀（133）、土師器羽釜（134・135）、土師器甕（136）、移動式竈（137）が出土したほか、須恵器杯Ａ・須恵器壺・須恵器片、土師器甑？・土師器片、弥生土器片、サヌカイト剥片が出土した。２-SD13 から須恵器杯Ａ（138）、須恵器杯Ｂ（139）、須恵器片、土師器片、黒色土器片、サヌカイト剥片が出土した。

出土遺物の年代から、室町時代と考えられる。

４・６・８－SD1(4-SD11・12)（図 18 ～ 22）

第４調査区北西側～東側、第６調査区北側、第８調査区北側で検出した溝である。東西に直行し、攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。

主軸方位 N-80°-W、検出面の標高は 5.10 mである。

長さ約 38.00 mを検出し、幅は約 6.60 m、深さは約 1.40 mを測る。断面形状は階段状である。

埋土は a-a' 断面では 25 層に分層でき、埋土の観察から、Ⅰ期（26 ～ 28 層）、Ⅱ期（23 ～ 25 層）、Ⅲ期（18 ～ 22 層）、Ⅳ期（13 ～ 17 層）、Ⅴ期（６～ 12 層）、Ⅵ期（４・５層）の順に６時期にわたり堆積していったことが確認できる。Ⅴ期とⅥ期との間にラミナの分断等が確認できることから、浚渫が行われたと考えられる。

Ⅵ期はの埋土は２層に分層でき、黄灰極細砂混じりシルト～粘土（ラミナ）と褐灰シルト～粘土である。

Ⅴ期の埋土は７層に分層でき、黄灰シルト混じり極細砂と褐灰微細砂混じりシルト（ラミナ）、にぶい黄細砂～粗砂（ラミナ）、褐灰シルト（炭化物・

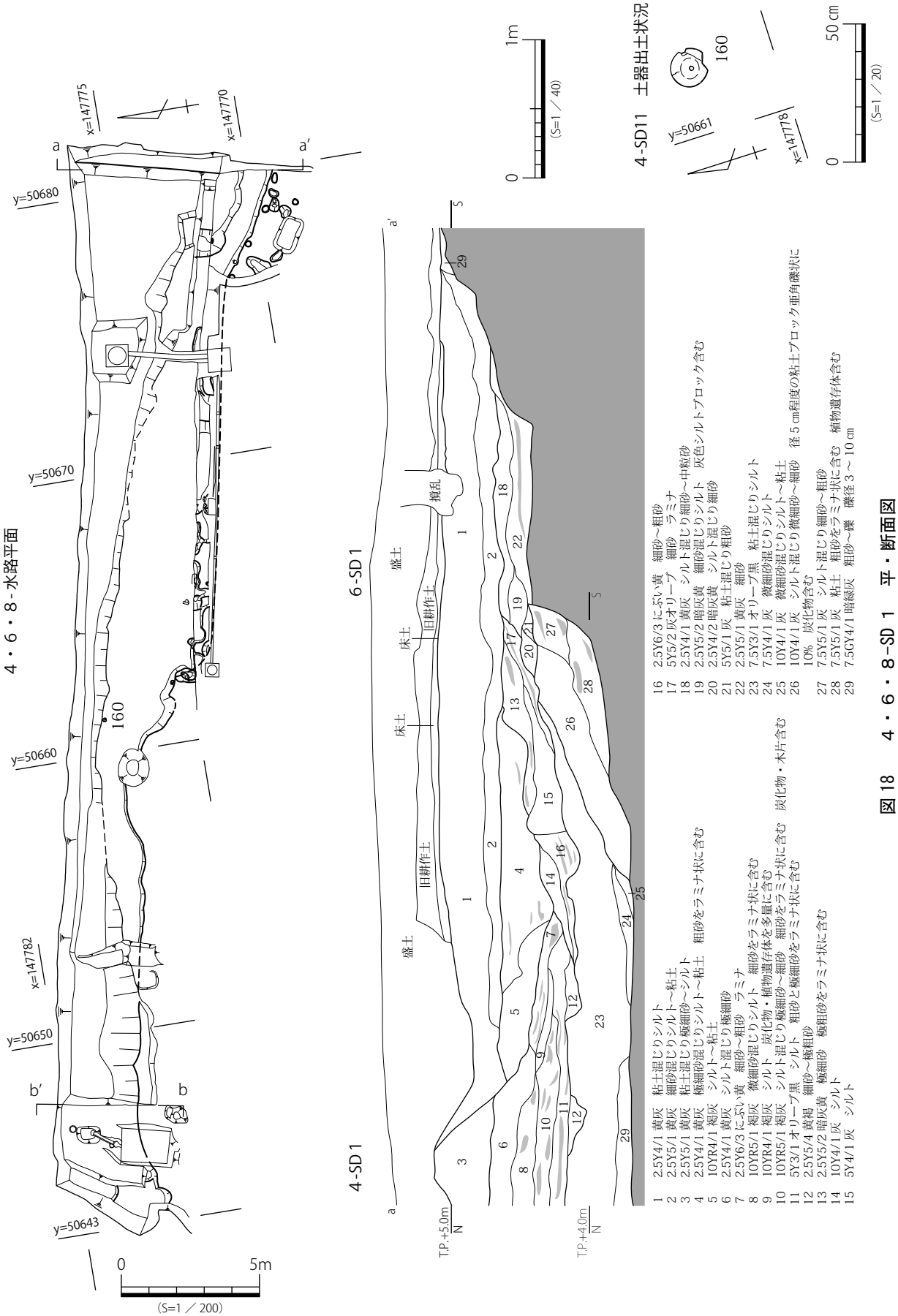
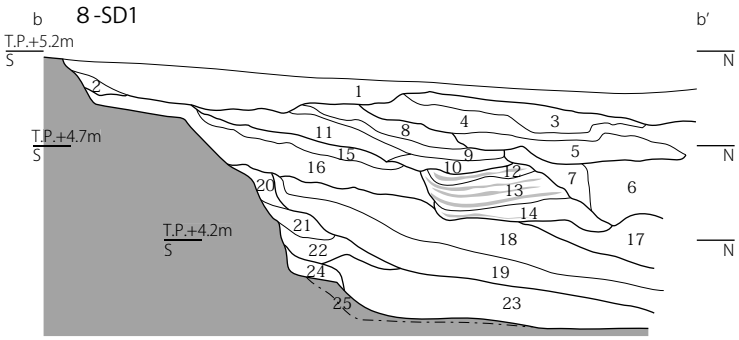


図18 4・6・8-SD１ 平・断面図



1　2.5Y6/2 灰黄　シルト
2　2.5Y6/1 黄灰　シルト
3　2.5Y6/1 黄灰　微細砂～細砂　炭化物含む
4　2.5Y5/1 黄灰　シルト
5　2.5Y5/1 黄灰　中粒砂混じりシルト
6　2.5Y6/2 灰黄　粗砂～小礫
7　2.5Y6/2 灰黄　微細砂
8　2.5Y6/2 灰黄　微細砂～細砂
9　2.5Y7/2 灰黄　中粒砂～粗砂
10　2.5Y6/2 灰黄　中粒砂
11　5Y5/2 灰オリーブ　微細砂
12　2.5Y6/1 黄灰　シルト混じり微細砂　ラミナ
13　2.5Y6/2 灰黄　細砂　ラミナ
14　2.5Y5/1 黄灰　シルト　ラミナ
15　5Y5/2 灰オリーブ　細砂
16　2.5Y5/2 暗灰黄　微細砂　シルトブロック含む
17　7.5YR4/6 褐　極細砂～小礫
18　10Y4/1 灰　シルト～極細砂　径 10 ㎝程度のシルト 8%　植物遺体含む
19　10Y4/1 灰　シルト～極細砂　植物遺存体含む
20　10YR5/6 黄褐　極細砂混じりシルト～粘土…地山ブロック土の流入
21　10Y4/1 灰　細砂混じりシルト　径３～10 ㎝程度の地山ブロック 3%
22　10Y4/1 灰　シルト混じり細砂　灰色シルトブロック・地山ブロック 10%
23　10Y4/1 灰　極細砂混じりシルト
24　5Y4/1 灰　粘土～シルト
25　2.5Y6/3 にぶい黄　砂礫

0　1m
（S=1／40）

図 19　　８-SD １　断面図

植物遺存体)、褐灰シルト混じり極細砂～細砂（ラミナ)、オリーブ黒シルト（ラミナ)、黄褐細砂～極粗砂である。主にラミナが確認できる流水堆積層である。この時期の層は、厚さ約 0.7 mにもおよんで堆積しており、相当量の土砂の供給が行われたと考えられる。この時の土砂の供給により、ほぼ埋まってしまった水路をⅥ期で浚渫し、再度水路としての機能を持たせたと考えられる。

Ⅳ期の埋土は５層に分層でき、暗灰黄極細砂（ラミナ)、と灰シルト、にぶい黄細砂～粗砂、灰オリーブ細砂（ラミナ）である。ラミナが確認できる極細砂～粗砂の層と、シルト質の層の交互堆積の状況が確認できる。

Ⅲ期の埋土は５層に分層でき、黄灰シルト混じり細砂～中粒砂、暗灰黄細砂混じりシルト、暗灰黄シルト混じり細砂と灰粘土混じり粗砂、黄灰細砂である。溝の南側からの土砂の供給によって埋まった堆積と考えられる。

Ⅱ期は３層に分層でき、オリーブ黒粘土混じりシルトと灰微細砂混じりシルト、灰微細砂混じりシルト～粘土である。シルトと粘土のヘドロ状の堆積が確認できた。

Ⅰ期は３層に分層でき、灰シルト混じり微細砂～細砂と灰シルト混じり細砂～粗砂､灰粘土（ラミナ）である。最低部で水路掘削時の流水堆積が確認できるほか、溝の南側からの土砂が流れ込んでいたことが確認できる。

b-b′断面では 22 層に分層で、Ⅰ期（23･24 層)、Ⅱ期（20 ～ 22 層)､Ⅲ期（18･19 層)､Ⅳ期（17 層)、Ⅴ期（15・16 層)、Ⅵ期（12 ～ 14 層)、Ⅶ期（８～ 11 層)、Ⅷ期（６・７層)、Ⅸ期（３～５層）の順に９期に分けて堆積したことが確認できる。このうちラミナの分断等の堆積状況からⅦ期とⅧ期の間とⅥ期とⅤ期との間で浚渫が行われた可能性が想定できる。

Ⅸ期は３層に分層でき、黄灰微細砂～細砂と黄灰シルト、黄灰中粒砂混じりシルトである。

Ⅷ期は２層に分層でき、灰黄粗砂～小礫と灰黄微細砂である。

Ⅶ期は４層に分層でき、灰黄微細砂～細砂と灰黄中粒砂～粗砂、灰黄中粒砂、灰オリーブ微細砂の粒形の異なる砂の連続堆積が確認できる。

Ⅵ期は３層に分層でき、黄灰シルト混じり微細砂（ラミナ）と灰黄細砂（ラミナ)、黄灰シルト（ラミナ）である。ラミナが確認できることから、流水堆積と考えられる。

Ⅴ期は２層に分層でき、灰オリーブ細砂と暗灰黄微細砂である。

Ⅳ期は単層で、褐極細砂～小礫である。

Ⅲ期は２層に分層でき、灰シルト～極細砂と灰シルト～極細砂で、植物遺存体を含むヘドロ状の堆積である。

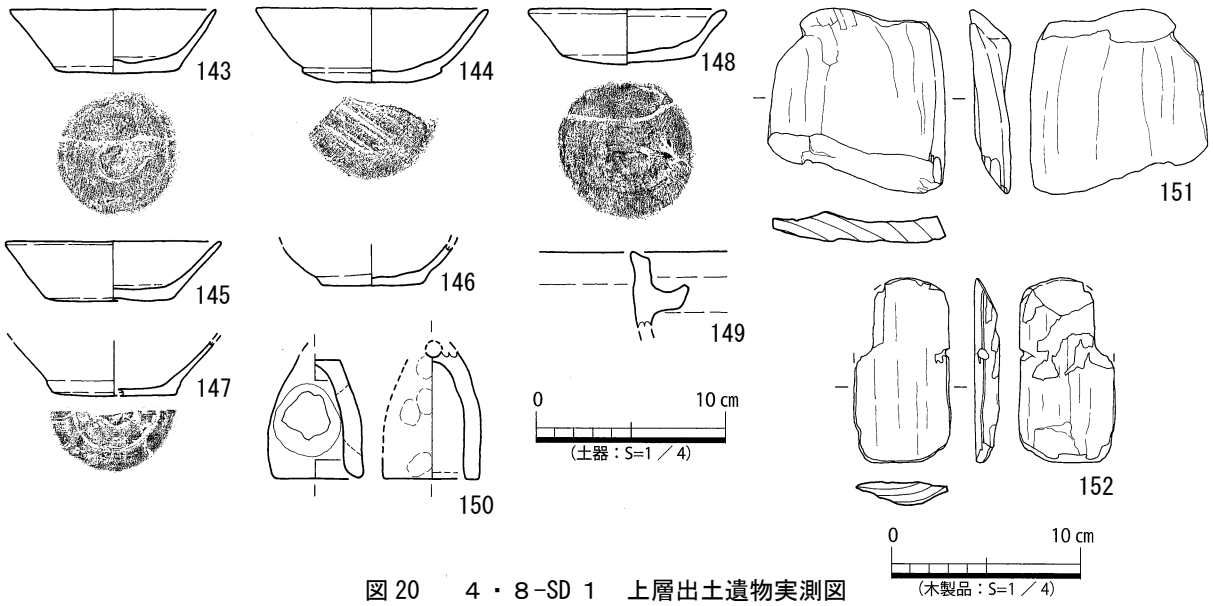


図 20　４・８-SD １　上層出土遺物実測図

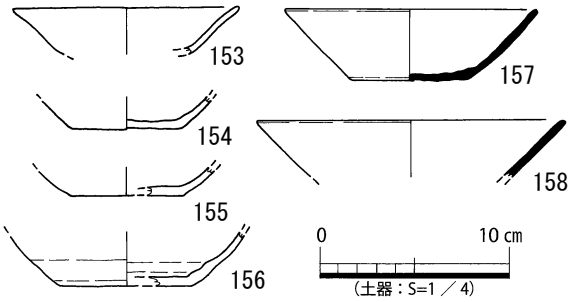


図 21　４-SD １　下層出土遺物実測図

Ⅱ期は３層に分層でき黄褐極細砂混じりシルト～粘土と灰細砂混じりシルト、灰シルト混じり細砂である。いずれの層も地山ブロック土を含むことから、南側からの土砂の流入によって形成された層と考えられる。

Ⅰ期は２層に分層でき、灰極細砂混じりシルトと灰粘土～シルトで、ヘドロ状の堆積である。

遺物は上層から、第４調査区から土師器杯（143～147）、土師器飯蛸壺（150）、木製品（151・152）が出土した。このほか図化できなかったが、須恵器杯Ｂ・須恵器片、土師器羽釜・土師器片、移動式竈、瓦質土器片、青磁片、瓦、弥生土器片、磁器片（染付）が出土した。第８調査区から土師器杯（148）、土師器羽釜（149）、が出土したほか、図化できなかったが、須恵器片、土師器片、黒色土器Ｂ片が出土した。

下層から第４調査区で土師器杯（153～156）、須恵器杯（157・158）が出土したほか、図化できなかったが、須恵器片、土師器片、陶器片が出土した。第８調査区から土師器片が出土した。

そのほか第４調査区から土師器杯（159・160）、土師器羽釜（161）、須恵質土器壺（162）が出土したほか、図化できなかったが、須恵器片、土師器片が出土した。第６調査区から須恵器片、土師器片、骨が、第７調査区から土師器杯（163）、須恵器杯Ａ（164）、土師器羽釜（165）、木製品（166）が出土した。

出土遺物の年代から、室町時代と考えられる。

９－SD80（図 23～27）

第９調査区中央～西側で検出した溝である。北に直行し、攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、４・６・８-SD １と北西工区２・３-SD13 と北側で合流すると考えられる。主軸方位 N-7°-E、検出面の標高は約 5.30 mである。

第９調査区での検出長は約 7.50 m、幅約 11.50

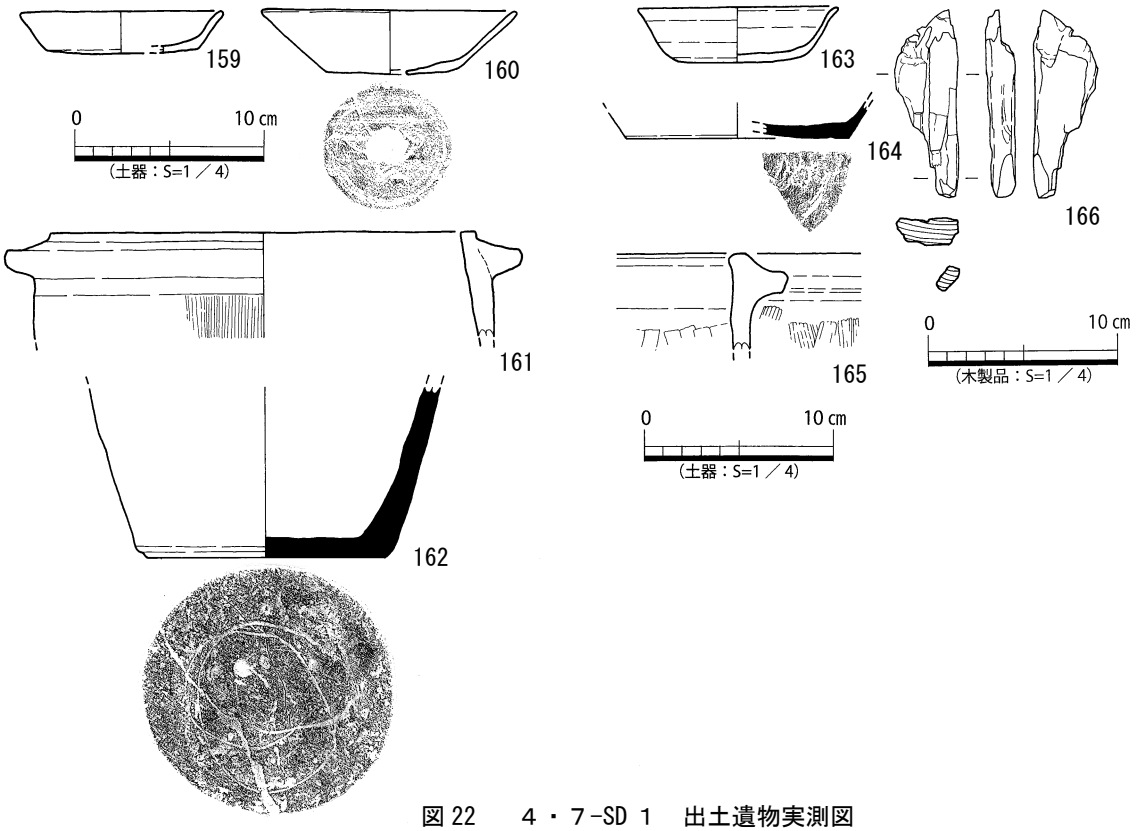


図 22　　4・7-SD 1　出土遺物実測図

m、深さ約 1.30 mを測る。断面形状は階段状である。地下埋設物の影響で、掘削の範囲が狭小であったこと、また多量の湧水により壁面の崩落が懸念された。安全を確保するため、掘削深度が地表面から約 1.8 mを越えた段階で掘削を中止した。

埋土は 39 層に分層でき、Ⅰ期（44・45 層・47・48 層）、Ⅱ期（39 ～ 43 層）Ⅲ期（38 層）、Ⅳ期（32 ～ 37 層）、Ⅴ期（31 層）、Ⅵ期（25 ～ 30 層）、Ⅶ期（24 層）、Ⅷ期（19 ～ 23 層）、Ⅸ期（15 ～ 18 層）Ⅹ期（13・14 層）、Ⅺ期（12 層）Ⅻ期（11 層）XⅢ期（8 ～ 10・46 層）の順に堆積したことが判明した。このうちⅠ期とⅡ期との間、Ⅲ期とⅣ期の間、Ⅻ期とXⅢ期の間に、浚渫等が行われた可能性が想定できる。

XⅢ期は西側で 3 層、東側で 1 層に分層できる。西側の埋土は灰黄褐微細砂混じりシルトと黄灰シルト混じり微細砂、褐灰細砂混じりシルトである。東側の埋土は暗灰黄細砂混じりシルトである。

Ⅻ期は褐灰細砂～中粒砂混じりシルトの単層である。

Ⅺ期は黄灰シルトの単層で、ラミナが確認できる。

Ⅹ期は 2 層に分層でき、黄灰細砂混じりシルト～粘土と暗灰黄細砂混じりシルト～粘土のヘドロ状の堆積である。

Ⅸ期は 4 層に分層でき、黄灰シルト混じり極細砂と褐灰シルト混じり極細砂、灰オリーブ極細砂～細砂（ラミナ）、灰シルト混じり極細砂（植物遺体含む）である。弱い水流による流水堆積層と考えられる。

Ⅷ期は 5 層に分層でき、埋土は灰極細砂～細砂（ラミナ）とにぶい黄褐細砂～中粒砂（ラミナ）、灰黄褐細砂～粗砂（ラミナ）、灰シルト混じり細砂～中粒砂、にぶい褐シルト混じり細砂～小礫である。最初にやや強い水流による堆積ののち、弱い水流による流水堆積により埋没したと考えられる。

Ⅶ期は暗灰黄粘土の単層である。大規模な地山ブロック土の可能性も想定できる。

Ⅵ期は 6 層に分層でき、埋土は褐灰極細砂混じりシルトと黄灰極細砂～細砂（ラミナ）、褐灰極細砂混じりシルト（弱ラミナ・植物遺存体含む）、明黄褐粗砂（ラミナ）、褐灰極細砂～粗砂（ラミナ）、灰黄褐シルト混じり中粒砂～粗砂（ラミナ）である。ラミナと植物遺存体が含まれる堆積層であることから、流水から滞留が起こる堆積環境であったと考えられる。

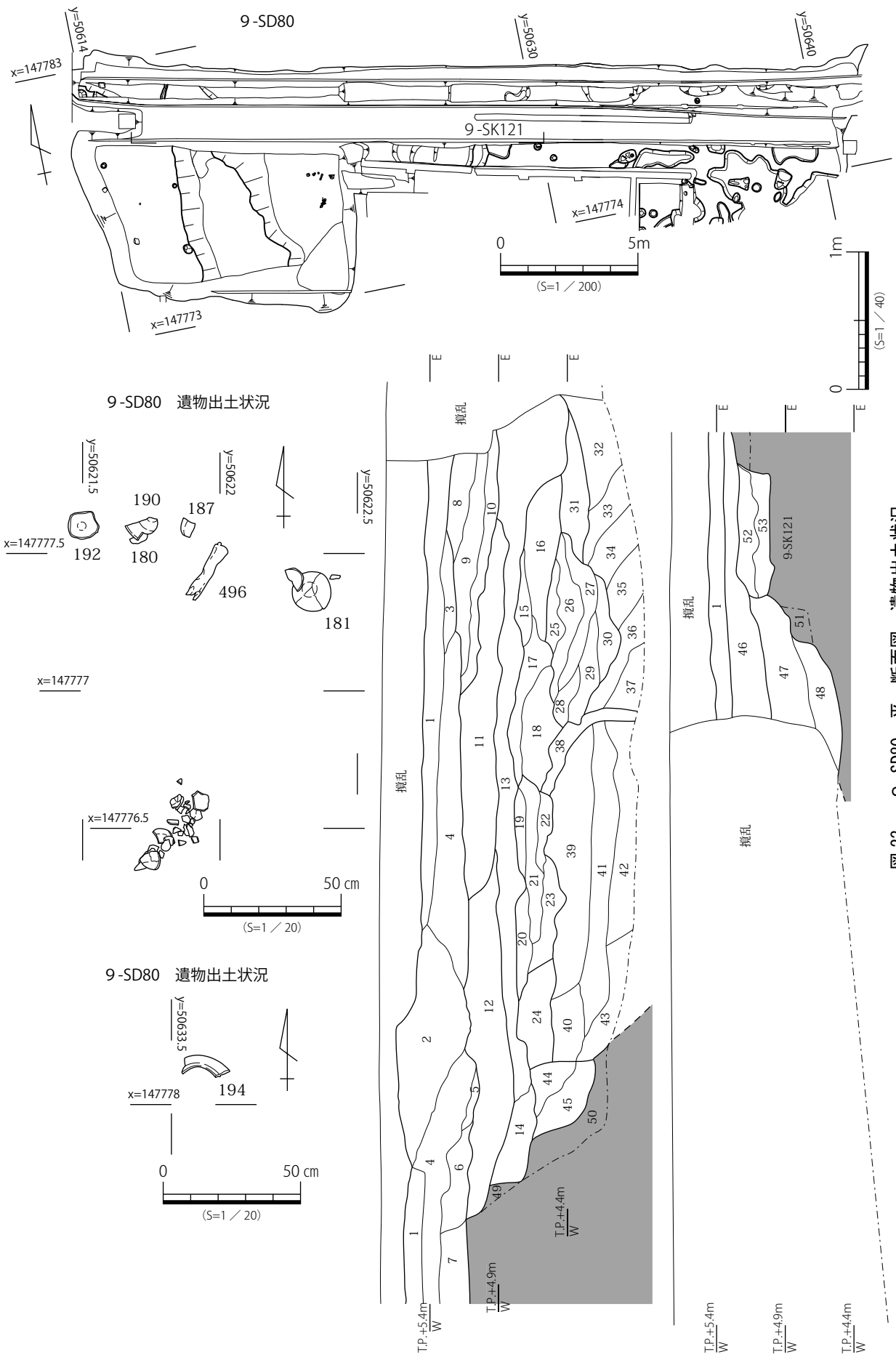


図 23　９−SD80　平・断面図、遺物出土状況

1　7.5YR5/1 褐灰　細砂混じりシルト
2　2.5Y5/1 黄灰　微細砂
3　10YR6/2 灰黄褐　シルト混じり細砂　粘性強
4　10YR5/1 褐灰　シルト混じり細砂　粘性強
5　2.5Y6/1 黄灰　シルト混じり微細砂～細砂　粘性強
6　2.5Y5/1 黄灰　シルト混じり細砂　粘性弱　５層と細砂量同じ　Fe 沈着
7　2.5Y5/1 黄灰　シルト混じり細砂　４層に比べ細砂多い
8　10YR5/2 灰黄褐　微細砂混じりシルト
9　2.5Y6/1 黄灰　シルト混じり微細砂
10　10YR5/1 褐灰　細砂混じりシルト
11　10YR5/1 褐灰　細砂～中粒砂混じりシルト　細砂～中粒砂ブロック状に含む
12　2.5Y4/1 黄灰　シルト　微細砂ラミナ状に含む
13　2.5Y4/1 黄灰　細砂混じりシルト～粘土
14　2.5Y5/2 暗灰黄　細砂混じりシルト～粘土
15　2.5Y5/1 黄灰　シルト混じり極細砂
16　10YR5/1 褐灰　シルト混じり極細砂　16 層に比べ粘性弱
17　5Y6/2 灰オリーブ　極細砂～細砂　ラミナ
18　5Y5/1 灰　シルト混じり極細砂　植物遺体含む
19　10Y5/1 灰　極細砂～細砂　ラミナ
20　10YR5/4 にぶい黄褐　細砂～中粒砂　ラミナ　Fe 沈着
21　10YR5/2 灰黄褐　細砂～粗砂　ラミナ　Fe 沈着
22　5Y4/1 灰　シルト混じり細砂～中粒砂
23　7.5YR5/4 にぶい褐　シルト混じり細砂～小礫　礫径 1 ㎝　Fe 沈着
24　2.5Y5/2 暗灰黄　粘土
25　10YR5/1 褐灰　極細砂混じりシルト
26　2.5Y5/1 黄灰　極細砂～細砂　ラミナ
27　10YR5/1 褐灰　極細砂混じりシルト　弱ラミナ　植物遺体含む
28　10YR6/6 明黄褐　粗砂　ラミナ
29　10YR5/1 褐灰　極細砂～粗砂　ラミナ
30　10YR5/2 灰黄褐　シルト混じり中粒砂～粗砂　ラミナ
31　5Y5/1 灰　シルト混じり微細砂
32　10Y4/1 灰　細砂混じりシルト　植物遺体含む
33　7.5Y4/1 灰　シルト混じり細砂～中粒砂　ラミナ　植物遺体スジ状に含む
34　5GY5/1 オリーブ灰　極細砂～細砂
35　2.5GY4/1 暗オリーブ灰　極細砂～細砂　ラミナ　植物遺体スジ状に含む
36　10Y4/1 灰　極細砂　ラミナ　植物遺体スジ状に含む
37　10Y4/1 灰　極細砂　ラミナ
38　2.5Y5/4 黄褐　シルト～粘土…地山ブロック土か
39　10Y5/1 灰　シルト～粘土
40　7.5Y5/1 灰　粘土　グライ化
41　7.5GY5/1 緑灰　シルト～粘土　グライ化　27 層より粘性強
42　10GY5/1 緑灰　シルト混じり極細砂～細砂　グライ化
43　5GY5/1 オリーブ灰　シルト混じり細砂～中粒砂　グライ化
44　5Y5/1 灰　細砂混じりシルト
45　5Y5/1 灰　シルト混じり細砂　植物遺体含む
46　2.5Y5/2 暗灰黄　細砂混じりシルト
47　2.5Y5/1 黄灰　シルト
48　2.5Y6/1 黄灰　シルト　径３～５㎝程度の地山ブロック 3%
49　2.5Y5/3 黄褐　粘土…ベース
50　5Y5/1 灰　細砂～中粒砂…ベース
51　10YR5/6 黄褐　粘土
52　10YR5/1 褐灰　粘土　径５㎝程度の地山ブロック 30%　焼土･炭化物含む
53　10YR5/1 褐灰　粘土　地山ブロック 50%　焼土 50%　炭化物多く含む

Ⅴ期は単層で灰シルト混じり微細砂である。

Ⅳ期は６層に分層でき、埋土は灰細砂混じりシルト（植物遺体含む）と灰シルト混じり細砂～中粒砂（ラミナ･植物遺体含む）、オリーブ灰極細砂～細砂、暗オリーブ灰極細砂～細砂（ラミナ･植物遺体含む）、灰極細砂（ラミナ・植物遺体含む）、灰極細砂（ラミナ）である。ラミナと植物遺存体を含む流水堆積による互層が確認できる。

Ⅲ期は単層で、黄褐シルト～粘土である。流路埋没段階の西側からの流入土の可能性が考えられるが、Ⅲ期とⅣ期の間の浚渫によってその情報の大部分が失われており、可能性の言及に留めたい。

Ⅱ期は５層に分層でき、埋土は灰シルト～粘土と灰粘土（グライ化）､緑灰シルト～粘土（グライ化）、緑灰シルト混じり極細砂～細砂（グライ化）､オリーブ灰シルト混じり細砂～中粒砂（グライ化）である。堆積後､長期間水が滞留状態であったと考えられる。

Ⅰ期は西側、東側とも２層に分層できる。西側の埋土は灰細砂混じりシルトと灰シルト混じり細砂（植物遺体含む）である。東側の埋土は黄灰シルトと黄灰シルトで、流路肩からの流入堆積と考えられる。

遺物は上層から土師器杯（167 ～ 177）、土師器羽釜（178）、骨（496）、土師器片、焼土塊が出土した。

下層から土師器杯（179 ～ 187）､須恵器杯（188）、須恵器杯Ａ（189・190）、須恵器壺（191）、黒色土器Ａ椀（192）、土師器羽釜（193・194）、土師器甕（195）、移動式竈（196･197）、木製品（201･202・204・205）が、図化できなかったが、須恵器片、土師器片、弥生土器片、サヌカイト剥片が出土した。

このほか須恵器壺（198）、瓦質土器摺鉢（199・200）木製品（203）、木製品杭（206）、土師器羽釜脚部・土師器片、須恵器片、黒色土器片、弥生土器片、焼土塊が出土した。

出土遺物の年代から、室町時代と考えられる。

12 － SD ３（図 28）

第 12 調査区中央で検出した溝である。13-SD ３へと続く。北に直行し、攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-10°-E、検出面の標高は 5.40 ｍである。

長さ約 4.00 ｍを検出し､幅約 2.96 ｍ､深さ約 1.04 ｍを測る。断面形状は不整形である。

埋土は２層に分層でき、洪水砂で埋まる。上層が暗灰黄細砂混じり極細砂、下層が灰細砂～極細砂である。

遺物が出土していないため､時期は不明であるが、遺構の連続関係から、室町時代と考えられる。

12 － SD １（図 28）

第 12 調査区中央で検出した大型水路である。13-SD １へと続く。北に直行し、攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-8°-E、検出面の標高は 5.55 ｍである。長さ約 3.97 ｍを検出し、幅約 2.57 ｍ、深さ約 0.48

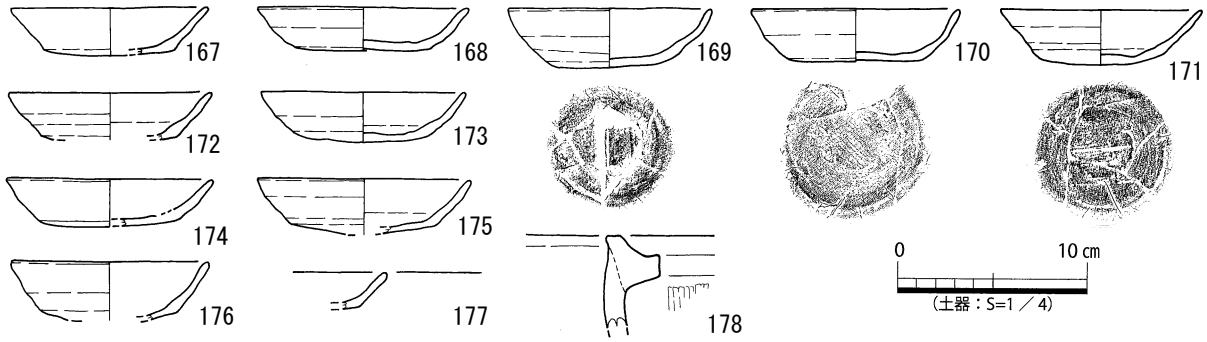


図 24　　９-SD80　上層出土遺物実測図

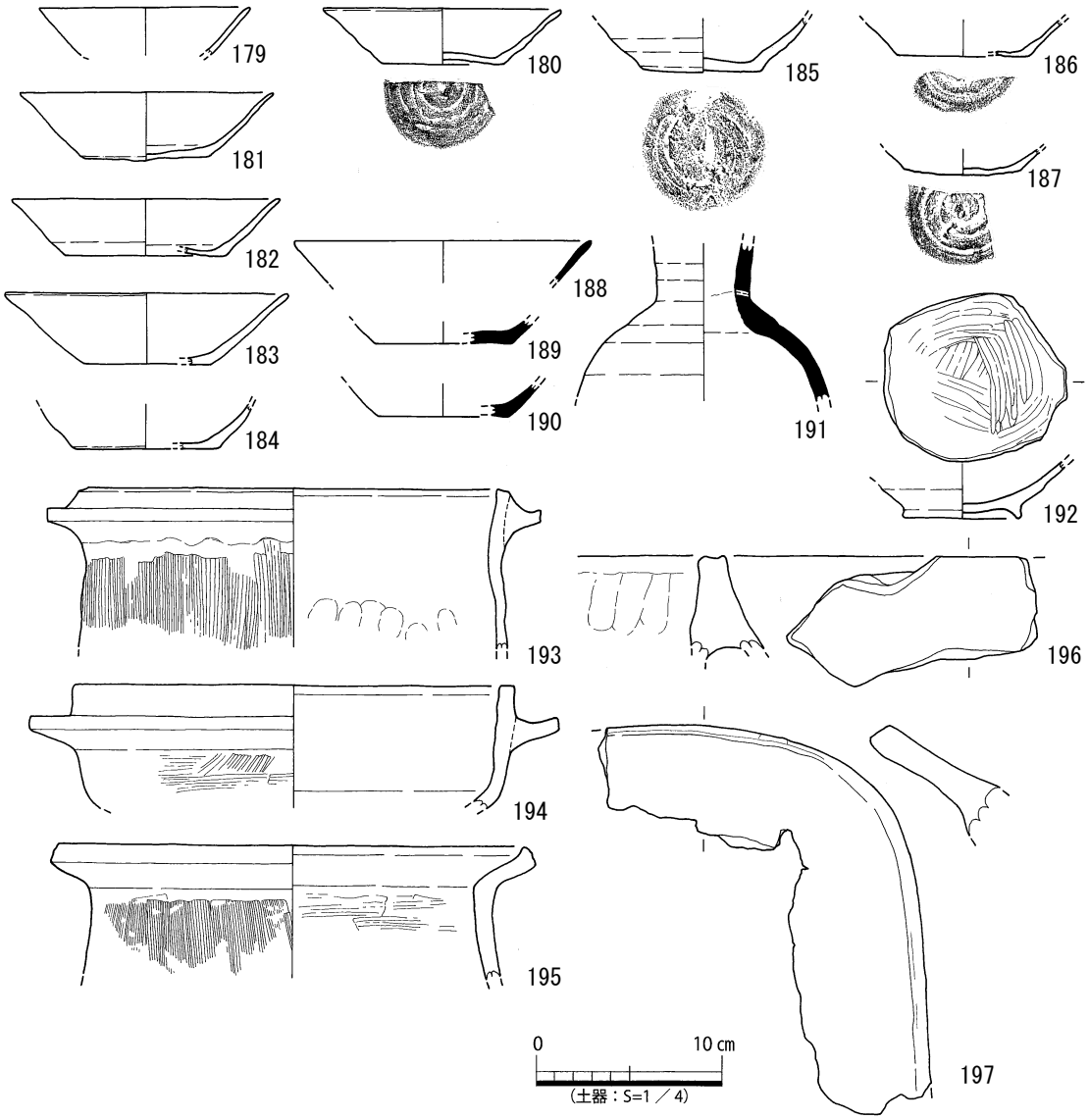


図 25　　９-SD80　下層出土遺物実測図

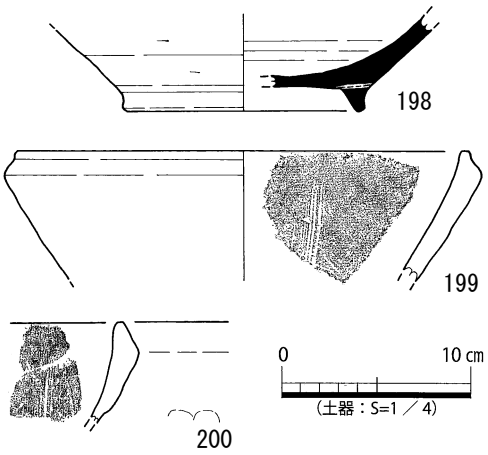


図 26　　9-SD80　出土遺物実測図

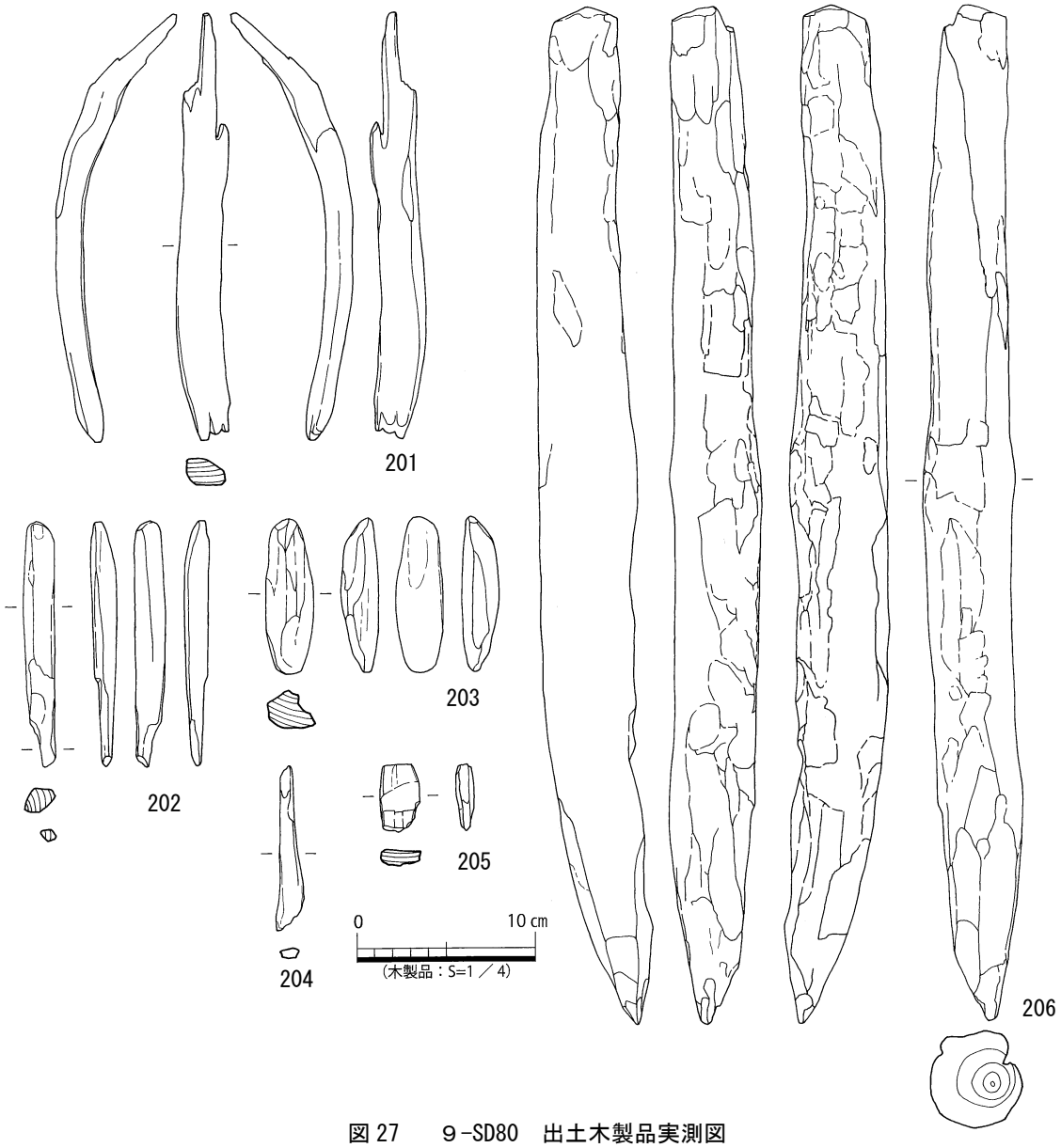


図 27　　9-SD80　出土木製品実測図

図 28　12-SD １・２・３　平・断面図

1　2.5Y4/2 暗灰黄　細砂混じり極細砂　2.5Y5/3 黄褐　極細砂ブロック 15%
炭化物含む
2　5Y4/1 灰　細砂～極細砂　Mn 沈着
3　2.5Y5/2 暗灰黄　細砂～極細砂　Mn 少量沈着…洪水砂
4　2.5Y5/3 黄褐　細砂混じり極細砂　細礫層状に入る
5　2.5Y5/1 黄灰　極細砂　Mn 多量沈着　炭化物含む
6　2.5Y6/1 黄灰　極細砂　ラミナあり
7　2.5Y6/2 灰黄　細砂～極細砂
8　2.5Y6/1 黄灰　細砂混じり極細砂　Fe
9　2.5Y6/2 灰黄　粗砂～細砂　Fe
10　10YR6/2 灰黄褐　極細砂　Fe　須恵器片含む
11　2.5Y5/1 黄灰　極細砂　Fe　ラミナあり
12　2.5Y6/1 黄灰　細砂　Fe　ラミナあり　植物遺存体あり
13　5Y6/1 灰　細砂～極細砂　Fe
14　5Y6/1 灰　細砂～極細砂　Fe　ラミナあり　植物遺存体あり　小礫含む
15　2.5Y4/1 黄灰　粗砂混じり極細砂　炭化物含む　土器片含む
16　2.5Y5/1 黄灰　細砂～極細砂　Fe　ラミナあり　小礫含む
17　5Y5/1 灰　細砂～極細砂　Mn 沈着　Fe
18　2.5Y5/1 黄灰　細砂～極細砂　Fe　植物遺存体あり
19　2.5Y5/1 黄灰　粘土　Fe
20　2.5Y5/2 暗灰黄　極細砂　Mn 沈着　Fe　黄灰色粘土ブロック 20%
21　2.5Y5/2 暗灰黄　粗砂混じり極細砂　Fe
22　5Y4/1 灰　粗砂混じり粘土　Mn 沈着　Fe　黄灰色粘土ブロック 7%
23　2.5Y6/2 灰黄　細砂～極細砂　Fe
24　2.5Y4/1 黄灰　砂礫　Fe 強
25　10YR5/1 褐灰　シルト～粘土
26　5Y6/2 灰オリーブ　粗砂～細砂
27　5Y4/1 灰　極細砂　小礫多量
28　5Y5/1 灰　粗砂混じり極細砂　Fe　径 1 ～ 3 ㎝程度の灰色粘土ブロック 15%
29　10YR6/6 明黄褐　シルト混じり粘土　Fe
30　5Y5/1 灰　細砂
31　N4/0 灰　細砂混じり極細砂　小礫含む　植物遺存体あり
32　N3/0 暗灰　細砂　小礫多量
33　7.5GY5/1 緑灰　極細砂～粘土
34　2.5Y6/2 灰黄　極細砂　Mn 少量沈着…洪水砂
35　2.5Y6/1 黄灰　粗砂混じり細砂～極細砂　Mn 沈着　小礫含む…洪水砂
36　2.5Y6/1 黄灰　細砂～極細砂　小礫含む…洪水砂
37　2.5Y5/1 黄灰　粗砂～細砂　Fe
38　2.5Y6/1 黄灰　粘土混じり細砂　Mn 少量沈着　Fe 少量
39　2.5Y6/2 灰黄　極細砂　Mn 少量沈着
40　5Y7/2 灰白　粗砂混じり極細砂～細砂　Mn 少量沈着　小礫含む…洪水砂
41　2.5Y5/1 黄灰　粗砂～細砂　細礫含む
42　2.5Y7/1 灰白　粗砂混じり極細砂～細砂
43　10YR5/1 褐灰　細砂～粘土　Mn 沈着　Fe
44　5Y5/1 灰　シルト～粘土　Mn 多量沈着　Fe 多量
45　2.5Y5/2 暗灰黄　極細砂　Mn 沈着　Fe　径 1 ～ 2 ㎝程度の 47 層ブロック 30%
46　2.5Y5/2 暗灰黄　極細砂　径 1 ～ 2 ㎝程度の灰色粘土ブロック 10%
47　2.5Y6/2 灰黄　シルト～粘土　Mn 少量沈着　Fe
48　2.5Y6/2 灰黄　細砂～極細砂
49　2.5Y5/1 黄灰　シルト～粘土　Mn 沈着　Fe
50　2.5Y5/2 暗灰黄　シルト混じり粘土　Mn 沈着　Fe
51　2.5Y5/1 黄灰　粘土　Mn 沈着　Fe…ベース
52　10YR4/1 褐灰　シルト混じり粘土　Mn 沈着
53　5Y4/1 灰　シルト混じり粘土　Mn 沈着

5 ～ 33：12-SD 2
34 ～ 45：12-SD 1

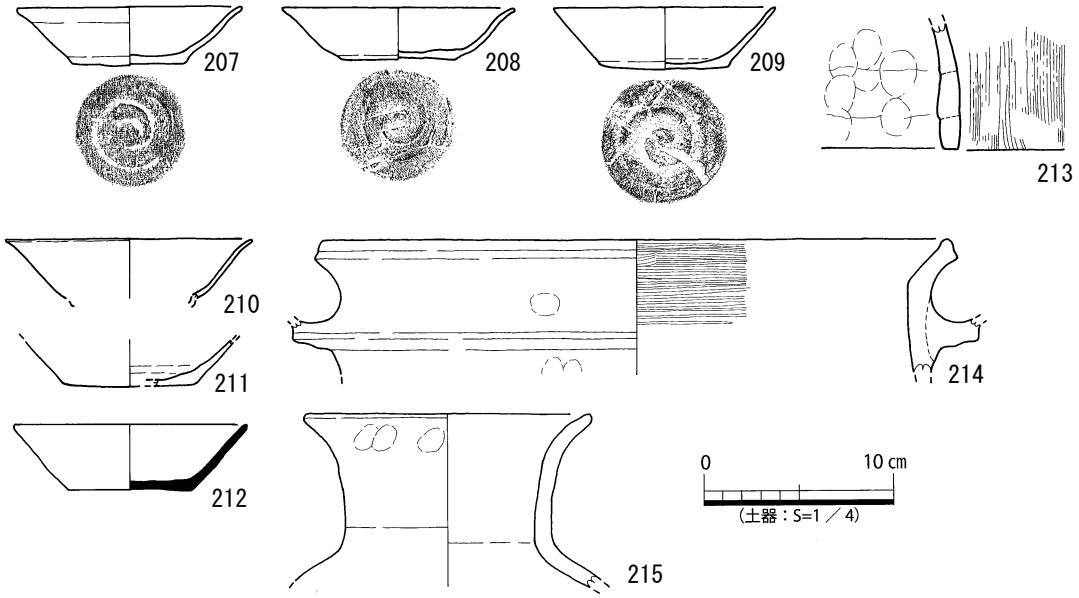


図 29　12-SD 2　中層出土遺物実測図

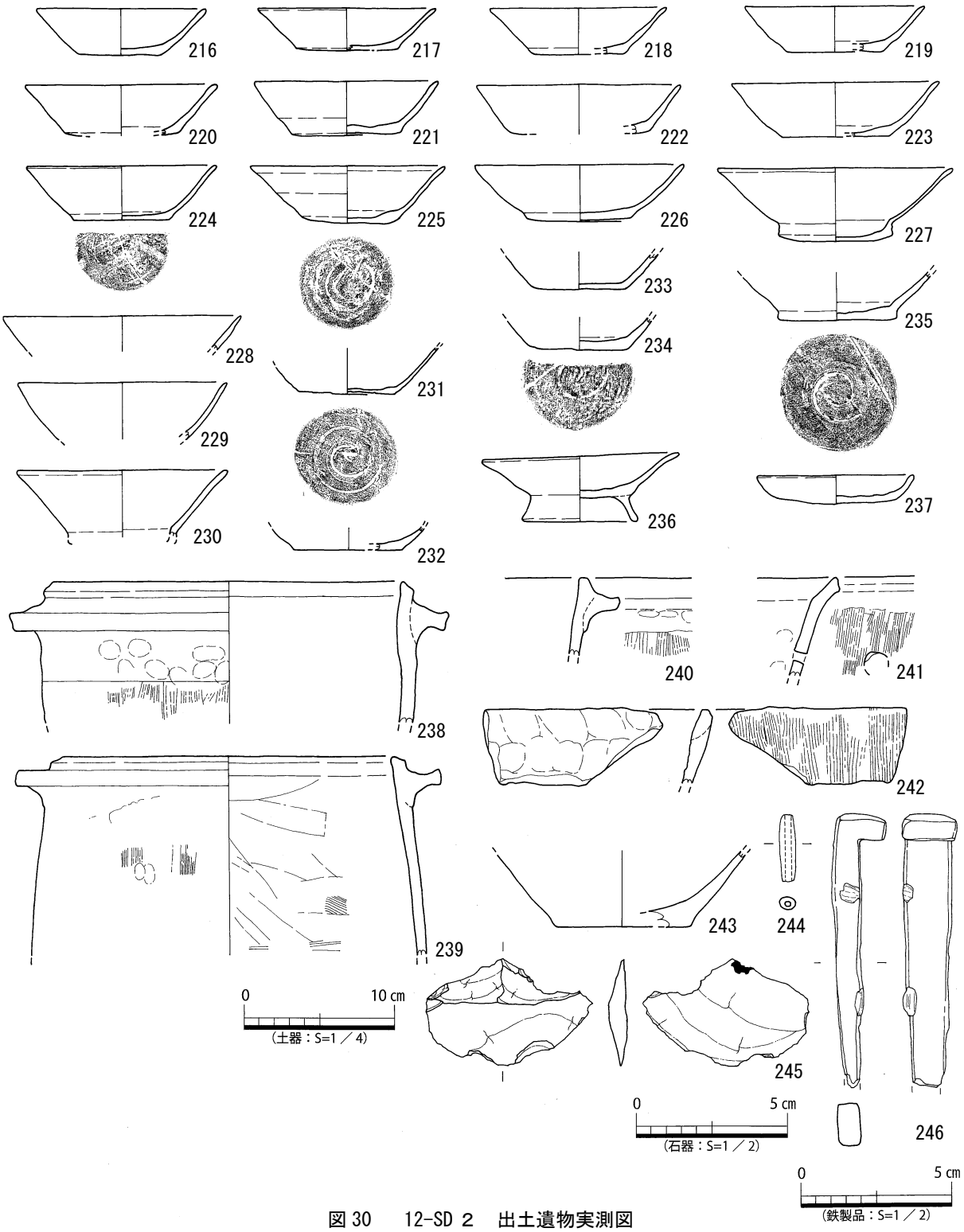


図 30　12-SD 2　出土遺物実測図

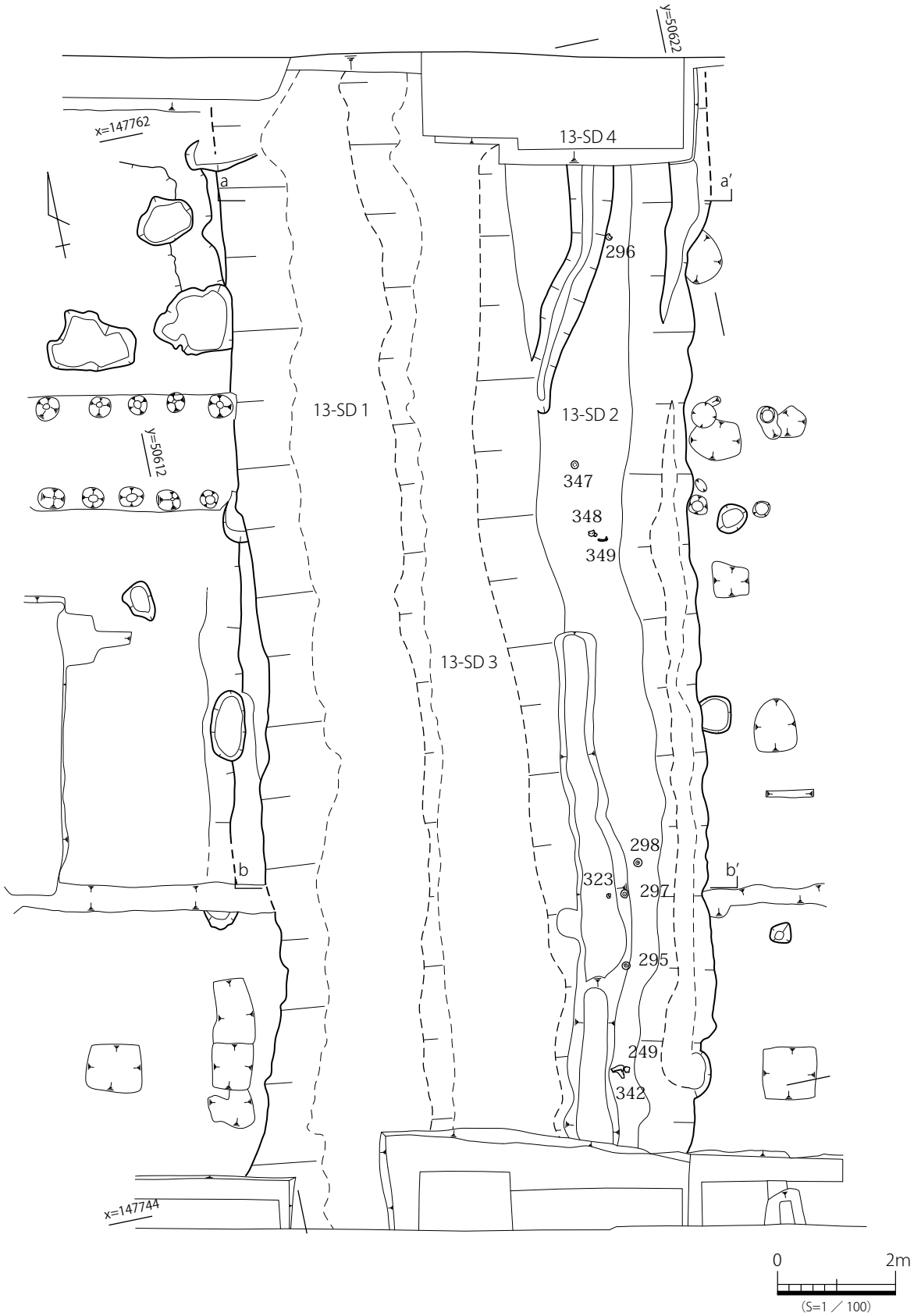
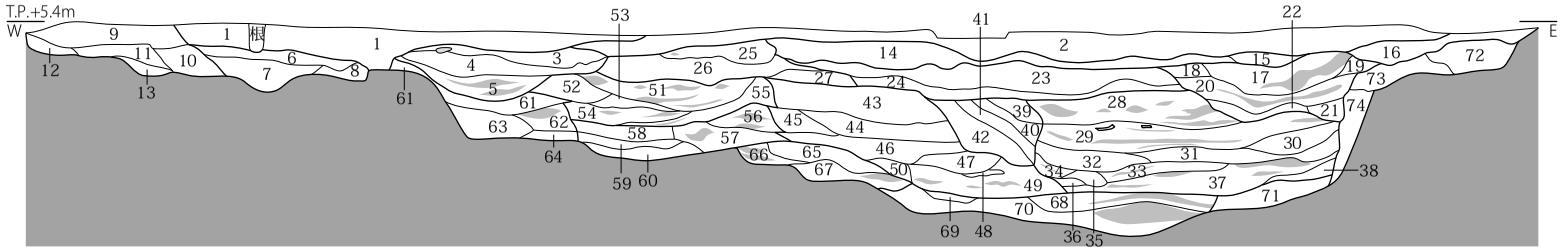


図 31　13-SD １・２・３・４　平面図

SD１～４a 断面



1　5Y8/1 灰白　細砂～極細砂
2　2.5Y8/1 灰白　中粒砂混じり極細砂～シルト　Mn 沈着
3　5Y7/1 灰白　中粒砂混じり細砂～極細砂　Fe 少量沈着　径７㎝大の小礫含む
4　2.5Y7/1 灰白　細砂混じり極細砂～シルト　　Mn・Fe 沈着　径２㎝程度の灰色粘土ブロック 1%　植物遺存体あり
5　2.5Y7/1 灰白　細砂混じり極細砂～シルト　Mn 少量沈着　Fe 沈着　ラミナあり
6　5Y7/1 灰白　細砂～極細砂
7　10YR6/1 褐灰　細砂混じり極細砂　Fe 沈着
8　10YR6/1 褐灰　シルト～粘土　径１～４㎝程度の地山ブロック 30%
9　2.5Y7/1 灰白　細砂混じりシルト　Mn・Fe 少量沈着
10　10YR5/1 褐灰　中粒砂混じり極細砂～シルト　Mn・Fe 沈着
11　10YR6/1 褐灰　シルト混じり細砂～極細砂　Fe 少量沈着
12　5Y7/1 灰白　細砂～シルト　Mn 少量沈着　径１～３㎝程度の地山ブロック 7%
13　2.5Y5/1 黄灰　細砂混じりシルト　Mn 沈着　径２㎝程度の灰色粘土ブロック 2%
14　2.5Y6/2 灰黄　シルト混じり極細砂　Mn・Fe 沈着
15　10YR6/1 褐灰　極細砂　Fe 少量沈着
16　5Y6/1 灰　粗砂混じり細砂～シルト　Mn・Fe 少量沈着
17　2.5Y5/1 黄灰　中粒砂～シルト　ラミナあり
18　2.5Y6/1 黄灰　極細砂　Mn 少量沈着　Fe 沈着
19　2.5Y6/1 黄灰　粘土混じり極細砂　Mn・Fe 少量沈着
20　2.5Y5/1 黄灰　細砂～極細砂　Fe 沈着　ラミナあり
21　5Y5/1 灰　極細砂～シルト　Mn・Fe 少量沈着　径３㎝程度の地山ブロック 2%
22　2.5Y7/2 灰黄　粗砂～細砂　Fe 沈着
23　2.5Y6/2 灰黄　細砂混じり極細砂～シルト　Mn・Fe 沈着
24　10YR5/6 黄褐　細砂～シルト　Fe 多量沈着
25　10YR7/1 灰白　シルト～極細砂　Fe 沈着　ラミナあり
26　5Y6/1 灰　極細砂～シルト　Mn 少量沈着　Fe 多量沈着　土器片含む
27　7.5Y5/1 灰　中粒砂混じり細砂　Mn 少量沈着　Fe 多量沈着　径２㎝程度の灰色粘土ブロック 10%
28　10YR6/1 褐灰　極細砂～シルト　Fe 沈着　ラミナあり
29　2.5Y5/2 暗灰黄　細砂～極細砂　Fe 多量沈着　ラミナあり　土器片含む
30　2.5Y4/2 暗灰黄　粗砂混じり中粒砂～細砂　Mn 少量沈着　Fe 多量沈着
31　5Y4/1 灰　中粒砂混じり細砂
32　2.5Y4/2 暗灰黄　細砂～極細砂　Fe 沈着　植物遺存体あり
33　5Y4/1 灰　粗砂～細砂　Fe 沈着　ラミナあり
34　2.5Y5/1 黄灰　シルト～極細砂　Fe 沈着　ラミナあり
35　2.5Y4/2 暗灰黄　極細砂　Fe 少量沈着
36　2.5Y4/1 黄灰　シルト～極細砂　やや粘質　Fe 少量沈着
37　5Y6/1 灰　粗砂～細砂　ラミナあり　Fe 多量沈着　径１～２㎝大の小礫含む
38　5Y6/1 灰　細砂～極細砂　Fe 沈着　径１～６㎝程度の砂礫ブロック 10%　径２～４㎝程度の地山ブロック 30%
39　2.5Y5/2 暗灰黄　極細砂～シルト　Fe 沈着
40　2.5Y4/2 暗灰黄　シルト～極細砂　Mn・Fe 少量沈着
41　2.5Y5/2 暗灰黄　シルト～極細砂　Mn・Fe 少量沈着　径１～２㎝程度の地山ブロック 2%
42　5Y5/1 灰　中粒砂混じりシルト～粘土　径１～２㎝程度の灰色極細砂ブロック 10%　径２～３㎝灰黄褐色ブロック 7%
43　5Y6/1 灰　中粒砂混じり粘土～シルト　Fe 沈着　径２～４㎝程度の灰色粘土ブロック 10%
44　2.5Y6/2 灰黄　粗砂混じり粘土～シルト　Mn 少量沈着　Fe 沈着　炭化物含む　土器片含む
45　2.5Y6/1 黄灰　極細砂混じりシルト　Mn 少量沈着　Fe 沈着　植物遺存体あり
46　10YR6/1 褐灰　中粒砂混じり極細砂～シルト　Mn 少量沈着　Fe 多量沈着　植物遺存体あり
47　10YR5/1 褐灰　粗砂混じりシルト～極細砂　Fe 少量沈着　径１㎝程度の暗褐色粘土ブロック 1%　植物遺存体あり
48　N4/0 灰　砂礫　Fe 多量沈着　径２㎝程度の褐色粘土ブロック 2%
49　10YR4/1 褐灰　細砂～極細砂　Fe 少量沈着　ラミナあり　植物遺存体あり
50　2.5Y5/1 黄灰　極細砂～シルト　Fe 沈着　径１㎝程度の緑灰色粘土ブロック 2%
51　2.5Y5/3 黄褐　シルト～極細砂　Fe 沈着　ラミナあり
52　2.5Y6/2 灰黄　細砂混じりシルト～極細砂　Mn 少量沈着　Fe 沈着
53　2.5Y4/2 暗灰黄　細砂～極細砂　Mn・Fe 少量沈着　ラミナあり
54　2.5Y5/2 暗灰黄　極細砂　Mn 少量沈着　Fe 沈着　ラミナあり
55　2.5Y4/2 暗灰黄　シルト～極細砂　Fe 沈着　やや粘質　ラミナあり
56　2.5Y5/3 黄褐　細砂～極細砂　Fe 沈着　炭化物含む　ラミナあり
57　2.5Y5/2 暗灰黄　シルト混じり極細砂　Mn・Fe 沈着　径２㎝程度の灰黄褐色粘土ブロック 2%　ラミナあり
58　2.5Y5/2 暗灰黄　中粒砂混じり細砂～極細砂　Fe 沈着　炭化物含む
59　2.5Y5/1 黄灰　粗砂混じり細砂　Mn・Fe 沈着　径１～２㎝程度の地山ブロック 5%
60　2.5Y6/2 灰黄　粘土　Mn・Fe 多量沈着　径２～６㎝程度の砂礫ブロック 20%
61　2.5Y5/2 暗灰黄　極細砂～シルト　Mn・Fe 少量沈着　径１～２㎝程度の灰色粘土ブロック 2%
62　5Y4/1 灰　シルト混じり極細砂　Mn・Fe 少量沈着　ラミナあり
63　2.5Y6/1 黄灰　細砂～極細砂　Mn・Fe 沈着　径１～３㎝程度の地山ブロック 5%
64　2.5Y4/2 暗灰黄　細砂～極細砂　粘性あり　Mn 少量沈着　Fe 沈着
65　2.5Y6/1 黄灰　中粒砂混じり極細砂　Fe 沈着
66　5Y4/1 灰　細砂～極細砂　Fe 沈着　ラミナあり
67　2.5Y6/2 灰黄　シルト混じり粘土　径２㎝大の小礫含む　ラミナあり
68　2.5Y5/1 黄灰　中粒砂～極細砂　Fe 沈着　径１～３㎝程度の灰褐色粘土ブロック 10%　径１㎝大の小礫含む　ラミナあり
69　2.5Y5/1 黄灰　極細砂　径１～４㎝程度の中粒砂～細砂ブロック 20%　径１㎝程度の緑灰色粘土ブロック 2%　径３㎝大の小礫含む
70　7.5Y5/1 灰　シルト　Fe 少量沈着　径３～５㎝程度の 2.5Y6/2 灰黄色粘土ブロック 10%
71　2.5Y5/2 暗灰黄　細砂混じり粘土　Mn 少量沈着　Fe 沈着　径２～４㎝程度の地山ブロック斑状に 40%
72　2.5Y4/1 黄灰　中粒砂混じりシルト～粘土　Mn 多量沈着　径１～３㎝程度の地山ブロック 30%
73　5Y6/1 灰　細砂～シルト　Mn 少量沈着　Fe 沈着　径１～４㎝程度の地山ブロック 10%
74　2.5Y5/1 黄灰　細砂混じり粘土　Mn・Fe 沈着

3～5：13-SD３
6～13：13-SD１
14～67：13-SD２
68～70：13-SD４

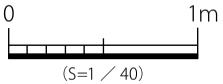
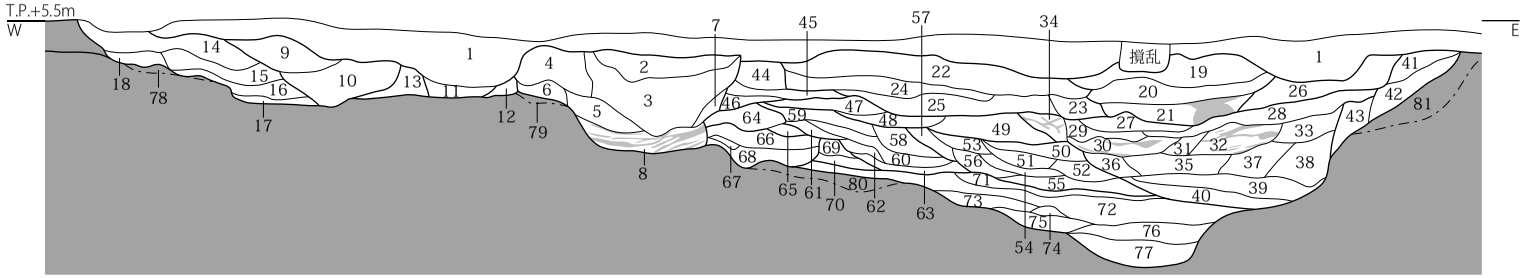


図 32　13-SD １・２・３・４　a 断面図

SD１～３b 断面



1　10YR7/3 にぶい黄橙　微細砂～細砂…近世洪水砂層
2　2.5Y7/4 浅黄　微細砂
3　2.5Y5/3 黄褐　シルト～微細砂
4　10YR5/4 にぶい黄褐　細砂～中粒砂
5　2.5Y5/3 黄褐　シルト混じり微細砂
6　10YR5/3 にぶい黄褐　細砂混じりシルト
7　10YR5/4 にぶい黄褐　シルト～微細砂
8　10YR6/4 にぶい黄橙　シルト～微細砂　ラミナ
9　2.5Y6/3 にぶい黄　微細砂～細砂　径３～５㎝程度の地山ブロック 3%
10　2.5Y5/3 黄褐　微細砂
11　2.5Y6/2 灰黄　微細砂　径２㎝程度の灰色粘土ブロック・地山ブロック 8%
12　10YR6/4 にぶい黄橙　微細砂　径３㎝程度の灰色粘土ブロック 2%
13　10YR5/2 灰黄褐　シルト
14　2.5Y5/3 黄褐　微細砂　弱ラミナ
15　2.5Y5/2 暗灰黄　微細砂～中粒砂
16　2.5Y6/2 灰黄　中粒砂
17　2.5Y6/3 にぶい黄　細砂
18　2.5Y5/3 黄褐　微細砂～細砂
19　2.5Y5/2 暗灰黄　微細砂～細砂　弱ラミナ
20　2.5Y6/2 灰黄　細砂～中粒砂　弱ラミナ
21　2.5Y5/2 暗灰黄　細砂混じりシルト　ラミナ
22　2.5Y6/3 にぶい黄　細砂混じりシルト
23　10YR5/2 灰黄褐　シルト混じり微細砂　弱ラミナ
24　7.5YR4/6 褐　微細砂　径３㎝程度の地山ブロック 3%
25　2.5Y5/3 黄褐　微細砂　弱ラミナ
26　2.5Y5/2 暗灰黄　シルト混じり細砂
27　2.5Y5/3 黄褐　粗砂
28　10YR5/2 灰黄褐　シルト混じり微細砂　弱ラミナ
29　10YR5/2 灰黄褐　シルト混じり微細砂
30　2.5Y4/1 黄灰　微細砂～細砂　ラミナ
31　10YR5/2 灰黄褐　シルト混じり微細砂～細砂
32　10YR5/2 灰黄褐　シルト～微細砂　ラミナ
33　2.5Y5/2 暗灰黄　シルト混じり微細砂　弱ラミナ
34　2.5Y4/2 暗灰黄　シルト　ラミナ
35　2.5Y5/1 黄灰　シルト混じり細砂
36　2.5Y4/2 暗灰黄　シルト混じり細砂　弱ラミナ
37　10YR4/2 灰黄褐　細砂混じりシルト
38　2.5Y4/2 暗灰黄　シルト混じり微細砂
39　7.5YR5/6 明褐　粗砂～細礫
40　10YR5/6 黄褐　シルト混じり中粒砂～粗砂
41　10YR5/3 にぶい黄褐　シルト～粘土　径５㎝程度の地山ブロック 2%
42　10YR5/3 にぶい黄褐　シルト～粘土　ほぼ地山土で構成
43　2.5Y5/2 暗灰黄　シルト～粘土
44　10YR6/3 にぶい黄橙　微細砂～細砂
45　2.5Y5/3 黄褐　微細砂～細砂
46　2.5Y5/2 暗灰黄　細砂　弱ラミナ
47　2.5Y5/2 暗灰黄　細砂　ややしまり悪い
48　2.5Y5/4 黄褐　細砂　弱ラミナ
49　2.5Y4/2 暗灰黄　シルト混じり微細砂～細砂
50　2.5Y4/2 暗灰黄　シルト混じり微細砂
51　2.5Y5/1 黄灰　シルト～微細砂
52　2.5Y5/1 黄灰　微細砂　径１㎝程度の灰色粘土ブロック・地山ブロック 2%
53　2.5Y5/3 黄褐　微細砂～細砂
54　2.5Y6/1 黄灰　シルト混じり細砂～中粒砂　弱ラミナ
55　10YR5/6 黄褐　粗砂～小礫
56　2.5Y6/1 黄灰　シルト混じり細砂
57　2.5Y5/2 暗灰黄　細砂
58　2.5Y4/2 暗灰黄　シルト混じり細砂
59　2.5Y4/4 オリーブ褐　細砂　弱ラミナ
60　10YR5/4 にぶい黄褐　細砂
61　10YR5/3 にぶい黄褐　細礫混じり細砂～中粒砂
62　10YR4/2 灰黄褐　細礫混じり細砂
63　10YR5/1 褐灰　シルト混じり微細砂～細砂　弱ラミナ
64　2.5Y5/2 暗灰黄　細砂　若干シルト混じる
65　10YR5/4 にぶい黄褐　細砂　弱ラミナ
66　10YR5/4 にぶい黄褐　中粒砂～小礫
67　2.5Y6/3 にぶい黄　細砂　径３㎝程度の地山ブロック 10%
68　2.5Y4/2 暗灰黄　シルト～細砂　乱れたラミナ
69　2.5Y5/2 暗灰黄　微細砂～細砂
70　10YR5/2 灰黄褐　中粒砂～小礫
71　2.5Y4/2 暗灰黄　シルト混じり中粒砂
72　7.5YR4/6 褐　粗砂～中礫
73　2.5Y4/1 黄灰　粘土　径１㎝程度の地山ブロック斑状に 5%
74　2.5Y5/1 黄灰　細砂混じりシルト
75　2.5Y4/2 暗灰黄　シルト　径５㎝程度の粗砂ブロック含む
76　2.5Y6/1 黄灰　シルト～粘土　径３㎝程度の地山ブロック 8%　グライ化
77　7.5Y4/2 灰オリーブ　シルト　グライ化
78　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト～粘土…ベース
79　10YR4/2 灰黄褐　シルト…ベース
80　7.5YR5/6 明褐　粘土…ベース
81　2.5Y5/2 暗灰黄　粘土…ベース

2～8：13-SD３
9～18：13-SD１
19～77：13-SD２

0　1m
（S=1／40）

図 33　13-SD １・２・３　b断面図

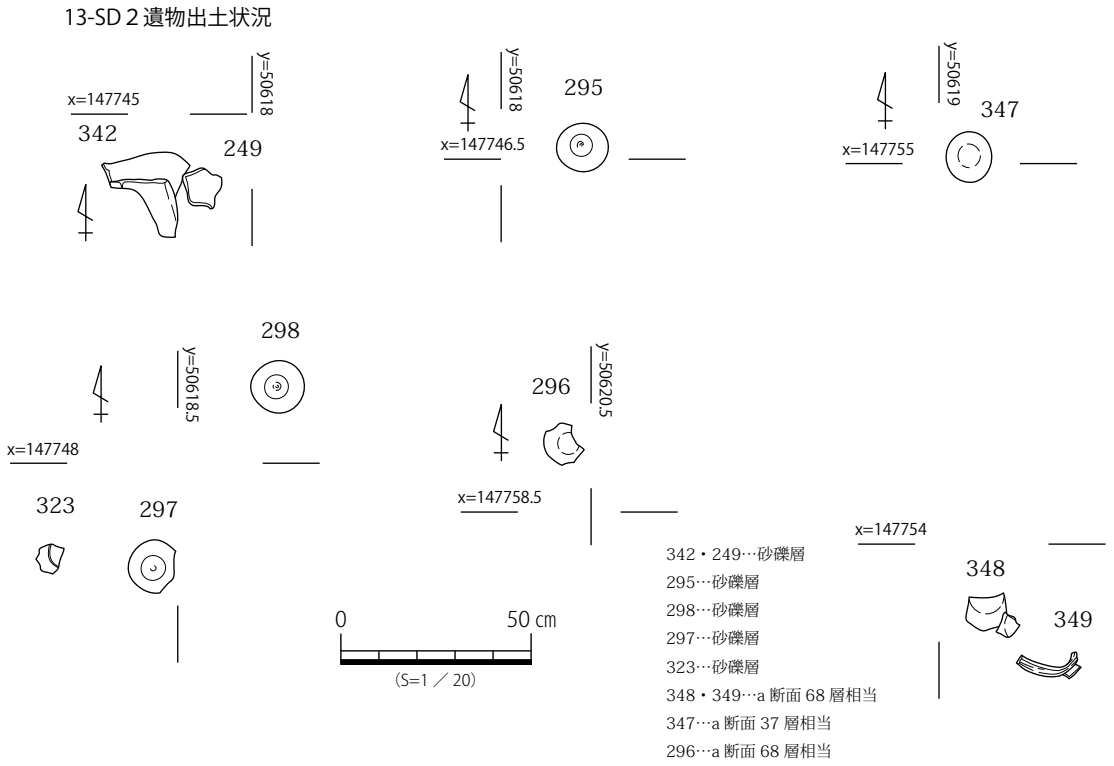


図 34　13-SD ２　遺物出土状況図

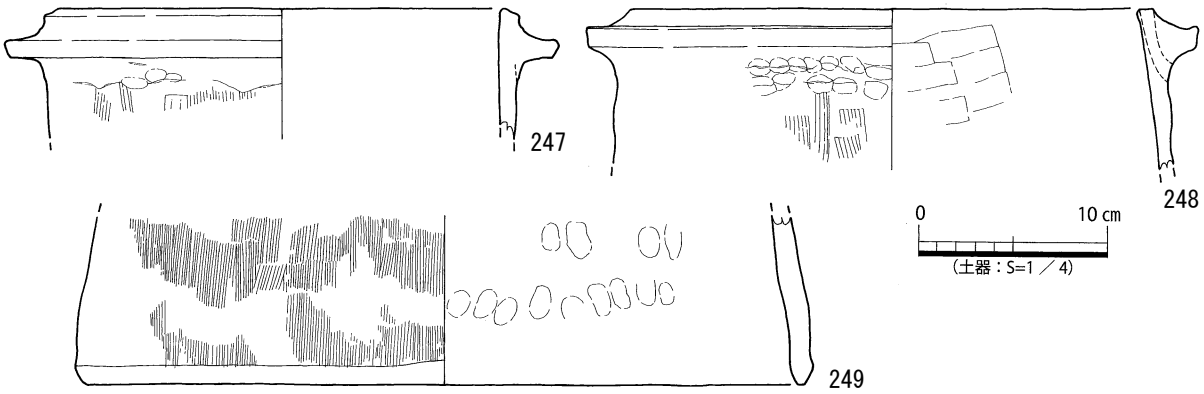


図 35　13-SD ３　中層出土遺物実測図

mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は 11 層に分層でき、２時期に分類できる。

Ⅰ期（40 ～ 45 層）、Ⅱ期（34 ～ 39 層）の順に堆積する。堆積状況の観察から、Ⅰ期とⅡ期の間には、浚渫等の人為的な行為が及んでいた可能性が想定できる。

Ⅱ期は６層に分層でき、灰黄極細砂と黄灰粗砂混じり細砂～極細砂、黄灰細砂～極細砂、黄灰粗砂～細砂、黄灰粘土混じり細砂、灰黄極細砂である。いずれの層も洪水砂によって埋没している。

Ⅰ期は６層に分層でき、灰白粗砂混じり極細砂～細砂と黄灰粗砂～細砂、灰白粗砂混じり極細砂～細砂、褐灰細砂～粘土、灰シルト～粘土、暗灰黄極細砂である。

遺物は図化できなかったが弥生土器片、土師器片・土師器杯、瓦、瓦質土器片、須恵器片・中世須恵器片、陶器片、移動式竈？、サヌカイト剥片、骨が出土した。

出土遺物の年代から、室町時代と考えられる。

12 － SD ２（図 28）

第 12 調査区中央で検出した溝状の遺構である。13-SD ２へと続く。北に直行し、攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-6° -E、検出面の標高は 5.50 mである。

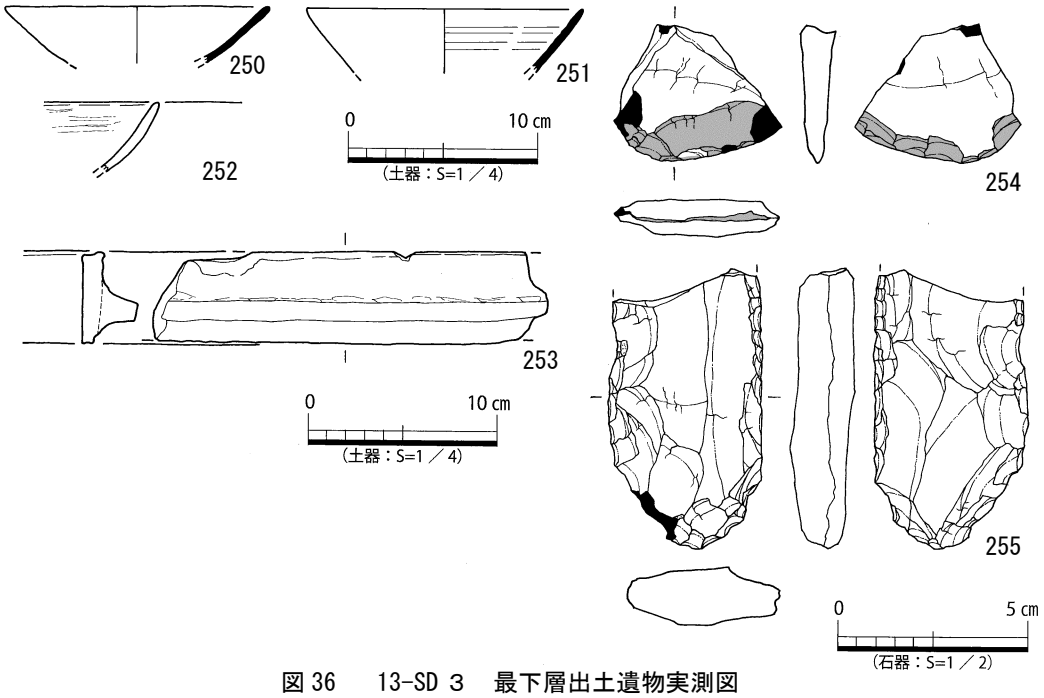


図 36　13-SD 3　最下層出土遺物実測図

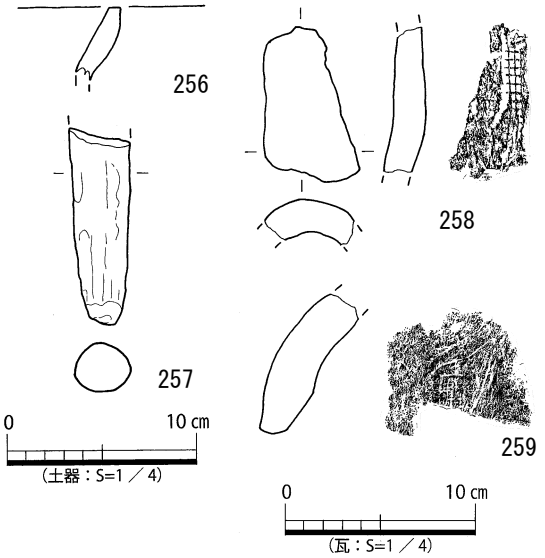


図 37　13-SD 3　出土遺物実測図

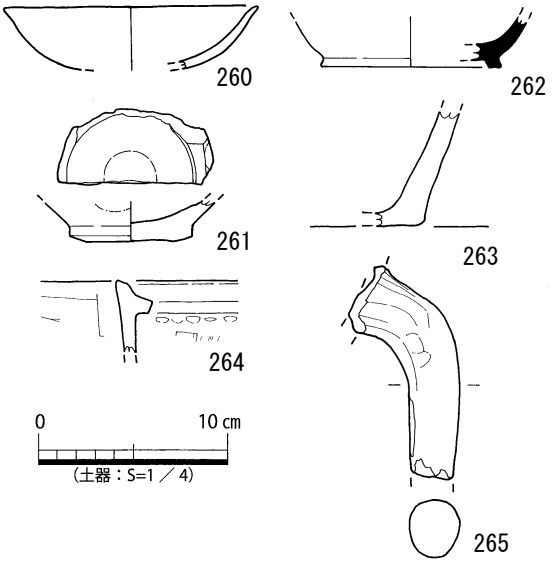


図 38　13-SD 1　出土遺物実測図

長さ約2.18 mを検出し、幅約0.66 m、深さ約0.18 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は29層に分層でき、Ⅰ期（31～33層）、Ⅱ期（28～30層）、Ⅲ期（23～27層）、Ⅳ期（15～22層）、Ⅴ期（7～14層）、Ⅵ期（6層）、Ⅶ期（5層）の順に埋没する。堆積状況の観察から、Ⅳ期とⅤ期との間に人為的な浚渫が行われた可能性が想定できる。

Ⅶ期は黄灰極細砂の単層である。

Ⅵ期は黄灰極細砂（ラミナ）の単層で、顕著なラミナが確認でき、複数回の流水堆積があったと考えられる。

Ⅴ期は8層に分層でき、灰黄細砂～極細砂と黄灰細砂混じり極細砂、灰黄粗砂～細砂、灰黄褐極細砂、黄灰極細砂（ラミナ）、灰細砂～極細砂、黄灰細砂（ラミナ・植物遺存体）、灰細砂～極細砂（ラミナ・植物遺存体）である。下層でラミナや植物遺存体が確認でき、流水と一部植生が認められる環境にあったものと考えられる。上層は洪水砂によって埋没する。

Ⅳ期は8層に分層でき、西側が黄灰粗砂混じり極細砂と黄灰細砂～極細砂（ラミナ）、東側が灰細砂～極細砂と黄灰細砂～極細砂（植物遺存体）、黄灰

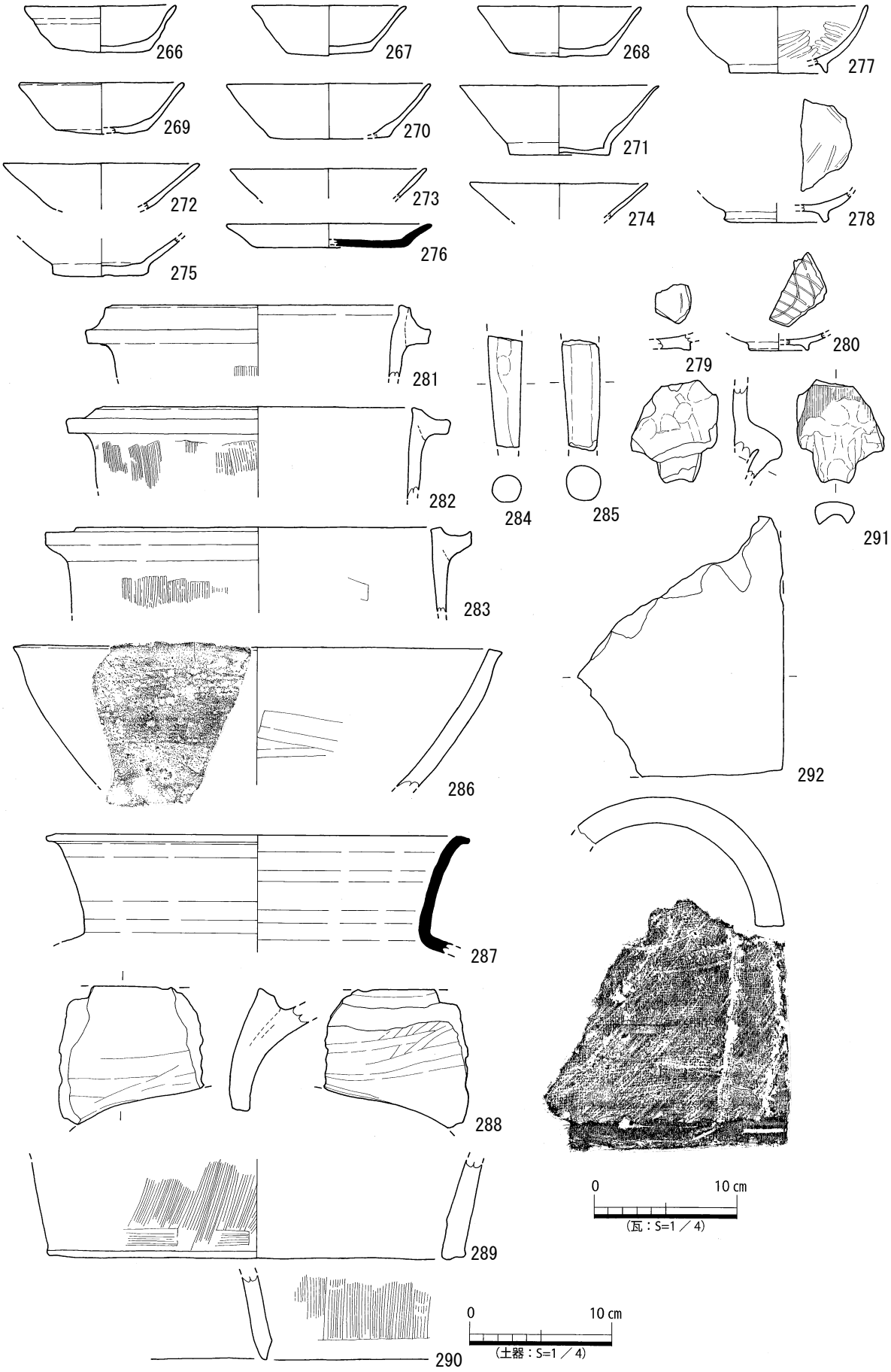


図 39　13-SD 2　上層出土遺物実測図

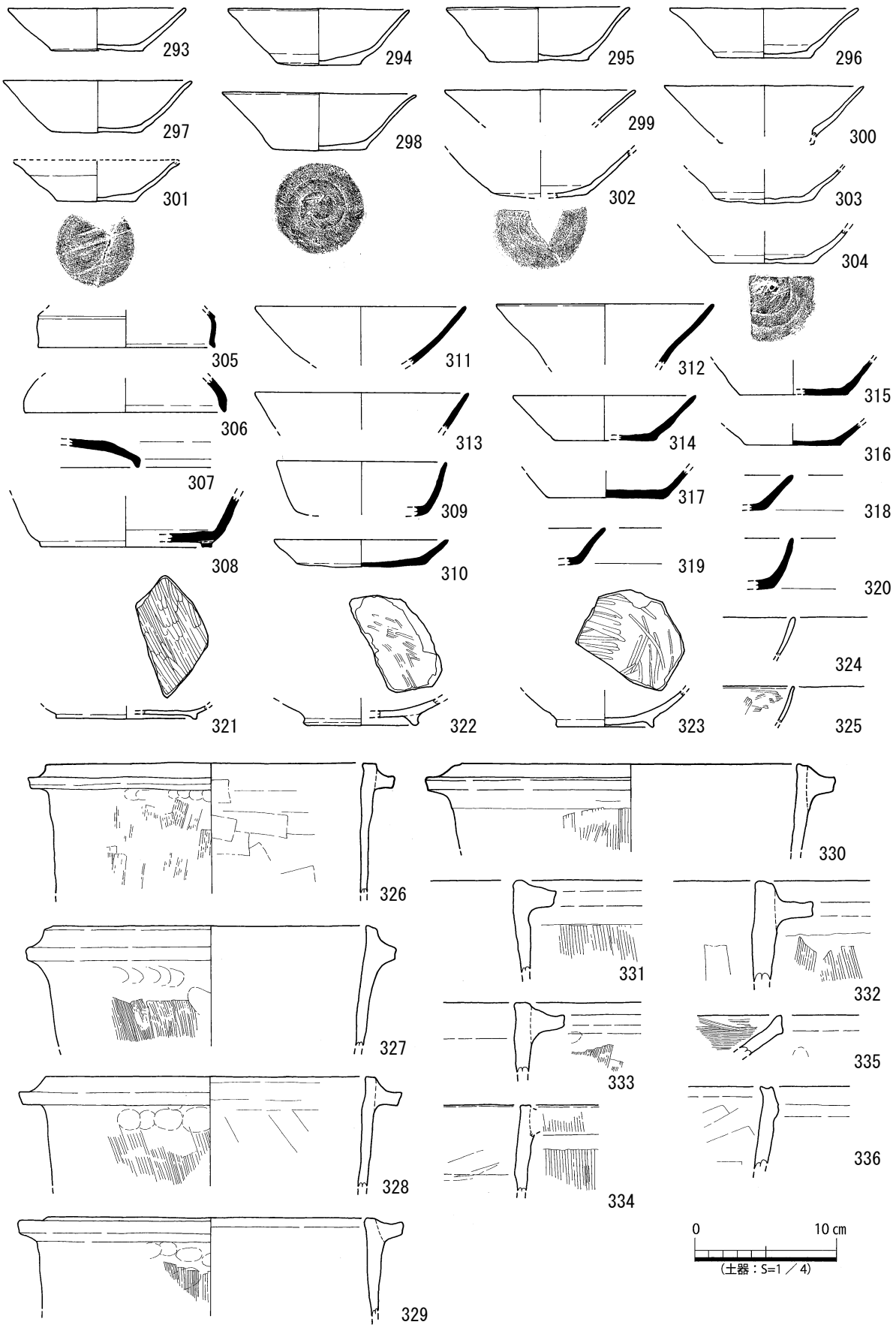


図 40　13-SD 2　中層出土遺物実測図①

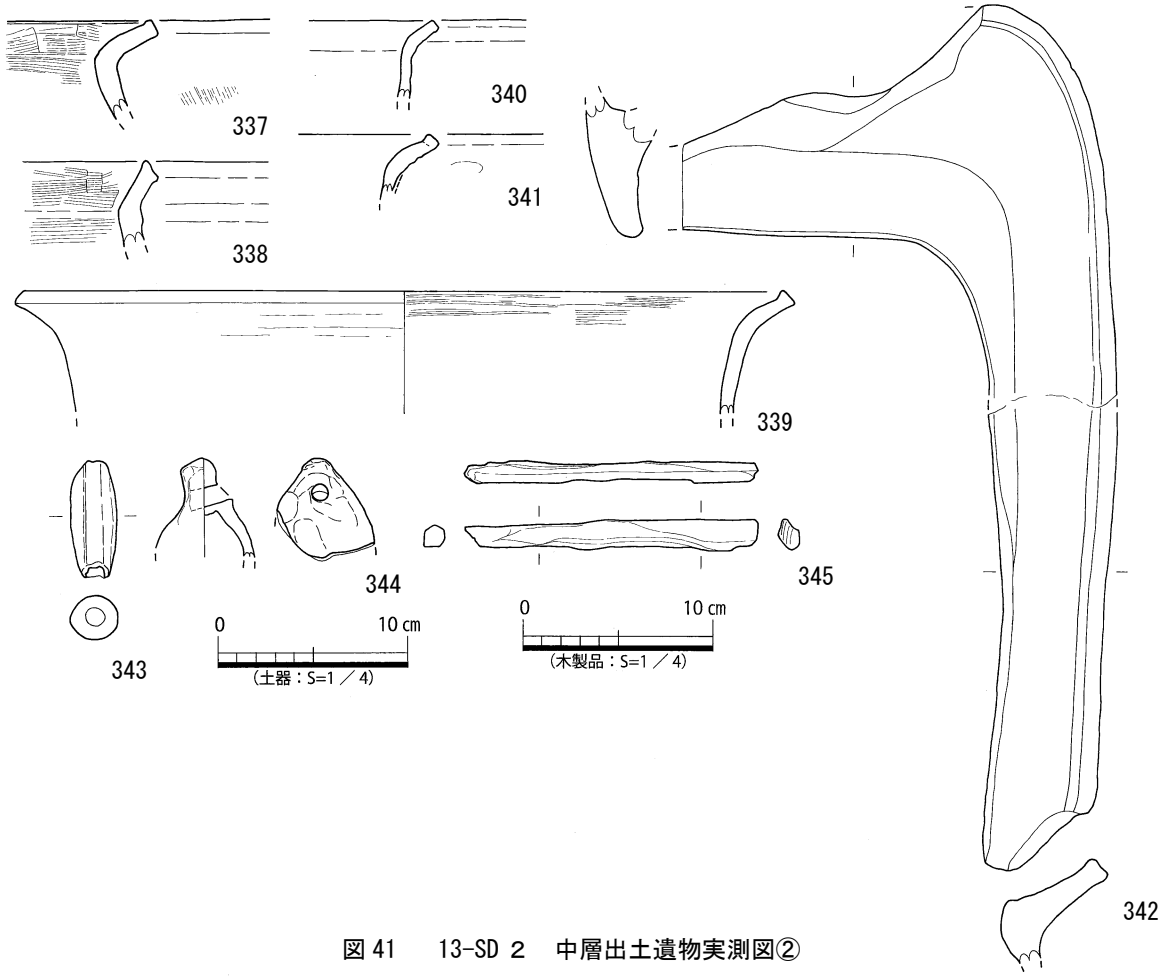


図 41　13-SD ２　中層出土遺物実測図②

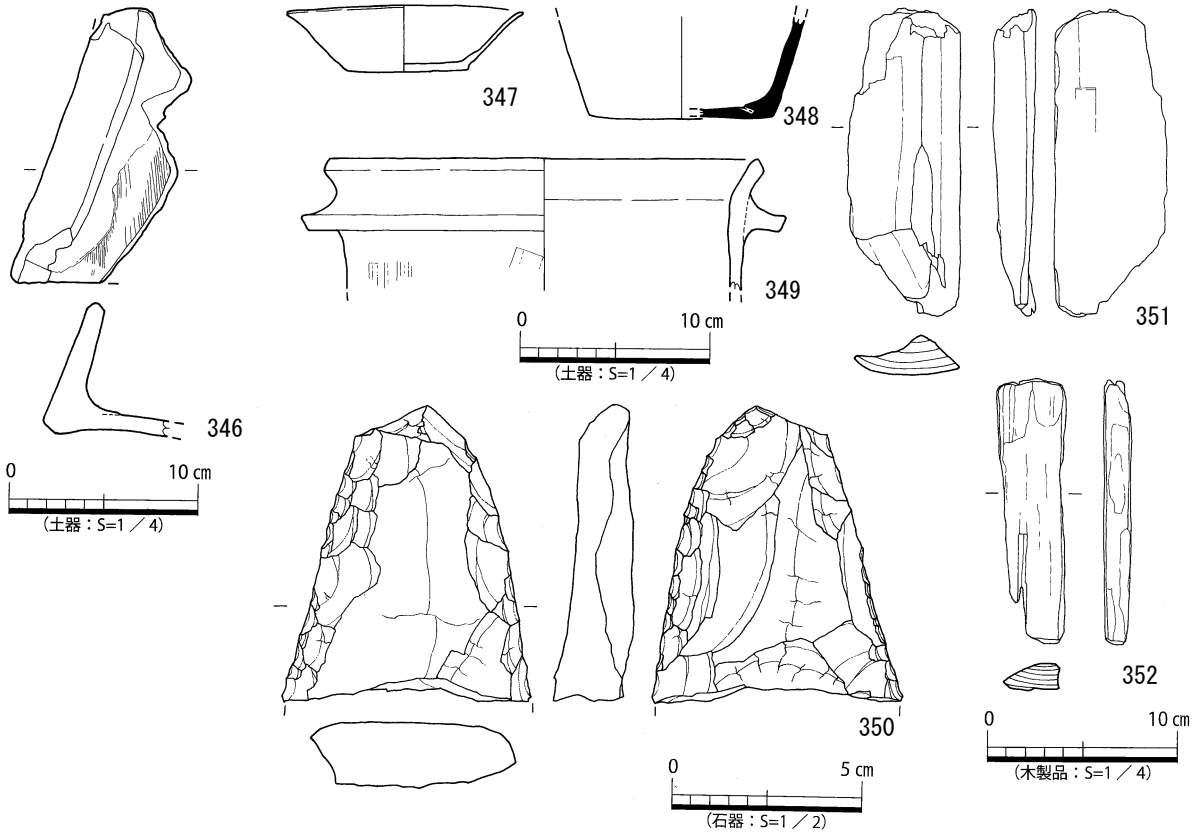


図 42　13-SD ２　下層・最下層出土遺物実測図

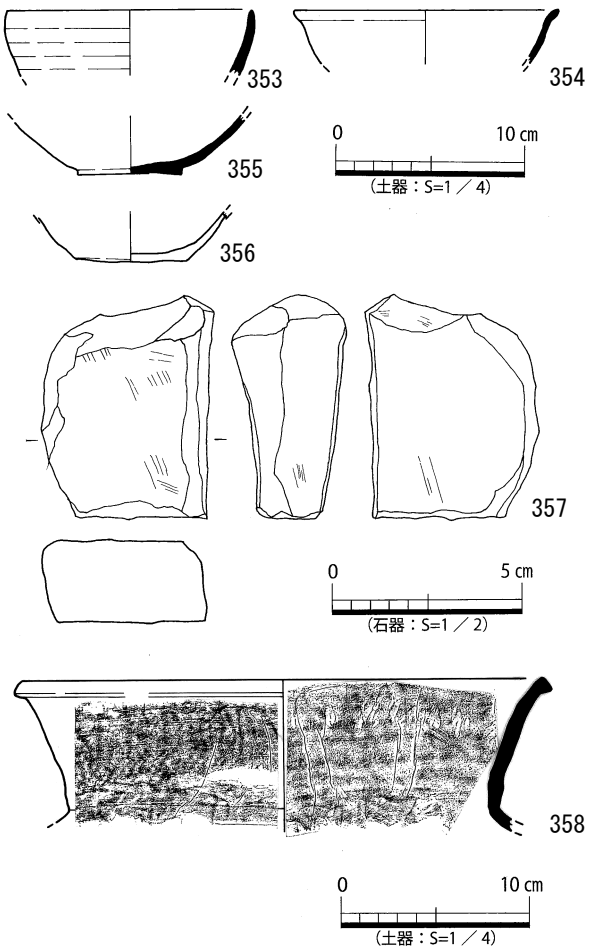


図 43　13-SD 4　出土遺物実測図

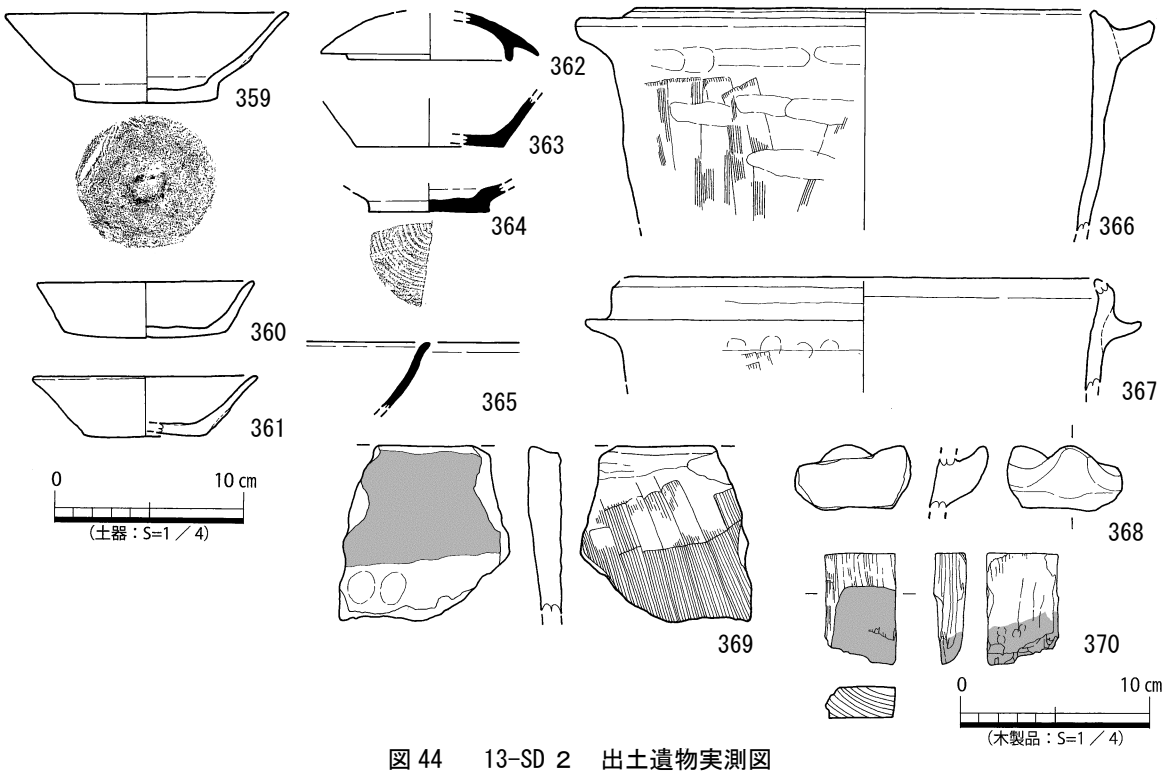


図 44　13-SD 2　出土遺物実測図

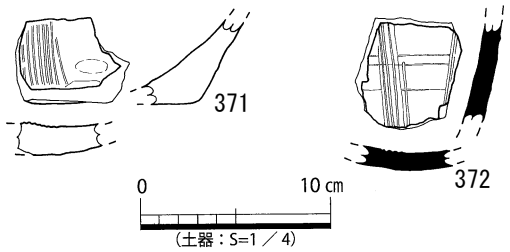


図 45　13-SD １～３　上層出土遺物実測図

粘土、暗灰黄極細砂、暗灰黄粗砂混じり極細砂、灰粗砂混じり粘土である。流水堆積と溝の肩側からの土砂の流入によって形成された堆積層と考えられる。

Ⅲ期は５層に分層でき、灰黄細砂～極細砂と、黄灰砂礫、褐灰シルト～粘土、灰オリーブ粗砂～細砂、灰極細砂である。弱い流水堆積によって堆積した層と、強い流水堆積の互層が確認できる。

Ⅱ期は３層に分層でき、灰粗砂混じり極細砂と明黄褐シルト混じり粘土、灰細砂である。溝西側の肩からの流入土による堆積と考えられる。

Ⅰ期は３層に分層でき、灰細砂混じり極細砂（植物遺存体）と、暗灰細砂、緑灰極細砂～粘土である。

遺物は中層から土師器杯（207 ～ 211）、須恵器杯（212）、土師器移動式竈（213）、土師器羽釜（214）、弥生土器壺（215）が出土したほか、須恵器片と土師器甕？・土師器片、弥生土器片が出土した。

このほか土師器杯（216 ～ 235）、土師器高台付杯（236）、土師器皿（237）、土師器羽釜（238 ～ 240）、土師器鍋（241）、移動式竈（242）、土錘（244）、弥生土器壺（243）、微細剥離痕ある剥片（245）、鉄器釘（246）が出土した。また図化できなかったが、中世須恵器片・須恵器杯 A・須恵器片、土師器甕・土師器片、弥生土器片、木片が出土した。

出土遺物の年代から、室町時代と考えられる。

13 － SD ３（図 31 ～ 33・35 ～ 37）

第 13 調査区中央で検出した溝である。12-SD3 から続き、北に直行し、攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-12° -E、検出面の標高は 5.40 ～ 5.50 mである。

長さ約 16.70 mを検出し、幅は約 1.20 m、深さは約 1.10 ～ 1.20 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は a 断面３層、b 断面７層に分層できる。

a 断面の埋土は、灰白中粒砂混じり細砂～極細砂、灰白細砂混じり極細砂～シルト（植物遺存体）、灰白細砂混じり極細砂～シルト（ラミナ）である。

b 断面では、３時期に分類でき、Ⅰ期（８層）、Ⅱ期（５～７層）、Ⅲ期（２～４層）の順に埋没したと考えられる。

Ⅲ期は３層に分層でき、浅黄微細砂と黄褐シルト～微細砂とにぶい黄褐細砂～中粒砂である。

Ⅱ期は３層に分層でき、黄褐シルト混じり微細砂とにぶい黄褐細砂混じりシルト、にぶい黄褐シルト～微細砂である。

Ⅰ期は単層で、にぶい黄褐シルト～微細砂で顕著なラミナが確認できる。

遺物は中層から土師器羽釜（247・248）、土師器移動式竈（249）が出土したほか須恵器杯・須恵器片、土師器杯・土師器片、黒色土器 B、弥生土器片が出土した。

最下層から須恵器杯（250・251）、黒色土器 A（252）、土師器移動式竈（253）、スクレイパー（254）、尖頭器（255）が出土したほか、図化できなかったが須恵器杯・須恵器壺・須恵器片、土師器片、木片が出土した。

このほか土師器鉢（256）、土師器三足羽釜脚部（257）、瓦（258・259）が出土した。このほか図化できなかったが、須恵器壺・須恵器片、土師器杯・土師器片、弥生土器片、焼土塊、サヌカイト剥片、骨が出土した。出土遺物の中には、13-SD2 から出土した遺物と接合関係が確認できた遺物（249・253・342）がある。

出土遺物の年代から、室町時代と考えられる。

13 － SD １（図 31 ～ 33・38）

第 13 調査区中央で検出した溝である。12-SD １から続き、北に直行し、攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-12° -E、検出面の標高は 5.40 ～ 5.50 mである。

長さ約 19.60 mを検出し、幅は SD １～ SD ２で約 7.00 ～ 8.00 m、深さ約 0.35 ～ 0.45 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は a-a' 断面８層、b-b' 断面 10 層に分層できる。

a-a' 断面では堆積状況から２時期に分類でき、Ⅰ期（９～ 13 層）、Ⅱ期（６～８層）の順に埋没し

たと考えられる。

Ⅱ期は３層に分層でき、灰白細砂～極細砂と褐灰細砂混じり極細砂、褐灰シルト～粘土である。

Ⅰ期は５層に分層でき、灰白細砂混じりシルトと褐灰中粒砂混じり極細砂～シルト、褐灰シルト混じり細砂～極細砂、灰白細砂～シルト、黄灰細砂混じりシルトである。西側の溝肩からの流入土と考えられる。

b-b' 断面では３期に分類できる。Ⅰ期（14 ～ 18 層）、Ⅱ期（11 ～ 13 層）、Ⅲ期（９・10 層）の順に埋没したと考えられる。

Ⅲ期は２層に分層でき、にぶい黄微細砂～細砂と黄褐微細砂である。

Ⅱ期は３層に分層でき、灰黄微細砂とにぶい黄橙微細砂、灰黄褐シルトである。

Ⅰ期は５層に分層でき、黄褐微細砂（弱ラミナ）と暗灰黄微細砂～中粒砂、灰黄中粒砂、にぶい黄細砂、黄褐微細砂～細砂である。流水堆積と溝の西側の肩からの流入土と考えられる。

遺物は土師器杯（260）、白磁（261）、須恵器杯 B（262）、陶器甕（263）、土師器羽釜（264）、土師器三足羽釜脚部（265）が出土した。このほか図化できなかったが、上層から弥生土器片、陶器片、土師器片、須恵器片が出土した。また弥生土器片、土師器壺？・土師器片、須恵器杯 A・須恵器片、陶器片、焼土塊、骨が出土した。

出土遺物の年代から、室町時代と考えられる。

13 － SD ２・４（図 31 ～ 34・39 ～ 45）

第 13 調査区位中央で検出した溝である。北に直行し、攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-12°-E、検出面の標高は 5.40 ～ 5.50 mである。

長さ約 16.70 mを検出し、幅約 3.80 m、深さ約 0.55 mを測る。断面形状は階段状である。

埋土は a-a' 断面 61 層、b-b' 断面 59 層に分層できる。

a-a' 断面では、堆積状況の検討から、13 期に分類できる。Ⅰ期（72 ～ 74 層）、Ⅱ期（71 層）、Ⅲ期（68 ～ 70 層）、Ⅳ層（65 ～ 67 層）、Ⅴ期（61 ～ 64 層）、Ⅵ期（56 ～ 60 層）、Ⅶ期（51 ～ 55 層）、Ⅷ期（43 ～ 50 層）、Ⅸ期（39 ～ 42 層）、Ⅹ期（28 ～ 38 層）、Ⅺ期（25 ～ 27 層）、Ⅻ期（23･24 層）、XⅢ期（17 ～ 22 層）、XⅣ期（14 ～ 16 層）の順に堆積したと考えられる。Ⅻ期と XⅢ期との間、Ⅸ期とⅩ期との間、Ⅶ期とⅧ期との間、Ⅵ期とⅦ期の間で、人為的な浚渫が行われた可能性が高い。

XⅣ期は３層に分層でき、灰黄シルト混じり極細砂と褐灰極細砂、灰粗砂混じり細砂～シルトである。

XⅢ期は６層に分層でき黄灰中粒砂～シルト（ラミナ）、黄灰極細砂、黄灰粘土混じり極細砂、黄灰細砂～極細砂（ラミナ）、灰極細砂～シルト、灰黄粗砂～細砂である。ラミナが確認できる層と極細砂～粗砂層との交互堆積である。流水の影響により形成されたと考えられる。

Ⅻ期は２層に分層でき、灰黄細砂混じり極細砂～シルトと黄褐細砂～シルトである。

Ⅺ期は３層に分層でき、灰白シルト～極細砂（ラミナ）と灰極細砂～シルト、灰中粒砂混じり細砂である。西側を 13-SD ３に切られる。

Ⅹ期は 11 層に分層でき、褐灰極細砂～シルト（ラミナ）と暗灰黄細砂～極細砂（ラミナ）、暗灰黄粗砂混じり中粒砂～細砂、灰中粒砂混じり細砂、暗灰黄細砂～極細砂（植物遺存体）、灰粗砂～細砂（ラミナ）、黄灰シルト～極細砂（ラミナ）、暗灰黄極細砂、黄灰シルト～極細砂、灰粗砂～細砂（ラミナ）、灰細砂～極細砂である。Ⅹ期最下層の 38 層は、東側の肩からの流入土と考えられる。このほかは、ラミナが確認できる層とシルト～中粒砂層の交互堆積が確認できる。ゆるやかな流水堆積と、強い流水による堆積が頻繁に発生していたと考えられる。

Ⅸ期は４層に分層でき、暗灰黄極細砂～シルトと暗灰黄シルト～極細砂、暗灰黄シルト～極細砂、灰中粒砂混じりシルト～粘土である。斜め方向の堆積が確認でき、Ⅹ期の堆積によって切られる。Ⅷ期の堆積を肩として、西側から土砂が供給されたと考えられる。

Ⅷ期は８層に分層でき、灰中粒砂混じり粘土～シルト、灰黄粗砂混じり粘土～シルト、黄灰極細砂混じりシルト（植物遺存体）、褐灰中粒砂混じり極細砂～シルト（植物遺存体）、褐灰粗砂混じりシルト～極細砂（植物遺存体）、灰砂礫、褐灰細砂～極細砂（ラミナ・植物遺存体）、黄灰極細砂～シルトである。植物遺存体が残存する層が多数みられ、またシルトや粘土の水平堆積が確認できることから、緩やかな水流によって形成された層序であると考えられる。

Ⅶ期は５層に分層でき、黄褐シルト～極細砂（ラ

ミナ）と灰黄細砂混じりシルト～極細砂、暗灰黄細砂～極細砂（ラミナ）、暗灰黄極細砂（ラミナ）、暗灰黄シルト～極細砂（ラミナ）である。ラミナが確認できることから、流水堆積層と考えられる。

Ⅵ期は５層に分層でき、黄褐細砂～極細砂（ラミナ）と暗灰黄シルト混じり極細砂（ラミナ）、暗灰黄中粒砂混じり細砂～極細砂、黄灰粗砂混じり細砂、灰黄粘土である。上層はラミナを含む流水堆積層、下層は地山ブロック土を含む層であることから、西側の肩からの流入土の可能性が想定できる。

Ⅴ期は４層に分層でき、暗灰黄極細砂～シルトと灰シルト混じり極細砂（ラミナ）、黄灰細砂～極細砂、暗灰黄細砂～極細砂である。

Ⅳ期は３層に分層でき、黄灰中粒砂混じり極細砂と灰細砂～極細砂（ラミナ）、灰黄シルト混じり粘土（ラミナ）である。

Ⅲ期は３層に分層でき、黄灰中粒砂～極細砂（ラミナ）、黄灰極細砂、灰シルトである。掘削途中で落ちが確認できたことから、この層序から出土した遺物は 13-SD 4 として取り上げを行った。

Ⅱ期は暗灰黄細砂混じり粘土の単層で、地山のブロック土が多量に確認できることから、東側の溝肩からの流入土の可能性が高い。

Ⅰ期は３層に分層でき、黄灰中粒砂混じりシルト～粘土と灰細砂～シルト、黄灰細砂混じり粘土である。東側の溝肩からの地山ブロック土を含んだ流入土と考えられる。

b-b' 断面では、堆積状況から 12 期に区分できる。Ⅰ期（71 ～ 77 層）、Ⅱ期（69・70 層）、Ⅲ期（66 ～ 68 層）、Ⅳ期（64・65 層）、Ⅴ期（58 ～ 63 層）、Ⅵ期（50 ～ 57 層）、Ⅶ期（47 ～ 49 層）、Ⅷ期（44 ～ 46 層）、Ⅸ期（41 ～ 43 層）、Ⅹ期（27 ～ 40 層）、Ⅺ期（22 ～ 26 層）、Ⅻ期（19 ～ 21 層）の順で埋没したと考えられる。堆積状況の観察から、Ⅺ期とⅫ期の間、Ⅸ期とⅩ期の間、Ⅵ期とⅦ期の間に人為的な浚渫が行われた可能性が想定できる。

Ⅻ期は３層に分層でき、暗灰黄微細砂～細砂（弱ラミナ）と灰黄細砂～中粒砂（弱ラミナ）、暗灰黄細砂混じりシルト（ラミナ）である。ラミナが確認できることから、溝の最終埋没時の流水堆積層と考えられる。

Ⅺ期は５層に分層でき、にぶい黄細砂混じりシルトと灰黄褐シルト混じり微細砂（弱ラミナ）、褐微細砂、黄褐微細砂（弱ラミナ）、暗灰黄シルト混じり細砂である。弱い水流による流水堆積層と考えられる。

Ⅹ期は 14 層に分層でき、黄褐粗砂と灰黄褐シルト混じり微細砂（弱ラミナ）、灰黄褐シルト混じり微細砂、黄灰微細砂～細砂（ラミナ）、灰黄褐シルト混じり微細砂～細砂、灰黄褐シルト～微細砂（ラミナ）、暗灰黄シルト混じり微細砂（弱ラミナ）、暗灰黄シルト（ラミナ）、黄灰シルト混じり細砂、暗灰黄シルト混じり細砂（弱ラミナ）、灰黄褐細砂混じりシルト、暗灰黄シルト混じり微細砂、明褐粗砂～細礫、黄褐シルト混じり中粒砂～粗砂である。ラミナが確認できる層と微細砂～細礫の砂層との互層堆積である。弱い流水堆積と、強い流水による堆積が頻繁に起こっていたと考えられる。

Ⅸ期は３層に分層でき、にぶい黄褐シルト～粘土とにぶい黄褐シルト～粘土、暗灰黄シルト～粘土である。地山ブロック土を含む土であることから、溝の東側の肩からの流入土と考えられる。

Ⅷ期は３層に分層でき、にぶい黄橙微細砂～細砂と黄褐微細砂～細砂、暗灰黄細砂（弱ラミナ）である。

Ⅶ期は３層に分層でき、暗灰黄細砂と黄褐細砂（弱ラミナ）、暗灰黄シルト混じり微細砂～細砂である。

Ⅵ期は８層に分層でき、暗灰黄シルト混じり微細砂と黄灰シルト～微細砂、黄灰微細砂、黄褐微細砂～細砂、黄灰シルト混じり細砂～中粒砂（弱ラミナ）、黄褐粗砂～小礫、黄灰シルト混じり細砂、暗灰黄細砂である。

Ⅴ期は６層に分層でき、暗灰黄シルト混じり細砂とオリーブ褐細砂（弱ラミナ）、にぶい黄褐細砂、にぶい黄褐細礫混じり細砂～中粒砂、灰黄褐細礫混じり細砂、褐灰シルト混じり微細砂～細砂（弱ラミナ）である。

Ⅳ期は２層に分層でき、暗灰黄細砂とにぶい黄褐細砂（弱ラミナ）である。

Ⅲ期は３層に分層でき、にぶい黄褐中粒砂～小礫とにぶい黄細砂、暗灰黄シルト～細砂（乱れたラミナ）である。地山ブロック土が確認できる層と、乱れたラミナが確認できる層があることから、人為的な攪拌を受けた可能性がある。

Ⅱ期は２層に分層でき、暗灰黄微細砂～細砂と灰黄褐中粒砂～小礫である。

Ⅰ期は７層に分層でき、暗灰黄シルト混じり中粒砂と褐粗砂～中礫、黄灰粘土、黄灰細砂混じりシルト、暗灰黄シルト、黄灰シルト～粘土、灰オリーブ

シルト（グライ化）である。最下層ではグライ化が確認でき、溝掘削時は停滞状態に近い水流があり、その後強い水流と緩やかな水流の時期とが交互に起こっていたと想定できる。

遺物は上層から土師器杯（266 ～ 275）、須恵器皿(276)、黒色土器Ａ椀(277)、黒色土器Ｂ椀(278)、緑釉陶器（279)、瓦器椀（280)、土師器羽釜（281 ～ 283)、土師器三足羽釜脚部（284・285)、瓦質土器鉢（286)、須恵器壺（287)、土師器移動式竈（288 ～ 290)、土師器器種不明取手（291)、丸瓦（292）が出土した。

中層から土師器杯（293 ～ 304)、須恵器杯蓋(305･306)、須恵器蓋（307)、須恵器杯Ｂ（308)、須恵器杯Ａ（309)、須恵器皿（310)、須恵器杯（311 ～ 320)、黒色土器Ａ椀（321 ～ 325)、土師器羽釜（326 ～ 333)、土師器器種不明（334)、土師器鉢（335・336)、土師器甕（337 ～ 339)、土師器鍋(340･341)、土師器移動式竈(342)、土錘(343)、飯蛸壺（344)、木製品（345）が出土した。このほか図化できなかったが、須恵器壺・須恵器片、土師器片、弥生土器高杯・弥生土器片、微細剥離痕のある剥片・剥片、焼土塊、骨が出土した。

下層から土師器移動式竈（346）が出土した。

最下層から土師器杯（347)、須恵器壺（348)、土師器羽釜（349)、打製石斧（350)、木製品（351･352）が出土したほか、須恵器片と土師器片、骨が出土した。

13-SD 4から須恵器杯（353 ～ 355)、土師器杯(356)、砥石（357)、須恵器甕（358)、須恵器片、土師器羽釜脚部・土師器片、焼土塊が出土した。

このほか、土師器杯（359 ～ 361)、須恵器蓋(362)、須恵器杯（363・364)、須恵器椀（365)、土師器羽釜（366・367)、土師器鍋又は甑取手(368)、土師器移動式竈（369)、木製品（370)、須恵器壺・須恵器片、土師器片、弥生土器片、黒色土器Ａ、焼土塊、木片が出土した。

また13-SD1・３上層から、陶器擂鉢（371）が、13-SD １～３上層から中世須恵器擂鉢（372）が出土した。

出土遺物の年代から室町時代と考えられる。

７－SK63（図46）

第７調査区北側で検出した土坑である。攪乱で切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整形である。検出面の標高は5.00 mである。

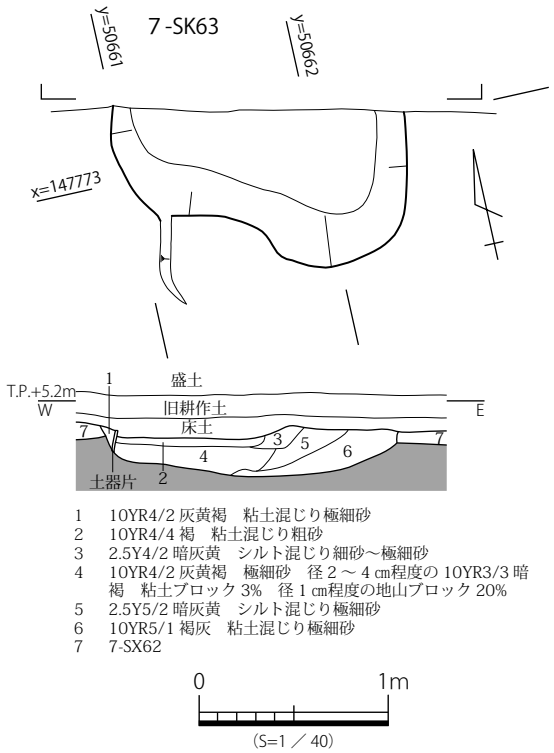


図46　７-SK63　平・断面図

長軸約1.56 m、短軸約0.83 m、深さ約0.25 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は６層に分層でき、上層が灰黄褐粘土混じり極細砂と褐粘土混じり粗砂、暗灰黄シルト混じり細砂～極細砂である。下層が灰黄褐極細砂と暗灰黄シルト混じり極細砂、褐灰粘土混じり極細砂である。

遺物は須恵器片、土師器片、瓦質土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

10－SD ２（図47）

第10調査区中央、洪水砂下層で検出した溝である。南側の第11調査区で検出した11-SD1と同一の溝の可能性がある。11-SD 1とは遺構幅や深さに差があるが、検出面の標高差と遺構の残存状況によるものと考えられる。北に直行し、攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位N-8°-E、検出面の標高は5.50 mである。

長さ約15.10 mを検出し、幅約0.67 ～ 0.46 m、深さ約0.10 ～ 0.06 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で、a-a' 断面で灰黄褐細砂混じりシル

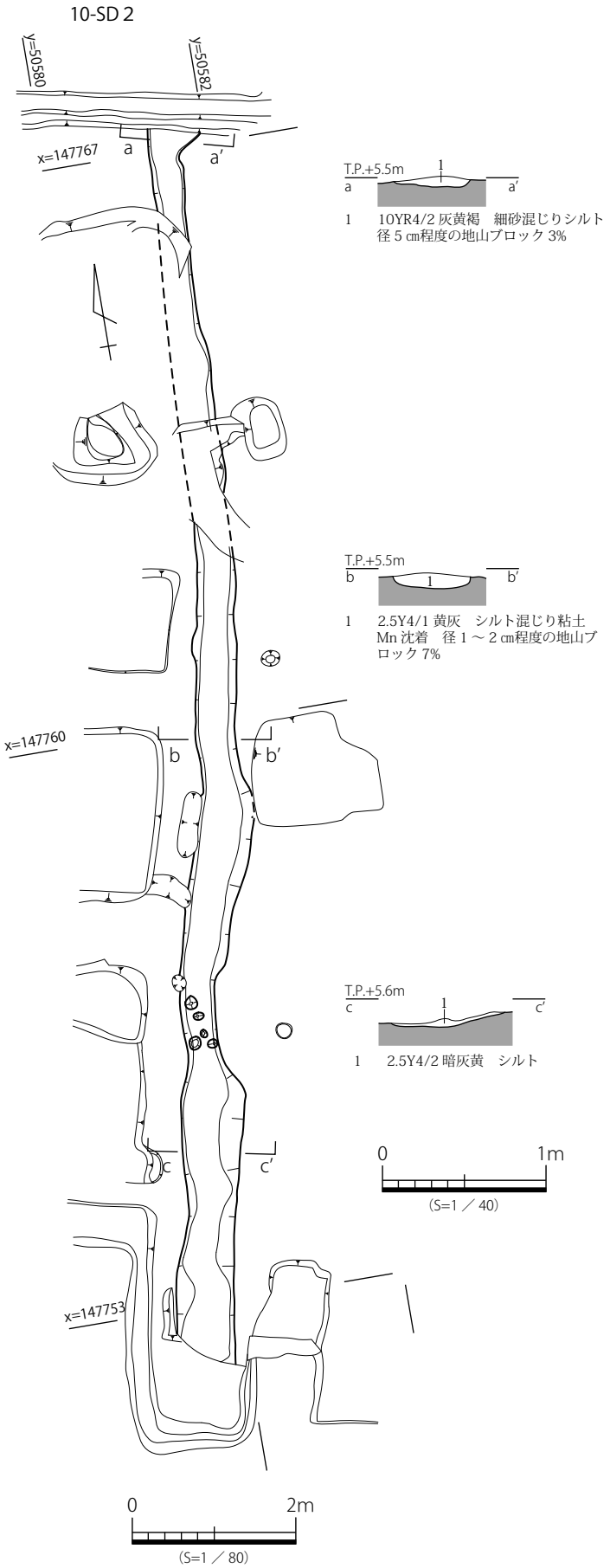
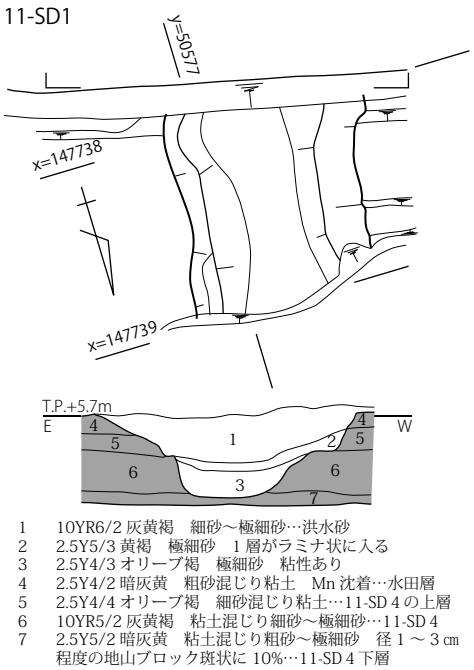


図 47　10-SD ２　平・断面図



1　10YR6/2 灰黄褐　細砂～極細砂…洪水砂
2　2.5Y5/3 黄褐　極細砂　１層がラミナ状に入る
3　2.5Y4/3 オリーブ褐　極細砂　粘性あり
4　2.5Y4/2 暗灰黄　粗砂混じり粘土　Mn 沈着…水田層
5　2.5Y4/4 オリーブ褐　細砂混じり粘土…11-SD４の上層
6　10YR5/2 灰黄褐　粘土混じり細砂～極細砂…11-SD４
7　2.5Y5/2 暗灰黄　粘土混じり粗砂～極細砂　径１～３㎝程度の地山ブロック斑状に 10%…11-SD４下層

図 48　11-SD １　平・断面図

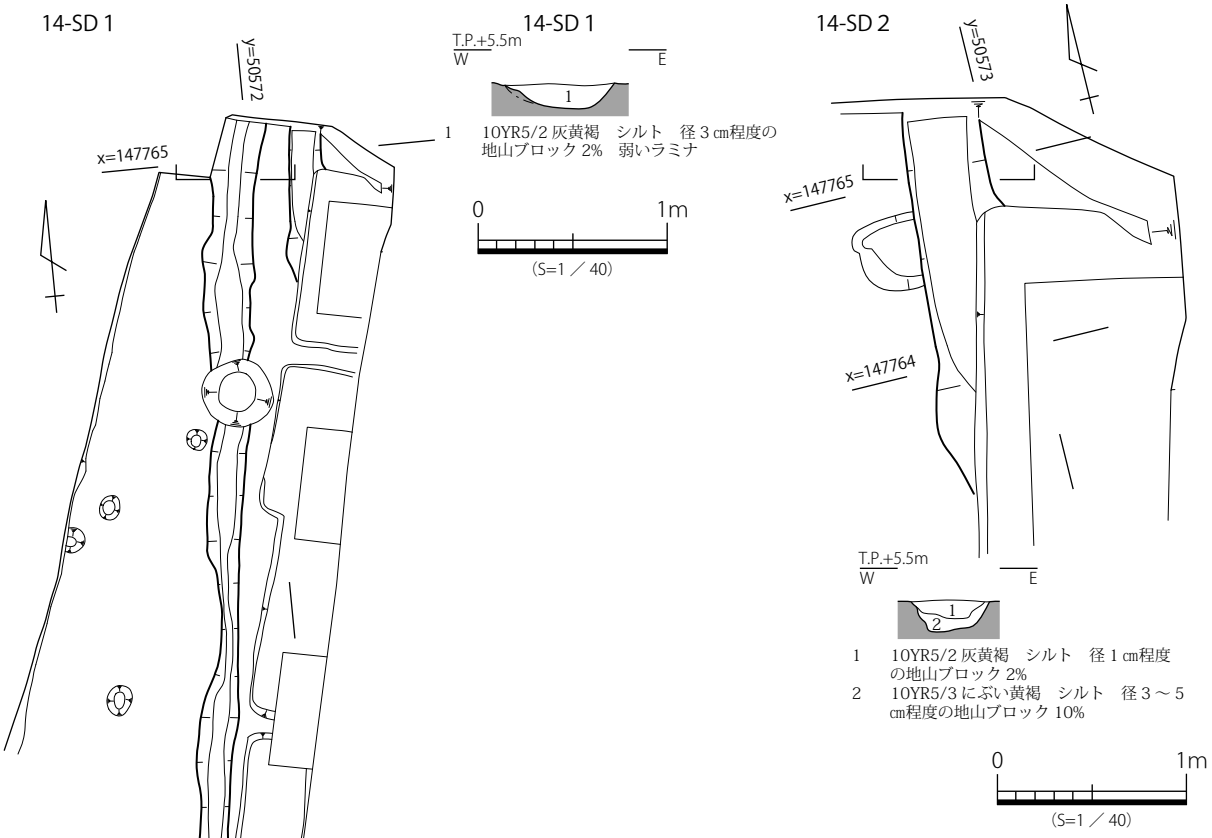


図 49　14-SD １・２　平・断面図

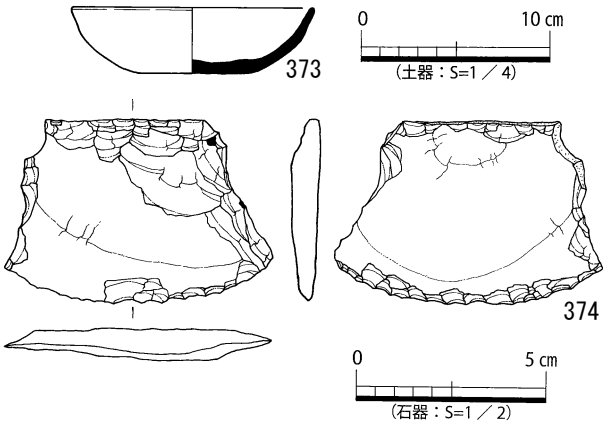


図 50　14-SD １　出土遺物実測図

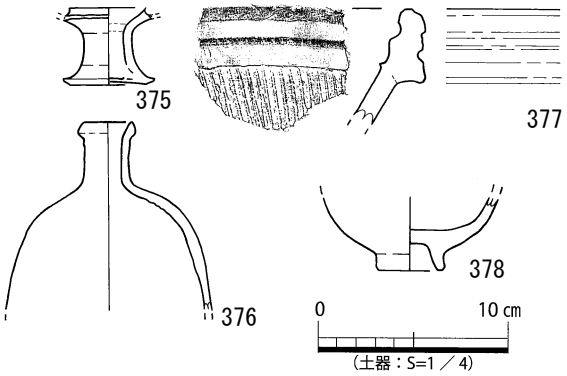


図 51　北西工区　近世出土遺物実測図

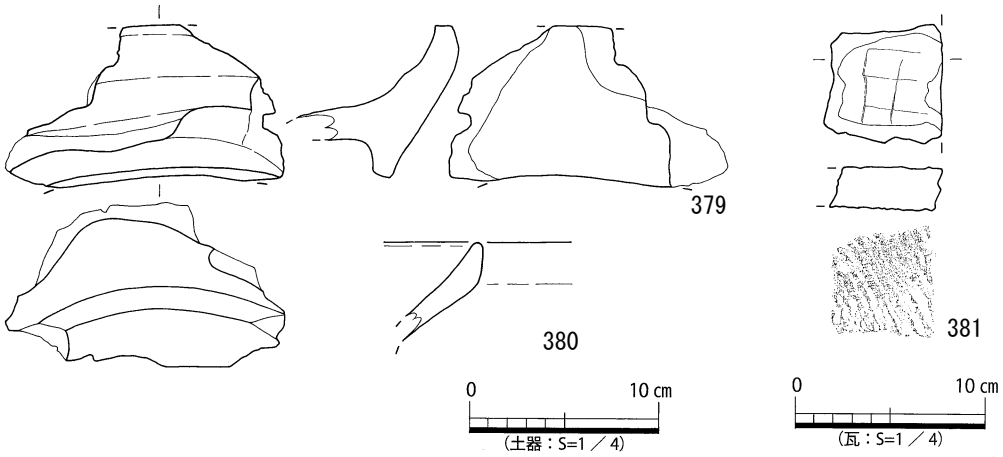


図 52　第４調査区　近世出土遺物実測図

ト、b-b' 断面で黄灰シルト混じり粘土、c-c' 断面で暗灰黄シルトである。

遺物は須恵器壺？・須恵器片、土師器片、弥生土器片、焼土塊が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

11-SD 1 の堆積状況から、室町時代以降と考えられる。

11 － SD 1（図 48）

第 11 調査区中央で検出した溝である。10-SD2 に続くと考えられる。水田層を切って掘削している。北に直行し、攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-5° -E、検出面の標高は 5.75 mである。

長さ約 1.10 mを検出し、幅約 1.38 m、深さ約 0.44 mを測る。断面形状は逆台形にテラスである。

埋土は３層に分層でき、上層が灰黄褐細砂～極細砂で、第１遺構面を覆う洪水砂である。中層は黄褐極細砂で、ラミナが確認できることから、流水堆積と考えられる。下層はオリーブ褐極細砂である。

遺物は弥生土器片が出土したが細片のため、詳細な時期は不明である。

遺構の切り合い関係から室町時代以降と考えられる。

14 － SD 1（図 49・50）

第 14 調査区東側で検出した溝である。北に直行し、攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-8° -E、検出面の標高は 5.35 mである。

長さ約 20.70 mを検出し、幅約 0.55 m、深さ約 0.13 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で、灰黄褐シルトで弱いラミナが確認できる。

遺物は須恵器杯（373）、スクレイパー（374）、土師器片が出土した。

第 10・11 調査区で同一方位の南北方向の溝が検出されていること、第 14 調査区で切り合い関係をもつすべての遺構を切っていること、埋土の状況から、室町時代の遺構と考えられる。

14 － SD ２（図 49）

第 14 調査区北東隅で検出した溝である。14-SD1 に平行し、攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-6°-E、検出面の標高は 5.30 mである。

長さ約 2.04 mを検出し、幅約 0.40 m、深さ約 0.17 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は２層に分層でき、上層が灰黄褐シルト、下層がにぶい黄褐シルトである。

遺物は弥生土器片が出土した。

埋土の状況と、近接する 14-SD 1 と同一の方向の溝であることから、室町時代と考えられる。

第１面の近世遺構出土遺物（図 51・52）

陶器仏具？（375）、陶器瓶（376）、陶器擂鉢（377）、陶器椀（378）、移動式竈（379）、土師器鉢？（380）、布目瓦（381）が出土した。

第２面の調査

第２面は、上面で検出した水田層を除去後、黄褐粘土の地山層上面である。第 10・17 調査区の一部と、第 14･19･20 調査区では、第１面が確認できず、重機掘削後すぐに第２面であった。

第２面の調査成果については、第１～３調査区を北西工区、第４～９・15 調査区を北東工区、第 10・14・19・20 調査区を中央西工区、第 11～13 調査区を中央南工区、第 16～18 調査区を中央東工区として報告を行う。

北西工区

北西工区は、第１～３調査区に該当する。調査は工事ヤードと工程の関係で、調査範囲を３分割して実施し、それぞれに調査区名を付した。

１－SD12（図 55・58）

第１調査区中央で検出した溝である。攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-46°-W、検出面の標高は約 5.30 mである。

長さ約 4.70 mを検出し、幅約 3.60～8.00 m、深さ約 1.05 mを測る。断面形状は逆台形に緩やかなテラスである。

埋土は４層に分層でき、上層が灰褐粗砂混じりシルト～粘土ににぶい赤褐シルト、中層が褐灰粗砂混じり粘土と黒褐粗砂混じり微細砂～粘土、下層が褐灰粗砂～微細砂である。下層は流水による堆積と考えられる。

遺物は下層から土師器鍋取手（382）、スクレイパー（386）、弥生土器片、二次加工のある剥片が、そのほか弥生土器甕（383）、弥生土器甕底部（384）、打製石斧（385）が出土した。

出土遺物の年代から、奈良時代と考えられる。

１－SX13（図 56）

第１調査区西端で検出した性格不明遺構である。1-SD11 を切り、調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整形である。主軸方位 N-10°-E、検出面の標高は約 5.25 m である。

長軸約 3.00 m、短軸約 0.60 m、深さ約 0.11 m を測る。断面形状は椀状である。

埋土は単層で、黄灰シルト～粘土である。

遺物はサヌカイト剥片が出土した。

遺構の切合い関係から、奈良時代以降と考えられる。

１－SD11（図 56・58）

第１調査区西端で検出した溝状の遺構である。攪乱と 1-SX13 に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-40°-E、検出面の標高は 5.15 mである。

長さ約 4.80 mを検出し、幅約 0.54 m、深さ約 0.11 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で、灰黄褐粘土混じりシルトである。

遺物は須恵器杯Ａ（387）、弥生土器前期壺（木葉紋）（388）、須恵器片、土師器片が出土した。

出土遺物の年代から、奈良時代と考えられる。

１－SX14（図 56）

第１調査区西端で検出した土坑である。攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-28°-E、検出面の標高は約 5.25 mである。

長軸約 2.50 m、短軸約 0.46 m、深さ約 0.18 m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。

埋土は単層で、黒褐シルト混じり粘土である。

遺物が出土していないため、遺構の年代は不明である。

２－SX10（図 57・58）

第２調査区南側中央で検出した性格不明遺構である。２-SD25・29 を切る。平面・断面形状も不整形である。整地層の可能性がある。

埋土は単層で、2.5Y4/1 黄灰シルト～粘土（径２～3㎝程度の地山ブロック 10%）である。

遺物は須恵器杯Ｂ底部（389）、土師器片、須恵器片が出土した。

出土遺物の年代と遺構の切合い関係から、奈良時代と考えられる。

２－SD23（図 59）

第２調査区北側中央で検出した溝である。北東に直行し、２-SD14 に切られ、南に屈曲して調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-72°-E、検出面の標高は 5.40 mである。

長さ約 5.40 mを検出し、幅約 1.15 m、深さ約 0.06

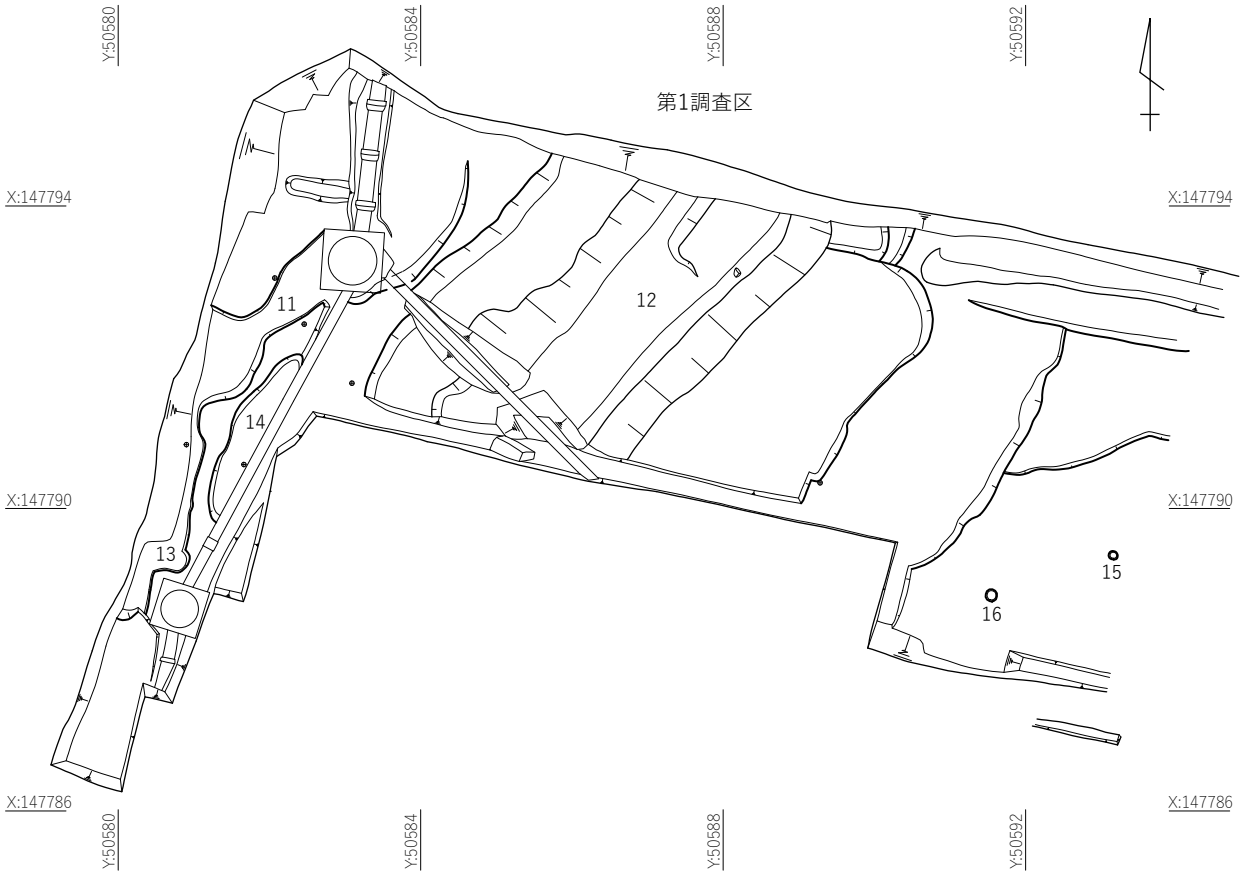


図 53　第１調査区第２面　平面図 (S= １／100)

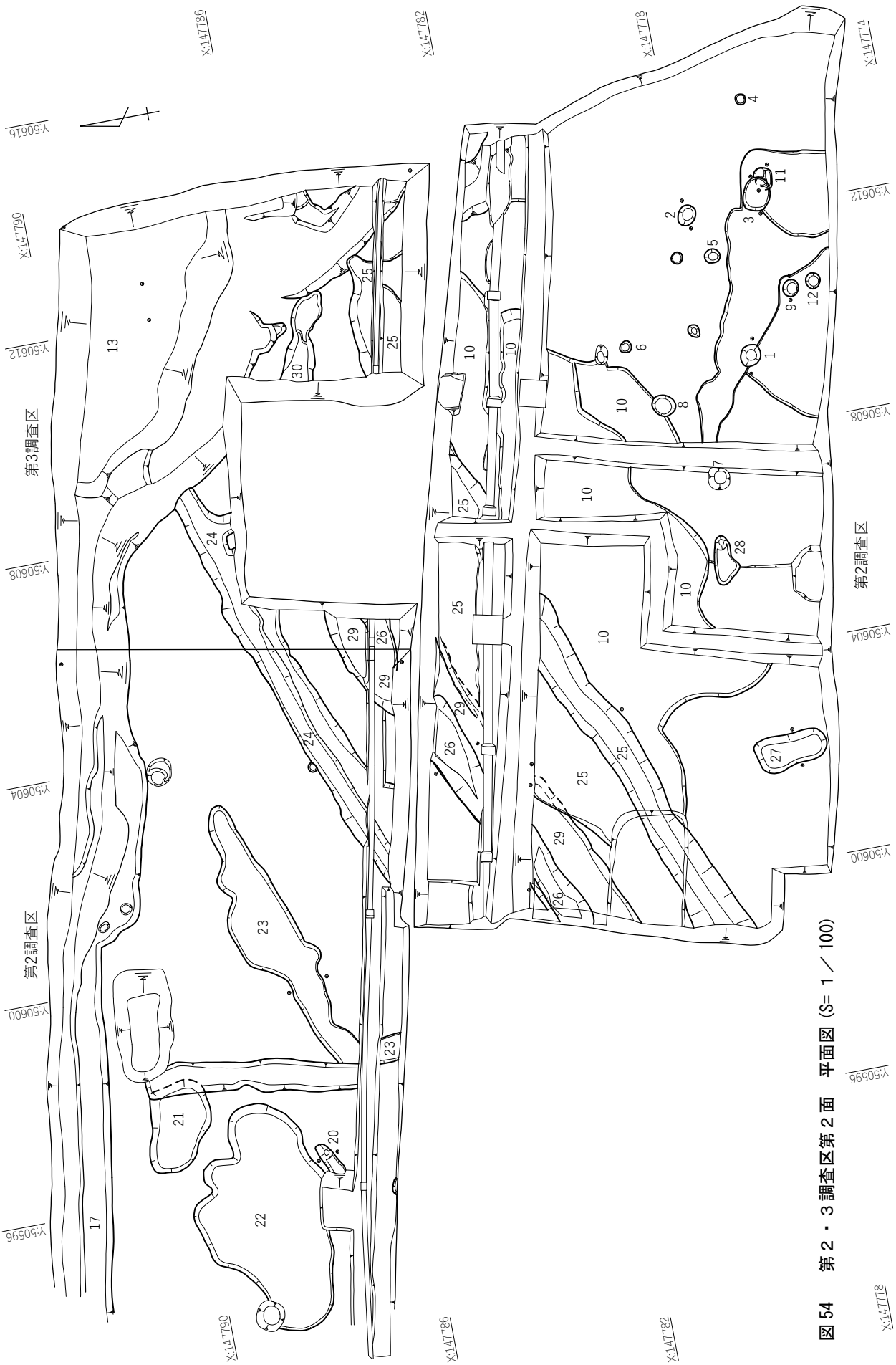


図 54　第２・３調査区第２面　平面図（S= １／100）

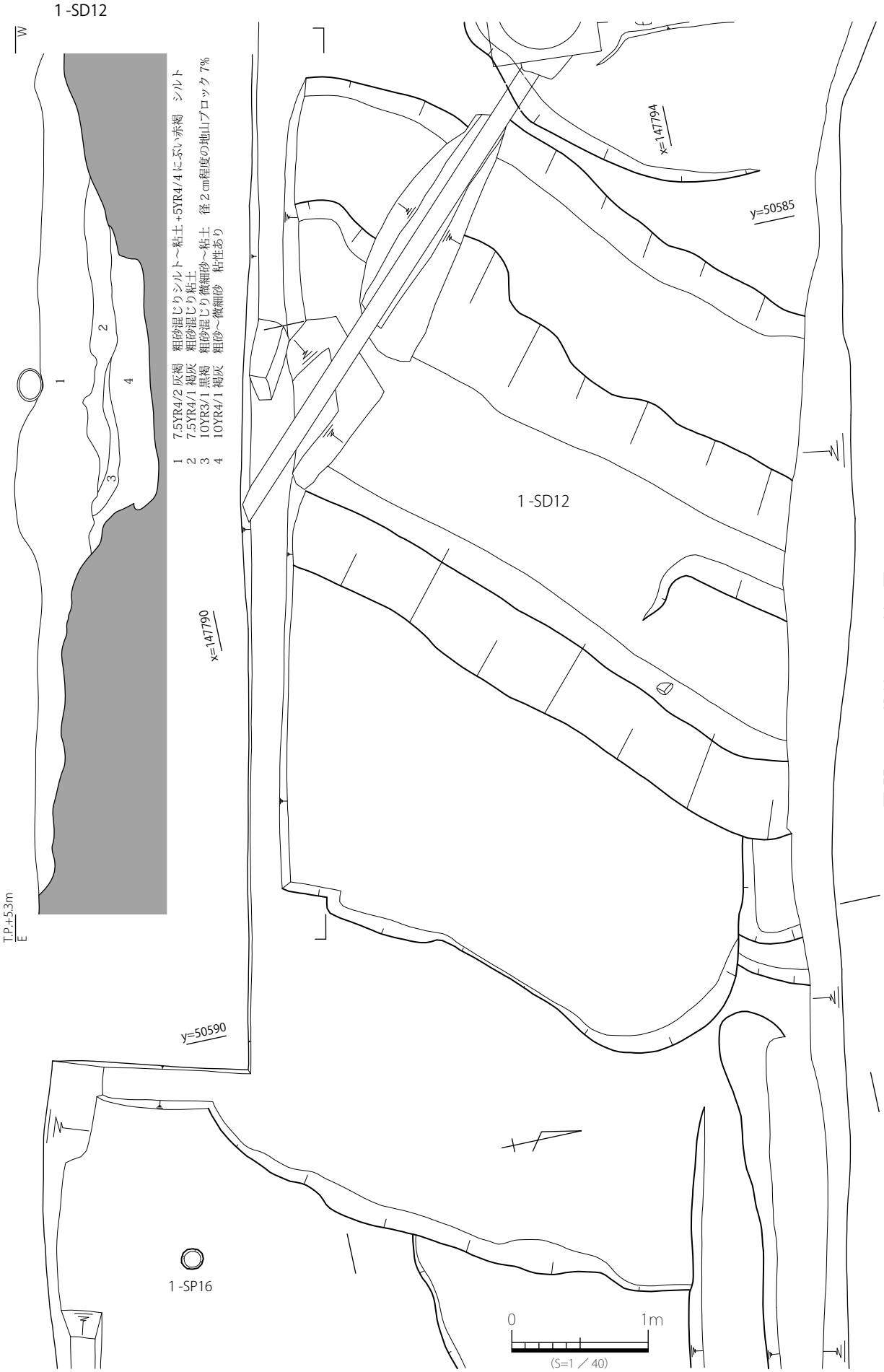


図 55　1-SD12　平・断面図

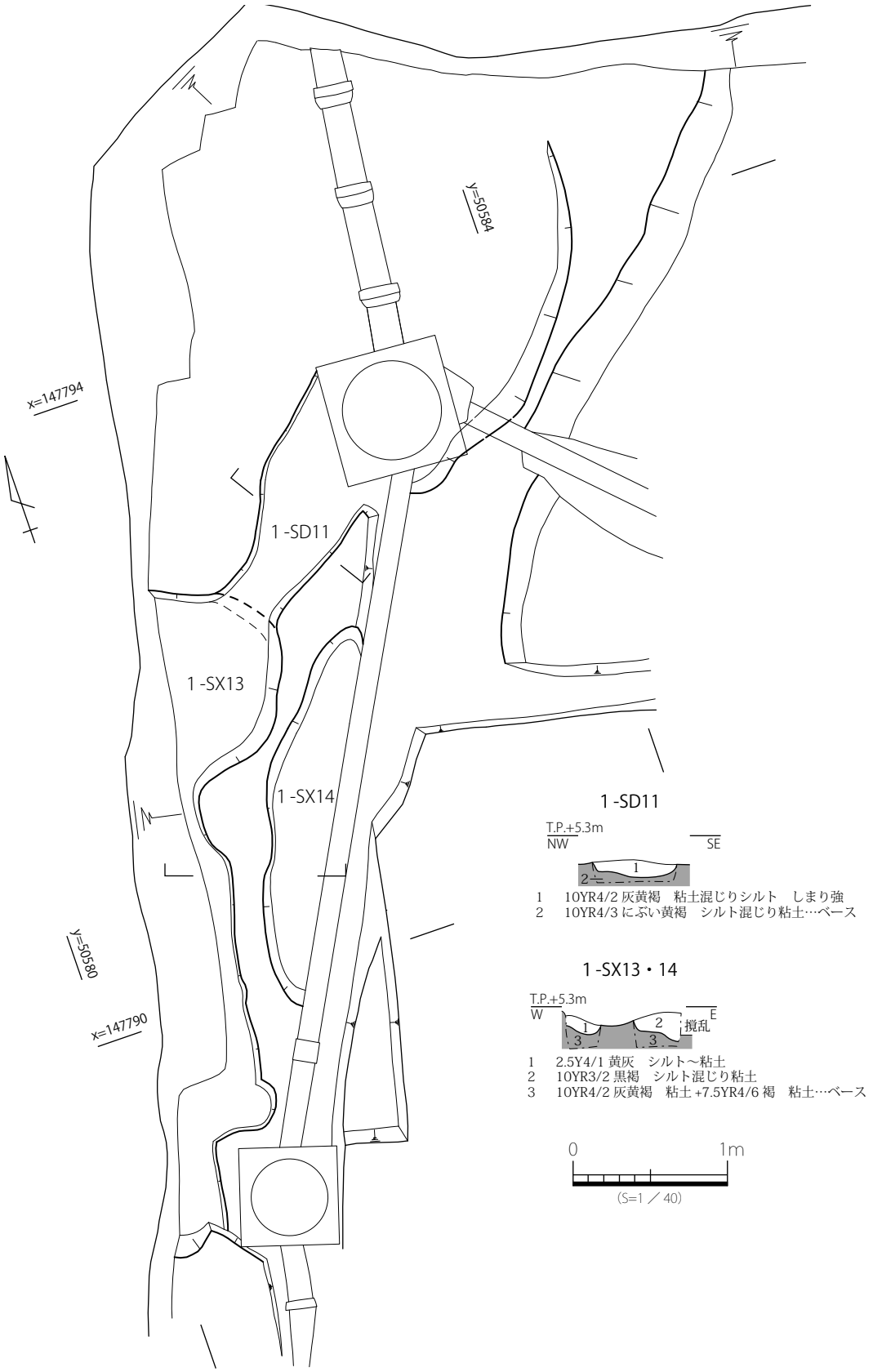


図 56　1-SD11・SX13・14　平・断面図

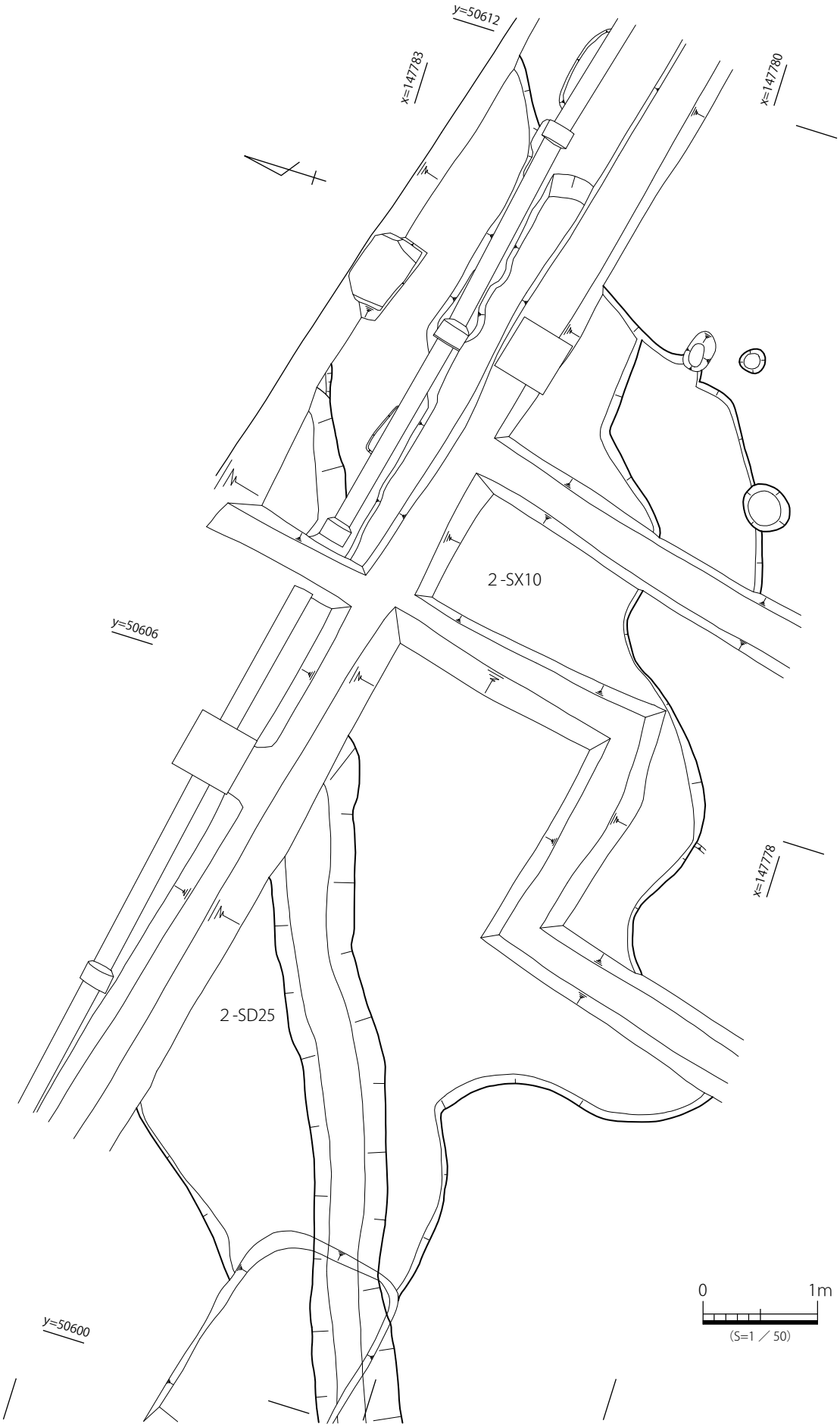


図 57　　2-SX10　平面図

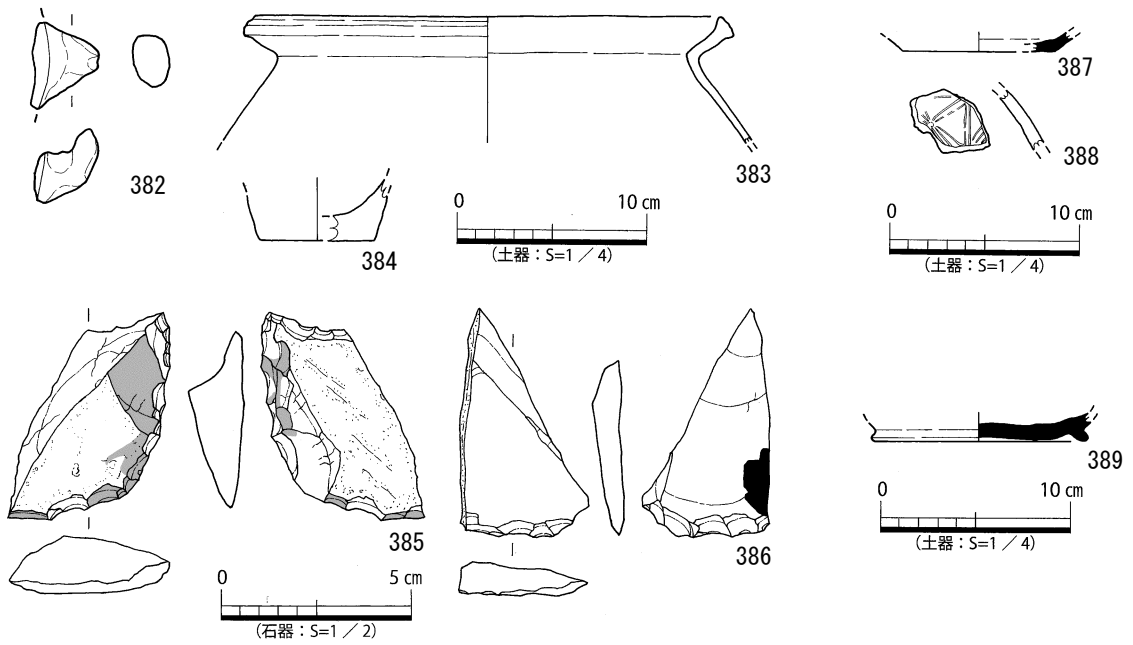


図 58　北西工区　奈良時代の遺構出土遺物実測図

mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で、暗灰黄粘土～シルトである。

遺物は土師器片と考えられる細片が出土したが、詳細な時期は不明である。

後述する 2-SD24・25・26・29 と同方向の主軸方位をもつことから、古墳～奈良時代の遺構である可能性が高い。

２・３－SD24（図 61・63）

第２調査区北東側、第３調査区西側で検出した溝である。北東方向に直行し攪乱と３-SD13に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-72°-E、検出面の標高は 5.30 mである。

長さ約 8.00 m、幅約 0.60 m、深さ約 0.25 mを測る。断面形状は U 字形にテラスである。

埋土は３層で、上層が灰黄褐粘土～シルトと褐灰粘土～シルト、下層が灰黄褐粘土～シルトである。

遺物は弥生土器片、須恵器片、土師器片、焼土塊が出土した。

出土遺物の年代から、古墳～奈良時代と考えられる。

２・３－SD25（図 60・61）

第２調査区南西～中央、第３調査区南側で検出した溝である。北東方向に直行し、攪乱と３-SD13、２-SX10 に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-69°-E、検出面の標高は 5.35 mである。

長さ約 14.50 m、幅約 2.03 m、深さ約 0.44 mを測る。断面形状は U 字形にテラスである。

埋土は７層で、上層が灰黄褐シルト～粘土と灰黄褐粘土混じりシルト、中層が褐灰粘土混じりシルトと灰黄褐シルト～粘土、黄灰シルト～粘土、下層が暗灰黄シルト～粘土と黄灰シルト～粘土である。

遺物は土師器片、焼土塊が出土した。

出土遺物の年代から、古墳～奈良時代と考えられる。

２・３－SD26（図 60・61）

第２調査区南西側～中央、第３調査区南西側で検出した溝である。北東に直行し、２-SX10 に切られ、２-SD29 を切る。攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-65°-E、検出面の標高は 5.40 mである。

長さ約 7.00 m、幅約 0.70 m、深さ約 0.50 mを測る。断面形状は方形～方形に段落ちである。

埋土は４層に分層でき、a-a' 断面で上層が黒褐シルト～粘土、中層が褐灰シルト～粘土と褐灰シルト～粘土、下層が褐灰粘土である。

b-b' 断面では上層が暗褐極細砂混じりシルト～粘土、中層が褐灰シルト～粘土と褐灰シルト混じり粘土、下層が褐灰シルト～粘土である。

遺物は弥生土器片、サヌカイト剥片が出土した。

遺構の切り合い関係と埋土の状況から古墳～奈良時代と考えられる。

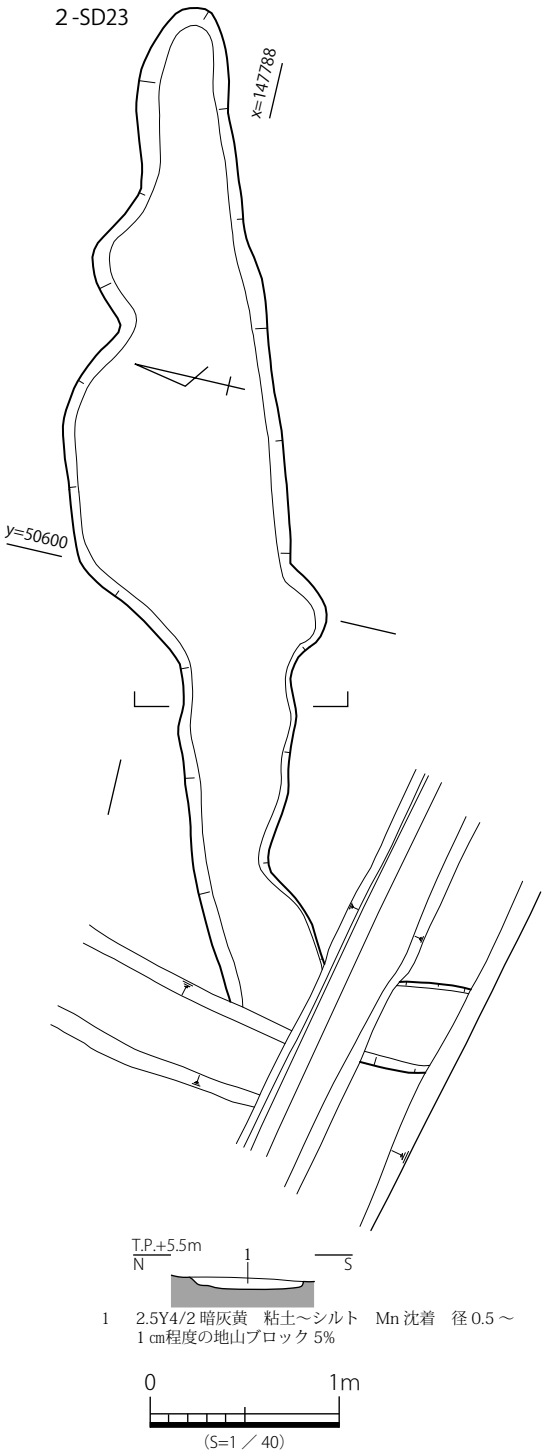


図 59　　２-SD23　平・断面図

２・３－SD29（図 60 ～ 63）

第２調査区西側、第３調査区南西隅で検出した溝である。北東に直行し、攪乱と 2-SD25･26 に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-63° -E、検出面の標高は 5.45 mである。

長さ約 8.00 mを検出し、幅約 1.85 m、深さ約 0.50 mを測る。断面形状は方形である。

埋土は 10 層に分層でき、上層が黄灰粘土～シルトと黄灰シルト～粘土、暗灰黄粘土混じりシルト、中層が褐灰粘土混じりシルトと黄灰粘土混じりシルト、下層が褐灰極細砂混じりシルト～粘土と黄灰極細砂～シルトである。

遺物は弥生土器甕又は壺の底部（390）、弥生土器片、土師器片、サヌカイト剥片が出土した。

遺構の切り合い関係と埋土の状況から古墳時代～奈良時代と考えられる。

３－SD30（図 61）

第３調査区中央で検出した溝である。東西に直行し、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。検出位置から 2-SD26 か 2-SD29 の延長の溝と考えられる。主軸方位 N-70° -E、検出面の標高は 5.20 mである。

長さ約 1.70 mを検出し、幅約 0.55 m、深さ約 0.27 mを測る。断面形状は逆台形である。

遺物は土師器杯、須恵器片が出土した。

出土遺物の年代から、古墳～奈良時代と考えられる。

２－SD20（図 64・66）

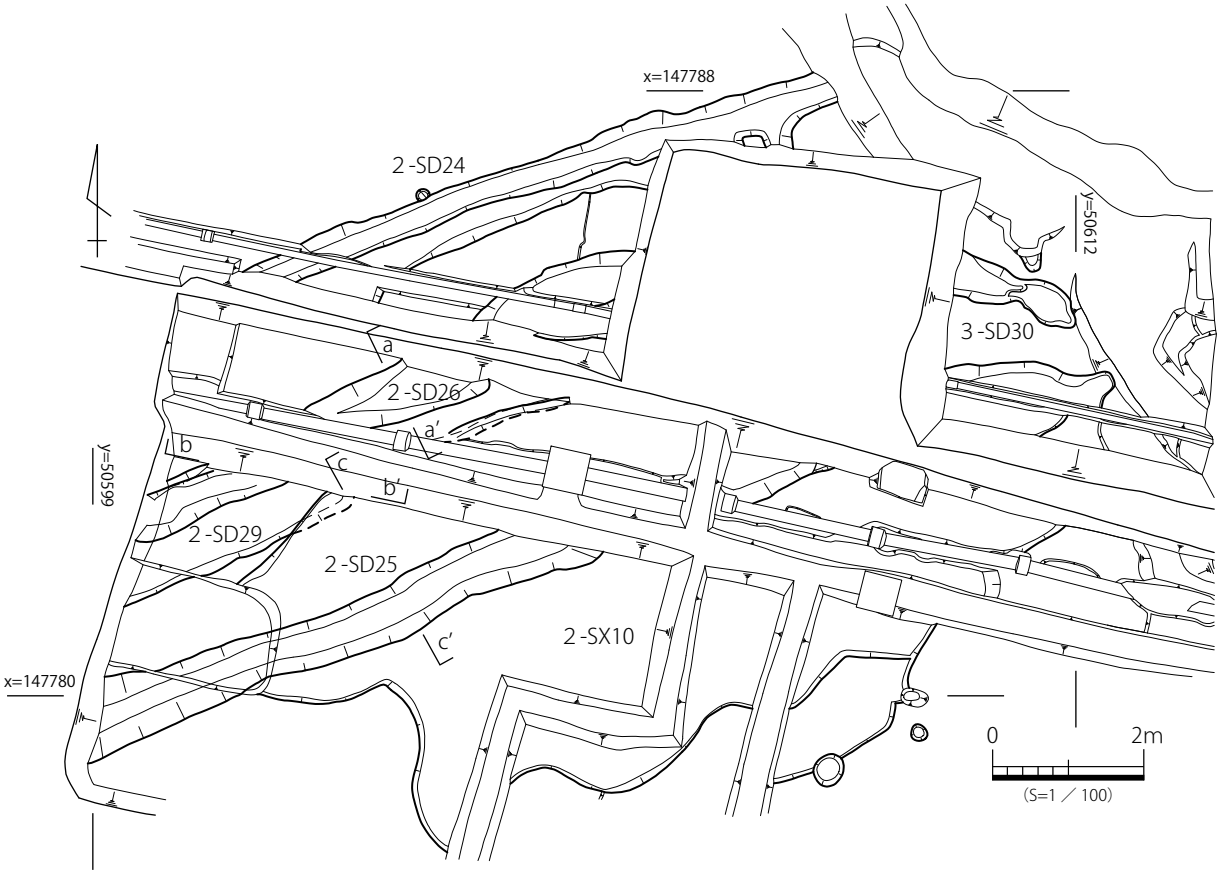
第２調査区北西側で検出した溝状の遺構である。北東に直行し、攪乱に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-62° -E、検出面の標高は 5.35 mである。

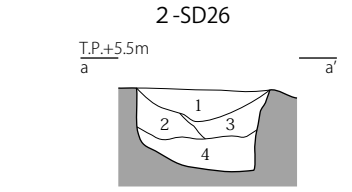
長さ約 0.70 mを検出し、幅約 0.24 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は V 字形である。

埋土は単層で、灰黄褐粘土～シルトである。

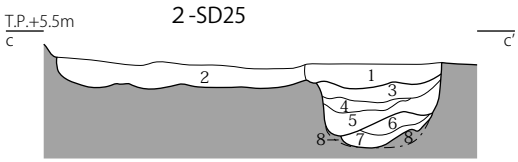
遺物はスクレイパー（392）が出土した。

出土遺物と埋土の状況から、弥生時代と考えられる。

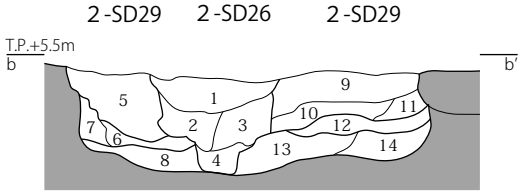


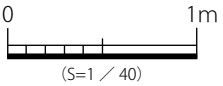


1　10YR3/2 黒褐　シルト～粘土　Mn 沈着　径 1 ～ 2 ㎝程度の 10YR4/6 褐　シルトブロック 7%
2　10YR4/1 褐灰　シルト～粘土　Mn 沈着　径 0.5 ～ 1 ㎝程度の地山ブロック斑状に 40%
3　10YR5/1 褐灰　シルト～粘土　Mn 沈着　径 1 ㎝程度の地山ブロック 50%
4　10YR4/1 褐灰　粘土　やや粘性強　径 4 ～ 5 ㎝程度の 2.5Y4/2 暗灰黄　シルト～粘土ブロック 10%　径 1 ～ 2cm 程度の地山ブロック 5%



1　10YR4/2 灰黄褐　シルト～粘土　径 1 ㎝程度の地山ブロック斑状に 3%
2　10YR4/2 灰黄褐　粘土混じりシルト　Mn 沈着　径 2 ～ 3 ㎝程度の地山ブロック 10%
3　10YR4/1 褐灰　粘土混じりシルト
4　10YR5/2 灰黄褐　シルト～粘土　径 1 ～ 2 ㎝程度の地山ブロック斑状に 5%
5　2.5Y4/1 黄灰　シルト～粘土　径 1 ㎝程度の地山ブロック 3%
6　2.5Y5/2 暗灰黄　シルト～粘土　2.5Y4/1 黄灰　シルト～粘土ブロック斑状に 5%　地山ブロック 40%
7　2.5Y4/1 黄灰　シルト～粘土　4 層よりやや粘性強
8　10YR4/4 褐　シルト混じり粘土…ベース





1　10YR3/4 暗褐　極細砂混じりシルト～粘土
2　10YR4/1 褐灰　シルト～粘土　径 2 ～ 3 ㎝程度の地山ブロック 10%
3　10YR4/1 褐灰　シルト混じり粘土　径 1 ㎝程度の地山ブロック斑状に 20%
4　10YR5/1 褐灰　シルト～粘土
5　2.5Y4/1 黄灰　粘土～シルト　径 1 ～ 2 ㎝程度の地山ブロック 20%
6　10YR5/1 褐灰　粘土混じりシルト　径 2 ㎝程度の地山ブロック 30%
7　2.5Y5/1 黄灰　粘土混じりシルト　径 1 ～ 3 ㎝程度の地山ブロック斑状に 30%
8　10YR4/1 褐灰　極細砂混じりシルト～粘土
9　2.5Y5/1 黄灰　シルト～粘土　径 1 ～ 2 ㎝程度の地山ブロック斑状に 5%
10　2.5Y5/2 暗灰黄　粘土混じりシルト　径 1 ～ 3 ㎝程度の地山ブロック 10%
11　2.5Y4/1 黄灰　粘土～シルト　径 1 ～ 2 ㎝程度の地山ブロック 5%
12　2.5Y4/1 黄灰　粘土混じりシルト　径 2 ～ 3 ㎝程度の地山ブロック 3%
13　2.5Y5/1 黄灰　極細砂～シルト　径 2 ㎝程度の地山ブロック斑状に 3%
14　2.5Y5/1 黄灰　極細砂～シルト　径 1 ～ 4 ㎝程度の地山ブロック 10%

1 ～ 4 ：2-SD26
5 ～ 14：2-SD29

図 60　２・３-SD25・26・29　平・断面図

第２調査区
第３調査区
x=147780
y=50615
x=147785
x=147790
y=50610
y=50605
y=50600
3-SD13
3-SD30
3-SD25
2-SX10
2-SD26・29
2-SD17
2-SD24
2-SD25
2-SD26
2-SD29
0
2m
(S=1／100)

図 61　２・３-SD24・25・26・29・30　平面図

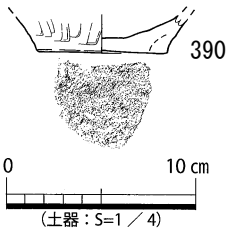
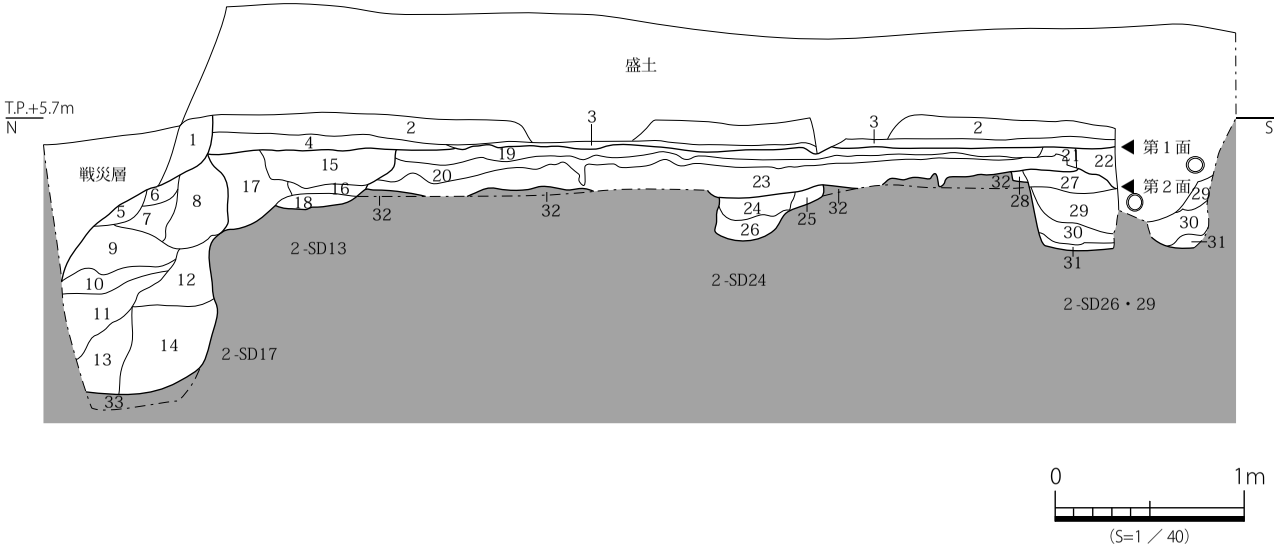


図 62　２-SD29
出土遺物実測図

第２調査区北側東壁



1　2.5Y6/2 灰黄　シルト　炭化物含む
2　旧耕作土
3　床土
4　10YR6/2 灰黄褐　シルト
5　5Y4/1 灰　シルト～微細砂…2-SD17
6　2.5Y5/1 黄灰　シルト～微細砂…2-SD17
7　5Y5/1 灰　シルト…2-SD17
8　2.5Y6/2 灰黄　シルト　12 層に比べ粒形粗い…2-SD17
9　2.5Y5/1 黄灰　シルト～微細砂…2-SD17
10　2.5Y4/1 黄灰　シルト…2-SD17
11　2.5Y4/1 黄灰　シルト　20 層に比べ粒形細かい…2-SD17
12　5Y5/1 灰　シルト～微細砂…2-SD17
13　5Y5/1 灰　粘土混じりシルト…2-SD17
14　2.5Y4/1 黄灰　シルト混じり微細砂…2-SD17
15　2.5Y6/2 灰黄　シルト…溝埋土…2-SD13
16　2.5Y6/1 黄灰　シルト　径１㎝程度の灰色粘土ブロック 1%…2-SD13
17　2.5Y6/3 にぶい黄　シルト…2-SD13
18　2.5Y5/1 黄灰　粘土～シルト　炭化物含む…水田層の流れ込み…2-SD13
19　2.5Y5/2 暗灰黄　シルト　炭化物含まない…水田層
20　2.5Y5/2 暗灰黄　シルト　４層に比べやや粒形粗い…水田層
21　2.5Y6/2 灰黄　シルト　４・５層に比べ粒形細かい…水田層
22　2.5Y5/2 暗灰黄　シルト　炭化物含む…水田層
23　2.5Y5/1 黄灰　粘土～シルト　炭化物含む…水田層
24　10YR4/2 灰黄褐　粘土～シルト…2-SD24
25　10YR4/1 褐灰　粘土～シルト　地山ブロック斑状に 3%…2-SD24
26　10YR4/2 灰黄褐　粘土～シルト　径１㎝程度のシルトブロック 3%…2-SD24
27　10YR5/2 灰黄褐　シルト　径１～２㎝程度の地山ブロック 5%…2-SD26・29
28　10YR4/2 灰黄褐　シルト　径１㎝程度の地山ブロック 5%…2-SD26・29
29　10YR6/2 灰黄褐　シルト～粘土　Mn 沈着　径１～２㎝程度の地山ブロック 20%…2-SD26・29
30　2.5Y6/1 黄灰　シルト混じり粘土　径２～３㎝程度の地山ブロック斑状に 3%…2-SD26・29
31　10YR5/1 褐灰　シルト～粘土　径２～３㎝程度の地山ブロック 10%…2-SD26・29
32　2.5Y4/3 オリーブ褐　粘土～シルト…ベース
33　7.5Y5/1 灰　シルト混じり細砂…ベース

図 63　２・３-SD13・17・24・26・29　断面図

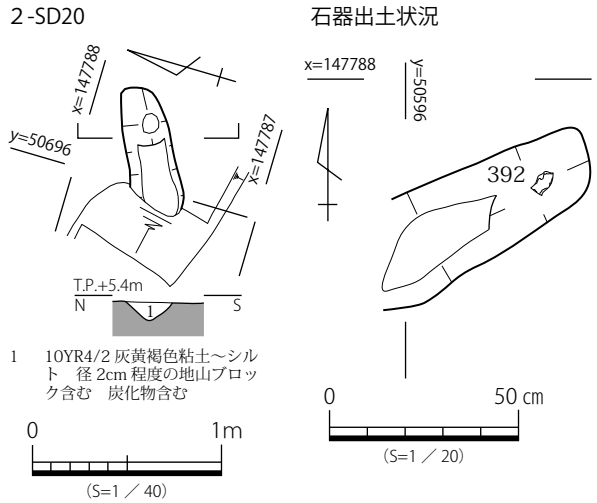


図 64　　2-SD20　平・断面図、遺物出土状況図

２－ SK22（図 65・66）

第２調査区北西側で検出した土坑である。一部を攪乱に切られる。形状は不整形である。主軸方位 N-86°-E、検出面の標高は 5.35 mである。

長軸約 4.26 mを検出し、短軸約 2.38 m、深さ約 0.12 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は単層で、暗灰黄シルトである。

遺物はスクレイパー（391）が出土した。

出土遺物から、弥生時代以降と考えられる。

２－ SK21（図 65）

第２調査区北西側で検出した土坑である。攪乱と２-SD14 に切られる。形状はやや歪な長方形を呈する。主軸方位 N-58°-W、検出面の標高は 5.35 m である。

長軸約 1.82 mを検出し、短軸約 1.02 m、深さ約 0.12 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で、暗灰黄シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

２－ SK27（図 65）

第２調査区中央南側で検出した土坑である。形状は隅丸長方形を呈する。主軸方位 N-9°-W、検出面の標高は 5.30 mである。

長辺約 1.33 mを検出し、短辺約 0.67 m、深さ約 0.14 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は２層に分層でき、上層が黄灰シルト～粘土、下層が黄褐粘土～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

２－ SK28（図 65）

第２調査区中央南側で検出した土坑である。形状は不整形である。主軸方位 N-83°-W、検出面の標高は 5.30 mである。

長軸約 0.90 mを検出し、短軸約 0.47 m、深さ約 0.20 mを測る。断面形状は逆台形に段落ちである。

埋土は単層で、暗灰黄粘土～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

北西工区第２面包含層出土遺物（図 67）

弥生土器壺（393）、石鏃（394）が出土した。

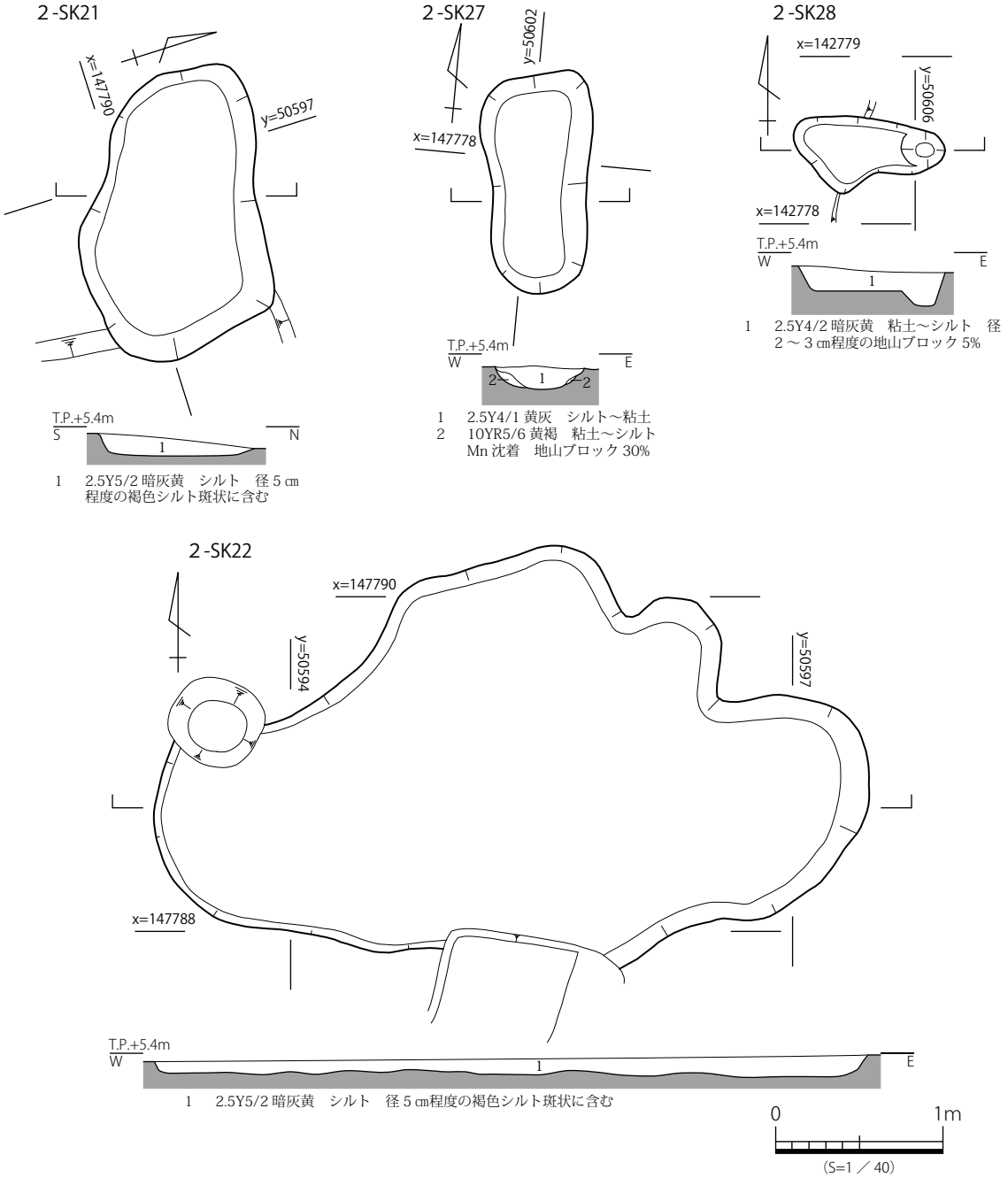


図 65　　2-SK21・22・27・28　平・断面図

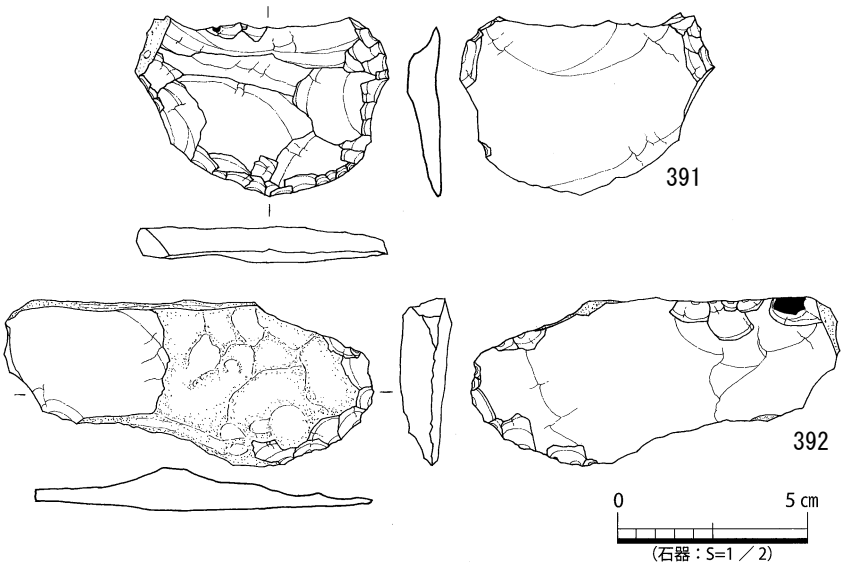


図 66　北西工区　弥生時代の遺構出土遺物実測図

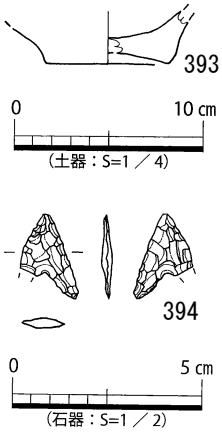


図 67　北西工区の第２面
包含層出土遺物実測図

北東工区

北東工区は、第４～９・15 調査区に該当する。調査は小学生の登下校ルート確保の関係で、６分割して実施したほか、第 15 調査区については、構造物の解体後に実施した。

５－SD24（図 75）

第５調査区中央で検出した溝である。北へやや蛇行し、攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。５-SK30 を切る。主軸方位 N-17°-E、検出面の標高は 5.20 mである。

長さ約 7.60 mを検出し、幅約 0.92 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は黄褐粘土の単層である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係から、弥生時代以降、中世以前の遺構と考えられる。

５－SK26（図 76）

第５調査区北側で検出した土坑である。攪乱と 5-SX25 に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位不明、検出面の標高は 5.10 mである。

長軸約 2.60 mを検出し、短軸約 0.90 m、深さ約 0.20 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は黄灰粗砂混じり粘土の単層である。

遺物は土師器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

５－SX25（図 76）

第５調査区北側で検出した性格不明遺構である。攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位不明、検出面の標高は 5.10 mである。

長軸約 0.90 mを検出し、短軸約 0.70 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は不整形である。上面には洪水砂層が堆積する。

埋土は単層で、灰黄褐微細砂に黒褐粘土ブロックと地山ブロック土を含む。平面形状と埋土の状況から、整地層と考えられる。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

５－SK23（図 76・88）

第５調査区中央で検出した土坑である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整形である。主軸方位 N-2°-W、検出面の標高は 5.10 mである。

長軸約 3.40 mを検出し、短軸約 1.50 m、深さ約 0.20 mを測る。断面形状は不整形である。上層に洪水砂層が覆うが、水田層は確認できない。

埋土は３層に分層でき、暗灰黄細砂～シルトと黄褐シルト混じり粘土、褐灰微細砂～極細砂である。

遺物は弥生土器甕（395）、弥生土器片が出土した。出土遺物の年代から、弥生時代後期と考えられる。

５－SX30（図 77・88）

第５調査区南側で検出した性格不明遺構である。攪乱と 5-SD24 に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整形である。主軸方位 N-55°-W、検出面の標高は 5.10 mである。

長軸約 5.30 mを検出し、短軸約 3.30 m、深さ約 0.15 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は黄灰粘土の単層である。

遺物は弥生土器器種不明底部（396）、弥生土器片、焼土塊、サヌカイト剥片が出土した。

出土遺物の年代から、弥生時代と考えられる。

５－SK29（図 78）

第５調査区東端で検出した土坑状の遺構である。調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は方形である。主軸方位 N-11°-E、検出面の標高は 5.00 mである。

長軸約 0.80 mを検出し、短軸は約 0.70 m、深さは約 0.10 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で、褐粗砂混じり粘土に褐灰粘土～シルトブロックと黒褐粘土ブロックを含む。

遺物は土師器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

５－SK39（図 79）

第５調査区西側で検出した土坑である。攪乱と 5-SX30 に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-45°-E、検出面の標高は 5.10 mである。

長軸約 0.60 mを検出し、短軸約 0.40 m、深さ

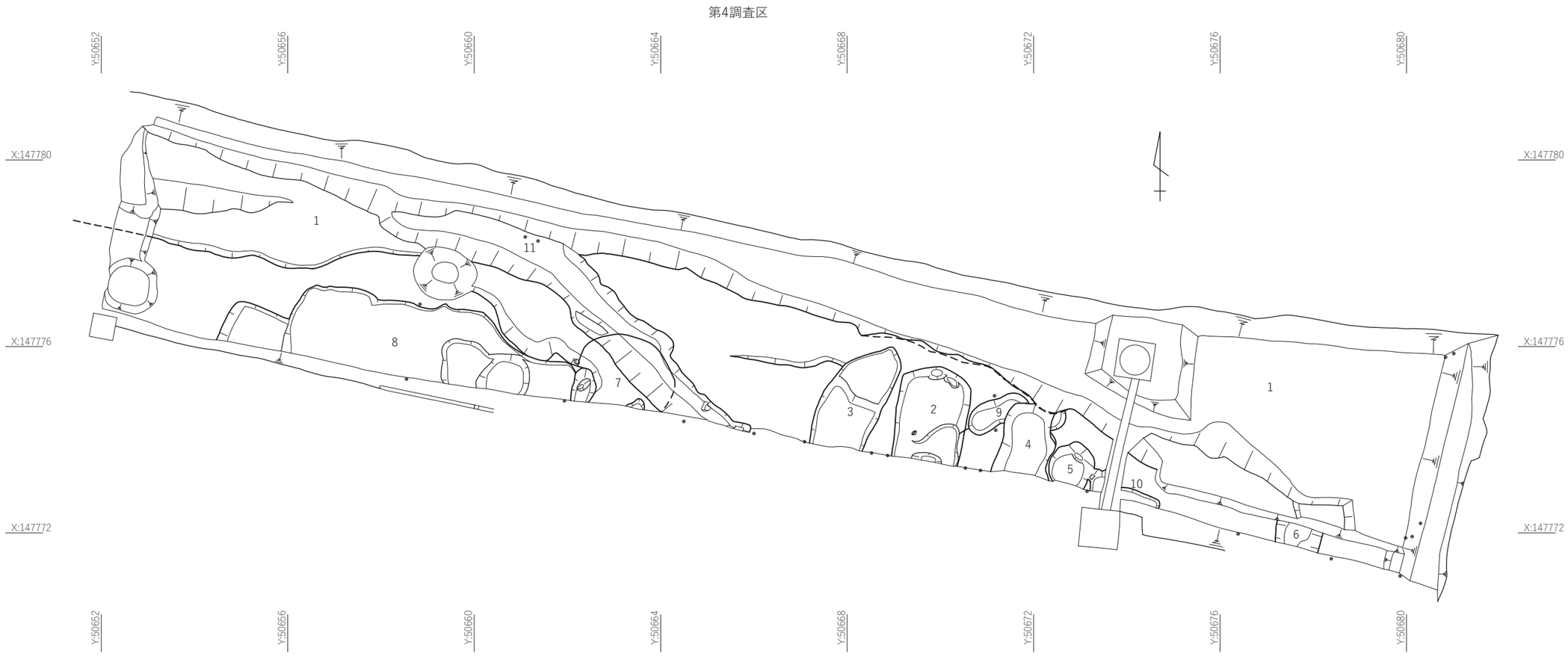


図 68　第４調査区　平面図 (S= １／100)

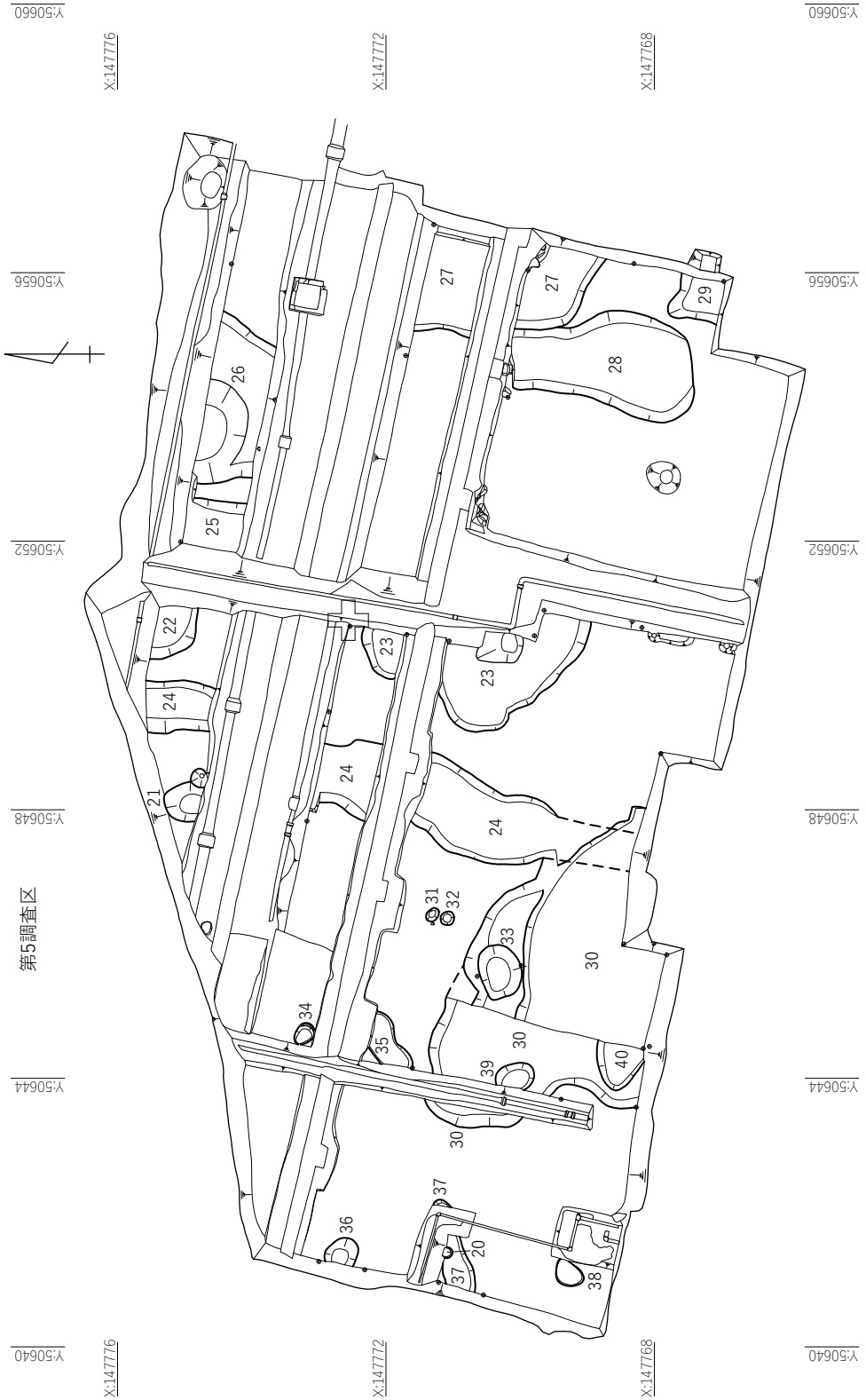


図69　第５調査区第２面　平面図（S= １／100）

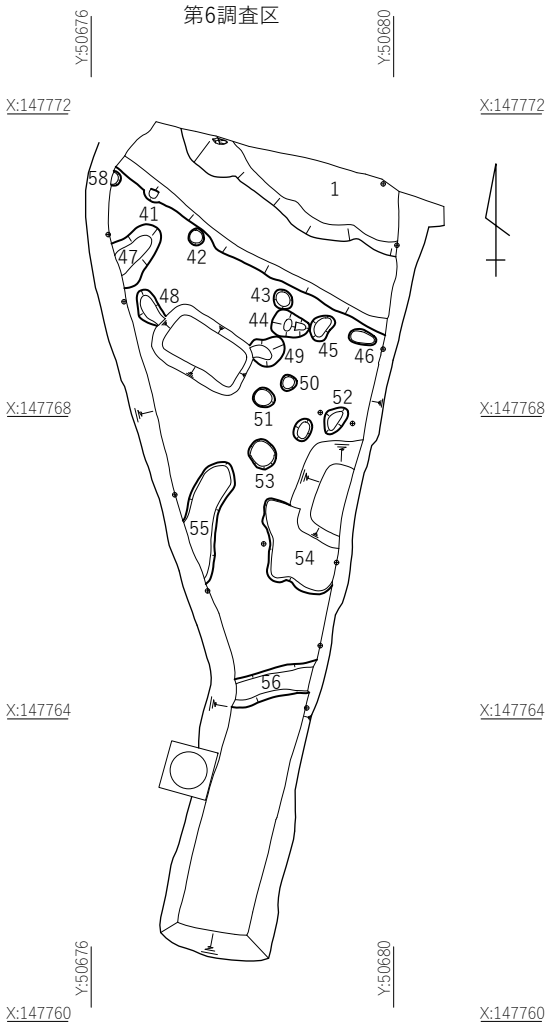


図 70　第６調査区　平面図（S= １／100）

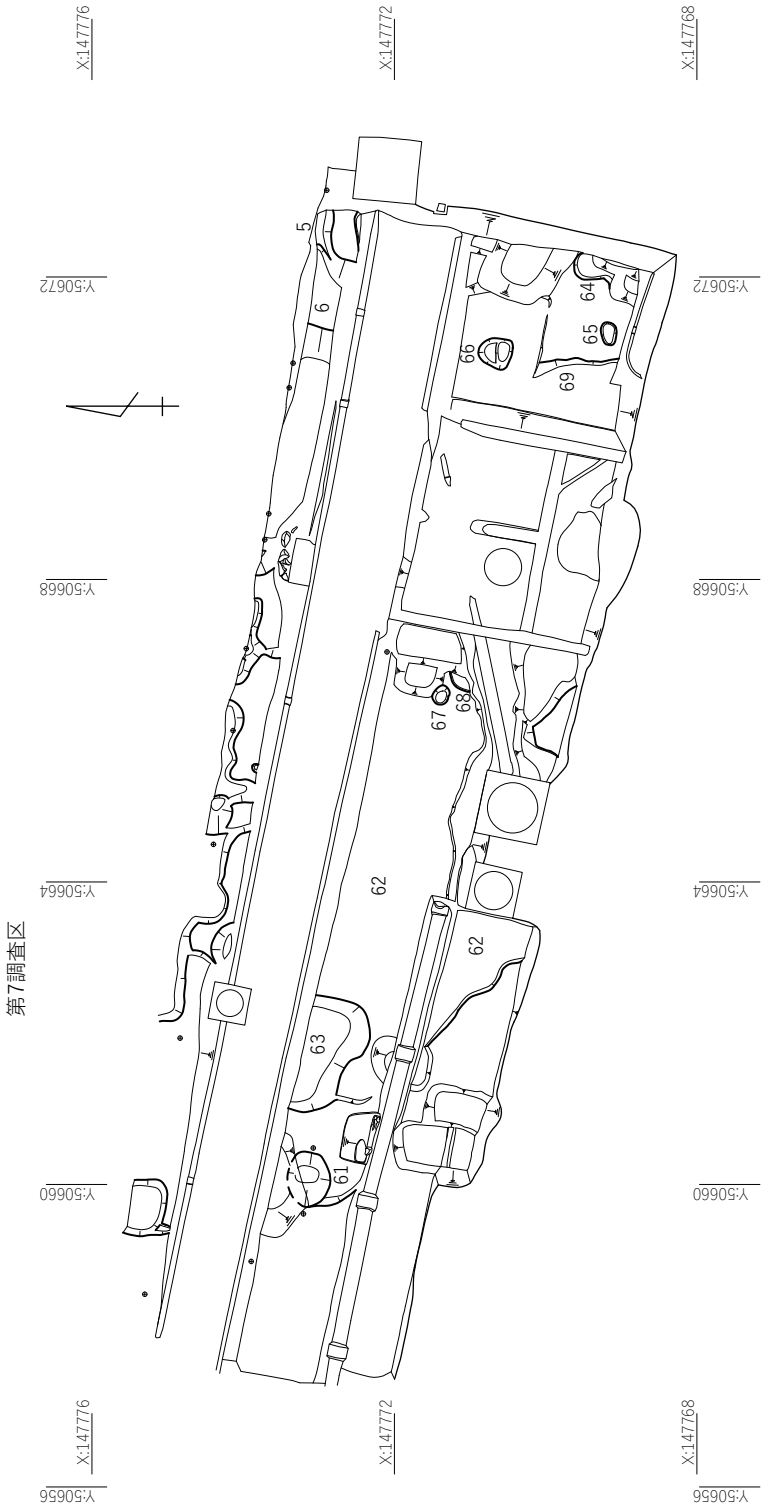


図 71　第７調査区　平面図 (S= １／100)

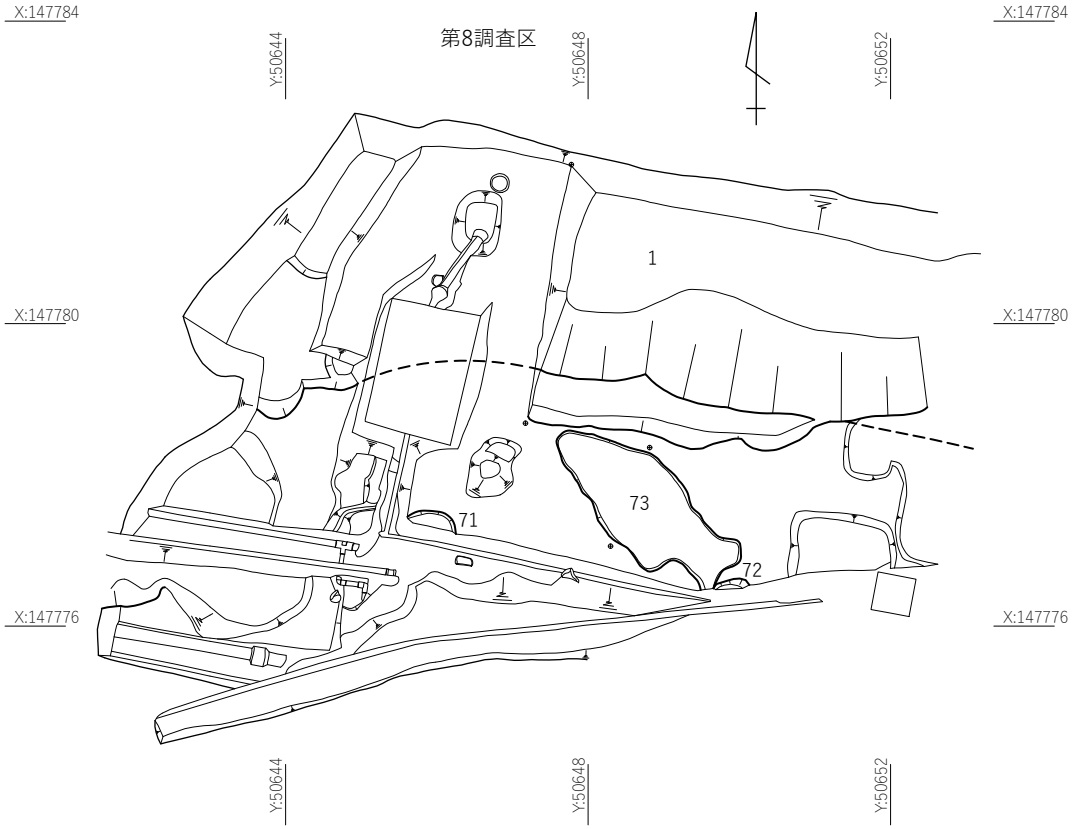


図 72　第８調査区　平面図（S= １／100）

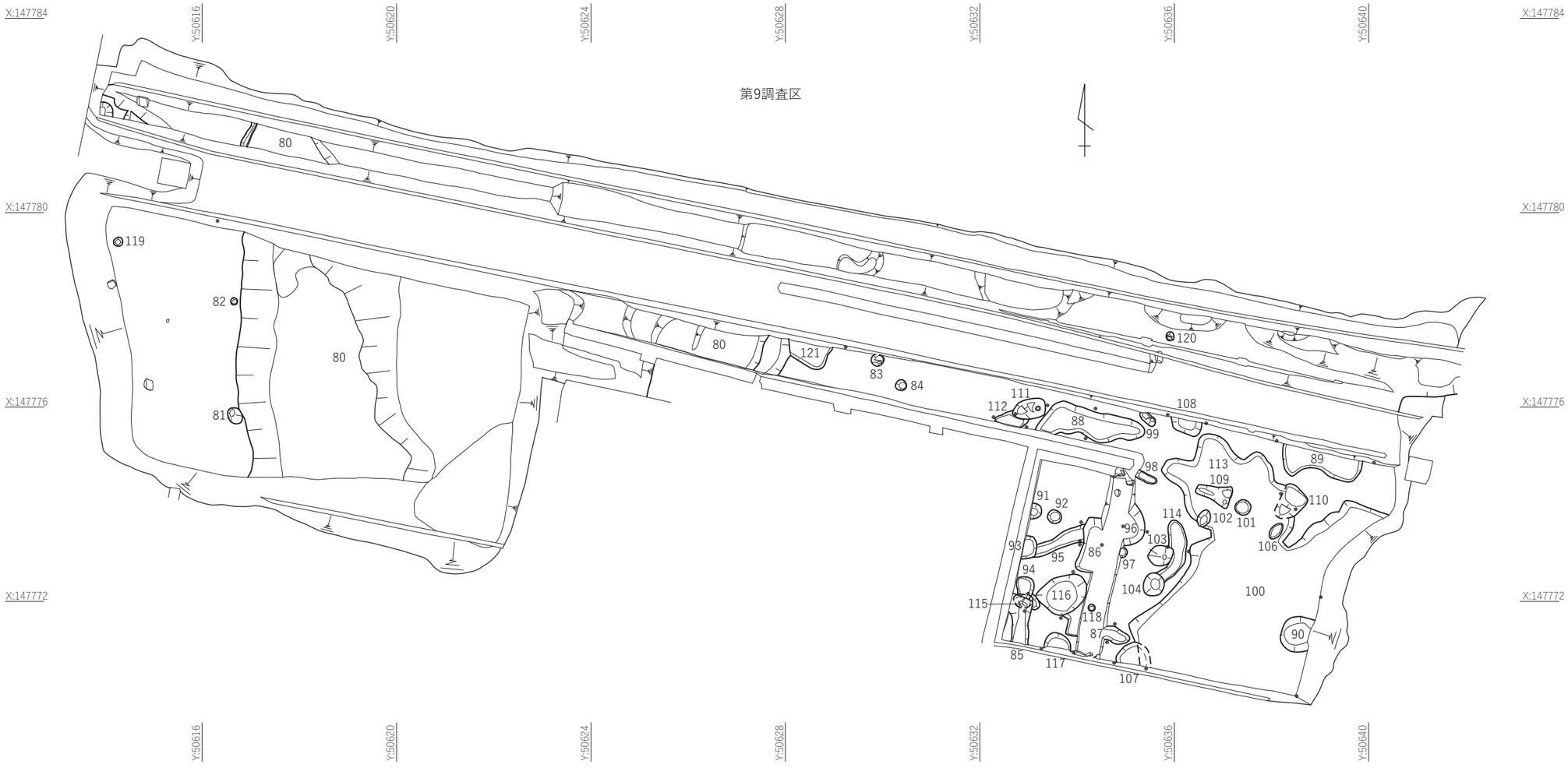


図 73　第９調査区第２面　平面図（S= １／100）

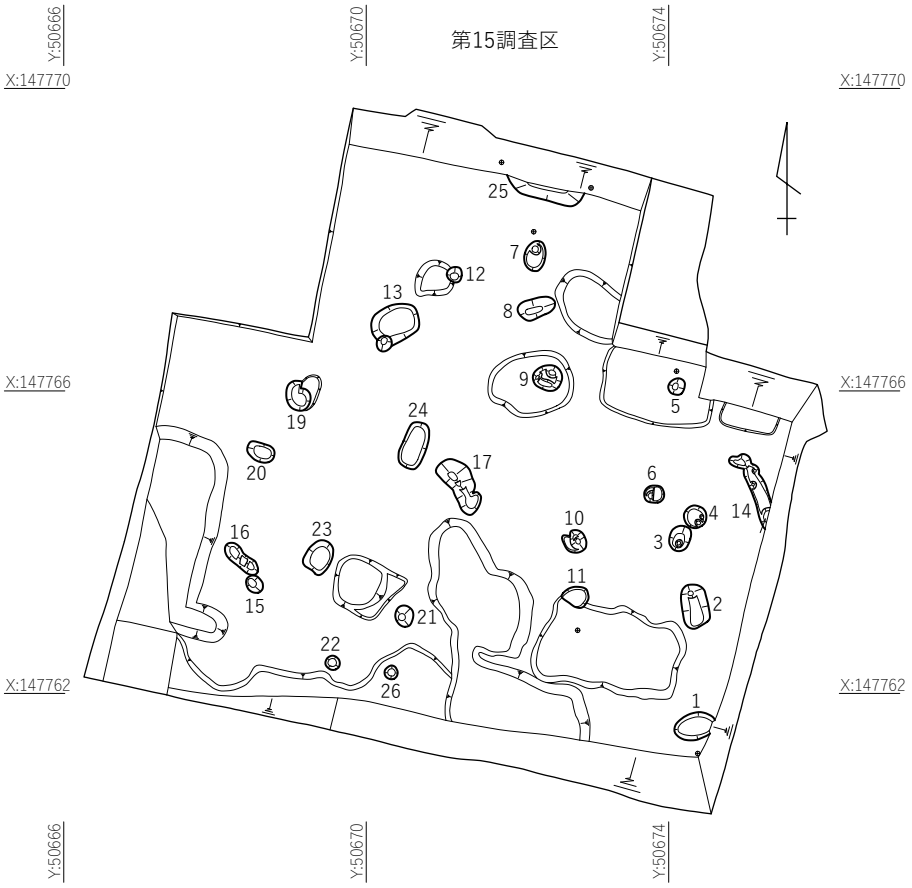
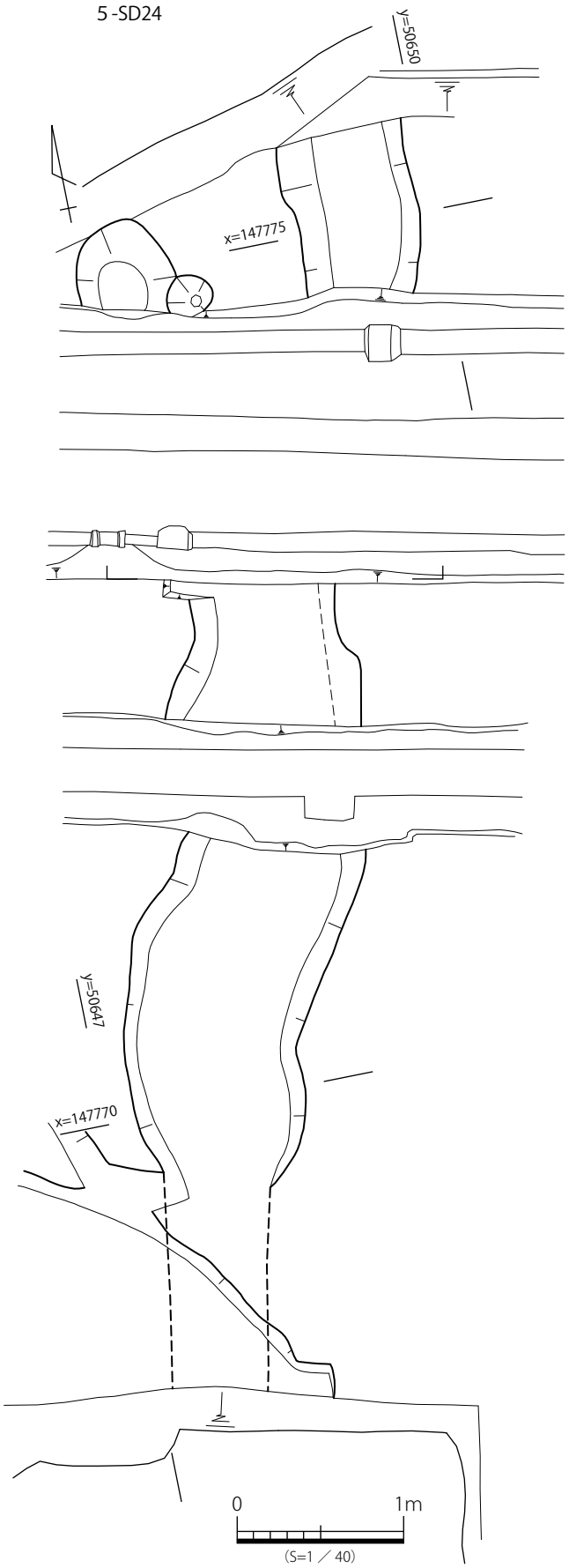
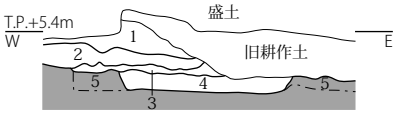


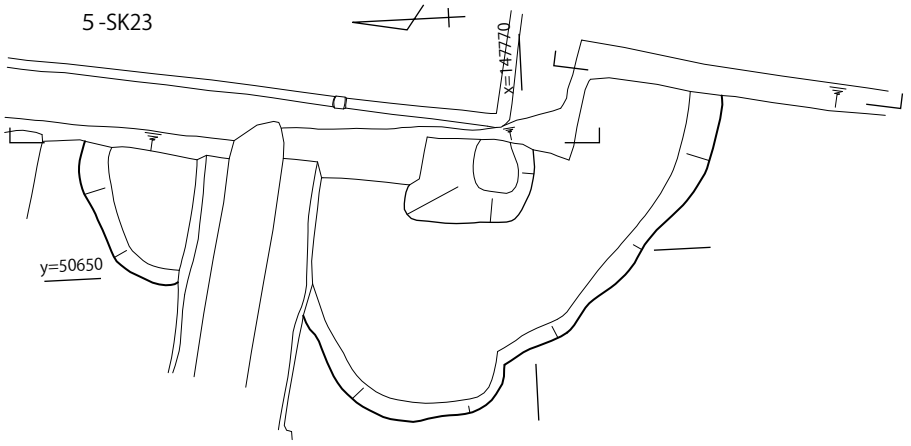
図 74　第 15 調査区　平面図 (S= 1 ／ 100)

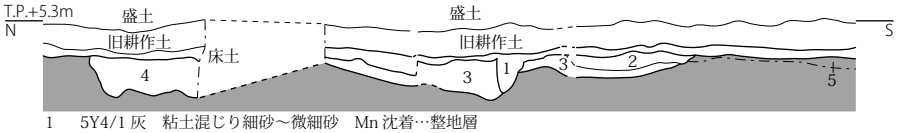




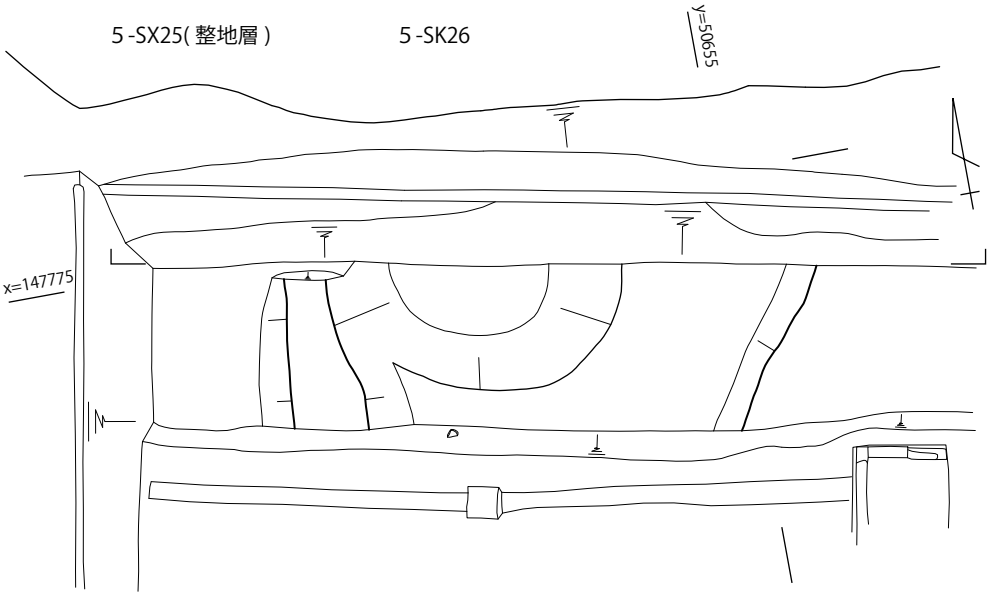
1　10YR4/6 褐 +10YR4/2 灰黄褐　細砂～微細砂…洪水砂層
2　10YR5/2 灰黄褐　シルト混じり粘土…水田層
3　10YR4/4 褐　粗砂混じり粘土…整地層
4　10YR5/6 黄褐　粘土　Mn 沈着　径２㎝程度の 10YR5/2 灰黄褐　粗砂混じりシルトブロック 5%
5　10YR4/6 褐　粗砂混じり粘土　Mn 沈着　径２～３㎝程度の 10YR5/1 褐灰　シルトブロック 10%…地山

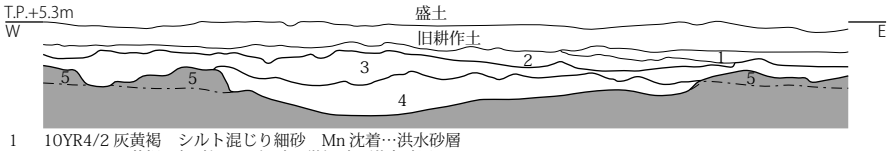
図 75　　5-SD24　平・断面図





1　5Y4/1 灰　粘土混じり細砂～微細砂　Mn 沈着…整地層
2　2.5Y4/2 暗灰黄　細砂～シルト　やや粘性あり
3　2.5Y5/3 黄褐　シルト混じり粘土　径２～３㎝程度の 5Y5/1 灰　粘土ブロック 30%
4　10YR4/1 褐灰　微細砂～極細砂　径２～４㎝程度の 10YR5/6 黄褐　粗砂混じり粘土ブロック 30%　径 0.5 ～２㎝程度の 10YR2/3 黒褐　粘土ブロック 5%…整地層
5　2.5Y4/2 暗灰黄　粗砂混じり粘土…ベース





1　10YR4/2 灰黄褐　シルト混じり細砂　Mn 沈着…洪水砂層
2　10YR4/2 灰黄褐　粗砂混じり細砂～微細砂…洪水砂層
3　10YR4/2 灰黄褐　微細砂　径１～８㎝程度の 10YR2/2 黒褐　粘土ブロック 20%　径１～３㎝程度の地山ブロック 5%…整地層
4　2.5Y4/1 黄灰　粗砂混じり粘土　径１～５㎝程度の地山ブロック斑状に 40%
5　10YR5/4 にぶい黄褐　粘土　2.5Y5/1 黄灰　粘土ブロック 30%…ベース

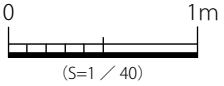
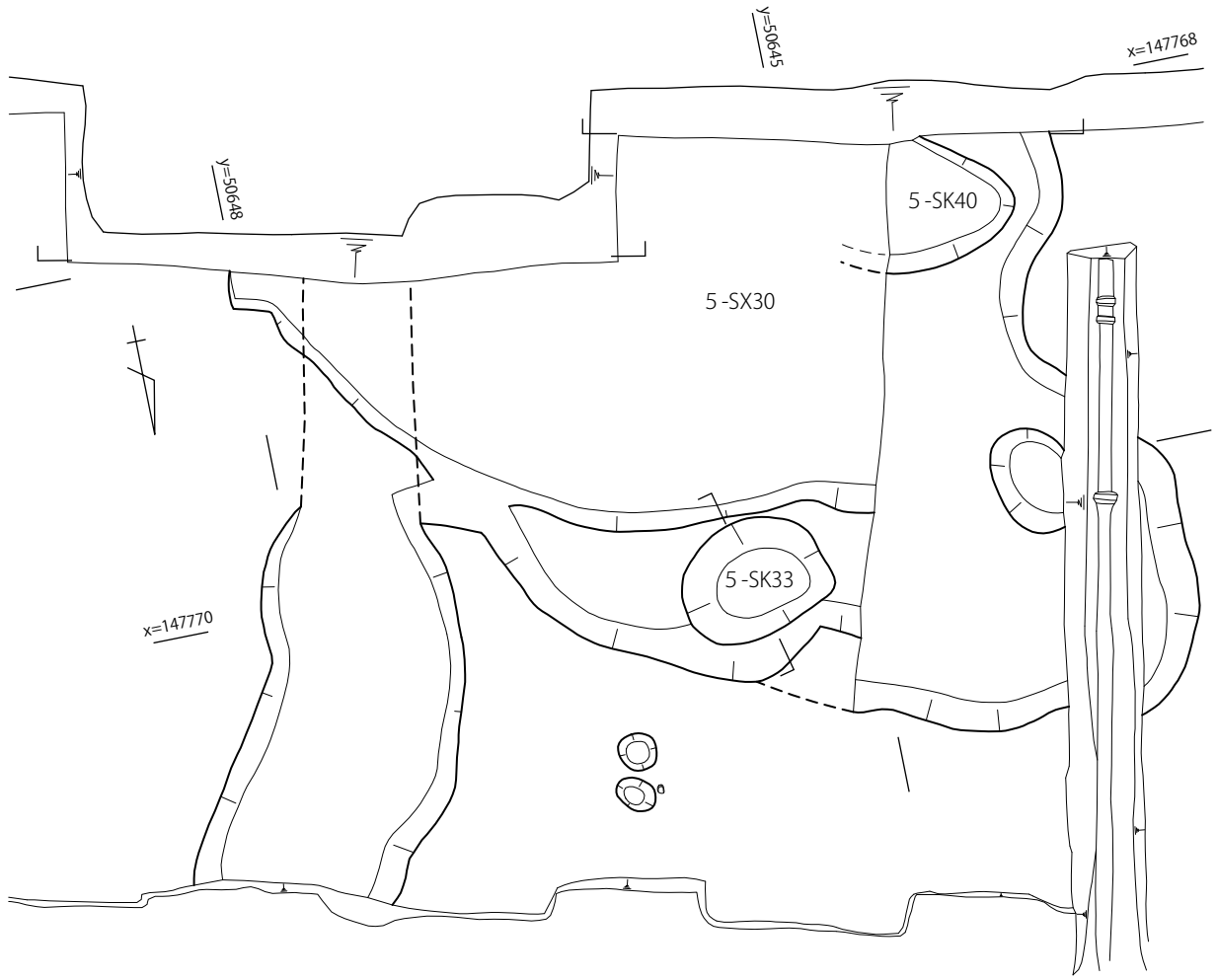
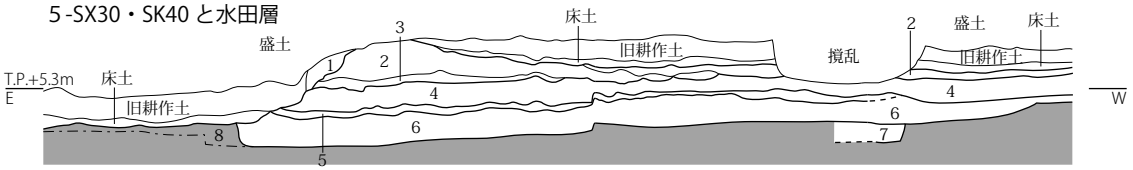


図 76　　5-SK23・SX25・SK26　平・断面図

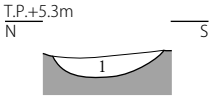


5-SX30・SK40 と水田層



1　10YR5/2 灰黄褐　粗砂混じりシルト　径２㎝程度の 10YR3/2 黒褐　粘土～シルトブロック含む　炭化物含む
2　10YR5/2 灰黄褐～ 10YR5/3 にぶい黄褐　粗砂混じり細砂～極細砂　小礫含む　炭化物含む…洪水砂層
3　2.5Y4/2 暗灰黄　粘土混じり細砂～微細砂
4　2.5Y6/1 黄灰　粗砂混じりシルト～粘土…水田層
5　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト混じり粘土　径１～３㎝程度の 10YR4/6 褐　シルトブロック 40%…整地層
6　2.5Y4/1 黄灰　粘土　Mn 沈着　10YR4/6 褐　細砂～シルト斑状に 40%…5-SX30
7　2.5Y5/2 暗灰黄　粘土…5-SK40
8　10YR5/6 黄褐　シルト～粘土　Mn 沈着…ベース

5-SK33



1　10YR4/6 褐　粗砂混じりシルト～粘土
径３～ 10 ㎝程度の 7.5YR1.7/1 黒　細砂
混じり粘土ブロック 30%　径２～６㎝
程度の 10YR4/1 褐灰　粘土ブロック 30%

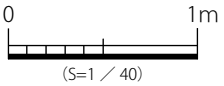


図 77　　5-SX30・SK33・40　平・断面図、水田層

約 0.10 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は暗灰黄粘土の単層である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係から弥生時代以前と考えられる。

５－SK33（図 77）

第５調査区西側で検出した土坑である。5-SX30 に切られる。全体の形状は楕円形である。主軸方位 N-77°-E、検出面の標高は 5.15 mである。

長軸約 0.78 mを検出し、短軸約 0.61 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は褐粗砂混じりシルト～粘土の単層である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係から、弥生時代以前と考えられる。

５－SK40（図 77）

第５調査区南西側で検出した土坑である。5-SX30 に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は三角形である。主軸方位 N-77°-W、検出面の標高は 5.10 mである。

長軸約 0.70 mを検出し、短軸約 0.70 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は暗灰黄粘土の単層である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係から弥生時代以前と考えられる。

５－SK27（図 78）

第５調査区東端で検出した土坑である。攪乱と 5-SK28 に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整方形である。主軸方位 N-2°-W、検出面の標高は 5.05 mである。

長軸約 2.60 mを検出し、短軸約 1.50 m、深さ約 0.25 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は３層に分類でき、上層がにぶい黄褐細砂とにぶい黄褐中粒砂混じり極細砂、下層が黒褐粗砂混じり粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

５－SK28（図 78）

第５調査区東側で検出した土坑である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状はひょうたん形である。主軸方位 N-4°-E、検出面の標高は 5.00 mである。

長軸約 2.80 mを検出し、短軸約 1.35 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は黄褐粗砂混じり粘土の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

５－SK36（図 79）

第５調査区西端で検出した土坑である。調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は半円形を呈する。主軸方位 N-69°-W、検出面の標高は 5.25 mである。

長軸約 0.46 mを検出し、短軸約 0.40 m、深さ約 0.15 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は灰黄褐シルト混じり粘土の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

５－SK37（図 79）

第５調査区西端で検出した土坑である。攪乱と 5-SP20 に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は棒状を呈する。主軸方位 N-77°-E、検出面の標高は 5.20 mである。

長軸約 1.45 mを検出し、短軸約 0.40 m、深さ約 0.08 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は灰黄褐シルト混じり粘土の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

５－SP38（図 79）

第５調査区南西隅で検出したピットである。攪乱に切られるも、形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-41°-E、検出面の標高は 5.25 mである。

長軸約 0.46 mを検出し、短軸約 0.33 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は方形である。

埋土はにぶい黄褐粘土の単層である。

遺物はサヌカイト剥片が出土したが、詳細な時期は不明である。

６－SK47（図 80）

第６調査区北側で検出した土坑である。調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出

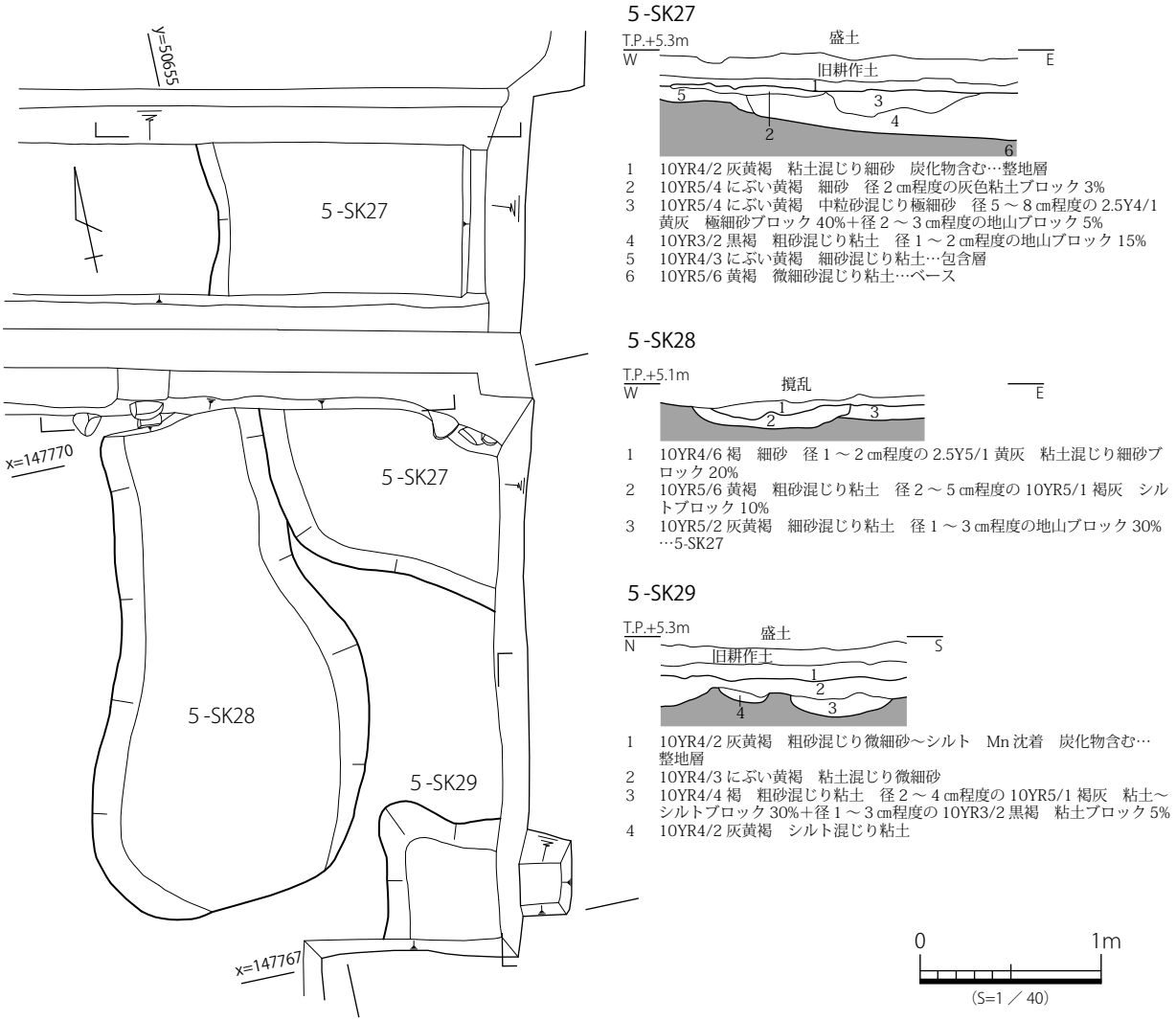


図 78　５-SK27・28・29　平・断面図

した平面形状は洋ナシ形を呈する。主軸方位 N-43°-E、検出面の標高は 5.00 mである。

長軸約 0.75 mを検出し、短軸約 0.55 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は２層に分層でき、上層が褐中粒砂混じりシルト～粘土、下層がにぶい黄褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

６－SK54（図 80）

第６調査区中央で検出した土坑である。攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整形である。主軸方位 N-35°-W、検出面の標高は 5.05 mである。

長軸約 1.45 mを検出し、短軸約 0.80 m、深さ約 0.16 mを測る。断面形状は方形である。

埋土は２層に分層でき、上層が黄褐シルト～粘土、下層が明黄褐シルト混じり粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

６－SK55（図 80）

第６調査区中央で検出した溝である。調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整形である。主軸方位 N-16°-E、検出面の標高は 5.10 mである。

長軸約 1.60 mを検出し、短軸約 0.40 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は２層に分層でき、上層がにぶい黄褐粗砂混じり粘土、下層がにぶい黄褐粘土混じりシルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

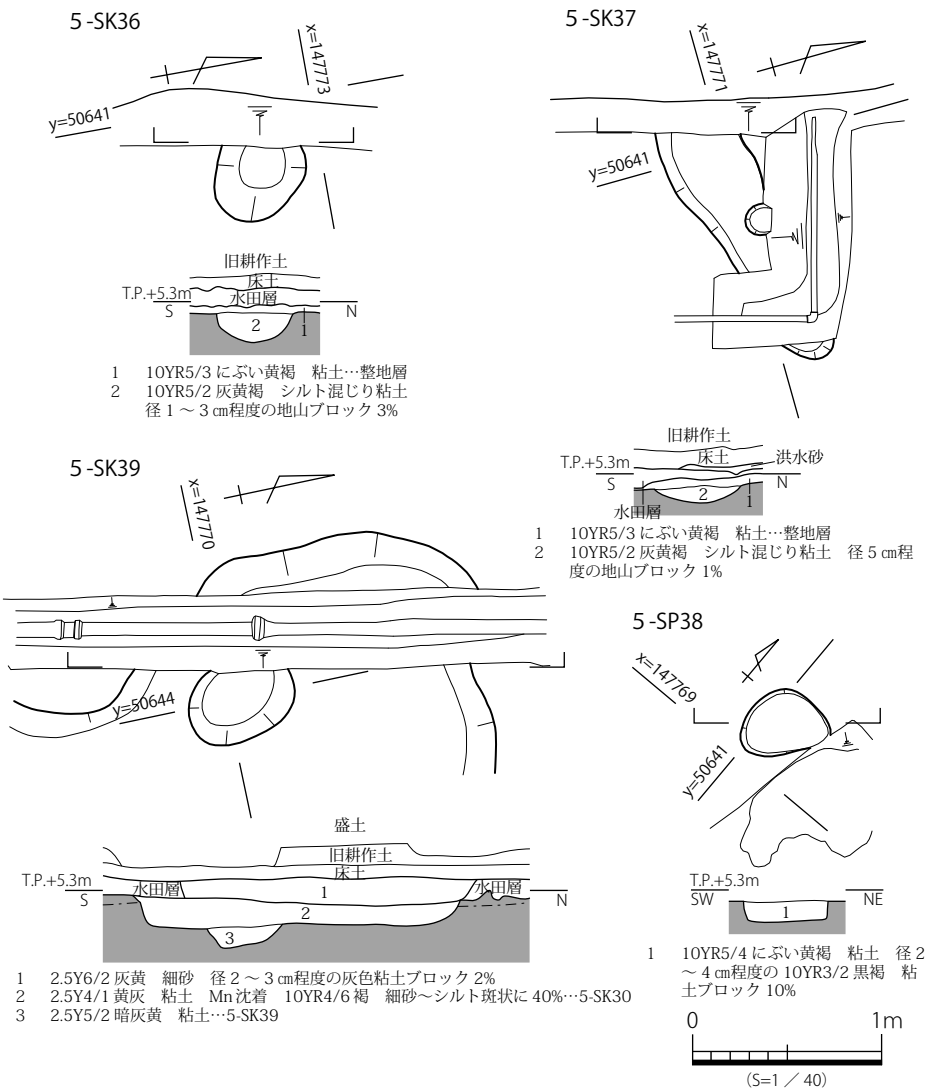


図 79　　5-SK36・37・39・SP38　平・断面図

６－ SD56（図 80）

第６調査区南側で検出した溝である。東西に直行し、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-77°-E、検出面の標高は 5.05 mである。

長さ約 1.10 mを検出し、幅約 0.40 m、深さ約 0.16 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は黒褐シルト混じり粘土の単層である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

７－ SK61（図 81）

第７調査区西側で検出した土坑である。形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-81°-W、検出面の標高は 5.10 mである。

長軸約 0.70 mを検出し、短軸約 0.56 m、深さ約 0.28 mを測る。断面形状は椀状にテラスである。

埋土は３層に分層でき、上層が黒褐粗砂混じり粘土、中層が黒褐粘土、下層が褐灰粘土である。

遺物は土師器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

７－ SX62（図 81）

第７調査区中央で検出した性格不明遺構である。攪乱と 7-SK61・63 に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-45°-W、検出面の標高は 5.10 mである。

長軸約 5.30 mを検出し、短軸約 2.90 m、深さ約 0.26 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は３層に分層でき、灰黄褐細砂混じりシルトと褐中粒砂混じりシルト～粘土、灰黄褐シルト～粘土である。遺構の形状と埋土の状況から、整地層と

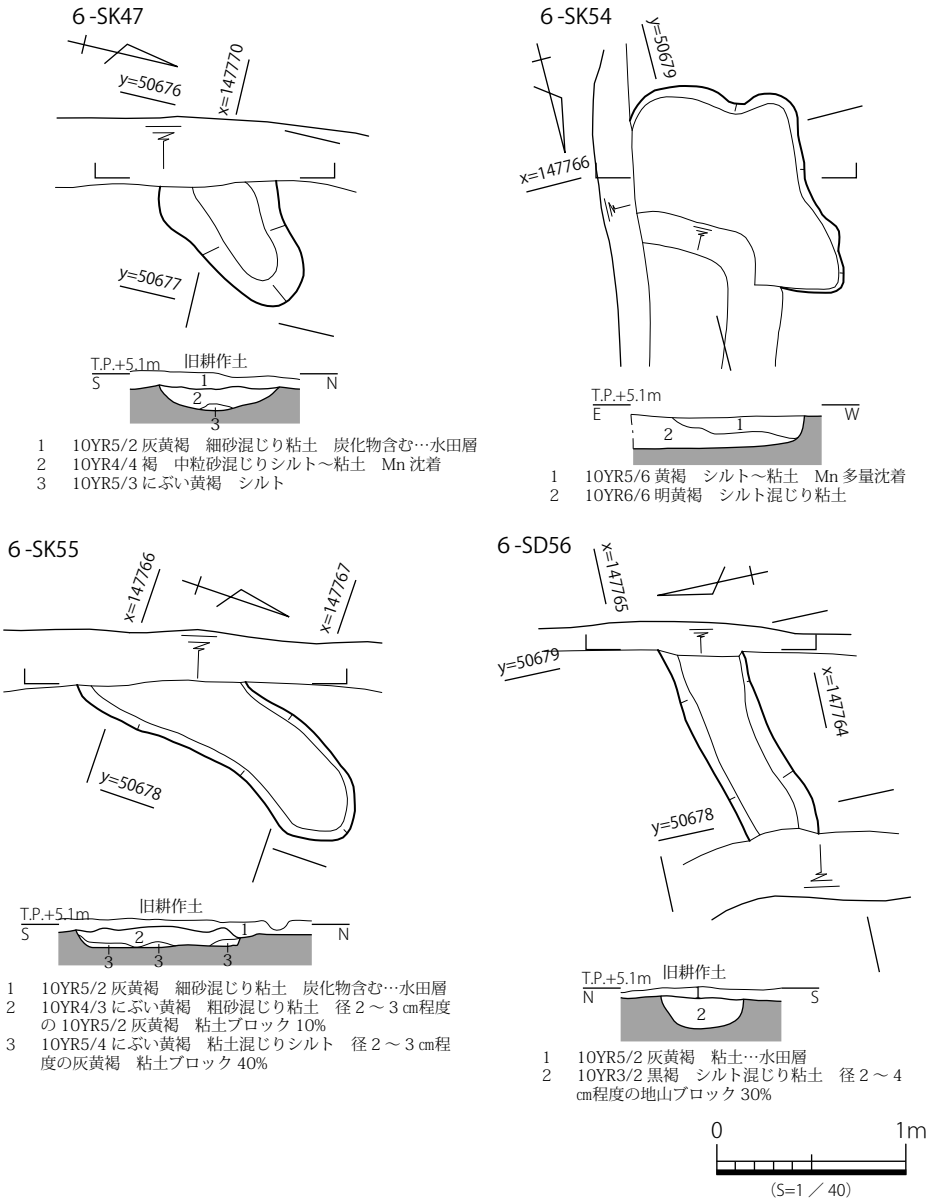


図 80　６-SK47・54・55・SD56　平・断面図

考えられる。

遺物は弥生土器片、須恵器片、焼土塊、サヌカイト剥片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

出土遺物の年代から、古墳時代以降と考えられる。

５－SK35（図 82）

第５調査区西側で検出した土坑状の遺構である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状はひょうたん形である。主軸方位 N-59°-E、検出面の標高は 5.25 mである。

長軸約 1.00 mを検出し、短軸は約 0.40 m、深さは約 0.11 mを測る。断面形状は逆台形である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

７－SK69（図 82）

第７調査区東側で検出した土坑である。攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は方形を呈する。主軸方位 N-3°-W、検出面の標高は 5.00 mである。

長軸約 1.05 mを検出し、短軸約 0.92 m、深さ約 0.09 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は灰黄褐シルト～粘土の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

８－SK73（図 82）

第８調査区南側で検出した土坑である。攪乱に切られる。埋土状況から５-SD24 へと続く可能性がある。全体の形状は不明であるが、検出した平面形状

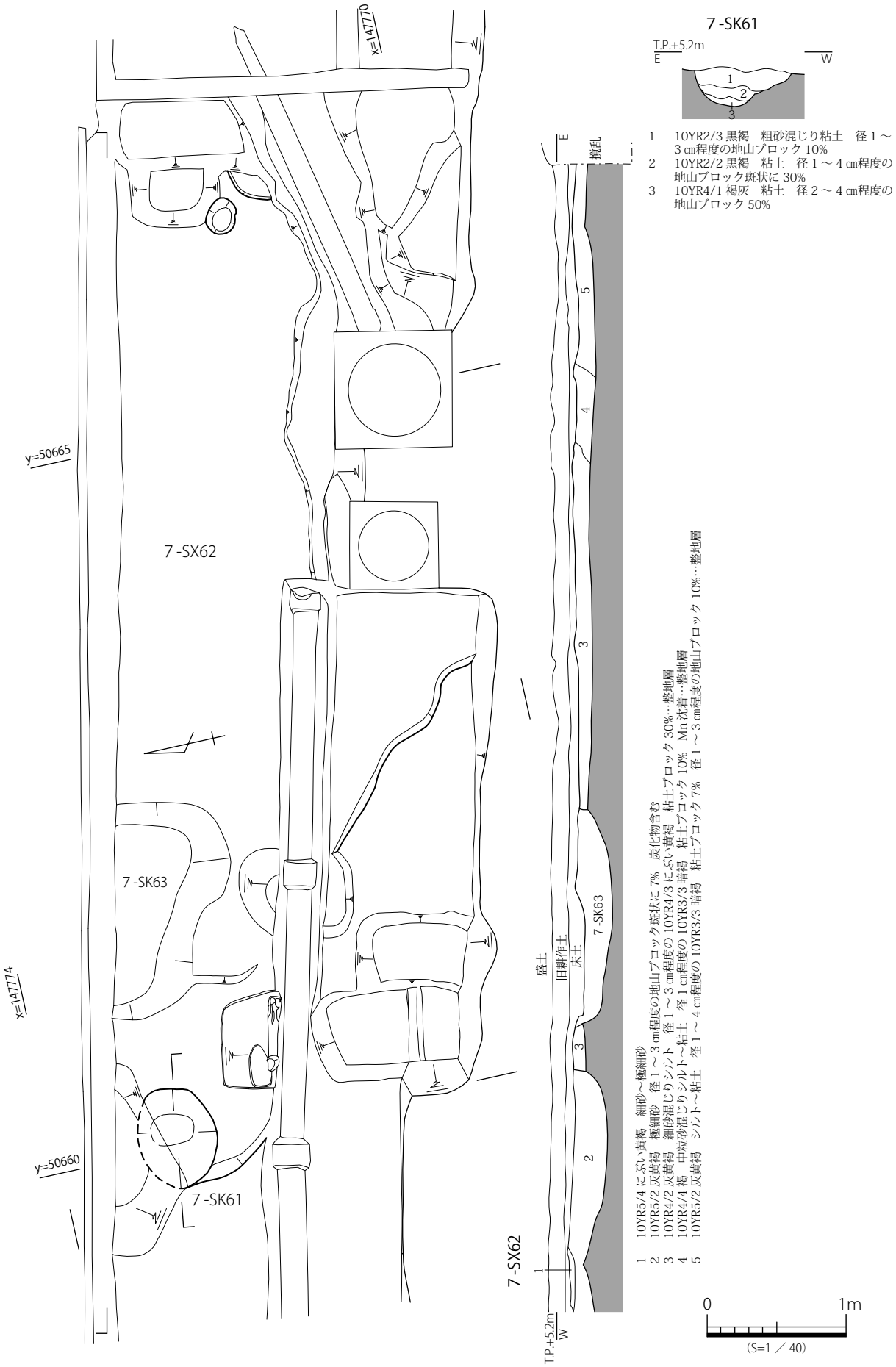


図 81　　7-SK61・SX62・SK63　平・断面図

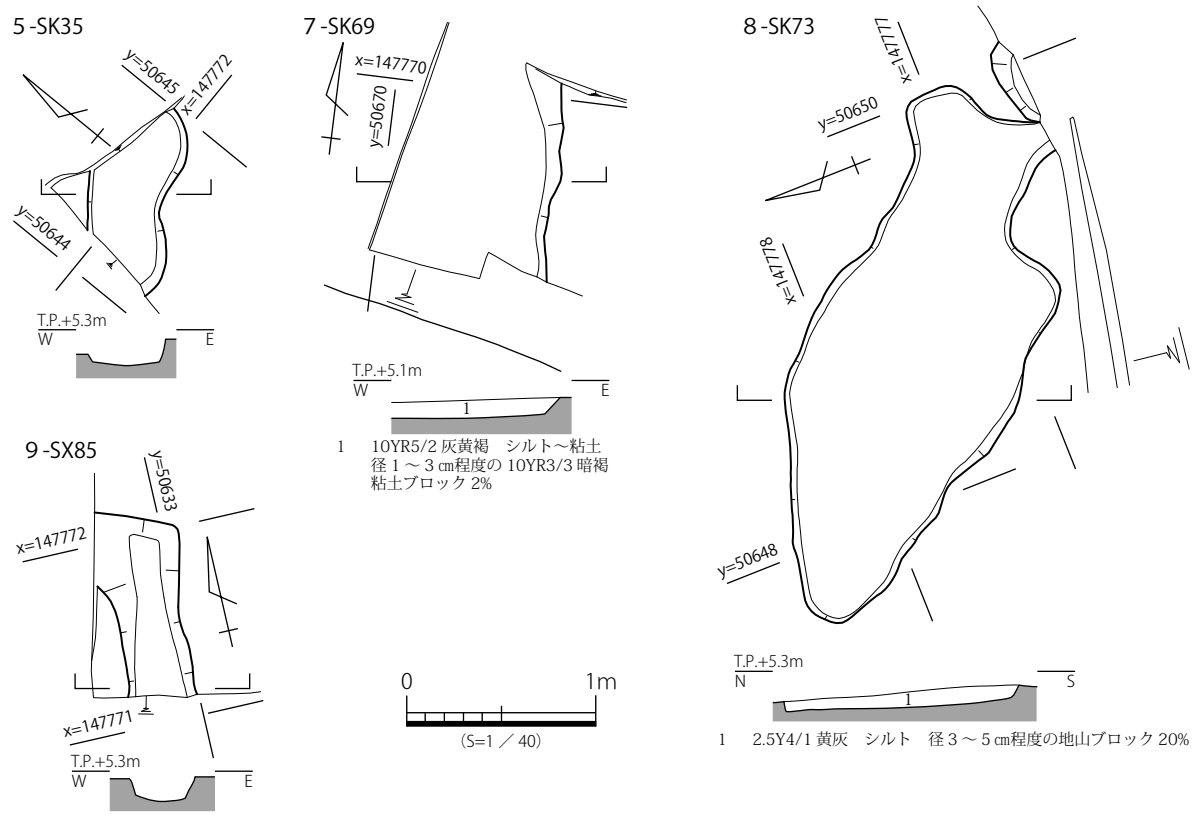


図 82　５-SK35・７-SK69・８-SK73・９-SX85　平・断面図

は不整形である。主軸方位 N-47°-W、検出面の標高は 5.20 mである。

長軸約 2.80 mを検出し、短軸約 1.16 m、深さ約 0.08 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で、黄灰シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

９－SX85（図 82）

第９調査区東側で検出した性格不明遺構である。調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は長方形を呈する。主軸方位 N-2°-E、検出面の標高は 5.25 mである。

長軸約 0.96 mを検出し、短軸約 0.44 m、深さ約 0.12 mを測る。断面形状は逆台形である。

遺物は土師器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

９－SK86（図 83）

第９調査区東側で検出した土坑である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整方形である。主軸方位 N-15°-E、検出面の標高は 5.30 mである。

長軸約 1.13 mを検出し、短軸約 0.38 m、深さ約 0.14 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は２層に分層でき、上層が黒褐中粒砂混じり粘土～シルト、下層がにぶい黄褐細砂混じり粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

９－SK87（図 83）

第９調査区東側で検出した土坑である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は楕円形である。主軸方位 N-72°-W、検出面の標高は 5.25 mである。

長軸約 0.52 mを検出し、短軸約 0.30 m、深さ約 0.14 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は単層で、黒褐シルト～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

９－SK88（図 83）

第９調査区東側で検出した土坑である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整形である。主軸方位 N-83°-W、検出面の標高は 5.25 mである。

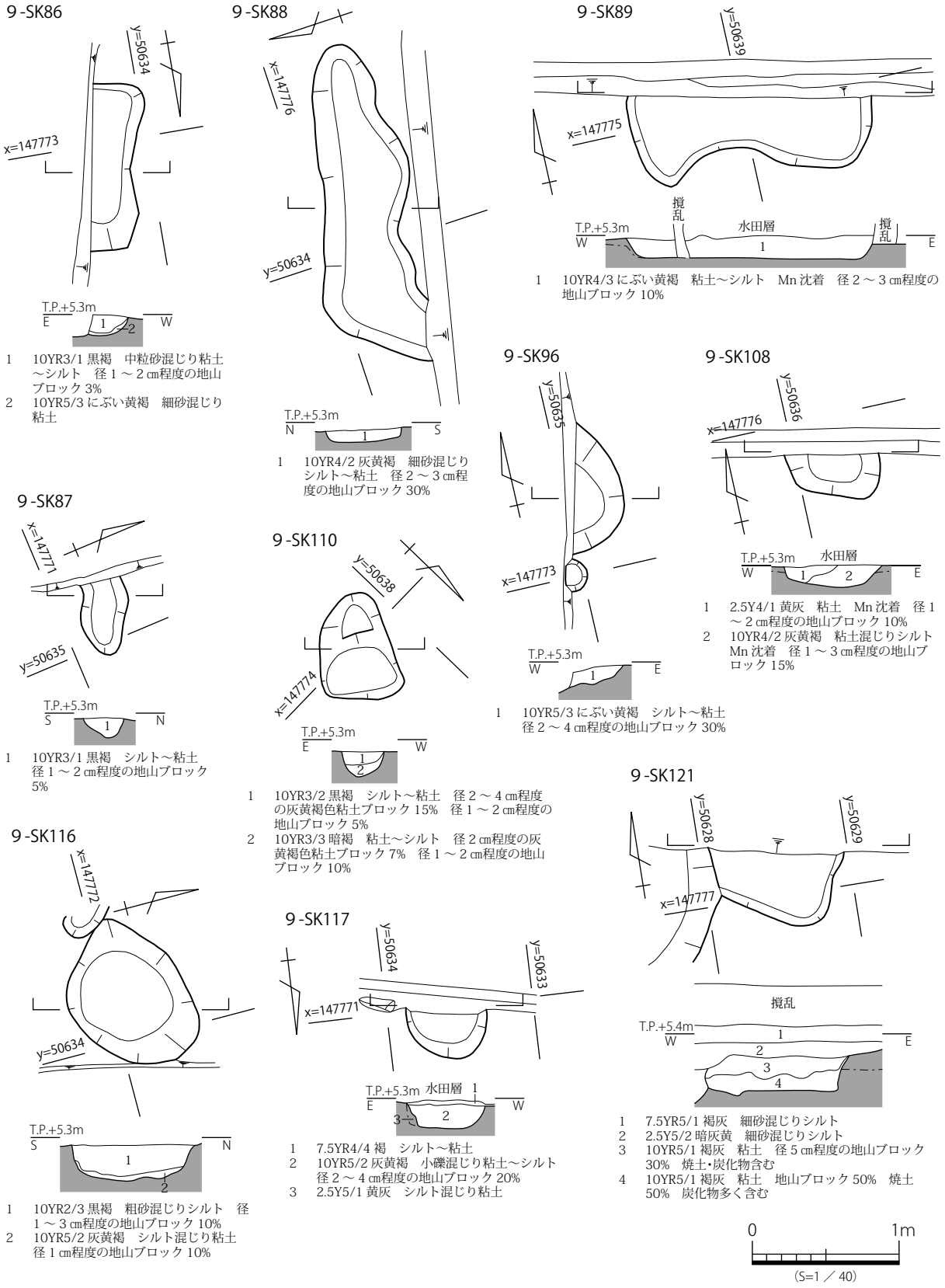


図 83　9-SK86・87・88・89・96・108・110・116・117・121　平・断面図

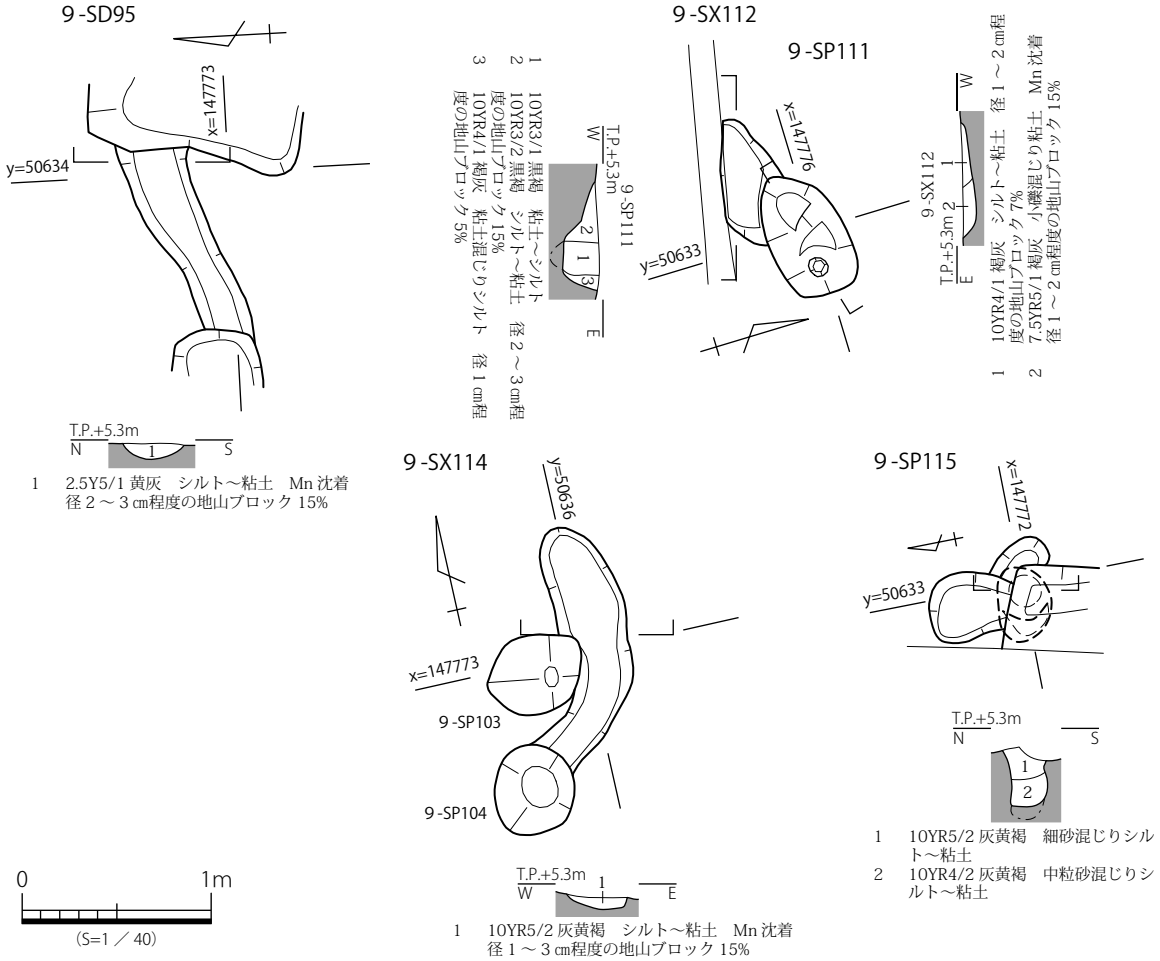


図 84　９-SD95・SP111・SX112・SX114・SP115　平・断面図

長軸約 2.20 mを検出し、短軸約 0.64 m、深さ約 0.08 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は灰黄褐細砂混じりシルト～粘土の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

９－SK89（図 83）

第９調査区東側で検出した土坑である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整形である。主軸方位 N-79°-W、検出面の標高は 5.30 mである。

長軸約 1.67 mを検出し、短軸約 0.60 m、深さ約 0.14 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土はにぶい黄褐粘土～シルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

９－SK96（図 83）

第９調査区東側で検出した土坑である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は半円形である。主軸方位 N-15°-E、検出面の標高は 5.30 mである。

長軸約 0.90 mを検出し、短軸約 0.34 m、深さ約 0.12 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土はにぶい黄褐シルト～粘土の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

９－SK108（図 83）

第９調査区東側で検出した土坑である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-69°-W、検出面の標高は 5.30 mである。

長軸約 0.54 mを検出し、短軸約 0.30 m、深さ約 0.15 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は２層に分層でき、上層が黄灰粘土、下層が灰黄褐粘土混じりシルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

９－SK110（図 83）

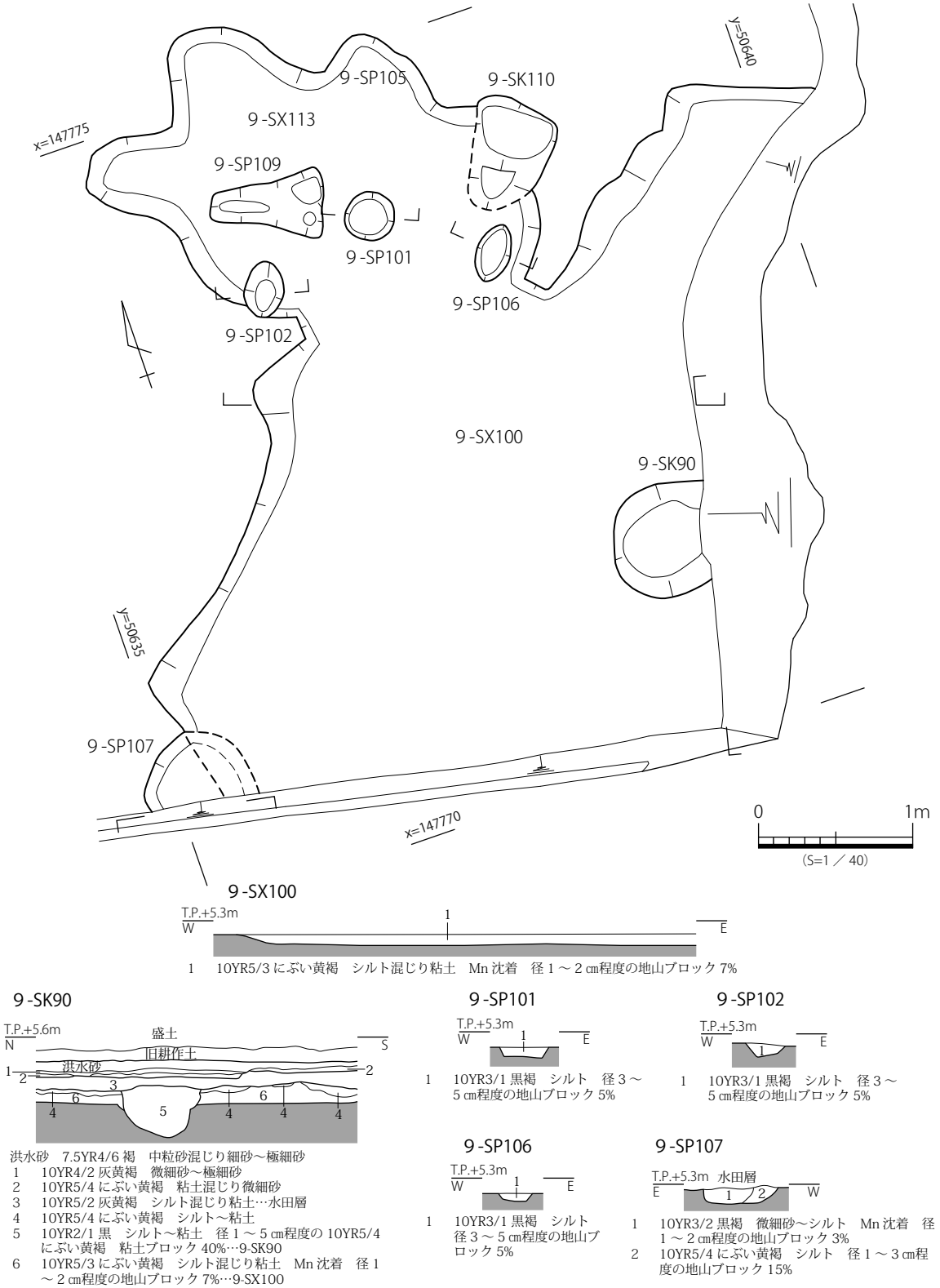


図 85　9-SK90・SX100・SP101・102・106・107　平・断面図

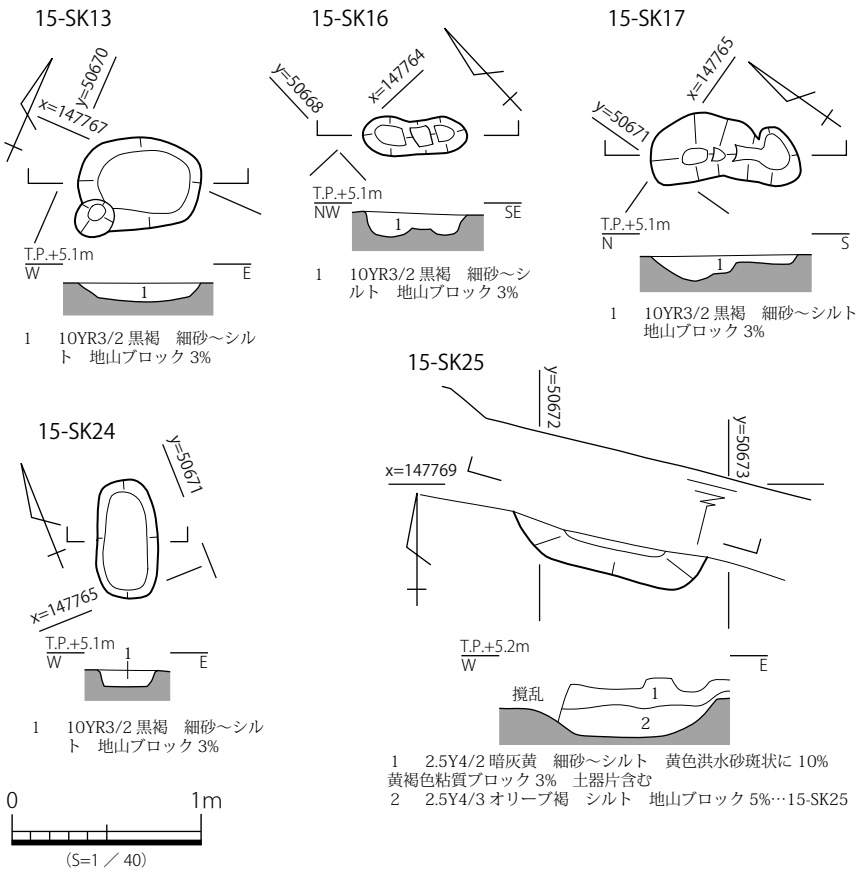


図 86　15-SK13・16・17・24・25　平・断面図

第９調査区東側で検出した土坑である。９-SX100 に切られる。平面形状は三角形を呈する。主軸方位 N-39°-E、検出面の標高は 5.20 mである。

長軸約 0.72 mを検出し、短軸約 0.54 m、深さ約 0.16 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は２層に分層でき、上層が黒褐シルト～粘土、下層が暗褐粘土～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

９－SK116（図 83）

第９調査区東側で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-56°-E、検出面の標高は 5.25 mである。

長軸約 0.95 mを検出し、短軸約 0.78 m、深さ約 0.24 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は２層に分層でき、上層が黒褐粗砂混じりシルト、下層が灰黄褐シルト混じり粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

９－SK117（図 83）

第９調査区南東側で検出した土坑である。調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は半円形である。主軸方位 N-79°-W、検出面の標高は 5.25 mである。

長軸約 0.55 mを検出し、短軸約 0.34 m、深さ約 0.16 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は２層に分層でき、上層が褐シルト～粘土、下層が灰黄褐小礫混じり粘土～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

９－SK121（図 83）

第９調査区中央で検出した土坑である。撹乱と 9-SD80 に切られ、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は隅丸方形を呈する。主軸方位 N-32°-E、検出面の標高は 5.15 mである。

長辺約 0.90 mを検出し、短辺約 0.52 m、深さ約 0.28 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は２層に分層でき、上層が褐灰粘土、下層が褐灰粘土である。

遺物は土師器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

切り合い関係から、室町時代以前と考えられる。

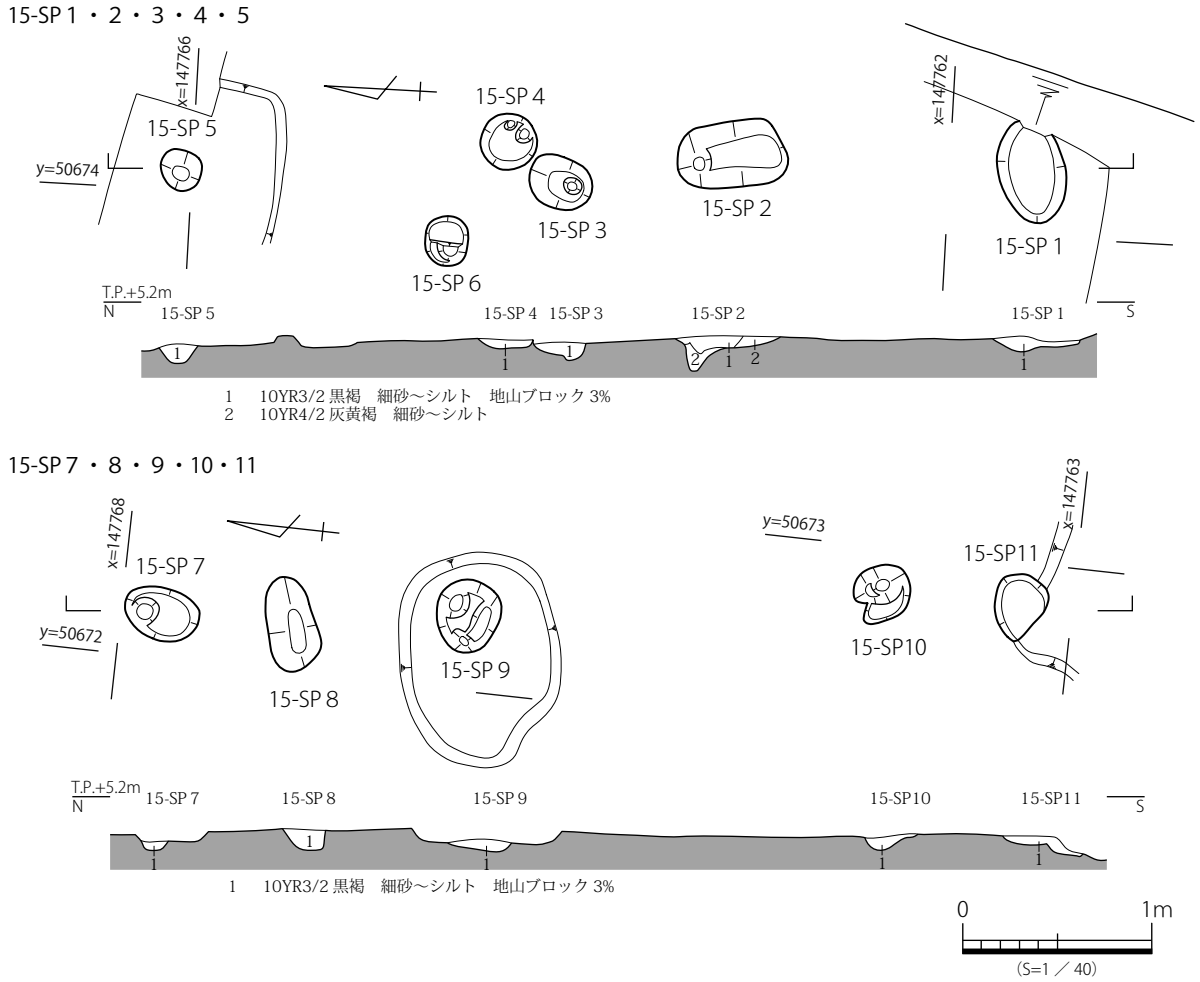


図 87　15-SP １～５・SP ７～11　平・断面図

９－ SD95（図 84）

第９調査区東側で検出した溝である。西へ直行し、９-SP93・SK86 に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-69°-E、検出面の標高は 5.30 mである。

長さ約 1.04 mを検出し、幅約 0.31 m、深さ約 0.08 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で、黄灰シルト～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

９－ SX112（図 84）

第９調査区東側で検出した性格不明遺構である。攪乱と９-SP111 に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-75°-E、検出面の標高は 5.25 mである。

長軸約 0.70 mを検出し、短軸約 0.32 m、深さ約 0.07 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は２層に分層でき、上層が褐灰シルト～粘土、下層が褐灰小礫混じり粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

９－ SP111（図 84）

第９調査区東側で検出したピットである。平面形状は楕円形である。主軸方位 N-76°-E、検出面の標高は 5.25 mである。

長軸約 0.70 mを検出し、短軸約 0.40 m、深さ約 0.19 mを測る。断面形状は逆台形にテラスである。

埋土は３層に分層でき、柱痕が確認できる。柱痕が黒褐粘土～シルト、掘方が黒褐シルト～粘土と褐灰粘土混じりシルトである。

遺物は土師器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

９－ SX114（図 84）

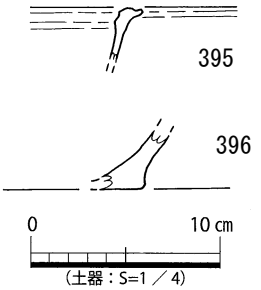


図 88　北東工区　弥生時代の遺構出土遺物実測図

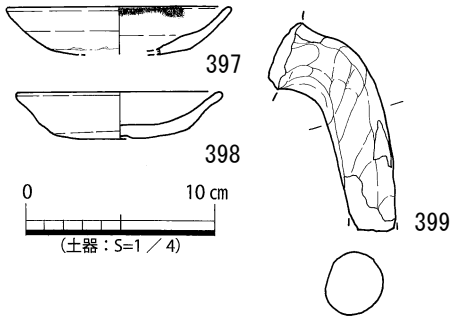


図 89　第４調査区　包含層出土遺物実測図

第９調査区東側で検出した性格不明遺構である。9-SP103・104 に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は爪形を呈する。主軸方位 N-50°-E → N-4°-W、検出面の標高は 5.25 m である。

長軸約 1.30 mを検出し、短軸約 0.30 m、深さ約 0.06 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は灰黄褐シルト～粘土の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

９－SP115（図 84）

第９調査区東側で検出したピットである。9-SP94・SX85 に切られる。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-87°-W、検出面の標高は 5.20 mである。

長軸約 0.40 mを検出し、短軸約 0.28 m、深さ約 0.30 mを測る。断面形状は U 字形である。

埋土は２層に分層でき、上層が灰黄褐細砂混じりシルト～粘土、下層が灰黄褐中粒砂混じりシルト～粘土である。

遺物は土師器片、サヌカイト剥片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

９－SK90（図 85）

第９調査区東端で検出した土坑である。9-SX100 を切る。調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は半円形である。主軸方位 N-82°-W、検出面の標高は 5.30 m である。

長軸約 0.70 mを検出し、短軸約 0.60 m、深さ約 0.32 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は黒シルト～粘土の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

９－SX100（図 85）

第９調査区東側で検出した性格不明遺構である。9-SK90 と 9-SP107 に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-62°-E、検出面の標高は 5.25 mである。

長軸約 5.80 mを検出し、短軸約 5.50 m、深さ約 0.07 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土はにぶい黄褐シルト混じり粘土の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

９－SP101（図 85）

第９調査区東側、9-SX100 下層で検出したピットである。平面形状は円形を呈する。検出面の標高は 5.20 mである。

直径約 0.32 mを検出し、深さ約 0.07 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は黒褐シルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

９－SP102（図 85）

第９調査区東側、9-SX100 下層で検出したピットである。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-25°-E、検出面の標高は 5.25 mである。

長軸約 0.35 mを検出し、短軸約 0.25 m、深さ約 0.09 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は黒褐シルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

９－SP106（図 85）

第９調査区東側、9-SX100 下層で検出したピットである。遺構の形状は楕円形を呈する。主軸方位

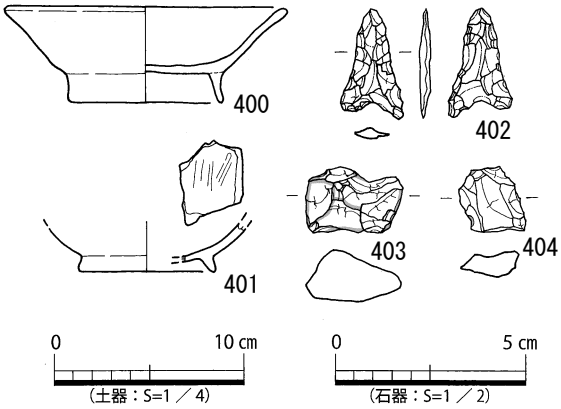


図 90　北側工区　その他出土遺物実測図

N-39°-E、検出面の標高は 5.20 mである。

長軸約 0.38 mを検出し、短軸約 0.22 m、深さ約 0.05 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は黒褐シルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

9 ― SP107（図 85）

第 9 調査区南東側で検出したピットである。9-SX100 に切られる。調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は半円形である。主軸方位 N-80°-W、検出面の標高は 5.25 mである。

長さ約 0.70 mを検出し、幅約 0.46 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は 2 層に分層でき、黒褐微細砂～シルトとにぶい黄褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

15 ― SK13（図 86）

第 15 調査区中央北側で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-66°-E、検出面の標高は 5.00 mである。

長軸約 0.65 mを検出し、短軸約 0.49 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は黒褐細砂～シルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

15 ― SK16（図 86）

第 15 調査区西側で検出した土坑である。平面形状は洋ナシ形を呈する。主軸方位 N-48°-W、検出面の標高は 5.05 mである。

長軸約 0.55 mを検出し、短軸約 0.21 m、深さ約 0.13 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は黒褐細砂～シルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

15 ― SK17（図 86）

第 17 調査区中央で検出した土坑である。平面形状は不整形を呈する。主軸方位 N-35°-W、検出面の標高は 5.00 mである。

長軸約 0.79 mを検出し、短軸約 0.36 m、深さ約 0.13 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は黒褐細砂～シルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

15 ― SK24（図 86）

第 15 調査区中央で検出した土坑である。平面形状は隅丸方形を呈する。主軸方位 N-21°-E、検出面の標高は 5.00 mである。

長軸約 0.63 mを検出し、短軸約 0.33 m、深さ約 0.08 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は黒褐細砂～シルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

15 ― SK25（図 86）

第 15 調査区北端で検出した土坑である。調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-76°-W、検出面の標高は 4.90 mである。

長さ約 1.05 mを検出し、幅約 0.20 m、深さ約 0.16 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土はオリーブ褐シルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

15 ―ピット群 1（図 87）

第 15 調査区中央で検出したピット群である。15-SP 1 ～ 5 で構成する。主軸方位 N-3°-W、検出面の標高は 5.00 mである。すべての遺構から遺物が出土していないため、時期は不明である。

15-SP 1 は楕円形を呈し、長軸約 0.55 m、短軸約 0.35 m、深さ約 0.08 mを測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は黒褐細砂～シルトの単層である。

15-SP 2 は楕円形を呈し、長軸約 0.58 m、短軸約 0.35 m、深さ約 0.18 mを測る。断面形状は浅い皿状に段落ちである。埋土は 2 層に分層でき、上層が黒褐細砂～シルト、下層が灰黄褐細砂～シルト

である。

15-SP 3は楕円形を呈し、長軸約0.34 m、短軸約0.27 m、深さ約0.10 mを測る。断面形状は浅い皿状に段落ちである。埋土は黒褐細砂～シルトの単層である。

15-SP 4は円形を呈し、直径約0.30 m、深さ約0.05 mを測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は黒褐細砂～シルトの単層である。

15-SP 5は円形を呈し、直径約0.21 m、深さ約0.10 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は黒褐細砂～シルトの単層である。

15-SP 6は　円形を呈し、直径約0.26 m、深さ約0.03 mを測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は黒褐細砂～シルトの単層である。

15 ーピット群２（図87）

北東工区東部で検出したピット群である。15-SP 7～11で構成する。主軸方位N-7°-W、検出面の標高は5.00 mである。すべての遺構から遺物が出土していないため、時期は不明である。

15-SP 7は楕円形を呈し、長軸約0.50 m、短軸約0.26 m、深さ約0.08 mを測る。断面形状は浅い皿状に段落ちである。埋土は黒褐細砂～シルトの単層である。

15-SP 8は楕円形を呈し、長軸約0.50 m、短軸約0.28 m、深さ約0.10 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は黒褐細砂～シルトの単層である。

15-SP 9は円形を呈し、直径約0.38 m、深さ約0.06 mを測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は黒褐細砂～シルトの単層である。

15-SP10は不整円形を呈し、直径約0.30 m、深さ約0.06 mを測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は黒褐細砂～シルトの単層である。

15-SP11は撹乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、不整円形を呈する。長軸約0.36 m、短軸約0.27 m、深さ約0.08 mを測る。断面形状は不整形である。埋土は黒褐細砂～シルトの単層である。

包含層出土遺物（図89）

土師器杯（397・398）、土師器三足羽釜脚部（399）が出土した。

撹乱・精査・重機掘削出土遺物（図90）

撹乱から土師器杯（400）、黒色土器A類椀（401）、精査で石鏃（402）、重機掘削から火打石（403・404）が出土した。

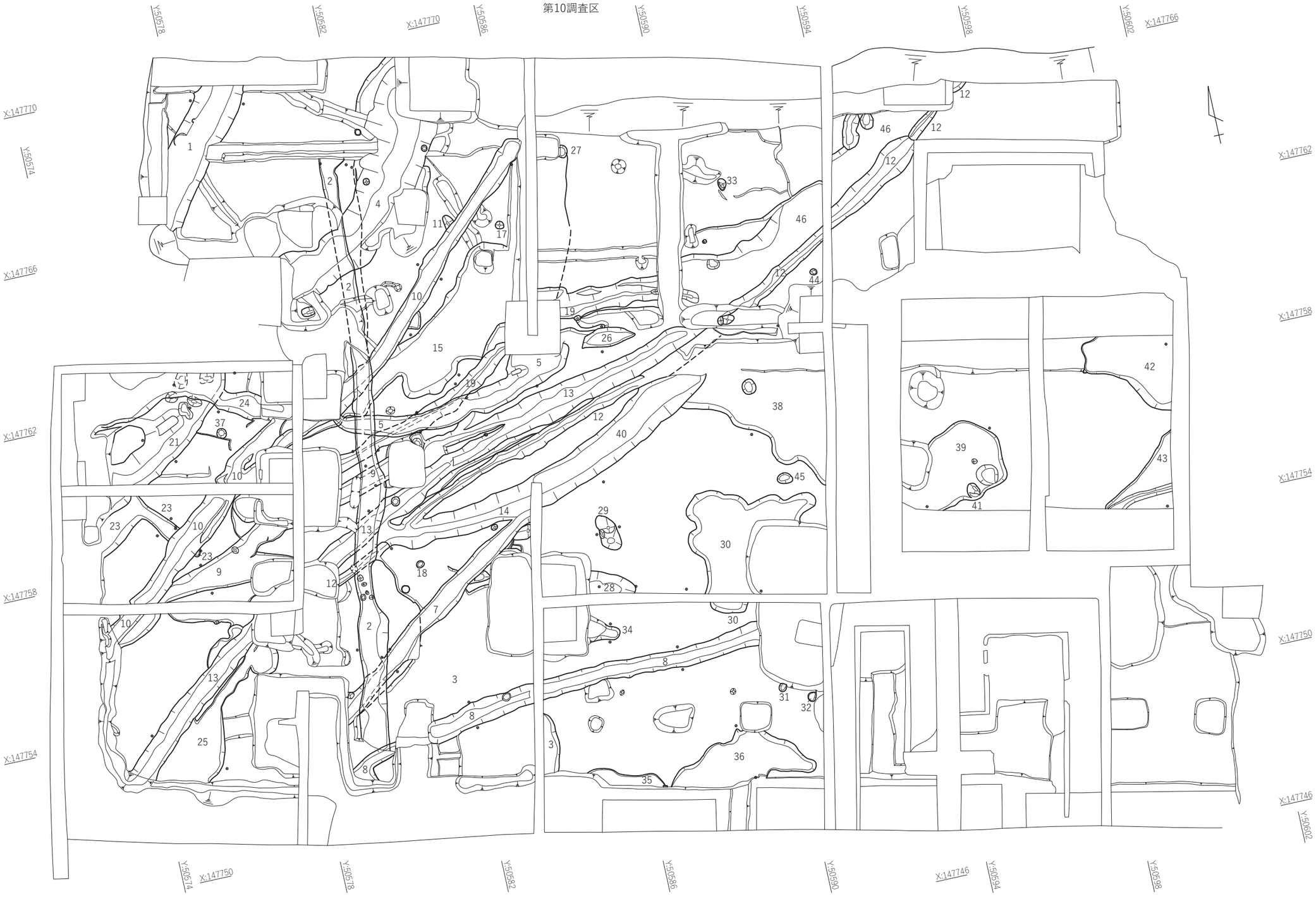


図 91　第 10 調査区　平面図 (S= 1 ／ 100)

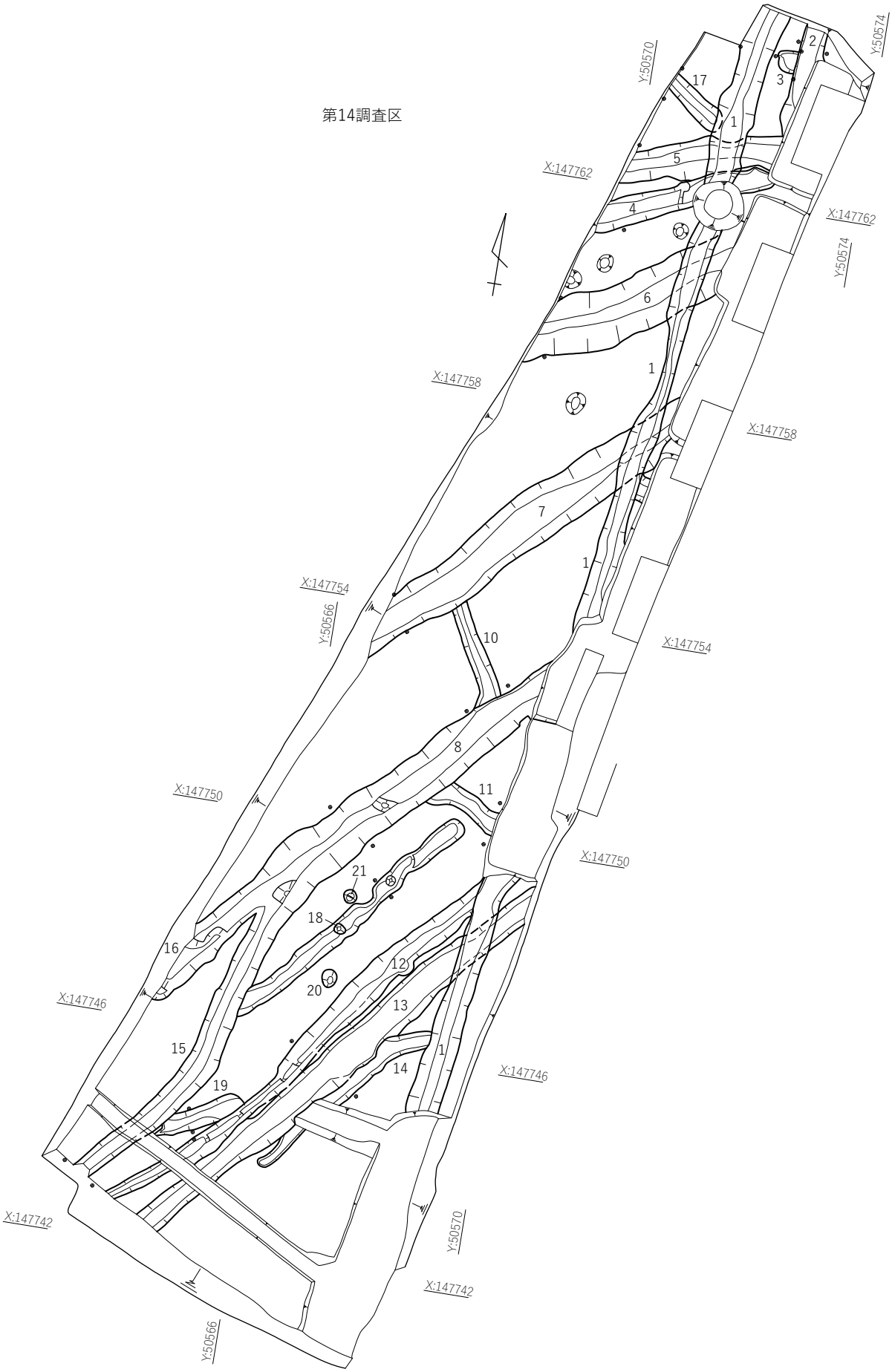


図 92　第 14 調査区　平面図（S= 1／100）

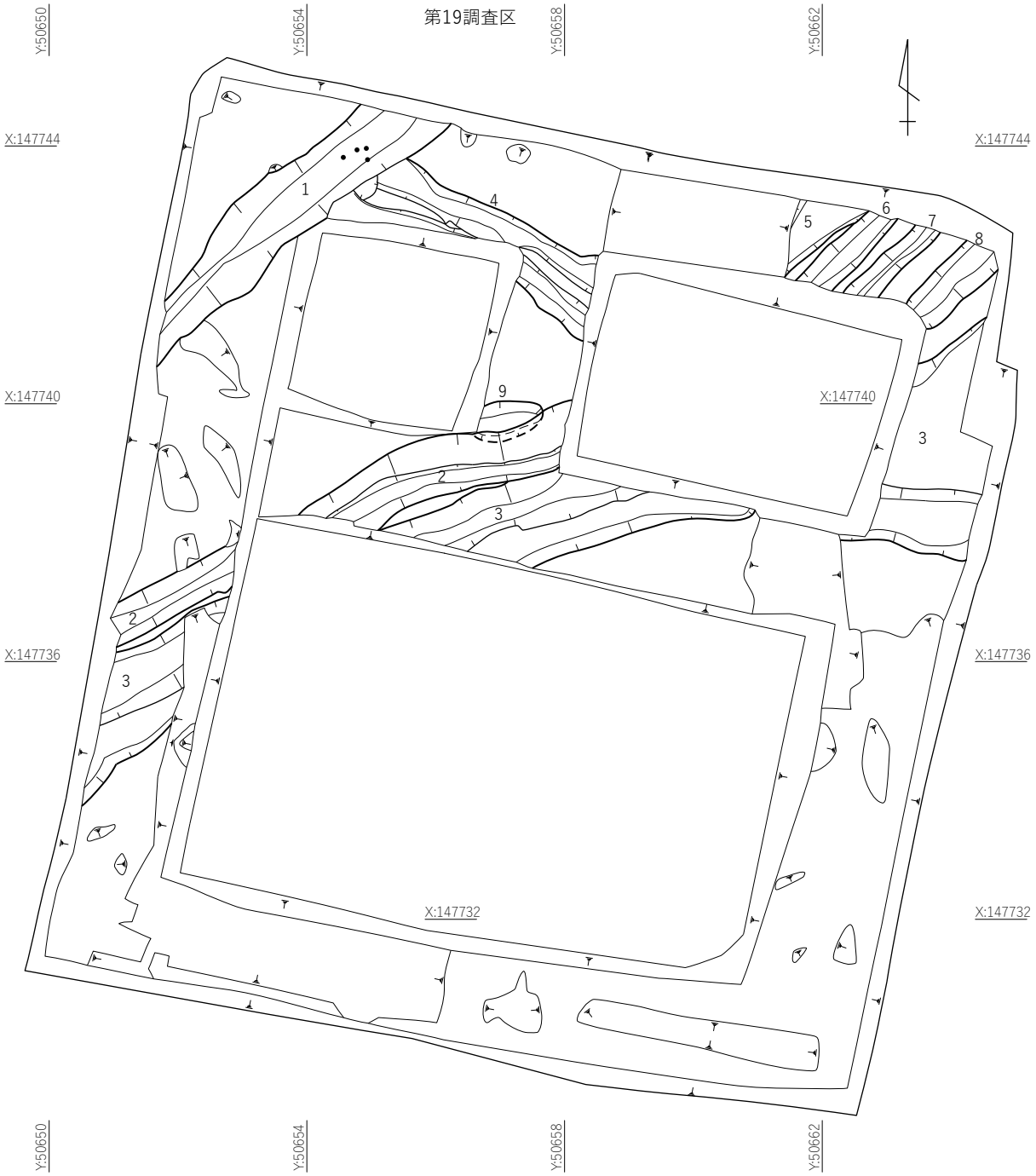


図 93　第 19 調査区　平面図（S= 1 ／ 100）

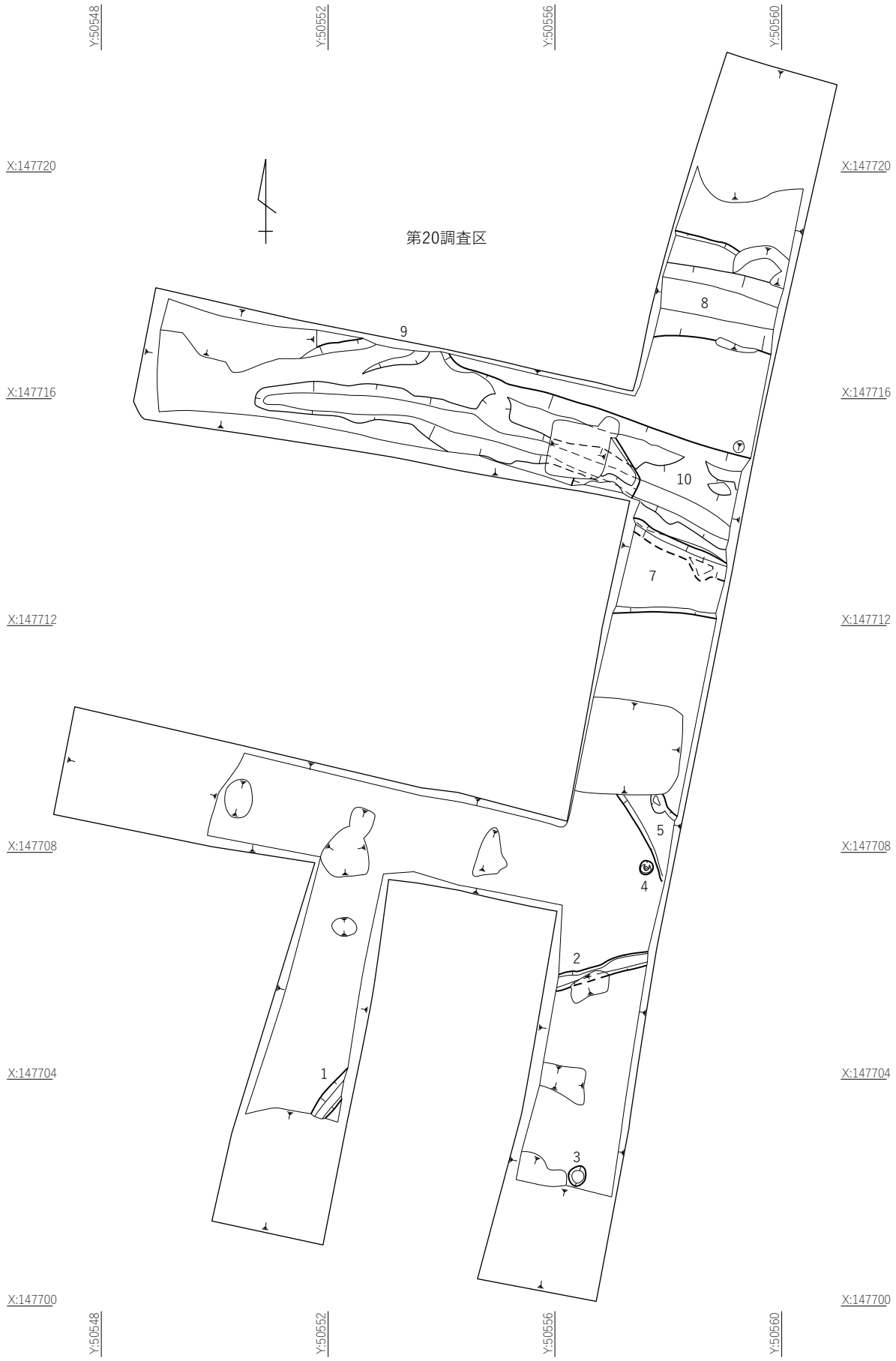


図 94　第 20 調査区　平面図（S= 1 ／ 100）

中央西工区

中央西工区は、第 10・14・19・20 調査区である。また、第 19・20 調査区の西側で擁壁建設工事に伴って工事立会を実施した。

この工区では、第 10 調査区の西半分、第 19・20 調査区では、洪水砂や第 1 面の水田層が確認できず、重機掘削で盛土等を除去後すぐ第２遺構面となった。

10 － SX ３（図 95 ～ 97）

第 10 調査区中央西側で検出した性格不明遺構である。攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位不明、検出面の標高は 5.55 mである。

長さ約 18.20 mを検出し、幅は約 5.03 m、深さ約 0.12 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は暗灰黄シルト～粘土の単層である。

遺物は小型仿製鏡（405）、弥生土器甕（406）、二次加工のある剥片（407）のほか、弥生土器片、サヌカイト剥片が出土した。このうち、小型仿製鏡（405）は、包含層掘削途中で出土した。背面を上にして置かれていた状態で、下層及び周辺に遺構を確認することができなかった。

埋土と堆積状況から、弥生時代後期末の遺構面を覆う包含層と考えられる。

10 － SD １（図 98・99）

第 10 調査区北西隅で検出した溝である。北東に直行し、攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-34° -E、検出面の標高は 5.45 mである。

長さ約 4.00 mを検出し、幅約 1.10 m、深さ約 0.30 mを測る。断面形状はゆるい V 字形である。

埋土は 4 層に分層でき、上層が灰黄褐シルト～粘土と灰黄褐シルト混じり細砂、下層が褐灰シルト～粘土と黒褐シルト～粘土である。

遺物は弥生土器高杯（410）と弥生土器片が出土した。

出土遺物の年代から、弥生時代後期末と考えられる。

10 － SD24（図 99・101）

第 10 調査区中央西側で検出した溝状の遺構である。東西に蛇行し、10-SD21 を切る。攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-80° -W、検出面の標高は 5.50 mである。

長さ約 5.00 mを検出し、幅約 1.00 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土はにぶい黄褐シルト混じり細砂の単層である。

遺物は弥生土器甕（408）、使用痕のある剥片（409）、弥生土器片が出土した。

出土遺物の年代から、弥生時代後期末と考えられる。

10 － SD ５（図 101）

第 10 調査区中央で検出した溝である。10-SX ３下層で検出した。東西にやや湾曲し、攪乱と 10-SD ２に切られるため、全体の形状は不明である。10-SD24 と同一溝の可能性がある。10-SD15・19 を切る。主軸方位 N-87° -E、検出面の標高は 5.40 m である。

長さ約 6.23 mを検出し、幅約 0.35 m、深さ約 0.15 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は 2 層に分層でき、灰黄褐細砂混じりシルトと灰黄褐細砂混じりシルトである。

遺物は弥生土器片が出土したが細片のため、詳細な時期は不明である。

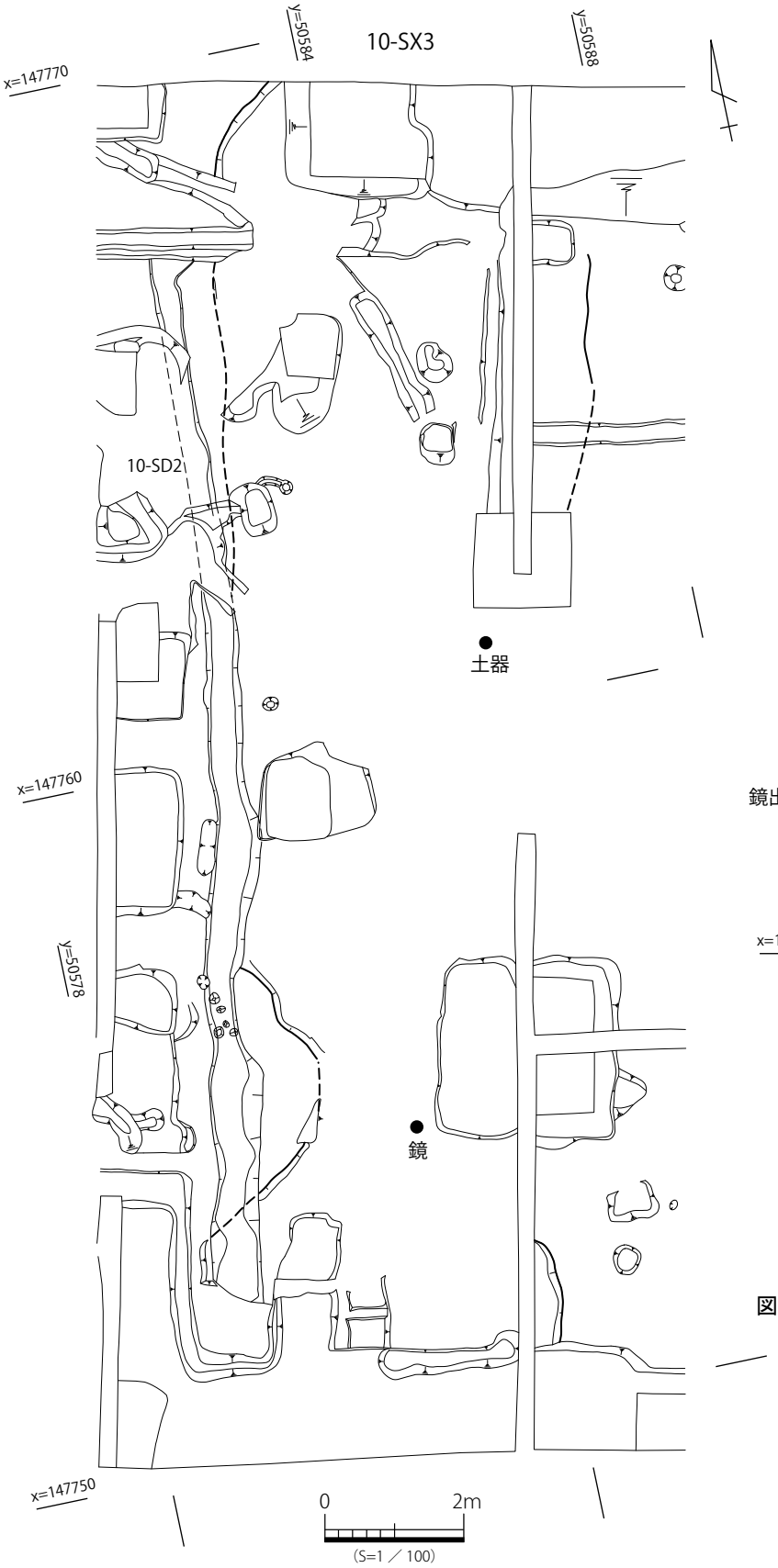
遺構の切り合い関係から、弥生時代後期末以降と考えられる。

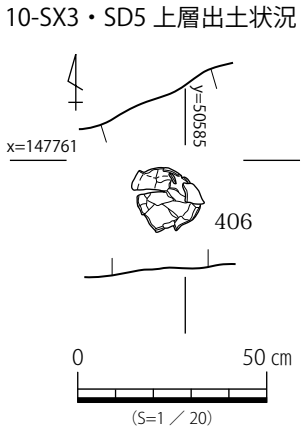
10 － SD ４(21)（図 100・102）

第 10 調査区北西側で検出した溝である。北東に直行し、やや蛇行する。攪乱と 10-SX3 と 10-SD2・24 と 14-SD1 に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-46° -E から N-54° -E、検出面の標高は 5.40 ～ 5.55 mである。

長さ約 14.0 mを検出し、幅約 0.84 ～ 1.60 m、深さ約 0.50 ～ 0.65 mを測る。断面形状は a 断面で椀状、b 断面で逆台形である。

埋土は a-a' 断面では 13 層に分層でき、浚渫を繰り返しながら、堆積していったと考えらえる。溝の最終埋没は上層が暗灰黄細砂混じりシルトと黒褐シルト、黄灰細砂混じりシルト、黄褐細砂混じりシルト、下層が黄灰シルトである。溝肩が黄灰シルト～粘土と黄灰シルト混じり細砂、黄灰シルト混じり細砂、黄褐細砂混じりシルト、褐灰シルト混じり細砂である。溝の最初期の堆積が暗灰黄細砂混じりシル





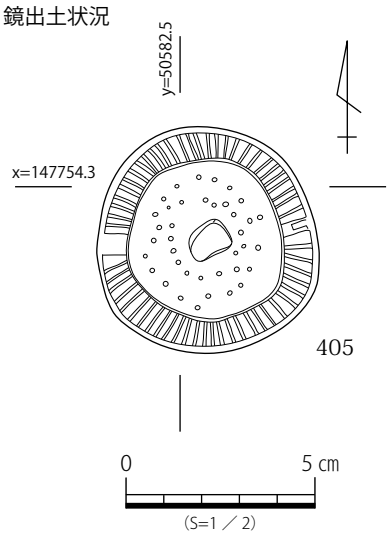


図 96　10-SX 3　鏡出土状況図

図 95　10-SX 3　平面図、遺物出土状況図

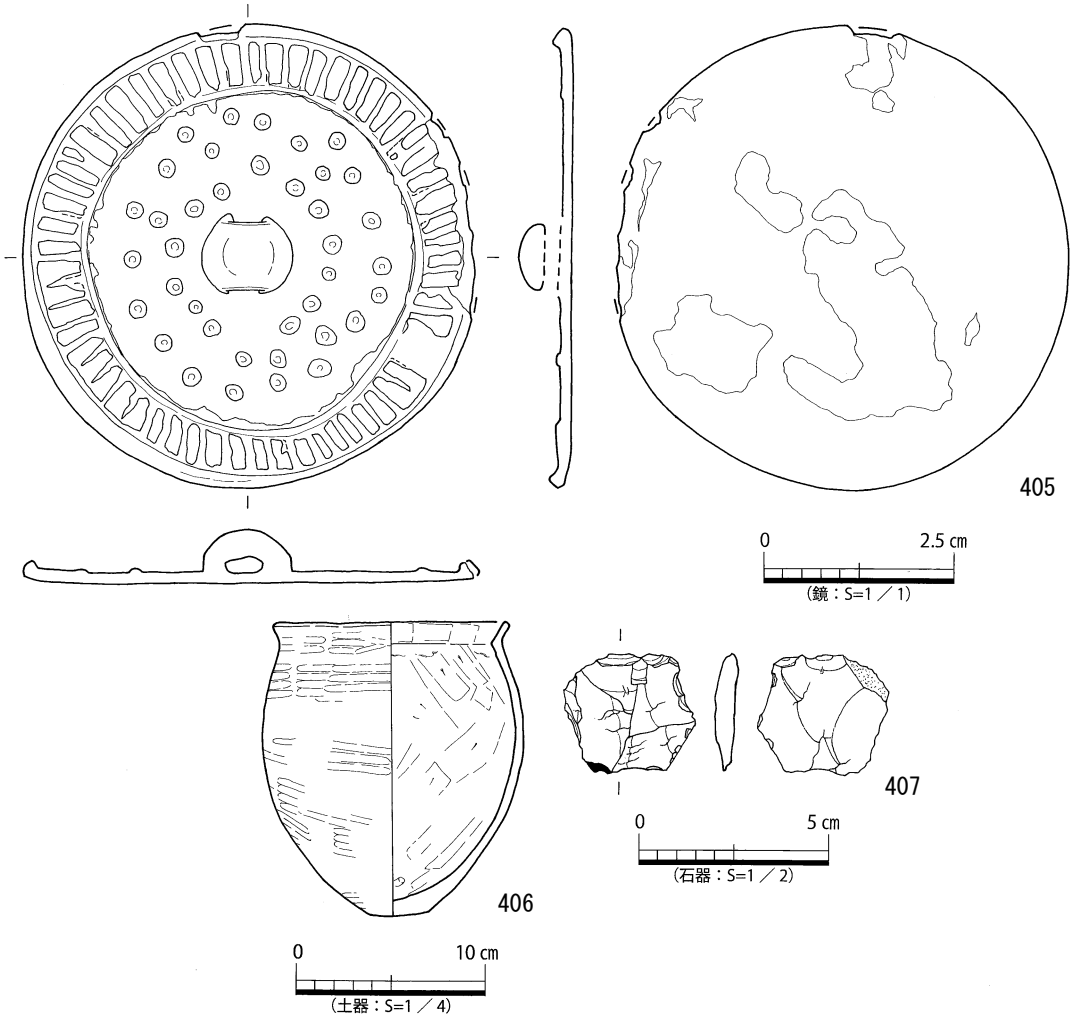


図 97　10-SX 3　出土遺物実測図

トと暗灰黄シルト混じり細砂、褐灰シルト混じり細砂である。

10-SD21 の b-b' 断面は７層に分層でき、上層が灰黄褐シルト混じり細砂とにぶい黄褐細砂混じりシルト、にぶい黄褐シルト～粘土、にぶい黄褐粘土である。下層が灰黄褐粘土と褐灰細砂混じりシルト～粘土である。溝肩の堆積が灰黄褐シルト～粘土である。

遺物は 10-SD21 の最下層から弥生土器甕（411・412）が、このほか弥生土器甕（413）、弥生土器壺（414）、弥生土器高杯・弥生土器片が出土した。10-SD 4 から弥生土器高杯（415）、弥生土器甕・弥生土器片が出土した。

出土遺物の年代から、弥生時代後期末と考えられる。

14-SD 7（図 103・104）

第 14 調査区南西～中央で検出した溝である。北東に直行し、14-SD 1 に切られる。主軸方位 N-50°-E、検出面の標高は 5.42 mである。

長さ約 7.20 mを検出し、幅約 0.64 ～ 0.95 m、深さ約 0.50m を測る。断面形状は方形を呈する。

埋土は５層に分層でき、上層がにぶい黄褐シルト、中層が灰黄褐細砂混じりシルト、下層が褐灰細砂～中粒砂混じりシルトと灰黄褐シルト混じり砂礫である。

遺物は、弥生土器長頸壺（416・417）、弥生土器甕（418）、弥生土器甕底部（419・420）、弥生土器高杯（421 ～ 423）、安山岩製打製石庖丁（424）、弥生土器片が出土した。このうち弥生土器高杯（421）は、14-SD 8 出土遺物と接合が確認できた。

出土遺物の年代から、弥生時代後期末と考えられ

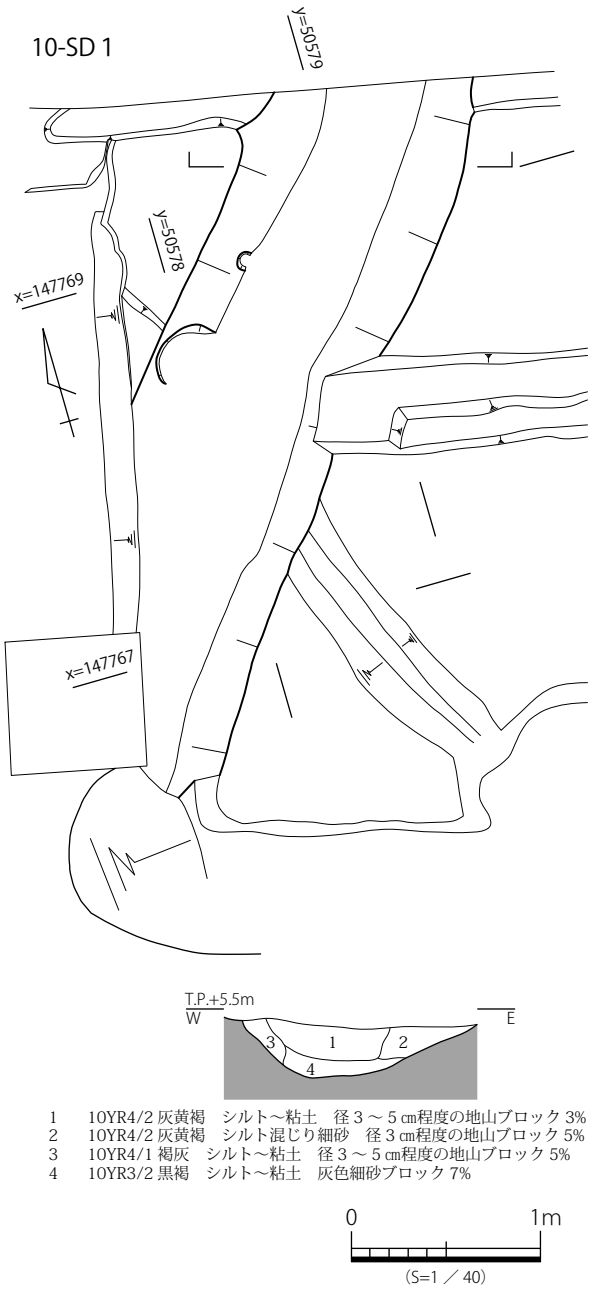


図 98　10-SD 1　平・断面図

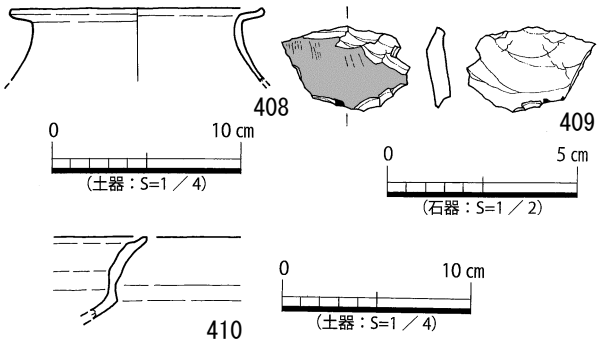


図 99　10-SD 1・24　出土遺物実測図

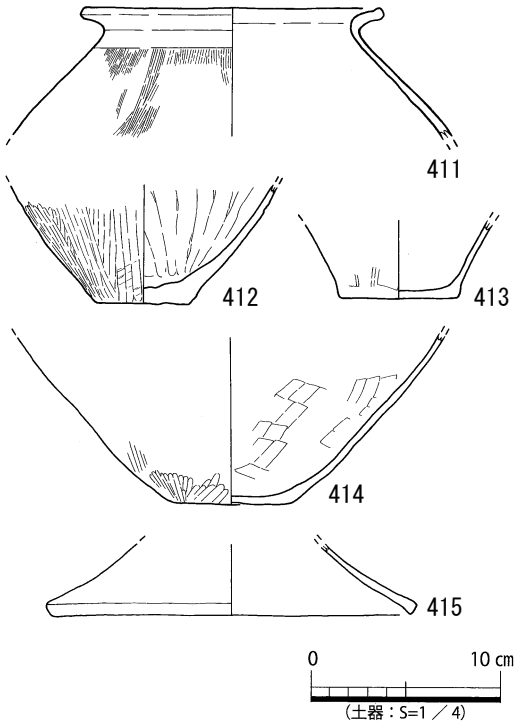


図 100　10-SD21・4　出土遺物実測図

る。

10 ― SD23（図 103）

第 10 調査区中央西端で検出した不整形な溝である。南から北西に屈曲し、10-SD10･21 に切られる。主軸方位 N-55°-E、検出面の標高は 5.30 mである。

長さ約 2.50 mを検出し、幅約 0.40 ～ 0.55 m以上、深さ約 0.20 mを測る。断面形状は方形である。

埋土は 4 層に分層でき、北東側から溝が埋没し、溝の規模が縮小したことが確認できる。上層がにぶい黄褐シルト混じり細砂、下層がにぶい黄褐細砂混じりシルトである。溝肩の埋没土が灰黄褐シルト混じり細砂とにぶい黄褐シルト混じり細砂である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、10-SD21 と 10-SD10 との切り合い関係から、弥生時代後期末以前と考えられる。

基幹水路群（14-SD ８・15・16、19-SD ６・２、10-SD10）（図 106）

中央西工区西部～中央で検出した溝群である。10-SD4(21)・14-SD 7 とほぼ並行し、14-SD10 で 14-SD 7 と 10-SD23 と 10-SD24 とも接続する。14-SD15 と SD16 が合流する部分から 14-SD 8 と遺構番号を付けた。攪乱に切られているが、10-SD10 に続くと考えられる。総延長約 46.85 mを検出した。また第 19 調査区西横の立会調査でも、溝

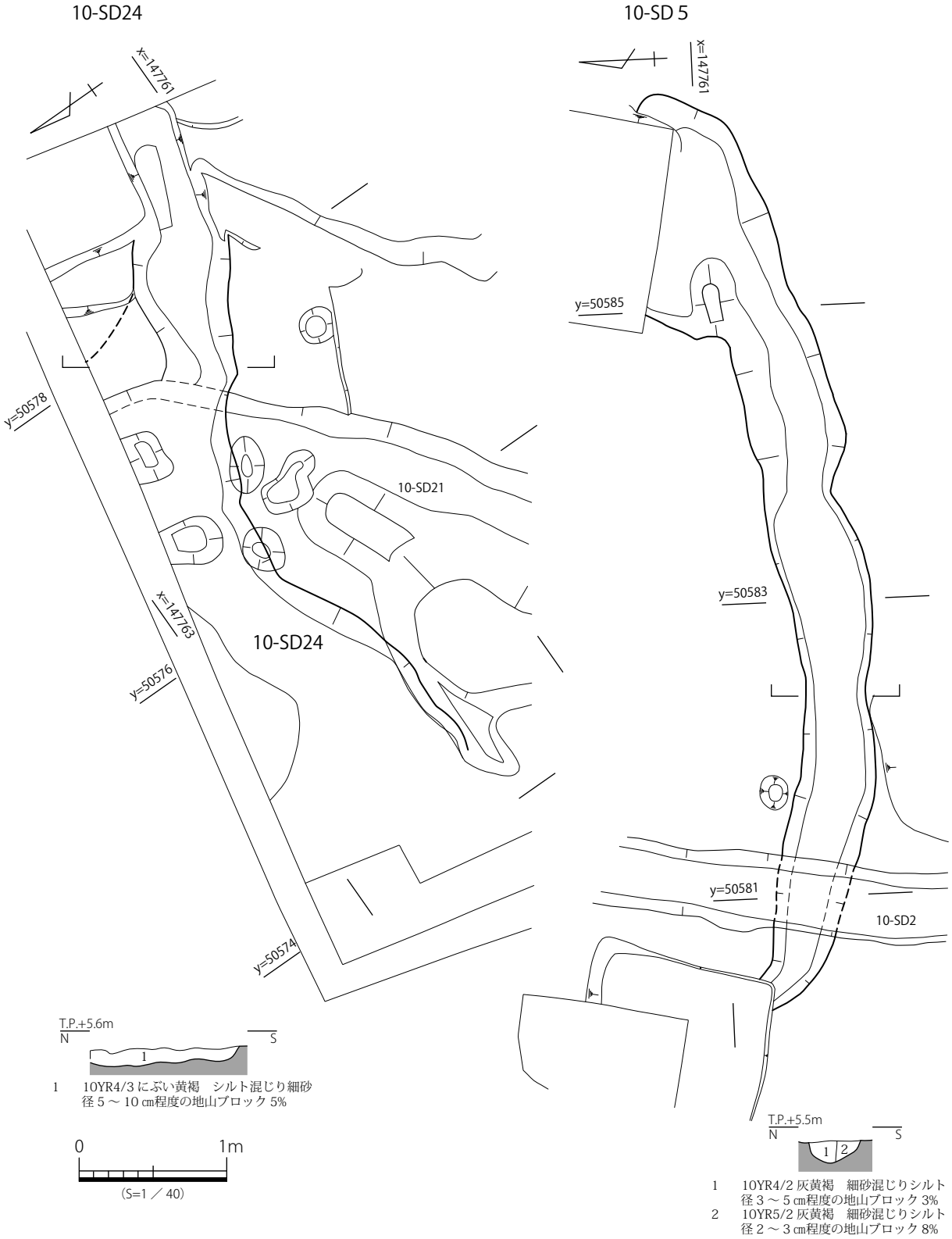


図 101　10-SD24・５　平・断面図

10-SD4(21)

10-SX3・SD4

T.P.+5.6m
W　E
a　a′

1　2.5Y5/2 暗灰黄　シルト～粘土　径 1 ㎝程度の地山ブロック斑状に 3%…10-SX3
2　2.5Y4/2 暗灰黄　細砂混じりシルト　径 5 ㎝程度の地山ブロック 5%
3　2.5Y3/2 黒褐　シルト　径 3 ㎝程度の地山ブロック 2%
4　2.5Y5/1 黄灰　細砂混じりシルト　径 5 ㎝程度の地山ブロック 5%
5　2.5Y5/3 黄褐　細砂混じりシルト　ほぼ地山土で構成
6　2.5Y4/1 黄灰　シルト　径 5 ㎝程度の灰色シルトブロック 3%
7　2.5Y4/1 黄灰　シルト～粘土　径 1 ㎝程度の地山ブロック円礫状に 3%
8　2.5Y5/1 黄灰　シルト混じり細砂　径 1 ㎝大の礫含む
9　2.5Y5/1 黄灰　シルト混じり細砂　8 層に比べて粘性弱
10　2.5Y5/3 黄褐　細砂混じりシルト　ほぼ地山土で構成　5 層に比べしまりわるい
11　10YR4/1 褐灰　シルト混じり細砂
12　2.5Y5/2 暗灰黄　細砂混じりシルト　ほぼ地山土で構成
13　2.5Y5/2 暗灰黄　シルト混じり細砂
14　10YR5/1 褐灰　シルト混じり細砂

0　1m
（断面図：S=1 ／ 40）

y=50585
y=50582
x=147769
x=147765
10-SD4
10-SD2
y=50578
10-SD21
y=50573
x=147762
x=147759
b　b′
0　2m
（平面図：S=1 ／ 80）

10-SD21

T.P.+5.6m
E　W
b　b′

1　10YR4/2 灰黄褐　シルト混じり細砂　径 3 ㎝程度の地山ブロック 8%
2　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂混じりシルト　径 1 ㎝程度の地山ブロック斑状に 3%
3　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト～粘土　径 5 ㎝程度の地山ブロック亜円礫状に 5%
4　10YR4/3 にぶい黄褐　粘土　径 1 ～ 5 ㎝程度の地山ブロック円礫状に 3%
5　10YR4/2 灰黄褐　粘土　径 3 ㎝程度の地山ブロック亜円礫状に 5%
6　10YR4/1 褐灰　細砂混じりシルト～粘土　径 1 ㎝程度の地山ブロック円礫状に 3%
7　10YR4/2 灰黄褐　シルト～粘土　径 1 ㎝大の礫含む　ほぼ地山土で構成

10-SD21 遺物出土状況

y=50575
x=147760.5
414

10-SD21 遺物出土状況

y=50577
411
412
x=147762

0　50 ㎝
（S=1 ／ 20）

図 102　10-SD 4 (21)　平・断面図、遺物出土状況図

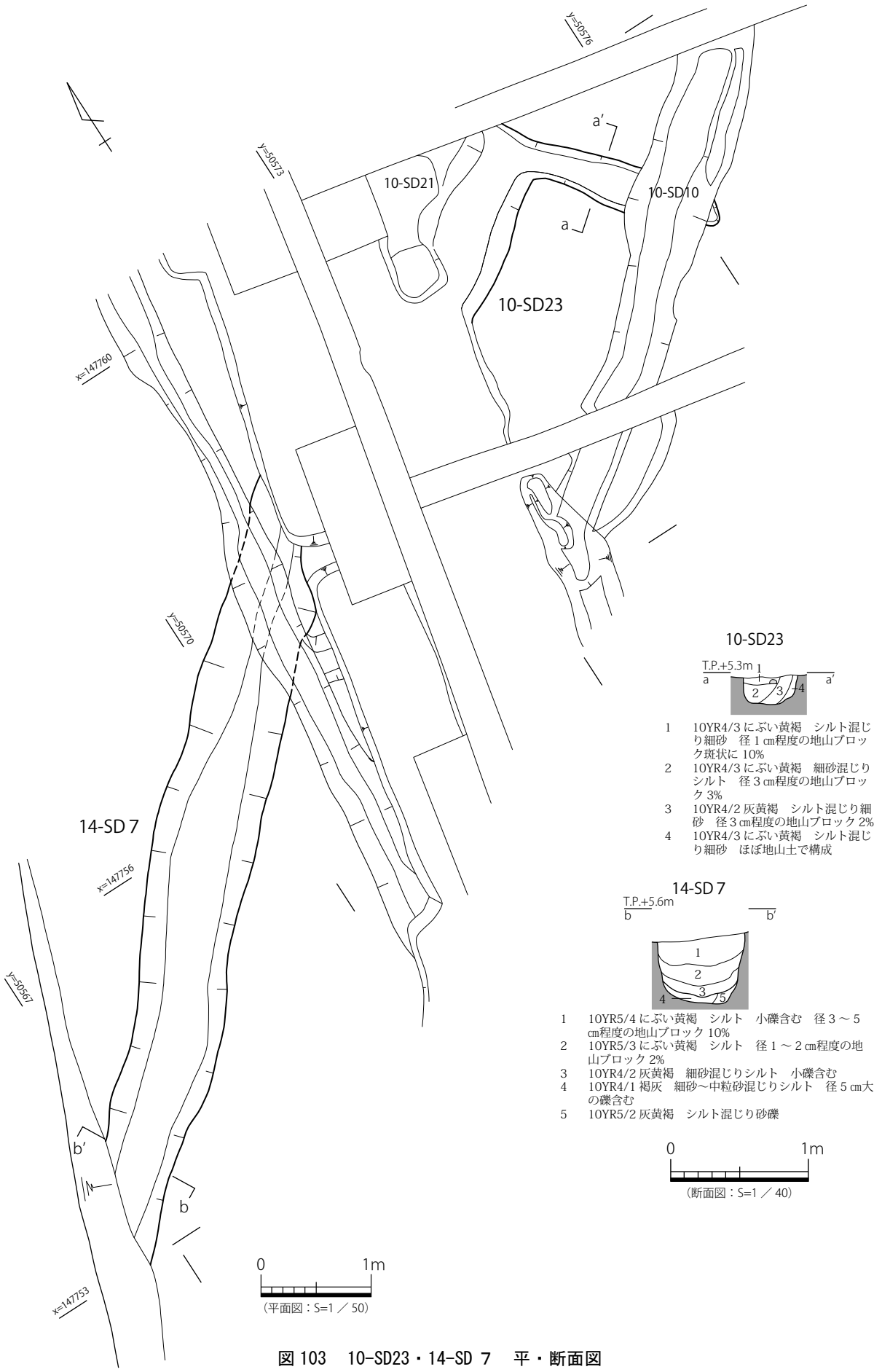


図 103　10-SD23・14-SD 7　平・断面図

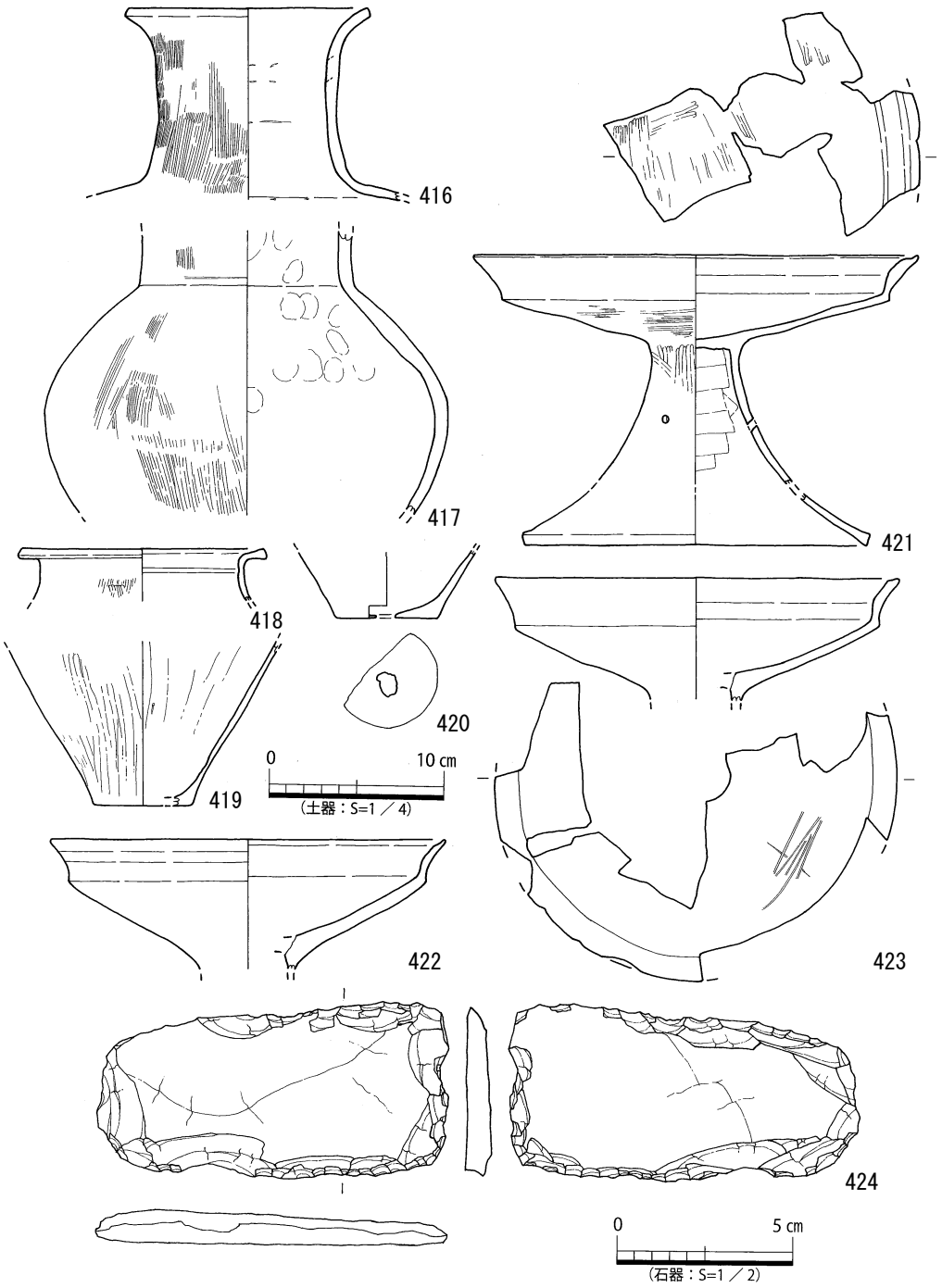


図 104　14-SD 7　出土遺物実測図

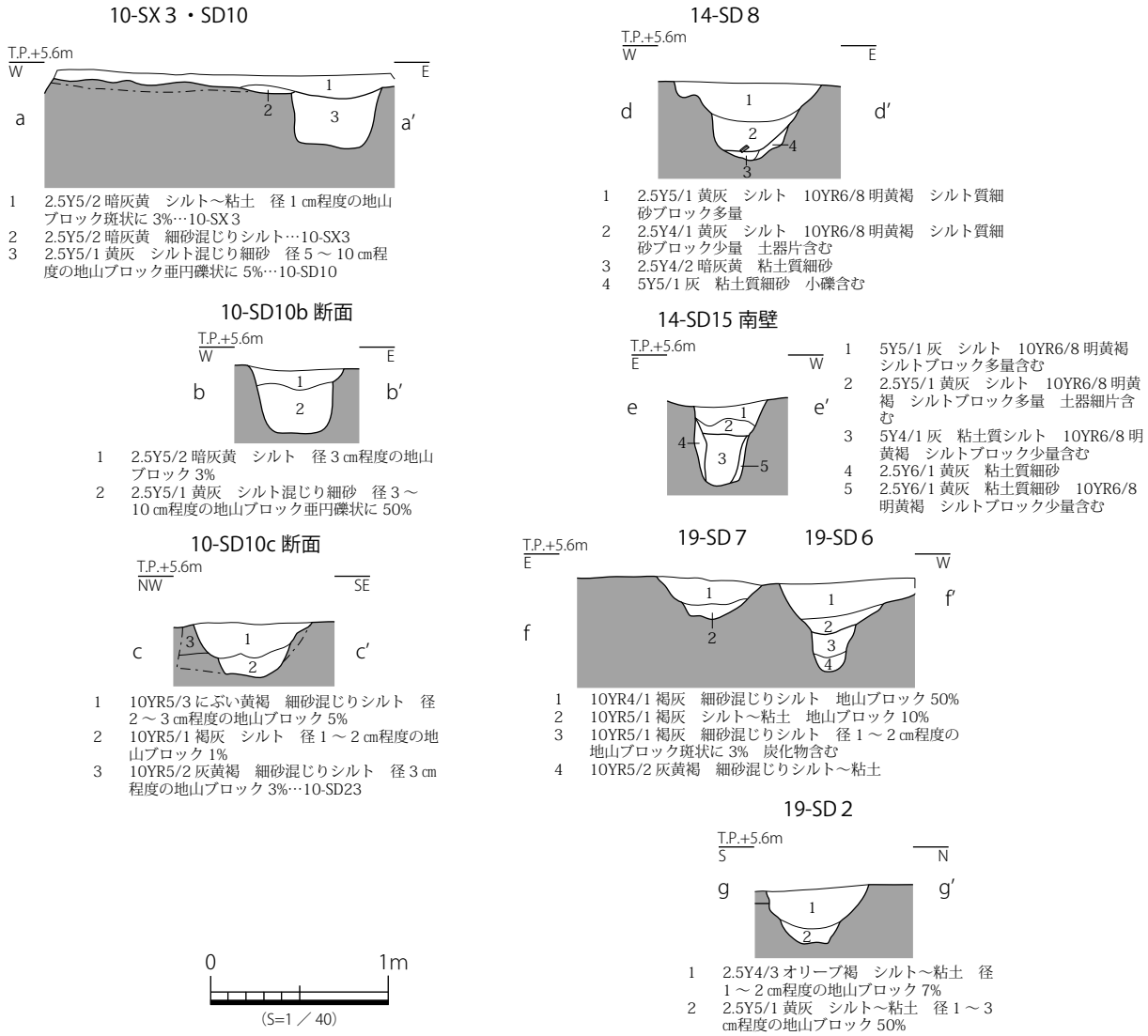


図 105　基幹水路群　断面図

の続きを検出しており、これらの成果を合わせると溝の延長は約 49 mとなる（図 134）。

10 － SD10（図 105・106）

第 10 調査区中央で検出した溝である。10-SX ３の下層で検出した。北東にやや蛇行し、攪乱と SD２に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。10-SD ９・23 を切る。主軸方位 N-52°-E、検出面の標高は 5.45 ～ 5.5 ～ 5.35 mである。

長さ約 16.80 mを検出し、幅約 0.50 ～ 0.65 m、深さ約 0.30 ～ 0.35 mを測る。断面形状は a 断面方形、b 断面方形、c 断面逆台形である。

埋土は a-a' 断面が単層で、黄灰シルト混じり細砂である。

b-b' 断面は２層に分層でき、上層が暗灰黄シルト、下層が黄灰シルト混じり細砂である。c-c' 断面は２層に分層でき、上層がにぶい黄褐細砂混じりシルト、下層が褐灰シルトである。

遺物は弥生土器高杯・弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

埋土の状況から、弥生時代後期末時代と考えられる。

14 － SD ８（図 105 ～ 108）

第 14 調査区南側～中央で検出した溝である。14-SD15・16 が合流して北東に直行し、攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明で

10-SD10・14-SD８・15・16・19-SD６・２

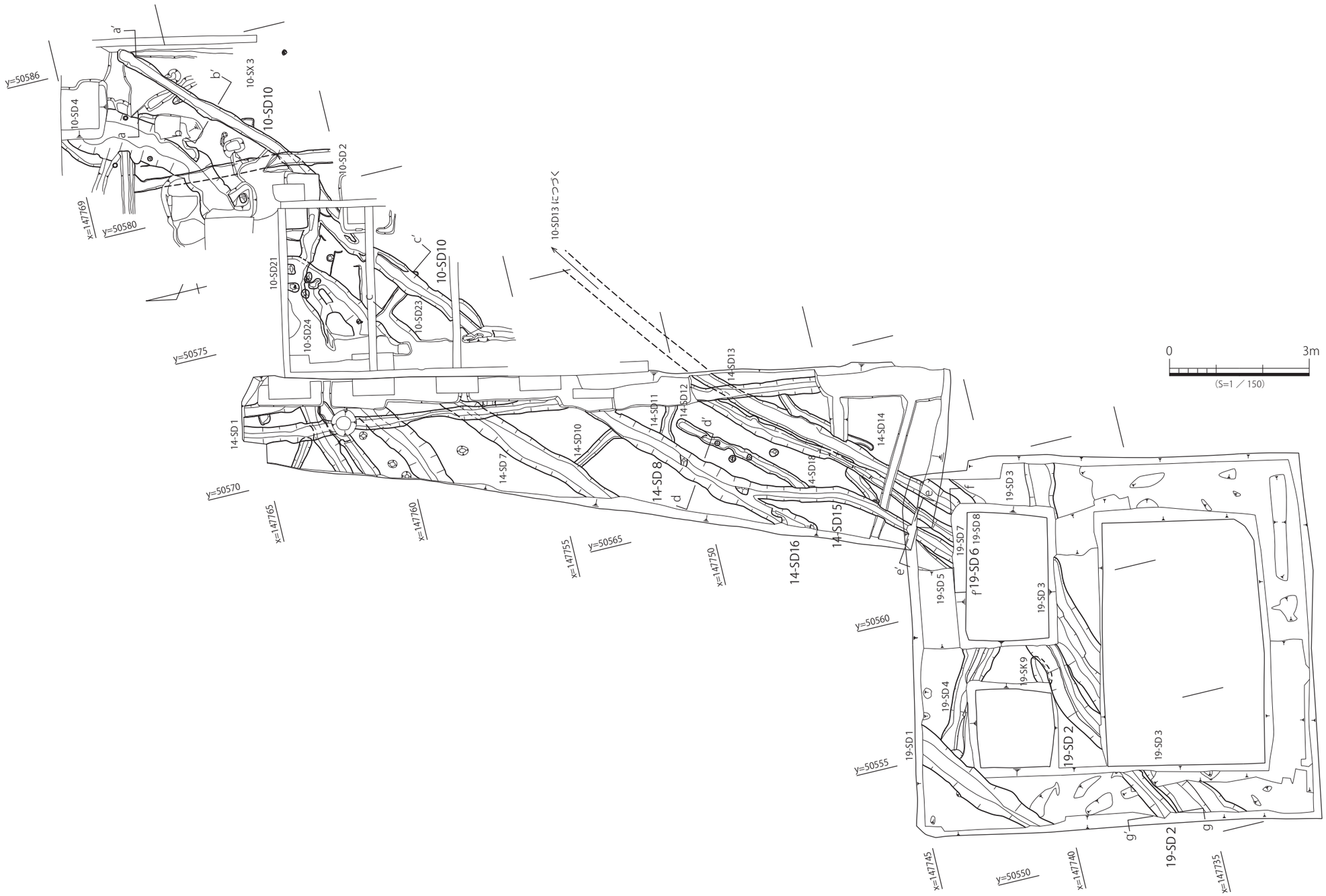


図 106　基幹水路群　平面図

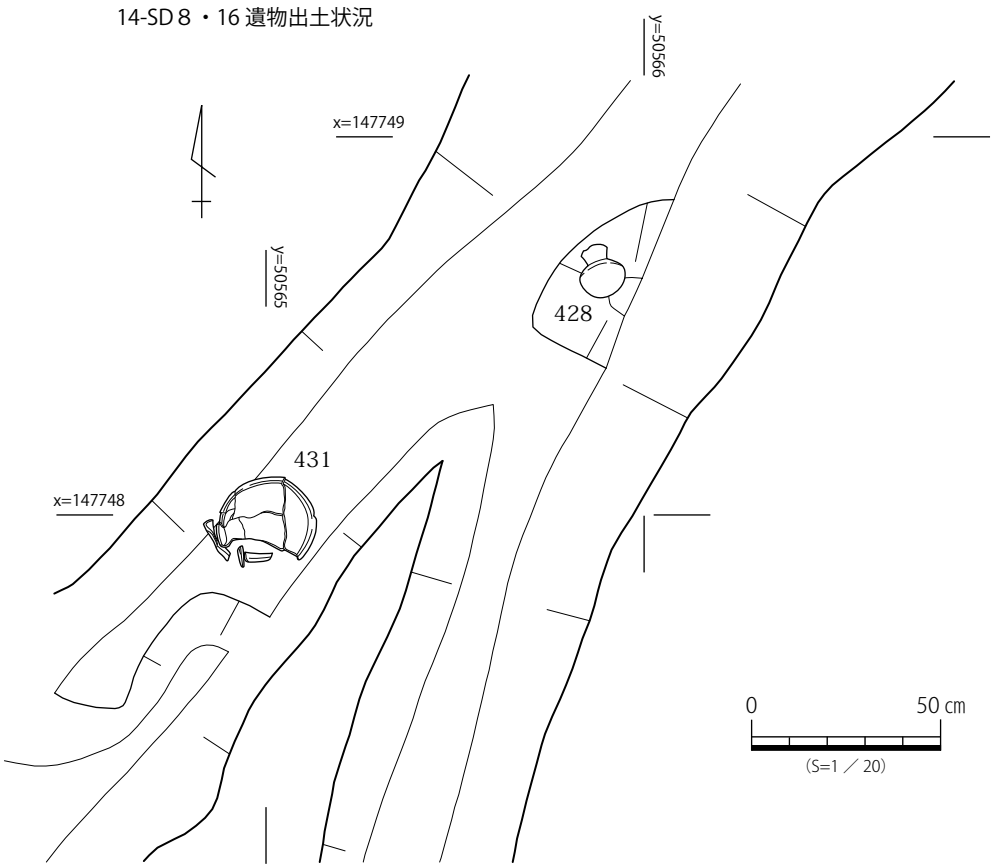


図 107　14-SD ８・16　遺物出土状況図

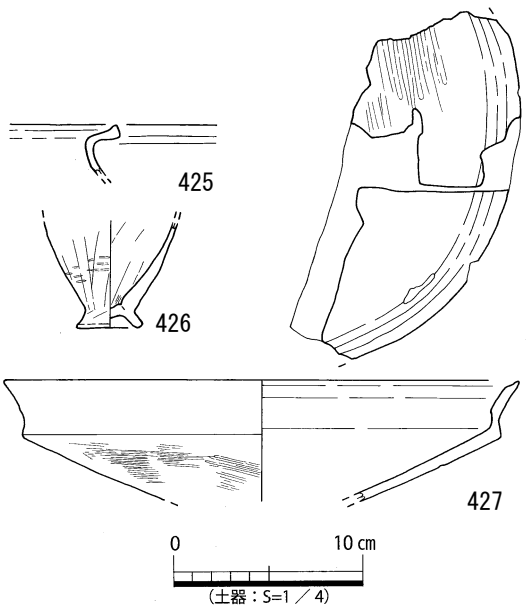


図 108　14-SD ８　出土遺物実測図

ある。10-SD10 へと続くと想定できる。主軸方位 N-45° -E、検出面の標高は 5.40 mである。

長さ約 6.90 mを検出し、幅約 0.82 m、深さ約 0.43 mを測る。断面形状は丸いＶ字形に西肩がゆるくなる。

埋土は４層に分層でき、上層が黄灰シルト、下層が暗灰黄粘土質細砂と灰粘土質細砂である。

遺物は弥生土器甕（425）、製塩土器（426）、弥生土器高杯（427）が出土したほか、図化できなかったが弥生土器鉢・弥生土器片が出土し、また、図化できなかったが、弥生土器高杯が 14-SD8 と 14-SD13 で遺構間接合している。

出土遺物の年代から、弥生時代後期末と考えられる。

14 ― SD15（図 105・106・109）

第 14 調査区南側で検出した溝状の遺構である。19-SD ６から続き、北東から北に屈曲して 14-SD16 に合流して 14-SD ８に続く。攪乱に切られる。主軸方位 N-43° -E → N-16° -E、検出面の標高は 5.35

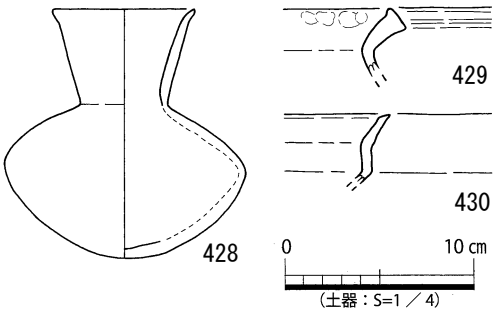


図 109　14-SD15　出土遺物実測図

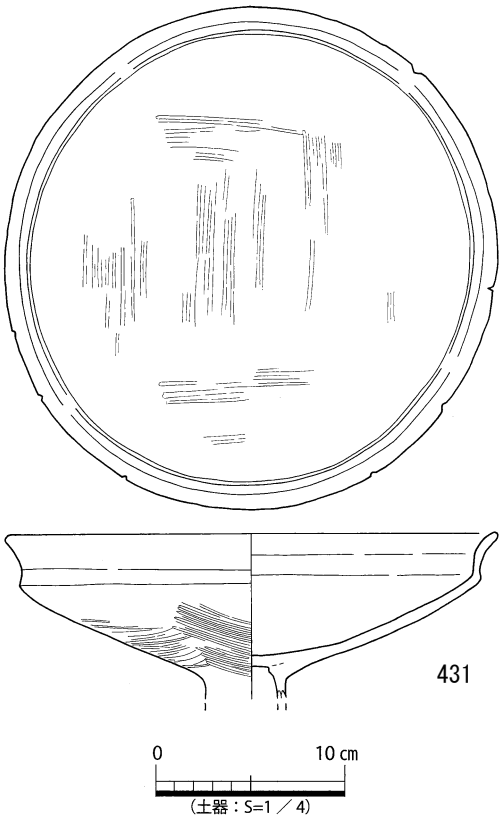


図 110　14-SD16　出土遺物実測図

mである。

長さ約5.70 mを検出し、幅約0.40 m、深さ約0.44 mを測る。断面形状はU型である。

埋土は５層に分層でき、埋土の観察から途中で浚渫が行われたと想定できる。埋土上層は灰シルトと黄灰シルトである。ブロックが多量に認められることから、人為的な埋め戻し土の可能性がある。下層は灰粘土質シルトで、下層肩は黄灰粘土質細砂である。

遺物は弥生土器小型丸底壺（428）、弥生土器壺（429）、弥生土器高杯（430）、弥生土器片が出土した。

出土遺物の年代から、弥生時代後期末と考えられる。

14 － SD16（図 106・107・110）

第 14 調査区南側で検出した溝である。北東に直行し、14-SD ８へと続く。調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-38°-E、検出面の標高は 5.35 mである。

長さ約2.40 mを検出し、幅約0.64 m、深さ約0.50 mを測る。断面形状は逆台形である。

遺物は弥生土器高杯（431）が出土した。

出土遺物の年代から、弥生時代後期末と考えられる。

19 － SD ６（図 105・106）

第 19 調査区北東側で検出した溝である。北東に直行して 14-SD15 につづく。19-SD ５に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明だが、19-SD ２に続くと想定できる。主軸方位 N-45°-E、検出面の標高は 5.50 mである。

長さ約1.50 mを検出し、幅約0.76 m、深さ約0.50 mを測る。断面形状はＶ字形である。

埋土は４層に分層でき、上層が褐灰細砂混じりシルトと褐灰シルト～粘土である。多量のブロック土を含むことから、人為的な埋め戻し土の可能性がある。下層が褐灰細砂混じりシルトと灰黄褐細砂混じりシルト～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明であるが、遺構の連続関係から、弥生時代後期末と考えられる。

19 － SD ２（図 105・106）

第 19 調査区西～中央で検出した溝状の遺構である。北東にやや蛇行し、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。19-SD ６へと続く可能性が高い。主軸方位 N-69°-E、検出面の標高は 5.40 mである。

長さ約7.46 mを検出し、幅約0.58 m、深さ約0.34 mを測る。断面形状は椀状に段落ちである。調査区西側で行われた立会調査も長さ約２mを検出しており、これらの成果を合わせると溝の検出長は約 9.5 mとなる。

埋土は２層に分層でき、上層がオリーブ褐シルト～粘土、下層が黄灰シルト～粘土である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

遺構の連続性から、弥生時代後期末と判断できる。

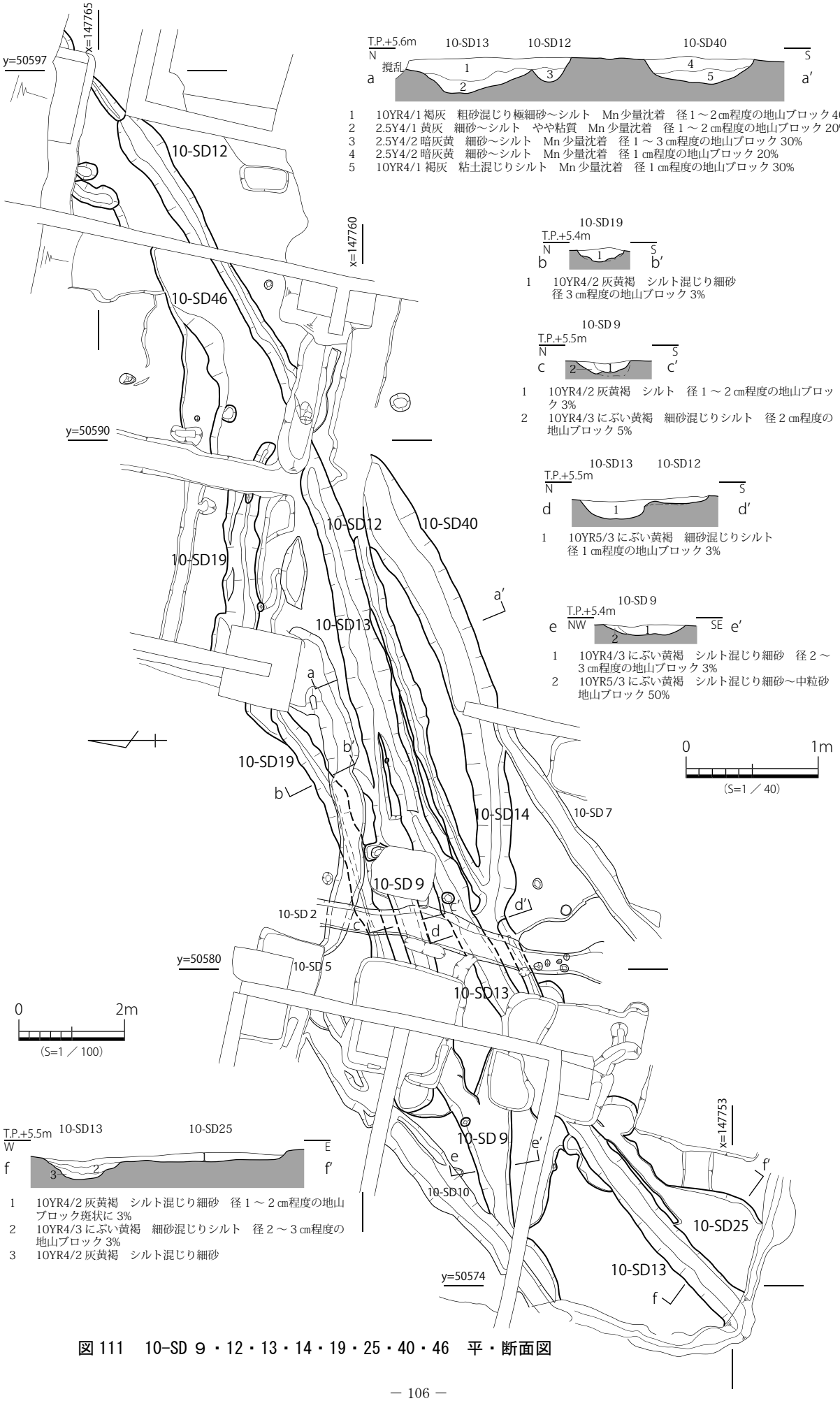


図 111　10-SD ９・12・13・14・19・25・40・46　平・断面図

10 － SD13（図 111）

第 10 調査区中央、10-SX3 下層で検出した溝である。10-SD25 に切られ、北東にゆるく蛇行し、10-SD 9 と交わる。10-SD12 と並行し、上層埋土が共通なので同時期に埋没したと思われる。攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、14-SD12 か 14-SD13 に続くと推測できる。主軸方位 N-63° -E、検出面の標高は 5.50 ～ 5.40 mである。

長さ約 17.90 mを検出し、幅約 0.95 ～ 0.48 m、深さ約 0.26 ～ 0.13 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は a-a' 断面では２層に分層でき、上層は 10-SD12 と共有し、褐灰粗砂混じり極細砂～シルトである。下層は黄灰細砂～シルトである。

d-d' 断面では埋土は単層で、にぶい黄褐細砂混じりシルトである。f-f' 断面は２層に分層でき、上層がにぶい黄褐細砂混じりシルト、下層が灰黄褐シルト混じり細砂である。

遺物は弥生土器高杯･弥生土器片、サヌカイトチップが出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

出土遺物と周辺の遺構の調査成果から弥生時代後期と考えられる。

10 － SD ９（図 111）

第 10 調査区南西側～中央で検出した溝である。北東に直行し、10-SD13 に合流する。攪乱と 10-SD ２・５・10 に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-75° -E、検出面の標高は 5.35 mである。

長さ約 10.10 mを検出し、幅約 0.40 ～ 0.60 m、深さ約 0.10 ～ 0.08 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は c-c' 断面で２層に分層でき、灰黄褐シルトとにぶい黄褐細砂混じりシルトである。

e-e' 断面では２層に分層でき、にぶい黄褐シルト混じり細砂とにぶい黄褐シルト混じり細砂～中粒砂である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

切り合い関係と埋土の状況から、弥生時代後期と考えられる。

14 － SD13・19-SD ８（図 114）

第 14 調査区中央～南西側、第 19 調査北東側で検出した溝である。北東に直行し、攪乱と 14-SD 1・12 に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-41 ～ 45° -E、検出面の標高は 5.40 ～ 5.50 mである。

長さ約 10.53 mを検出し、幅約 0.70 ～ 0.50 m、深さ約 0.24 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は a-a' 断面で２層に分層でき、上層が灰シルト、下層が黄灰シルトである。c-c' 断面でも２層に分層でき、上層が褐灰細砂混じりシルト、下層が褐灰シルト混じり微細砂～細砂である。

遺物は 14-SD13 から弥生土器鉢片・弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。出土遺物のうち 14-SD8 と 14-SD13 出土の弥生土器高杯が遺構間接合することが確認できた。

遺構の切り合い関係と出土遺物の状況から、弥生時代後期末と考えられる。

10 － SD12（図 111）

第 10 調査区中央～北東側で検出した溝状の遺構である。10-SX3 下層で検出した。後述する 10-SD13 と並行し、上層の埋土は共有する。北東にゆるく蛇行し、攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-64° -E、検出面の標高は 5.50 ～ 5.40 mである。

長さ約 19.30 mを検出し、幅約 0.30 ～ 0.47 m、深さ約 0.18 ～ 0.06 mを測る。断面形状は丸い V 字形、浅い皿状である。

埋土は a-a' 断面で２層に分層でき、上層が褐灰粗砂混じり極細砂～シルト、下層が暗灰黄細砂～シルトである。

d-d' 断面では単層で、にぶい黄褐細砂混じりシルトである。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

埋土の状況から、弥生時代と考えられる。

10 － SD40(14)（図 111）

第 10 調査区中央、10-SX3 下層で検出した溝である。北東に直行し、10-SD12・13 から分岐し、10-SD 7 と 10-SD14 と合流する。主軸方位 N-65° -E、検出面の標高は 5.50 mである。

長さ約 5.30 mを検出し、幅約 0.83 m、深さ約 0.19

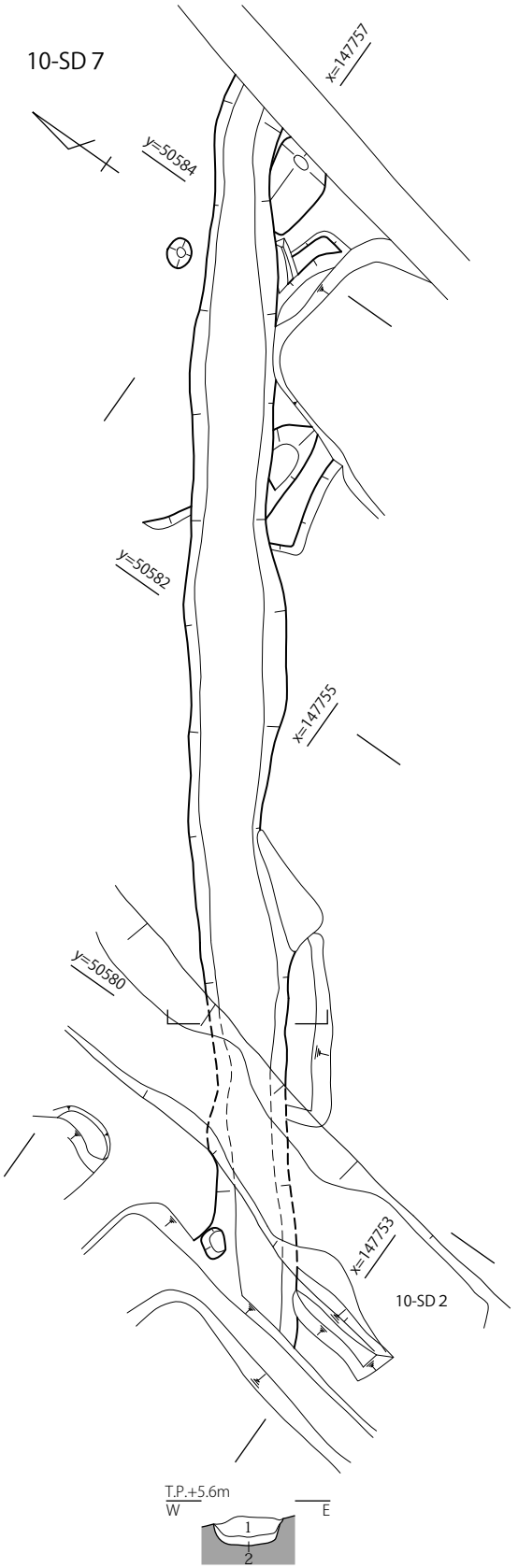


図 112　10-SD 7　平・断面図

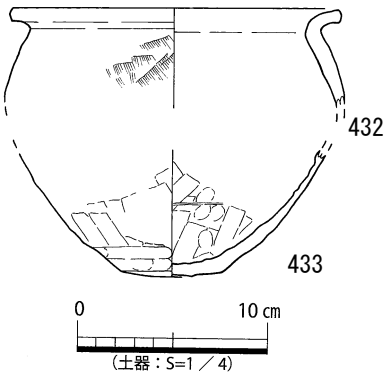


図 113　14-SD12　出土遺物実測図

mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は２層で、上層が暗灰黄細砂～シルト、下層が褐灰粘土混じりシルトである。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

遺構の切り合い関係から、弥生時代後期と考えられる。

10 － SD 7（図 112）

第 10 調査区南西側、10-SX3 下層で検出した溝である。北東に直行し、攪乱と 10-SD 2 に切られるため、全体の形状は不明である。10-SD40(14) と合流する。主軸方位 N-55° -E、検出面の標高は 5.50 mである。

長さ約 7.20 mを検出し、幅約 0.40 m、深さ約 0.16 mを測る。断面形状は方形である。

埋土は２層に分層でき、上層が褐灰細砂混じりシルト、下層が黄灰シルト～粘土である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係から、弥生時代後期以降と考えられる。

14 － SD12・19-SD 7（図 113・114）

第 14 調査区南側、第 19 調査区北側で検出した溝である。北東へやや蛇行し、攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-42 ～ 46° -E、検出面の標高は 5.40 ～ 5.50 mである。

長さ約 10.44 mを検出し、幅約 0.46 ～ 0.60 m、深さ約 0.18 ～ 0.24 mを測る。断面形状はゆるい V 字形と逆台形である。

埋土は a-a' 断面では黄灰シルトの単層である。

b-b' 断面では２層に分層でき、上層が灰黄褐細砂

14-SD12・13・14
19-SD７・８

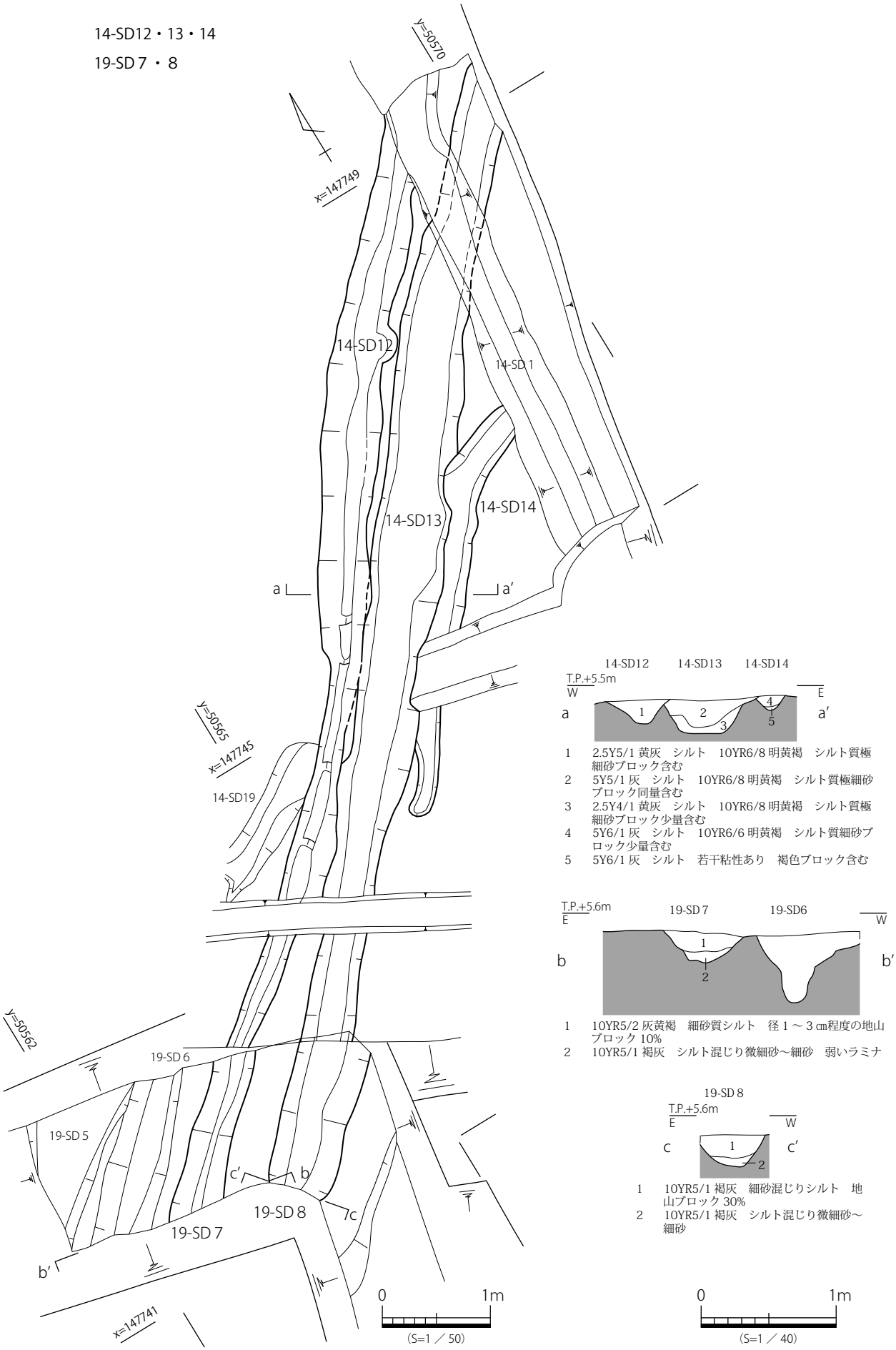


図 114　14-SD12・13・14・19-SD ７・８　平・断面図

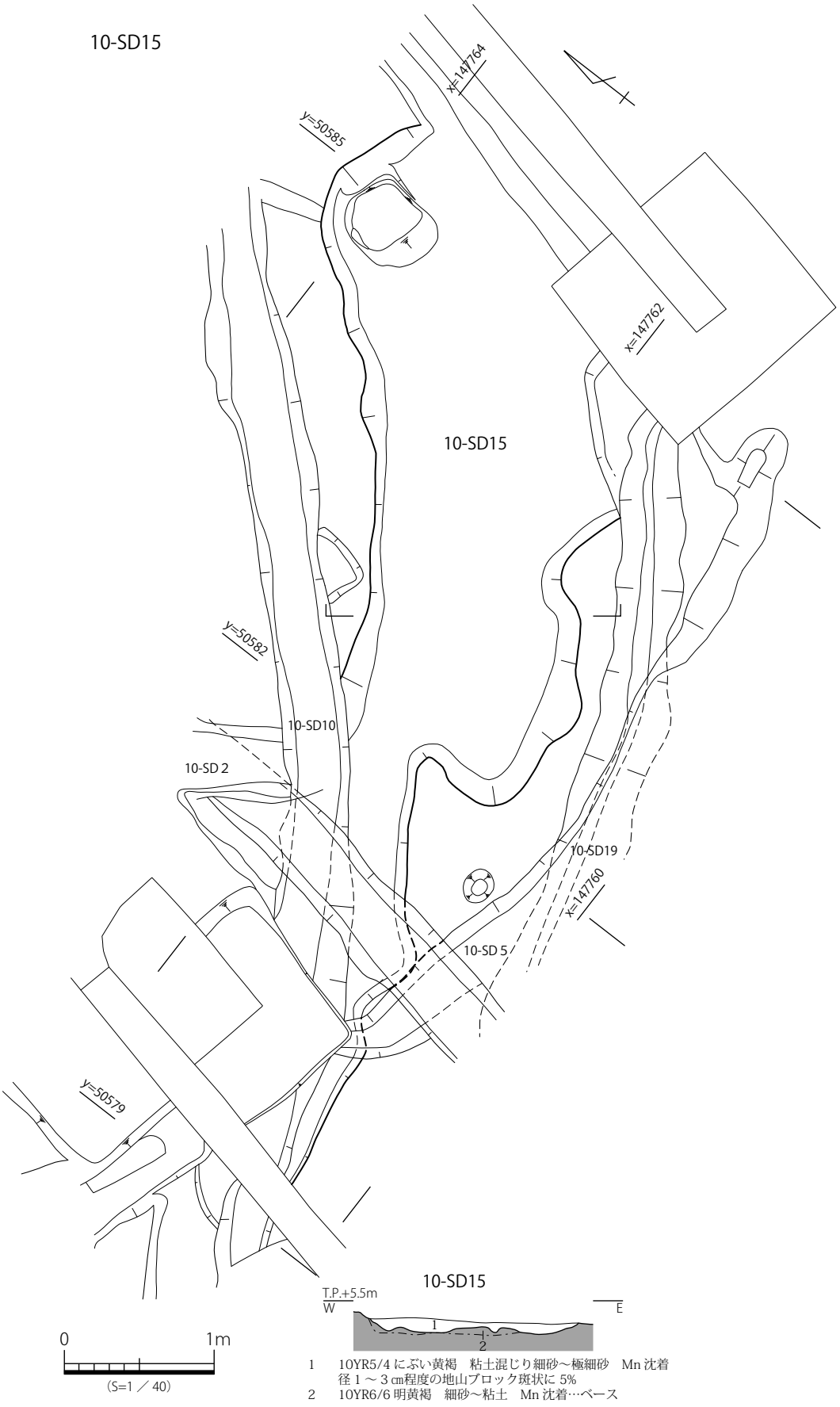


図 115　10-SD15　平・断面図

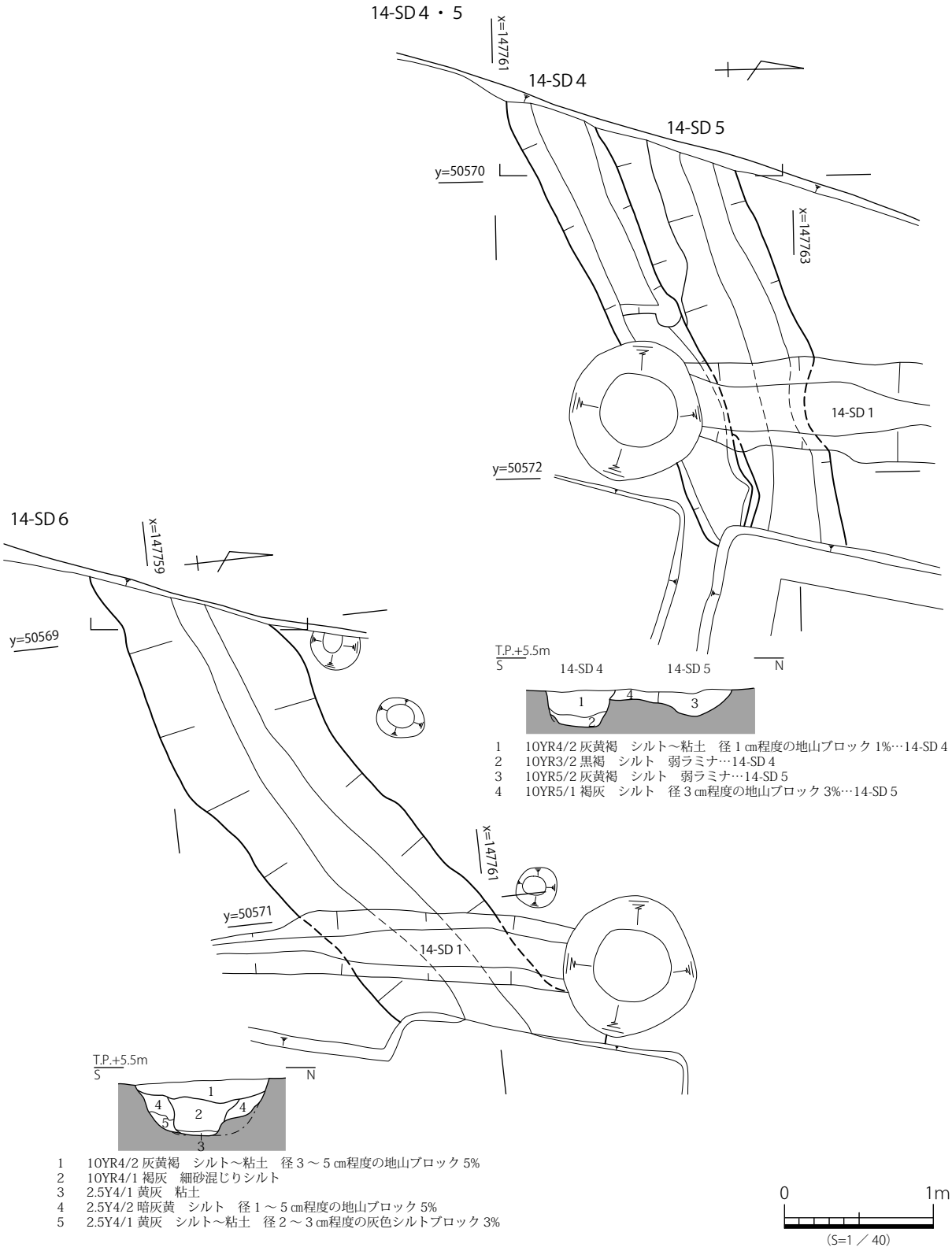


図 116　14-SD ４・５・６　平・断面図

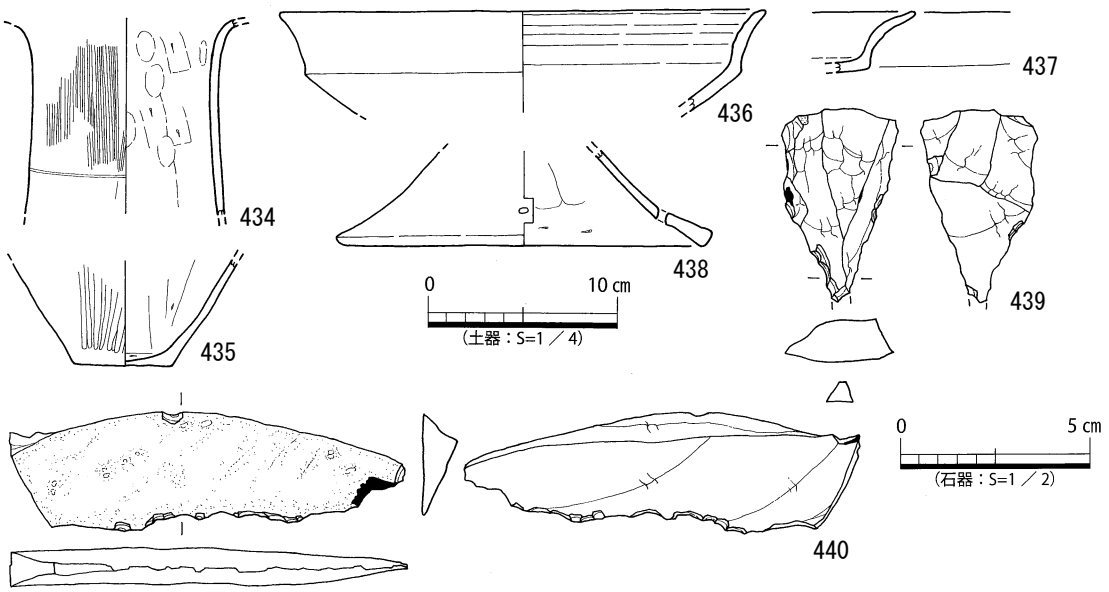


図 117　14-SD 6　出土遺物実測図

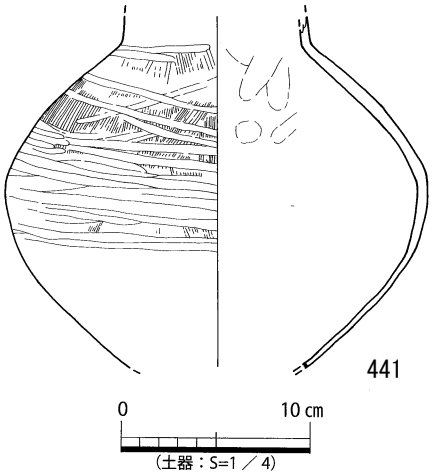


図 118　14-SD 5　出土遺物実測図

質シルト、下層が褐灰シルト混じり微細砂～細砂である。ラミナが確認できることから、流水があったと想定できる。

遺物は 14-SD12 から弥生土器甕（432）、弥生土器壺（433）、弥生土器片が出土した。19-SD 7 からは、弥生土器片が出土した。

出土遺物から、弥生時代後期末と考えられる。

14 － SD14（図 114）

第 14 調査区南側で検出した溝である。北東から東に屈曲し、攪乱と 14-SD 1・13 に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-39° -E → N-70° -E、検出面の標高は 5.40 mである。

長さ約 3.85 mを検出し、幅約 0.20 m、深さ約 0.11 mを測る。断面形状は V 字形である。

埋土は 2 層に分層でき、上層が灰シルトに明黄褐シルト質細砂ブロック含み、下層が灰シルトに褐色ブロック含んでいる。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から、弥生時代後期末以前と考えられる。

10 － SD46（図 111）

第 10 調査区中央～北東側で検出した溝状の遺構である。北東に直行し、10-SD19 と同一の溝の可能性がある。攪乱と 10-SD12 に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-70° -E、検出面の標高は 5.45 mである。

長さ約 4.40 mを検出し、幅約 2.00 m、深さ約 0.10 mを測る。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

遺構の切り合い関係から、弥生時代後期末以前と考えられる。

10 － SD19（図 111）

第 10 調査区中央、10-SX3 下層で検出した溝で

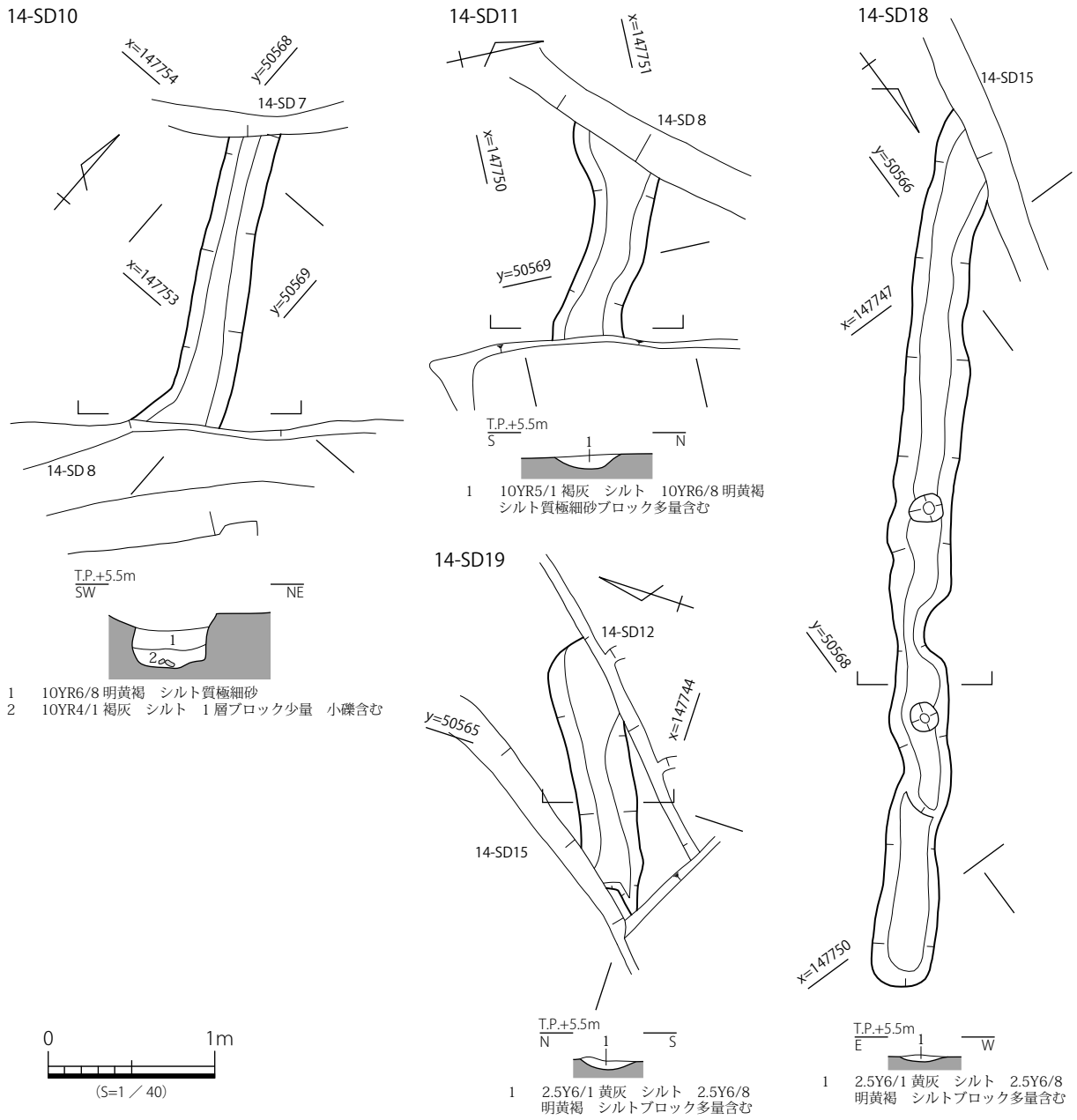


図 119　14-SD10・11・18・19　平・断面図

ある。北東に蛇行し、攪乱と 10-SD 5 に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-73°-E、検出面の標高は 5.35 mである。

長さ約 9.30 mを検出し、幅約 0.34 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は灰黄褐シルト混じり細砂の単層である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

遺構の切り合い関係から、弥生時代後期と考えられる。

10 ― SD25（図 111）

第 10 調査区南西側で検出した溝状の遺構である。北東に直行し、攪乱と 10-SD13 に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-49°-E、検出面の標高は 5.40 mである。

長さ約 4.20 mを検出し、幅約 1.25 m、深さ約 0.07 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は灰黄褐シルト混じり細砂の単層である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から、弥生時代後期以前と考えられる。

10 － SD15（図 115）

第 10 調査区中央西側で検出した溝である。北東にゆるく湾曲して広がる。攪乱と 10-SD 5・10・19 に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-62°-E、検出面の標高は 5.40 mである。

長さ約 7.17 mを検出し、幅約 1.38 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土はにぶい黄褐粘土混じり細砂～極細砂の単層である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため、詳細な時期は不明である。

遺構の切り合い関係から、弥生時代後期末以前と考えられる。

14 － SD 4（図 116）

第 14 調査区北側で検出した溝である。北東に直行し、攪乱と 14-SD 1 に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。14-SD 5 を切る。主軸方位 N-69°-E、検出面の標高は 5.30 mである。

長さ約 3.30 mを検出し、幅約 0.50 m、深さ約 0.25 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は２層に分層でき、上層が灰黄褐シルト～粘土、下層が黒褐シルトである。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

14-SD 5 との切り合い関係から、弥生時代後期末以降と考えられる。

14 － SD 6（図 116・117）

第 14 調査区北側で検出した溝状の遺構である。北東に直行し、攪乱と 14-SD 1 に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-60°-E、検出面の標高は 5.40 mである。

長さ約 3.60 mを検出し、幅約 1.05 m、深さ約 0.37 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は５層に分層でき、埋土の観察から浚渫が行われたと想定できる。埋土上層は灰黄褐シルト～粘土、下層が褐灰細砂混じりシルトと黄灰粘土、下層肩が暗灰黄シルトと黄灰シルト～粘土である。

遺物は弥生土器長頸壺（434）、弥生土器甕（435）、弥生土器高杯（436 ～ 438）、石錐（439）、スクレイパー（440）、弥生土器片が出土した。

出土遺物から弥生時代後期末と考えられる。

14 － SD 5（図 116・118）

第 14 調査区北側で検出した溝である。北東に直行し、攪乱と 14-SD 1・4 に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-77°-E、検出面の標高は 5.30 mである。

長さ約 2.20 mを検出し、幅約 0.65 m、深さ約 0.16 mを測る。断面形状は椀状に南肩テラスである。

埋土は２層に分層でき、灰黄褐シルトと褐灰シルトである。ラミナが確認できることから、流水があったと想定できる。

遺物は弥生土器壺（441）、弥生土器片が出土した。

出土遺物の年代から、弥生時代後期末と考えられる。

14 － SD10（図 119）

第 14 調査区中央で検出した溝状の遺構である。南東に直行し、14-SD 7・8 との切り合い関係は確認できなかったことから、14-SD 7・8 をバイパスし、水を流す方向を制御していたものと推定できる。主軸方位 N-30°-W、検出面の標高は 5.30 mである。

長さ約 1.76 mを検出し、幅約 0.48 m、深さ約 0.22 mを測る。断面形状は方形である。

埋土は２層に分層でき、上層が明黄褐シルト質極細砂、下層が褐灰シルトである。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

14-SD 7・8 の年代から、弥生時代後期末と考えられる。

14 － SD11（図 119）

第 14 調査区中央で検出した溝状の遺構である。東西に蛇行し、攪乱と 14-SD 8 に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-67°-W、検出面の標高は 5.35 mである。

長さ約 1.30 mを検出し、幅約 0.40 m、深さ約 0.08 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は褐灰シルトの単層である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

遺構の切り合い関係から、弥生時代後期末以前と考えられる。

14 － SD17（図 125）

第 14 調査区北側で検出した溝である。南東に直行し、14-SD 1 に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-56°-W、検出面の標高は 5.35 mである。

長さ約 1.16 mを検出し、幅約 0.30 m、深さ約 0.15 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は灰黄褐細砂混じりシルトの単層である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

遺構の切り合い関係から、室町時代以前と考えられる。

14 － SD18（図 119）

第 14 調査区南側で検出した溝である。北東に直行し、14-SD15 に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-41°-E、検出面の標高は 5.40 mである。

長さ約 5.20 mを検出し、幅約 0.25 m、深さ約 0.04 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で、黄灰シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から弥生時代後期末以前と考えられる。

14 － SD19（図 119）

第 14 調査区南側で検出した溝状の遺構である。北東に直行し、攪乱と 14-SD12・15 に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-63°-E、検出面の標高は 5.35 mである。

長さ約 3.50 mを検出し、幅約 0.30 m、深さ約 0.05 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で、黄灰シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から、弥生時代後期末以前と考えられる。

19 － SD 1（図 120 ～ 122）

第 19 調査区北西側で検出した溝である。北東に直行し、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。第 19 調査区で 19-SD 4 と合流する。14-SD7 と同一の溝の可能性がある。工事立会で確認した部分約 1.7 mと合わせて溝の延長は約 7.7 mを確認した。主軸方位 N-47°-E、検出面の標高は 5.70 mである。

第 19 調査区では長さ約 6.00 mを検出し、幅約 0.90 m、深さ約 0.54 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は５層に分層でき、上層が褐灰シルト混じり極細砂と褐灰粘土混じり極細砂、灰黄褐粗砂混じりシルト～粘土、下層が黄灰シルト～粘土と黒褐粘土混じり細砂～中粒砂である。埋土は大量のブロックを含む土で埋め戻されており、また土器もこれに伴い上層部分に多量に投棄されていた。

遺物は弥生土器壺（442 ～ 445・447）、製塩土器（446）、弥生土器鉢（448・449）のほか、図化できなかったが弥生土器壺・弥生土器甕・弥生土器片が出土した。

出土遺物の年代から、弥生時代後期末と考えられる。

19 － SD 4（図 120）

第 19 調査区中央北側で検出した溝である。19-SD 1 との切り合い関係は確認できなかったことから、19-SD 1 と東側に掘削された 19-SD 2・6 をバイパスする目的で掘られた溝の可能性が高い。19-SD 1 から東側で二股に分岐する。北西に直行し、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-65°-W、検出面の標高は 5.60 mである。

長さ約 4.40 mを検出し、幅約 1.30 m、深さ約 0.10 ～ 0.30 mを測る。断面形状は逆台形にテラスである。

埋土は南側の深い溝は３層に分層でき、上層が灰黄褐シルト～粘土、中層が灰黄褐シルト、下層が灰黄褐極細砂である。下層でラミナが確認できることから、流水があったと想定できる。北側の浅い溝の埋土は単層で、暗褐細砂混じりシルトである。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

19-SD1 との関係から、弥生時代後期末と考えられる。

19 － SD 3（図 123・124）

第 19 調査区中央西～東側で検出した溝である。北東から東にやや湾曲し、攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-32°-E、検出面の標高は 5.45 mである。

長さ約 14.60 mを検出し、幅約 3.80 m、深さ約

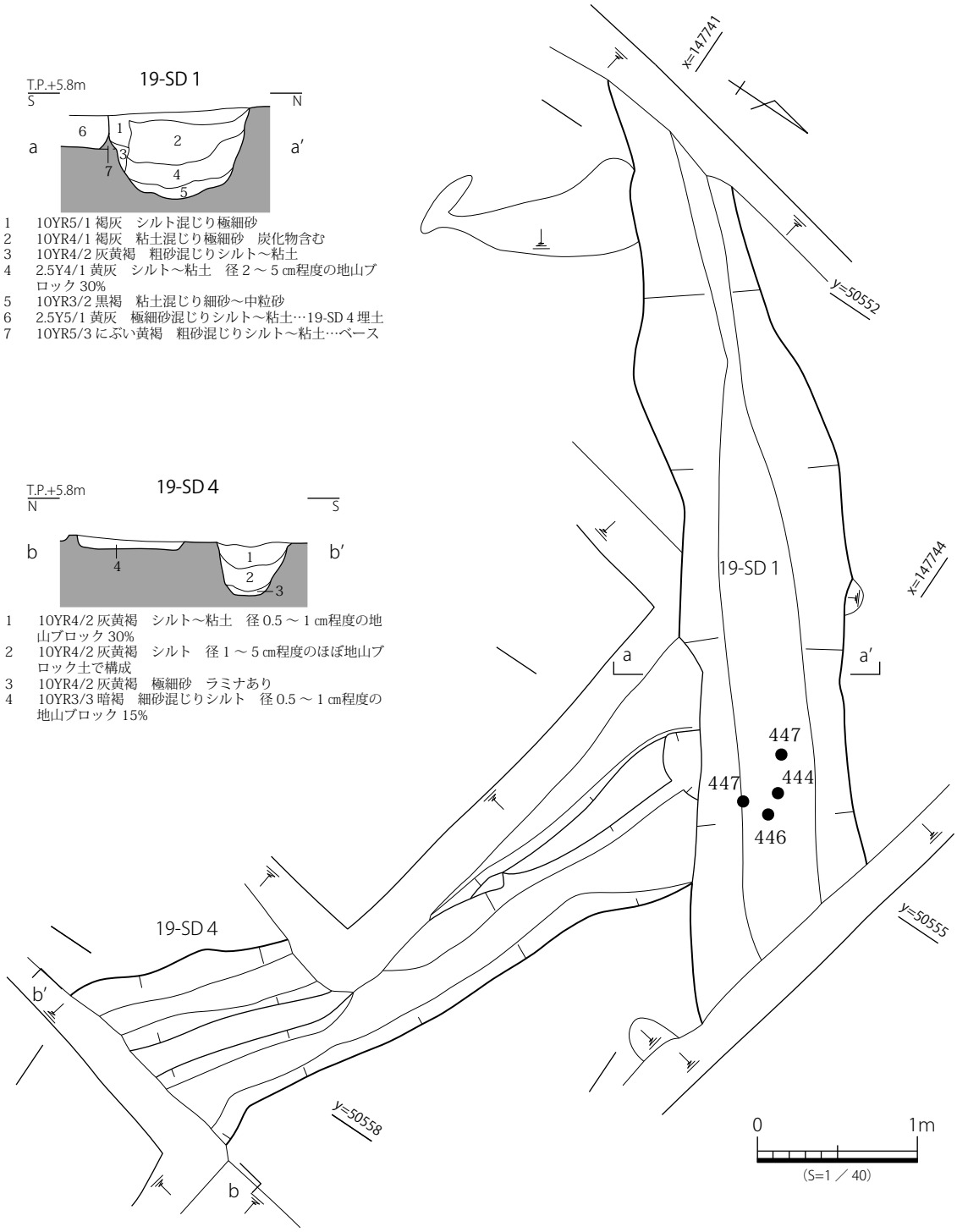


図 120　19-SD １・４　平・断面図

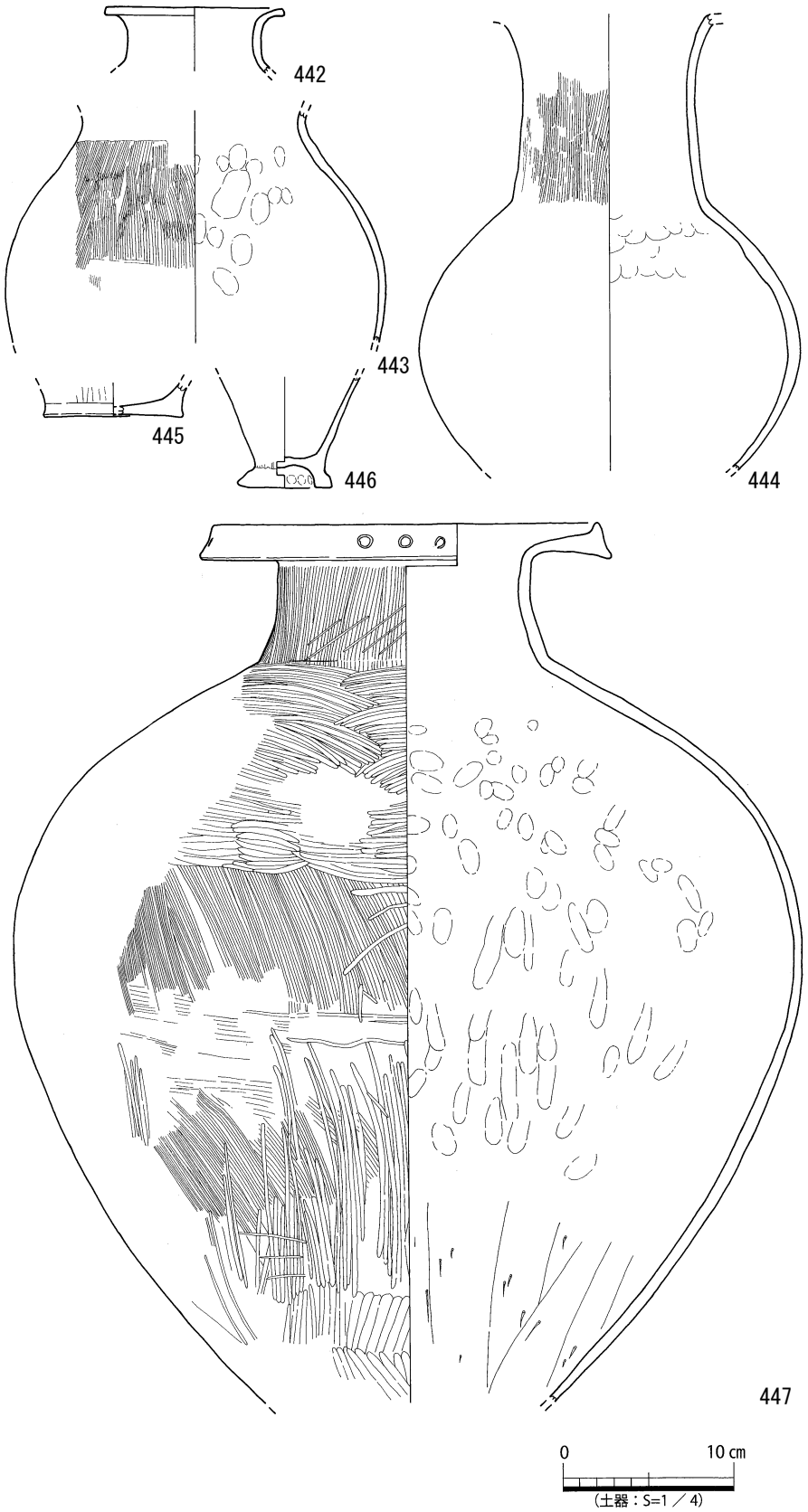


図 121　19-SD 1　出土遺物実測図①

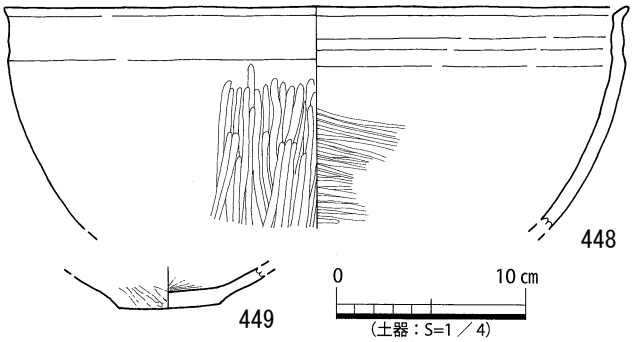


図 122　19-SD 1　出土遺物実測図②

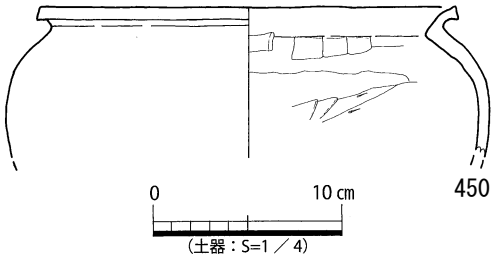


図 123　19-SD 3　出土遺物実測図

0.15 ～ 0.28 mを測る。断面形状は浅い皿状に段落ちである。調査区西側の立会調査で長さ約 1.70 mを検出しており、これらの成果を合わせると約 16.30 mを確認した。

埋土は２層に分層でき、上層が灰黄褐極細砂混じりシルト～粘土、下層が灰黄褐シルト混じり微細砂～細砂である。下層でラミナが確認できることから、流水があったと想定できる。

遺物は弥生土器甕（450）、弥生土器片が出土した。

出土遺物の年代から、弥生時代後期末と考えられる。

19 － SD 5（図 124）

第 19 調査区北東側で検出した溝状の遺構である。北東に直行し、攪乱に切られ、第 14 調査区では検出されなかったため、全体の形状は不明である。19-SD 6 を切る。主軸方位 N-55° -E、検出面の標高は 5.55 mである。

長さ約 1.66 mを検出し、幅約 0.90 m、深さ約 0.12 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は褐灰細砂混じりシルトの単層である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

遺構の切り合い関係から、弥生時代後期末以降と想定できる。

10 － SD 8（図 125）

第 10 調査区中央南側で検出した溝である。10-SX 3 下層で検出した。東西に直行し、攪乱と 10-SD2 に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-85° -E、検出面の標高は 5.50 mである。

長さ約 10.90 mを検出し、幅約 0.54 ～ 0.42 m、深さ約 0.16 ～ 0.24 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は a-a' 断面２層、b-b' 断面３層に分層できる。a-a' 断面では上層が灰黄褐極細砂～粘土、下層が灰黄褐極細砂混じり粘土である。

b-b' 断面では上層が褐灰シルトと褐灰シルト、下層が褐灰シルト～粘土である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

10 － SD34（図 125）

第 10 調査区中央南側で検出した溝状の遺構である。東西に直行し、攪乱に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-72° -W、検出面の標高は 5.55 mである。

長さ約 0.70 mを検出し、幅約 0.30 m、深さ約 0.12 mを測る。断面形状は U 字形である。

埋土は２層に分層でき、灰黄褐粗砂混じり粘土と灰黄褐極細～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

10 － SK29（図 126）

第 10 調査区中央で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-16° -W、検出面の標高は 5.55 mである。

長軸約 0.98 mを検出し、短軸約 0.50 m、深さ約 0.18 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は単層で、にぶい黄褐細砂混じりシルトである。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため、詳細な時期は不明である。

10 － SK30（図 126）

第 10 調査区中央で検出した土坑状の遺構

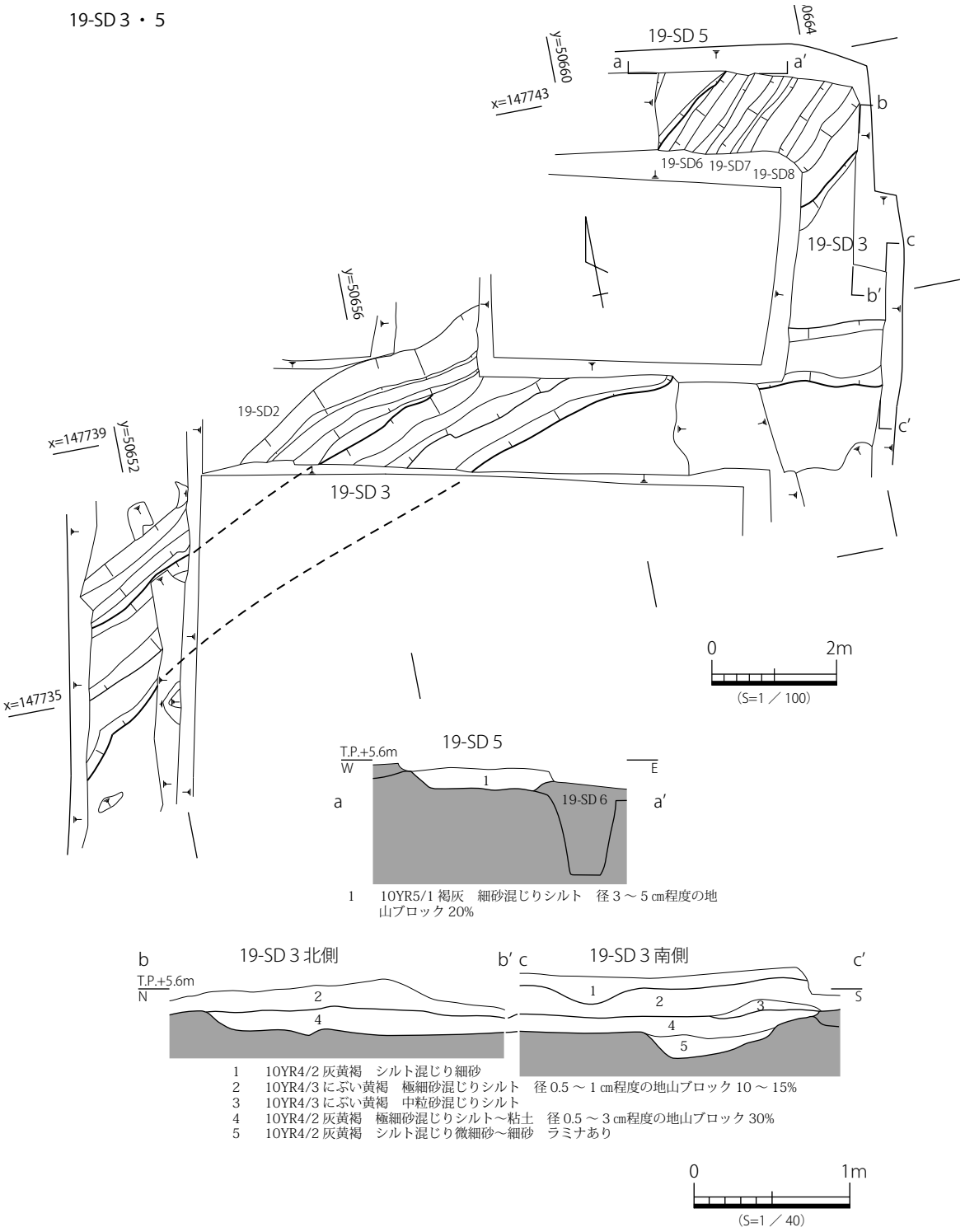


図 124　19-SD ３・５　平・断面図

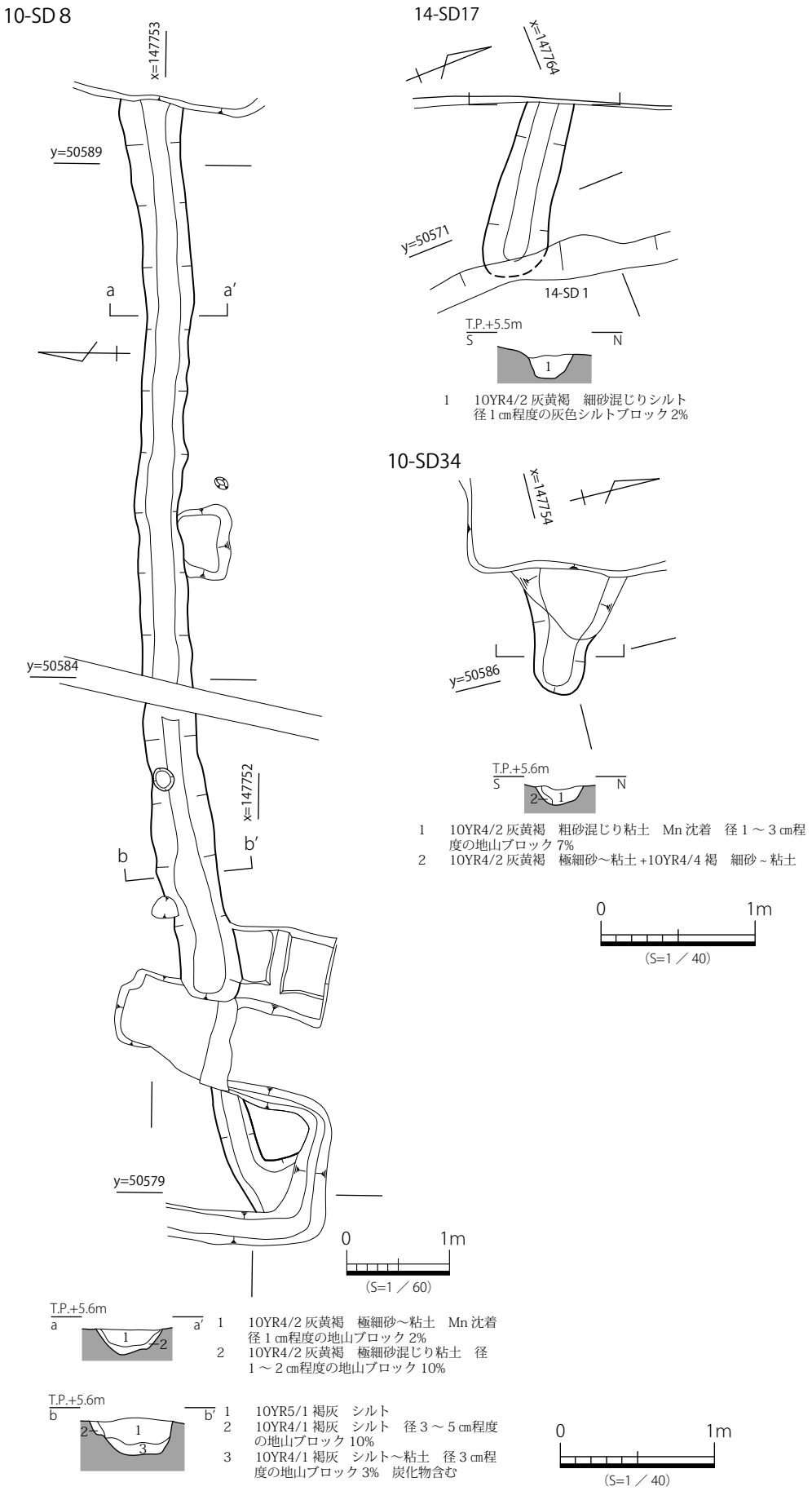


図 125　10-SD ８・34・14-SD17　平・断面図

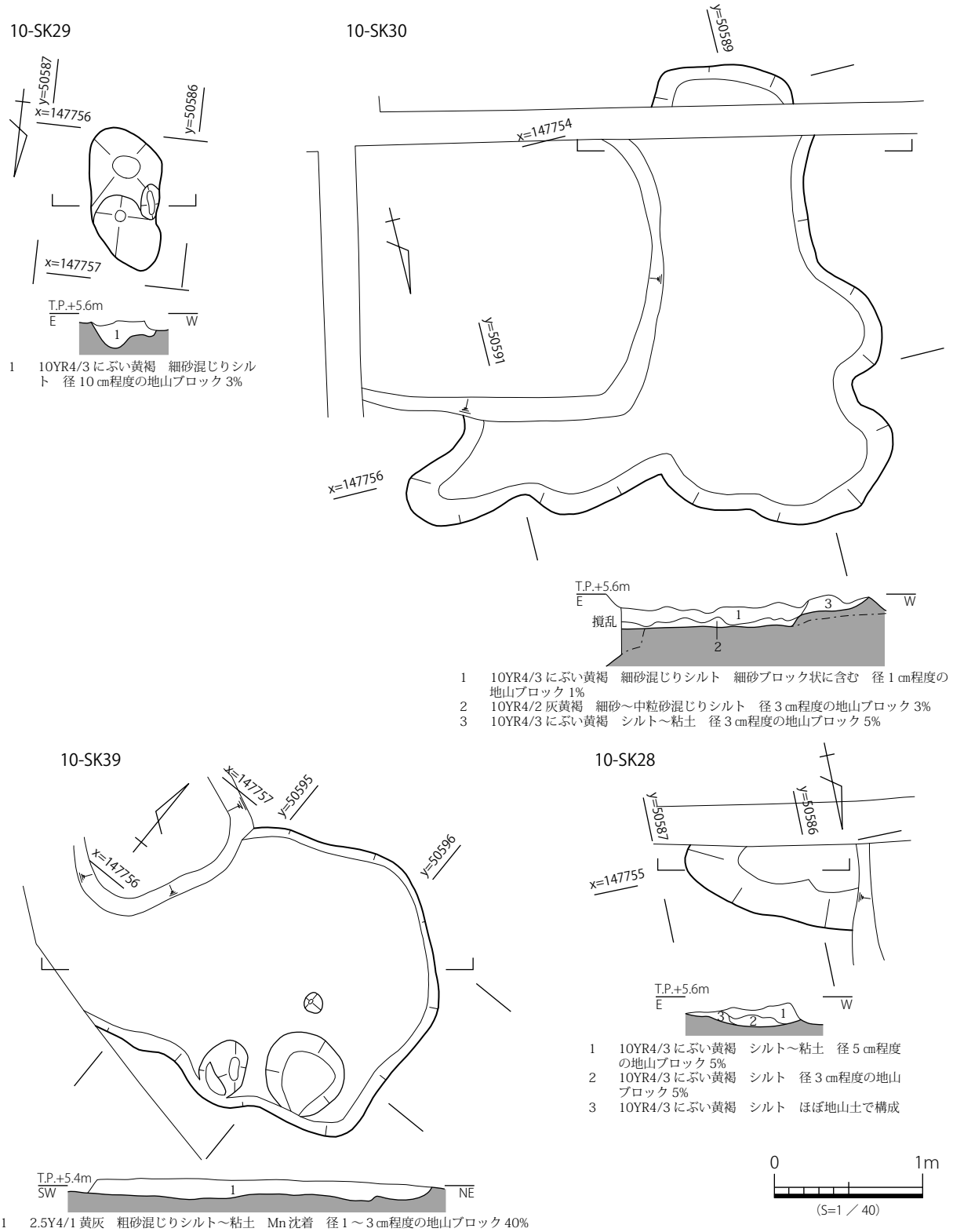


図 126　10-SK28・29・30・39　平・断面図

である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整形である。主軸方位 N-81°-W、検出面の標高は 5.60 mである。

長軸約 3.30 mを検出し、短軸約 3.00 m、深さ約 0.15 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は３層に分層でき、にぶい黄褐細砂混じりシルトと灰黄褐細砂～中粒砂混じりシルト、にぶい黄褐シルト～粘土である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため、詳細な時期は不明である。

10 － SK28（図 126）

第10調査区中央で検出した土坑状の遺構である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は楕円形である。主軸方位 N-70°-W、検出面の標高は 5.55 mである。

長軸約 1.17 mを検出し、短軸約 0.57 m、深さ約 0.14 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は３層に分層でき、上層がにぶい黄褐シルト～粘土、下層がにぶい黄褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

10 － SK39（図 126）

第 10 調査区中央東側で検出した土坑状の遺構である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整形である。主軸方位 N-62°-E、検出面の標高は 5.45 mである。

長軸約 2.85 mを検出し、短軸約 1.93 m、深さ約 0.14 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は単層で、黄灰粗砂混じりシルト～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

10 － SK42（図 127）

第 10 調査区中央東端で検出した土坑状の遺構である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整形である。主軸方位 N-79°-W、検出面の標高は 5.35 mである。

長軸約 2.30 mを検出し、短軸約 1.90 m、深さ約 0.20 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は２層に分層でき、灰黄褐細砂混じりシルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

10 － SK43（図 127）

第 10 調査区中央東端で検出した土坑状の遺構である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は三角形である。主軸方位 N-52°-E、検出面の標高は 5.45 mである。

長軸約 2.60 mを検出し、短軸約 1.20 m、深さ約 0.15 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は２層に分層でき、にぶい黄褐シルトである。下層は溝状となる。下層の溝状の掘方は 10-SD 8 と 13-SD21 と同一の溝の可能性もあるが、大部分が攪乱となっているため、同一の遺構との判断は差し控える。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

19 － SK ９（図 128）

第 19 調査区中央で検出した土坑である。19-SD ２に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は楕円形である。主軸方位 N-78°-E、検出面の標高は 5.60 mである。

長軸約 1.00 mを検出し、短軸約 0.62 m、深さ約 0.18 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は２層に分層でき、上層がにぶい黄褐シルト混じり細砂、下層が灰黄褐極細砂混じりシルト～粘土である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から、弥生時代後期末以前と考えられる。

14 － SP ３（図 128）

第 14 調査区北端で検出したピットである。14-SD ２に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-90°-E、検出面の標高は 5.30 mである。

長さ約 0.35 mを検出し、幅約 0.30 m、深さ約 0.08 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は褐灰シルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である

10 － SX36（図 129）

第 10 調査区中央南側で検出した性格不明遺構である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整形である。主軸方位 N-86°-W、検出面の標高は 5.40 mである。

長軸約 3.70 mを検出し、短軸約 1.35 m、深さ約 0.12 mを測る。断面形状は浅い皿状に南肩がゆ

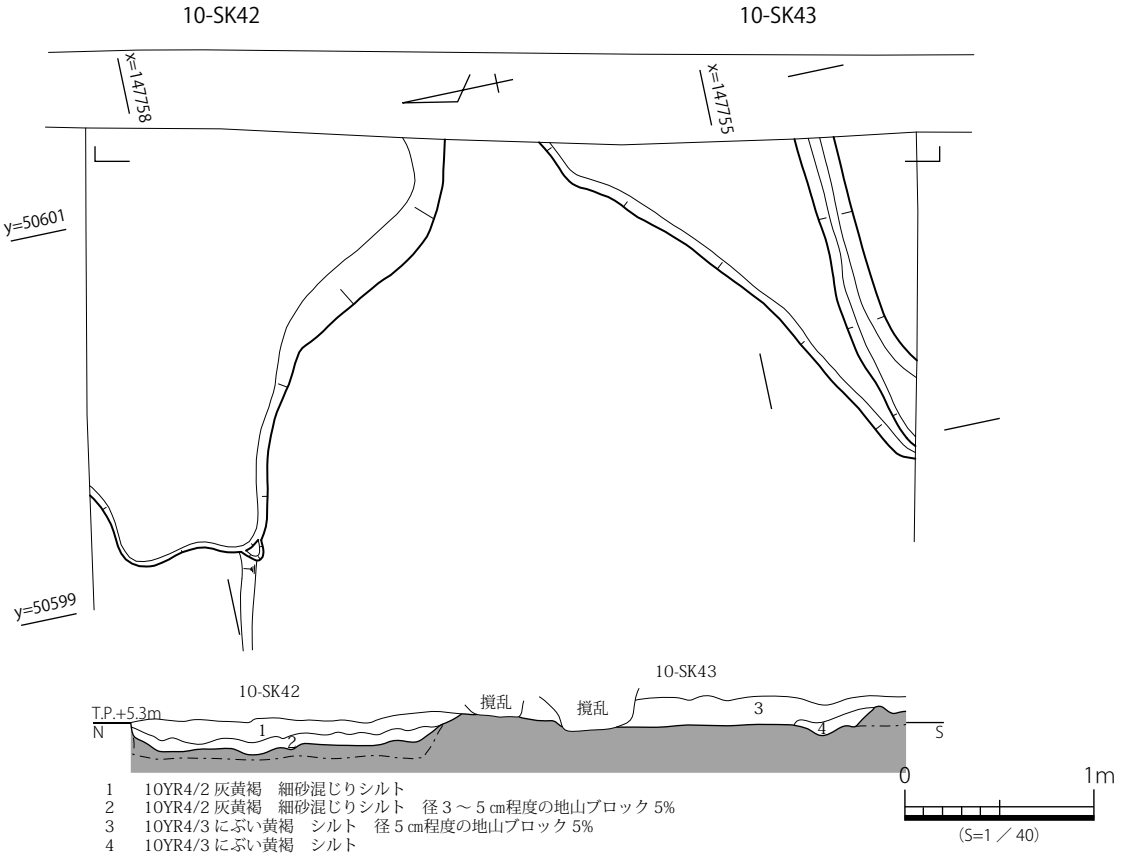


図 127　10-SK42・43　平・断面図

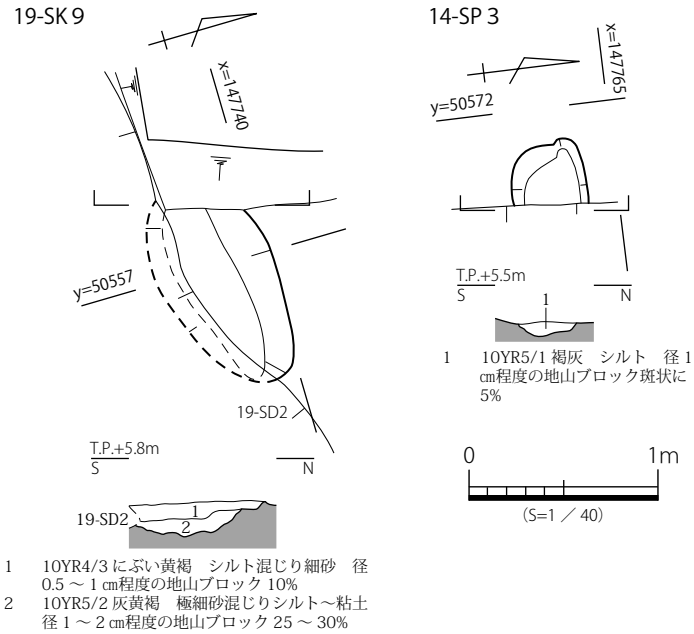


図 128　19-SK ９・14-SP ３　平・断面図

るやかである。

埋土は２層に分層でき、黄灰粘土混じり極細砂と暗灰黄細砂～粘土である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

10 － SX38（図 129）

第10調査区中央で検出した性格不明遺構である。攪乱と 10-SD12・40 に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整形である。主軸方位 N-53° -W、検出面の標高は 5.45 mである。

長軸約 4.60 mを検出し、短軸約 2.90 m、深さ約 0.08 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は２層に分層でき、上層が暗灰黄粗砂混じりシルト～粘土、下層が黄灰シルト混じり粘土である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

遺構の切り合い関係から、弥生時代後期末以前と考えられる。

10 － SX35（図 129）

第 10 調査区中央南端で検出した性格不明遺構である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状はひょうたん形である。主軸方位 N-68° -W、検出面の標高は 5.50 mである。

長軸約 2.00 mを検出し、短軸約 0.40 m、深さ約 0.06 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は黄灰粘土混じり細砂～シルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

20 － SD １（図 130）

第 20 調査区中央南側で検出した溝状の遺構である。北東に直行し、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。20-SD ２と同一の溝と考えられる。主軸方位 N-40° -E、検出面の標高は 5.80 mである。

長さ約 1.05 mを検出し、幅約 0.30 m、深さ約 0.18 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は黒褐細砂混じりシルトの単層である。

遺物は土師器高杯・土師器片、弥生土器片、サヌカイト剥片が出土した。

出土遺物の年代から、古墳時代と考えられる。

20 － SD ２（図 130）

第 20 調査区南東側で検出した溝である。東に直行し、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。20-SD １と同一の溝と考えられる。主軸方位 N-74° -E、検出面の標高は 5.75 mである。

長さ約 1.65 mを検出し、幅約 0.30 m、深さ約 0.08 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は３層に分層でき、上層が灰黄褐細砂混じり粘土～シルトと黒褐細砂～シルト、下層が黄灰シルト～粘土である。

遺物は土師器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

20 － SD ７（図 131 ～ 133）

第 20 調査区中央東側で検出した溝である。20-SD10 を切る。東に直行し、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-78° -W、検出面の標高は 5.80 mである。

長さ約 1.75 mを検出し、幅約 1.70 m、深さ約 0.14 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は３層に分層でき、黒褐微細砂～細砂混じりシルトと褐灰細砂質シルトである。

遺物は打製石斧の剥片（464）の他、弥生土器片、土師器？片が出土したが細片のため、詳細な時期は不明である。

遺構の切り合い関係から、弥生時代後期末以降と考えられる。

20 － SD ９（図 131 ～ 133）

第 20 調査区中央西側で検出した溝である。20-SD10 から北東に直行し、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。20-SD ８と合流する可能性がある。主軸方位 N-80° -E、検出面の標高は 5.80 mである。

長さ約 1.40 mを検出し、幅約 1.50 m、深さ約 0.60 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は 13 層に分層でき、埋土の観察から浚渫が行われたと考えられる。埋土上層が黒褐細砂混じりシルトと灰黄褐細砂混じりシルト、暗灰黄粘土混じりシルトである。中層が暗灰黄細砂質シルトと褐細砂混じりシルト、暗灰黄微細砂混じりシルトである。中層肩がにぶい黄褐シルト質微細砂と暗灰黄微細砂～細砂質シルト、黒褐微細砂混じりシルト、暗灰黄細砂混じりシルトである。下層が黒褐シルトと暗灰

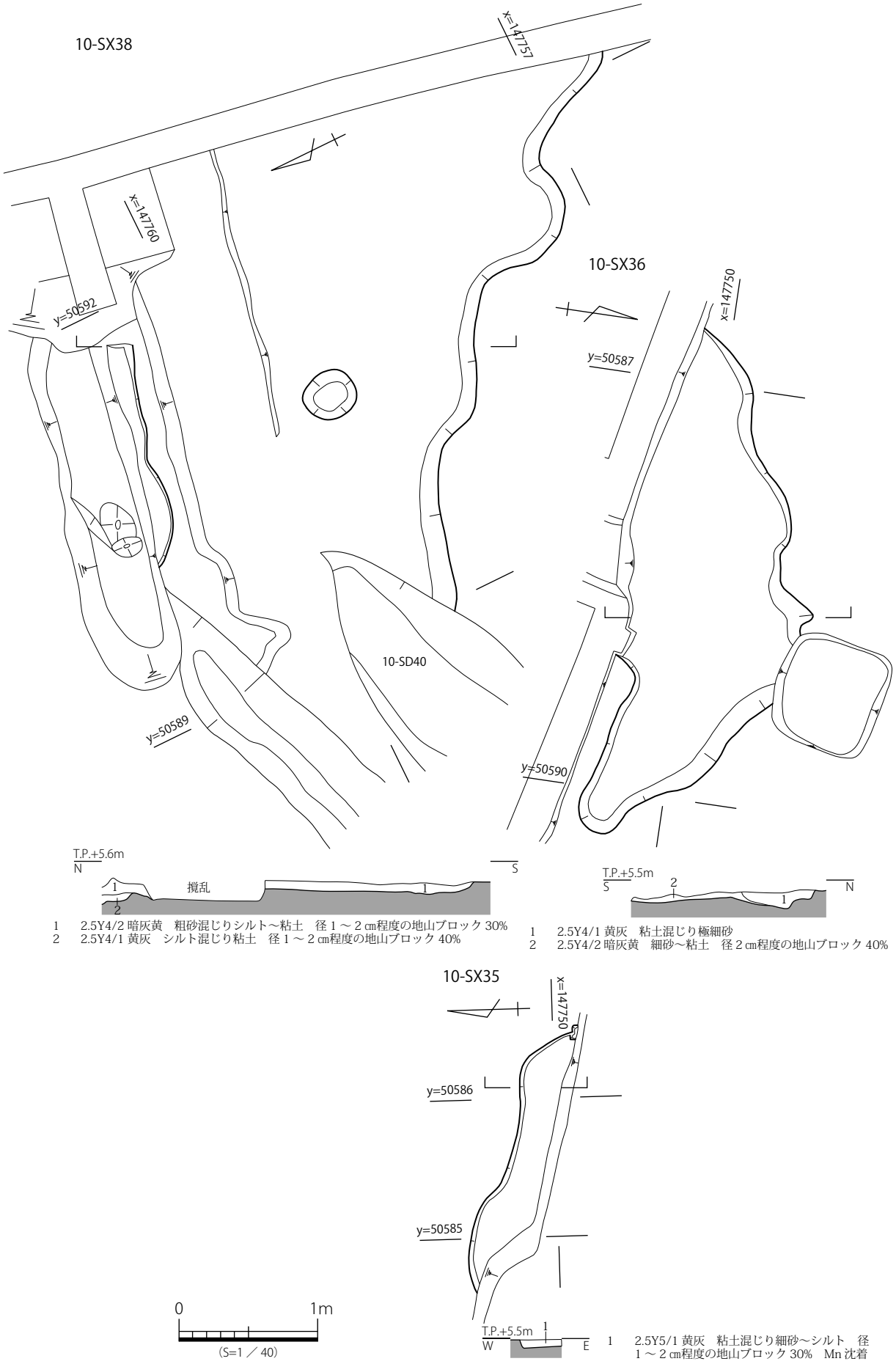
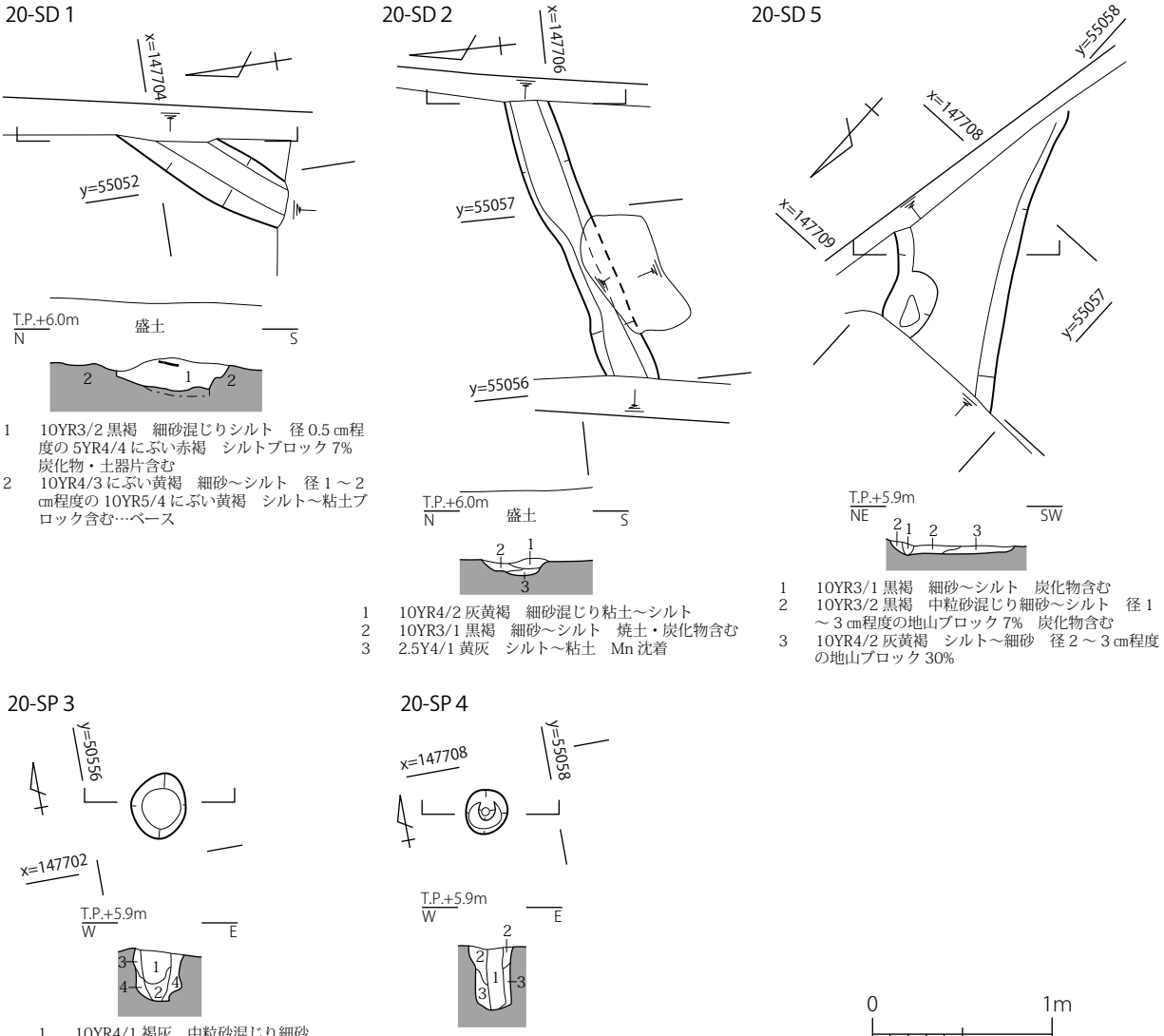


図 129　10-SX35・36・38　平・断面図



1　10YR3/2 黒褐　細砂混じりシルト　径 0.5 ㎝程度の 5YR4/4 にぶい赤褐　シルトブロック 7%　炭化物・土器片含む
2　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂～シルト　径 1 ～ 2 ㎝程度の 10YR5/4 にぶい黄褐　シルト～粘土ブロック含む…ベース

1　10YR4/2 灰黄褐　細砂混じり粘土～シルト
2　10YR3/1 黒褐　細砂～シルト　焼土・炭化物含む
3　2.5Y4/1 黄灰　シルト～粘土　Mn 沈着

1　10YR3/1 黒褐　細砂～シルト　炭化物含む
2　10YR3/2 黒褐　中粒砂混じり細砂～シルト　径 1 ～ 3 ㎝程度の地山ブロック 7%　炭化物含む
3　10YR4/2 灰黄褐　シルト～細砂　径 2 ～ 3 ㎝程度の地山ブロック 30%

1　10YR4/1 褐灰　中粒砂混じり細砂～シルト　径 1 ～ 2 ㎝程度の地山ブロック 5%
2　10YR3/1 黒褐　細砂混じりシルト
3　10YR3/2 黒褐　シルト～微細砂
4　10YR3/1 黒褐　細砂混じりシルト　径 2 ～ 3 ㎝程度の地山ブロック 10%

1　10YR2/2 黒褐　細砂～シルト　やや粘質
2　10YR4/2 灰黄褐　細砂～シルト　径 2 ㎝大の円礫多く含む
3　10YR4/1 褐灰　細砂混じりシルト～粘土　径 1 ～ 3 ㎝程度の地山ブロック 10%

図 130　20-SD 1・2・5・SP 3・4　平・断面図

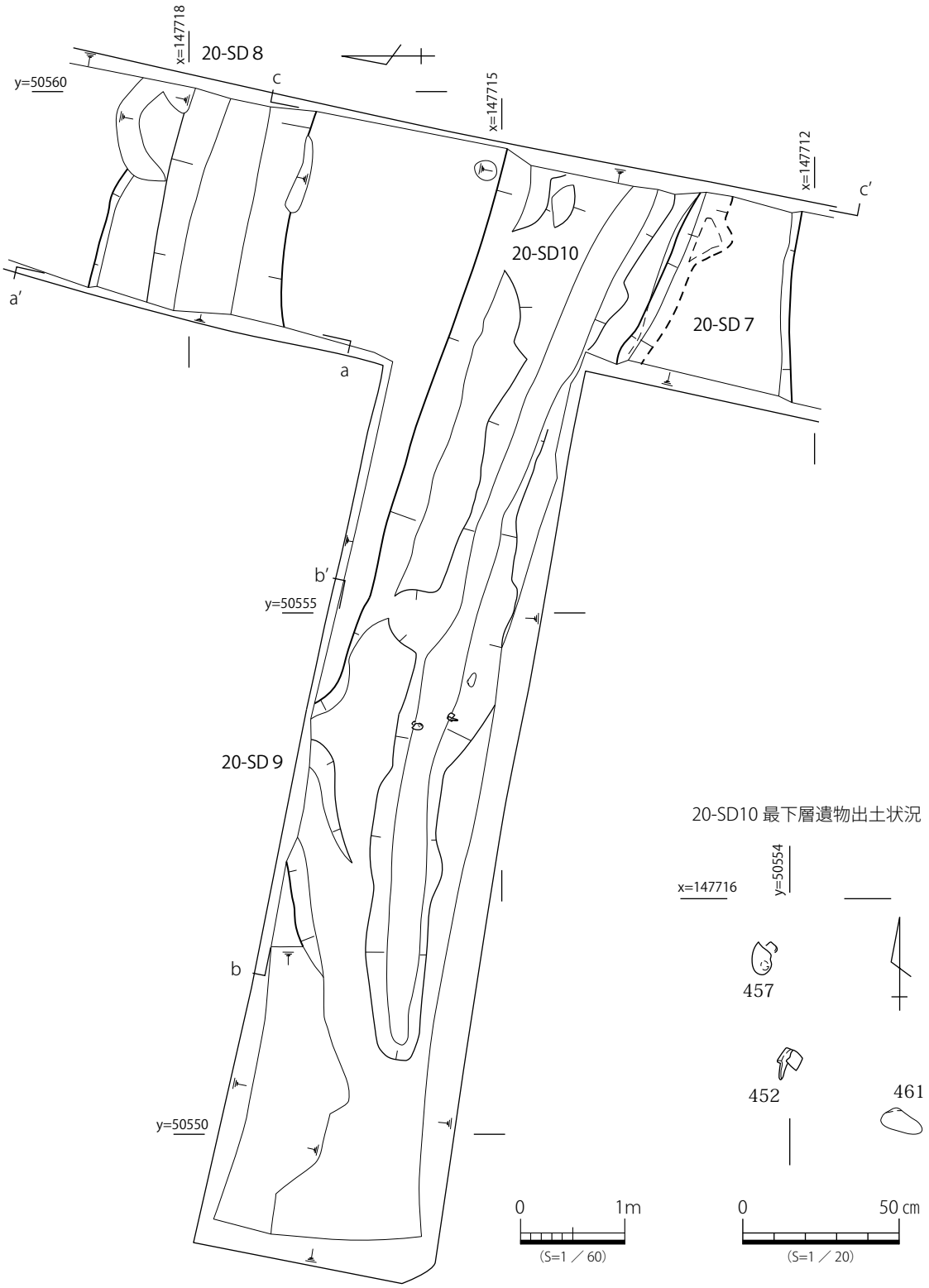
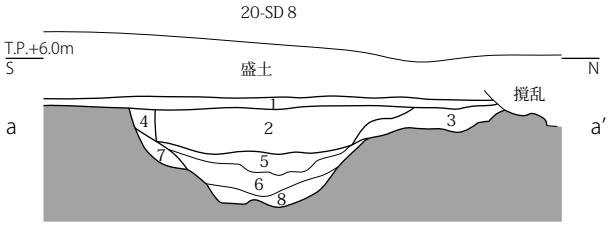
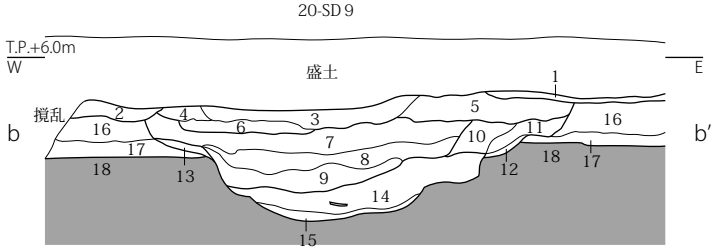


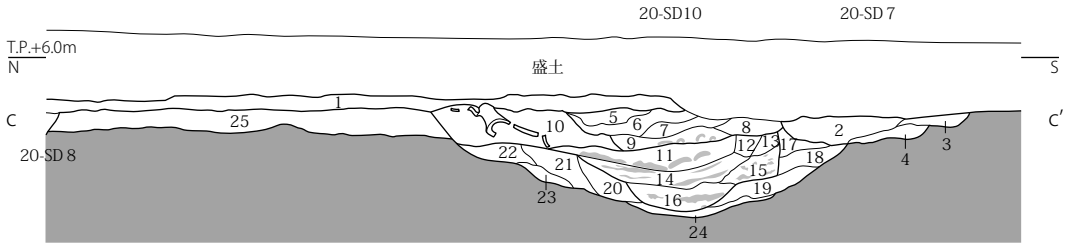
図 131　20-SD ７・８・９・10　平面図、遺物出土状況図



1　10YR5/1 褐灰　中粒砂混じりシルト～粘土…水田層
2　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト　土器片含む
3　2.5Y4/2 暗灰黄　細砂質シルト
4　10YR4/2 灰黄褐　細砂混じりシルト
5　10YR3/2 黒褐　シルト～粘土
6　10YR3/1 黒褐　シルト～粘土　粘性強
7　10YR4/2 灰黄褐　シルト～粘土
8　2.5Y3/1 黒褐　シルト～粘土　径 1 ～ 3 ㎝程度の
　　2.5Y5/2 暗灰黄　シルトブロック 7%



1　10YR6/1 褐灰　微細砂～細砂混じりシルト～粘土…水田層
2　10YR3/2 黒褐　細砂混じりシルト　径 3 ㎝程度の地山ブロック 5%
3　10YR3/1 黒褐　細砂混じりシルト　径 1 ～ 3 ㎝程度の灰褐色粘土ブロック・褐色シルトブロック斑状に 20%　土器片含む
4　10YR3/2 黒褐　細砂混じりシルト　径 2 ～ 3 ㎝程度の灰褐色粘土ブロック・褐色シルトブロック斑状に 10%
5　10YR4/2 灰黄褐　細砂混じりシルト　ほぼ地山土で構成
6　2.5Y4/2 暗灰黄　粘土混じりシルト
7　2.5Y5/2 暗灰黄　細砂質シルト　礫含む
8　10YR4/4 褐　細砂混じりシルト　上層に比べ粘性強
9　2.5Y4/2 暗灰黄　微細砂混じりシルト　径 1 ～ 2 ㎝程度の地山ブロック斑状に 5%
10　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト質微細砂　径 5 ㎝程度の地山ブロック 5%
11　2.5Y4/2 暗灰黄　微細砂～細砂質シルト　径 1 ㎝程度の地山ブロック 5%
12　2.5Y3/1 黒褐　微細砂混じりシルト
13　2.5Y5/2 暗灰黄　細砂混じりシルト
14　2.5Y3/1 黒褐　シルト　径 1 ㎝程度の暗灰黄色微細砂ブロック斑状に 20%
15　2.5Y5/2 暗灰黄　シルト混じり微細砂
16　10YR5/4 にぶい黄褐　シルト～粘土　礫含む…包含層
17　10YR5/2 灰黄褐　シルト質微細砂　Mn 多量沈着
18　10YR4/6 褐　細砂混じりシルト～粘土…ベース



1　10YR6/1 褐灰　微細砂～細砂混じりシルト～粘土…水田層
2　10YR3/2 黒褐　微細砂～細砂混じりシルト　Mn 沈着　径 3 ～ 5 ㎝程度の地山ブロック 10%…20-SD 7
3　10YR4/1 褐灰　細砂質シルト　Mn 沈着　径 1 ～ 2 ㎝程度の地山ブロック 5%…20-SD 7
4　10YR4/1 褐灰　細砂質シルト　Mn 多量沈着　径 3 ㎝程度の地山ブロック 20%…20-SD 7
5　10YR3/1 黒褐　細砂混じりシルト　径 3 ～ 5 ㎝程度の地山ブロック 15%
6　10YR2/1 黒　細砂混じりシルト　径 1 ㎝程度の地山ブロック 3%　細礫含む
7　10YR3/2 黒褐　シルト質細砂
8　10YR4/2 灰黄褐　シルト混じり微細砂　径 2 ㎝程度の地山ブロック 5%
9　10YR4/1 褐灰　シルト～微細砂　ラミナ（撹拌されている）
10　10YR3/2 黒褐　細砂混じりシルト　地山ブロック 50% 以上　土器片含む…人為的埋戻し土
11　2.5Y4/1 黄灰　シルト混じり微細砂　ラミナに乱れあり
12　2.5Y4/2 暗灰黄　微細砂～細砂　径 1 ㎝程度の黒色シルトブロック含む
13　10YR4/2 灰黄褐　微細砂質シルト　径 2 ～ 3 ㎝程度の地山ブロック 20%
14　10YR4/1 褐灰　シルト～微細砂　ラミナあり
15　10YR3/2 黒褐　微細砂質シルト　ラミナに乱れあり
16　2.5Y3/2 黒褐　シルト　ラミナあり　炭化物含む
17　2.5Y4/2 暗灰黄　細砂混じりシルト　径 3 ～ 5 ㎝程度の地山ブロック 10%
18　2.5Y5/1 黄灰　微細砂～細砂混じりシルト　径 1 ㎝程度の地山ブロック 10%　礫含む
19　2.5Y3/2 黒褐　細砂質シルト　径 1 ～ 2 ㎝程度の細砂ブロック 7%
20　2.5Y3/2 黒褐　細砂質シルト　19 層よりシルト強い　径 3 ㎝程度の細砂ブロック 10%
21　10YR4/2 灰黄褐　粗砂混じりシルト　径 3 ～ 5 ㎝程度の地山ブロック 20%
22　10YR4/4 褐　粗砂混じりシルト　地山ブロック 50% 以上
23　2.5Y4/1 黄灰　細砂混じりシルト　径 1 ～ 2 ㎝程度の地山ブロック 5%
24　2.5Y5/2 暗灰黄　細砂～中粒砂　礫含む
25　10YR5/4 にぶい黄褐　シルト～粘土　礫含む…包含層

…ラミナ

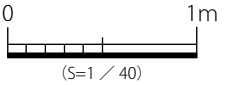


図 132　20-SD 7・8・9・10　断面図

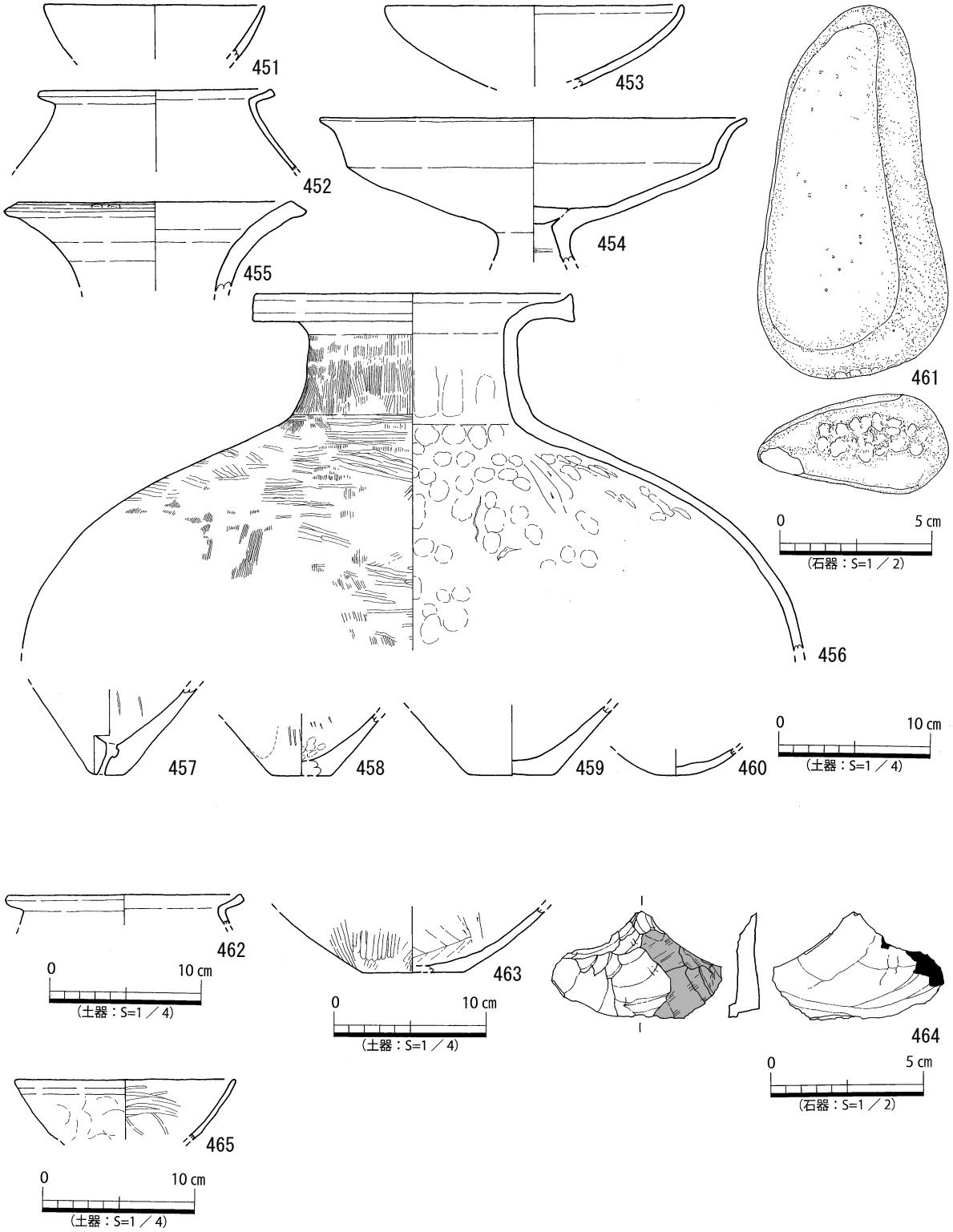


図 133　第 20 調査区　出土遺物実測図

黄シルト混じり微細砂である。

遺物は下層から弥生土器壺底部（463）、弥生土器片が、上層から須恵器片、弥生土器片が出土した。

出土遺物の年代から、溝の掘削時は弥生時代後期、最終埋没は古墳時代と考えられる。

20 － SD 8（図 131 ～ 133）

第 20 調査区北東側で検出した溝である。東に直行し、攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-77° -W、検出面の標高は 5.75 mである。

長さ約 2.10 mを検出し、幅約 1.90 m、深さ約 0.52 mを測る。断面形状は椀状で両肩が緩やかである。

埋土は 7 層に分層でき、埋土の観察から浚渫が行われたと考えられる。最終埋没がにぶい黄褐シルト、溝肩が暗灰黄細砂質シルトである。溝下層が灰黄褐細砂混じりシルトと黒褐シルト～粘土、灰黄褐シルト～粘土である。溝下層肩が黒褐シルト～粘土である。

遺物は上層から弥生土器甕口縁部（462）、弥生土器片が、下層から弥生土器壺・弥生土器片が、このほか弥生土器壺底部・弥生土器片が出土した。

出土遺物の年代から弥生時代後期末と考えられる。

20 － SD10（図 131 ～ 133）

第 20 調査区中央東側で検出した溝である。東にやや湾曲し、攪乱と 20-SD 7 に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-73° -W、検出面の標高は 5.75 mである。

長さ約 10.65 mを検出し、幅約 2.20 m、深さ約 0.55 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は 20 層に分層でき、堆積状況から複数回の浚渫が行われたと考えられる。上層が黒褐細砂混じりシルトと黒細砂混じりシルト、黒褐シルト質細砂、灰黄褐シルト混じり微細砂、褐灰シルト～微細砂である。上層溝肩は、黒褐細砂混じりシルトで弥生土器壺（456）が出土した。人為的な埋め戻し土の可能性がある。中層は黄灰シルト混じり微細砂と暗灰黄微細砂～細砂、灰黄褐微細砂質シルト、褐灰シルト～微細砂、黒褐微細砂質シルト、黒褐シルトである。ラミナが確認できることから、流水があったと想定できる。下層は暗灰黄細砂混じりシルトと黄灰微細砂～細砂混じりシルト、黒褐細砂質シルト、灰黄褐粗砂混じりシルトと褐粗砂混じりシルト、黄灰細砂混じりシルト、暗灰黄細砂～中粒砂である。

遺物は最上層から弥生土器高杯（454）、弥生土器片が、上層溝肩から弥生土器壺（456）と弥生土器高杯？（453）、弥生土器片が、下層から弥生土器甕底部（459・460）、弥生土器片が、最下層から弥生土器鉢？（451）、弥生土器壺口縁部（455）、弥生土器甕口縁部（452）、弥生土器甕底部（458）、敲き石（461）、弥生土器片、木片が、最下層溝肩付近から弥生土器甕底部（457）、弥生土器片が出土した。このうち高杯（454）は、最上層と上層溝肩、最下層から出土した遺物が接合した。

出土遺物の年代から、弥生後期末と考えられる。

20 － SD 5（図 130）

第 20 調査区中央東側で検出した溝状の遺構である。北西に直行し、攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-31° -W、検出面の標高は 5.75 mである。

長さ約 1.70 mを検出し、幅約 0.70 m、深さ約 0.06 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は 3 層に分層でき、黒褐細砂～シルトと黒褐中粒砂混じり細砂～シルト、灰黄褐シルト～細砂である。

遺物は弥生土器片・土師器？片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

20 － SP 3（図 130）

第 20 調査区東南側で検出したピット状の遺構である。検出した平面形状は楕円形である。主軸方位 N-16° -E、検出面の標高は 5.75 mである。

長軸約 0.37 mを検出し、短軸約 0.30 m、深さ約 0.30 mを測る。断面形状は U 字形である。

埋土は 4 層に分層でき、柱痕が確認できる。柱痕上層が褐灰中粒砂混じり細砂～シルト、下層が黒褐細砂混じりシルトである。掘方が黒褐シルト～微細砂と黒褐細砂混じりシルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

20 － SP 4（図 130）

第 20 調査区中央東側で検出したピットである。検出した平面形状は円形である。検出面の標高は 5.70 mである。

直径約 0.24 mを検出し、深さ約 0.36 mを測る。

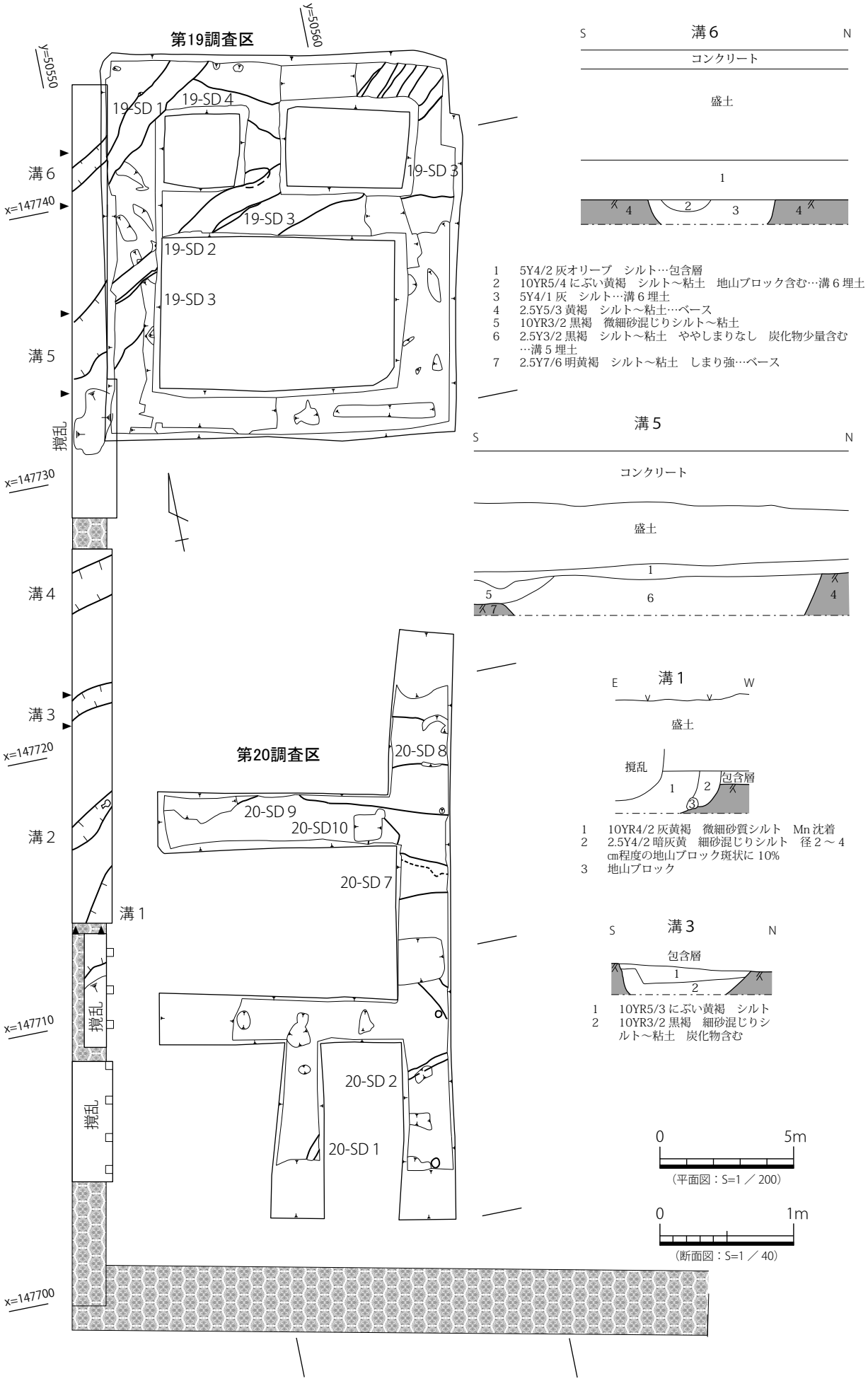


図 134　立会調査　平・断面図

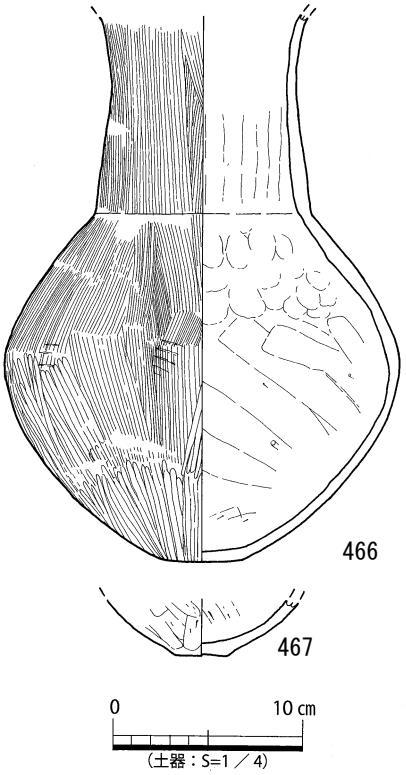


図 135　立会調査－溝２　出土遺物実測図

断面形状はＵ字形である。

埋土は３層に分層でき、柱痕が黒褐細砂～シルト、掘方上層が灰黄褐細砂～シルト、掘方下層が褐灰細砂混じりシルト～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

立会記録（図 134・135）

第 19･20 調査区の西側で、擁壁建設工事に伴い、工事立会を実施した。溝１は、20-SD ９・10 に続くと考えられる。溝２・溝３・溝４については、調査区外にあたるため溝の連続性は確認できていない。溝５は 19-SD2･3 へ、溝６は 19-SD １へと続く。

このうち、溝２で弥生土器長頸壺（466）・弥生土器壺底部（467）が出土した。遺跡の西側では、同時期の複数条の溝が掘削されていたことがうかがえる。

第 20 調査区攪乱出土遺物（図 133）

瓦器椀（465）が出土した。

中央南工区

中央南工区は、第 11 ～ 13 調査区である。

11 － SD ４・５（図 139・141）

第 11 調査区全域で検出した溝である。攪乱と 11-SD 1 に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。12-SD 5 へと続く。主軸方位 N-87° -E、検出面の標高は 5.55 ～ 5.60 mである。

長さ約 25.40 mを検出し、幅約 2.16 ～ 2.50 m、深さ約 0.35 ～ 0.28 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は a-a' 断面が３層に分層でき、上層が灰黄褐粘土混じり極細砂、中層が灰黄褐細砂、下層が灰黄褐粗砂混じり極細砂～粘土である。

b-b' 断面は３層に分層でき、上層が灰黄褐細砂～極細砂混じり粘土と褐灰粘土～極細砂、下層が黒褐粗砂混じり粘土である。

遺物は 11-SD 5 から弥生土器壺（469）、スクレイパー（470）、弥生土器壺 (前期)、弥生土器壺 (後期)、サヌカイト剥片、弥生土器片が、11-SD 4 から弥生土器片が出土した。

出土遺物の年代から、弥生時代後期と考えられる。

12 － SD ５（図 140・141）

第 12 調査区西側で検出した溝状の遺構である。11-SD 5 から続く。攪乱と 12-SD 1・2・3 に切られ、12-SD10 を切る。調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。大部分が調査区外へと延びるため、主軸方位は不明である。検出面の標高は 5.40 mである。

第 12 調査区では長さ約 41.60 mを検出し、幅約 2.50 m、深さ約 0.20 mを測る。断面形状は浅い皿状である。第 11 調査区からの検出長は、約 67.0 mである。

埋土は２層に分層でき、上層が褐灰中粒砂混じり細砂～シルト、下層が暗灰黄粘土混じり細砂～シルトである。

遺物は弥生土器壺（468）、石器二次加工ある剥片（471）が出土したほか、図化できなかったが弥生土器壺・弥生土器甕？底部・弥生土器片、微細剥離痕ある剥片・サヌカイト剥片、炭化物が出土した。

出土遺物の年代から、弥生時代後期と考えられる。

12 － SD11（図 140）

第 12 調査区中央で検出した溝状の遺構である。12-SD ２・５に切られ、12-SD10 を切る。東西に直行し調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-78° -W、検出面の標高は 5.20 mである。

長さ約 5.40 mを検出し、幅約 0.25 m、深さ約 0.08 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で、褐灰シルト混じり粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から、弥生時代前期以降と考えられる。

11 － SD ６（図 139）

第 11 調査区中央～東側で検出した溝状の遺構である。11-SD5 の下層で検出した。東に直行し、攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-81° -W、検出面の標高は 5.30 mである。

長さ約 13.20 mを検出し、幅約 0.80 ～ 1.17 m、深さ約 0.19 ～ 0.22 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は４層に分層でき、途中浚渫が行われた可能性がある。黄灰粘土と灰黄褐粗砂混じり粘土、褐粗砂混じり粘土、灰黄褐細砂混じり粘土である。

遺物は図化できなかったが弥生土器甕底部・弥生土器片が出土した。

出土遺物の年代から、弥生時代前期と考えられる。

12 － SD ６（図 140・141）

第 12 調査区西側～中央で検出した溝状の遺構である。12-SD 5 の下層で検出し、東西に直行する。攪乱と 12-SD 1 ・10 に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-76° -W、検出面の標高は 5.25 mである。

長さ約 13.20 mを検出し、幅約 0.56 m、深さ約 0.14 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で、にぶい黄褐中粒砂混じり粘土～シルトである。

遺物は弥生土器壺（472）、弥生土器甕底部（474）、弥生土器壺底部（473）、スクレイパー（475）、弥生土器片、サヌカイト剥片が出土した。

出土遺物の年代から、弥生時代前期と考えられる。

第11調査区

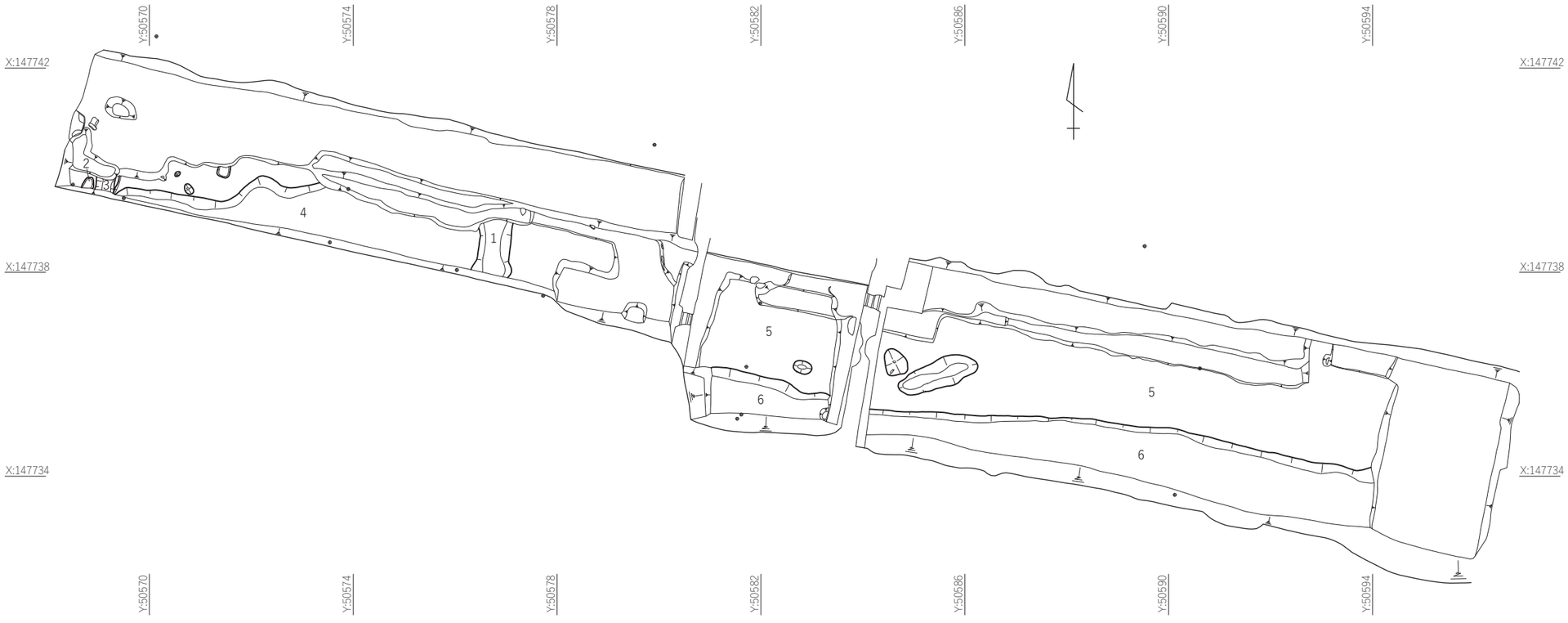


図 136　第 11 調査区　平面図 (S= 1 ／ 100)

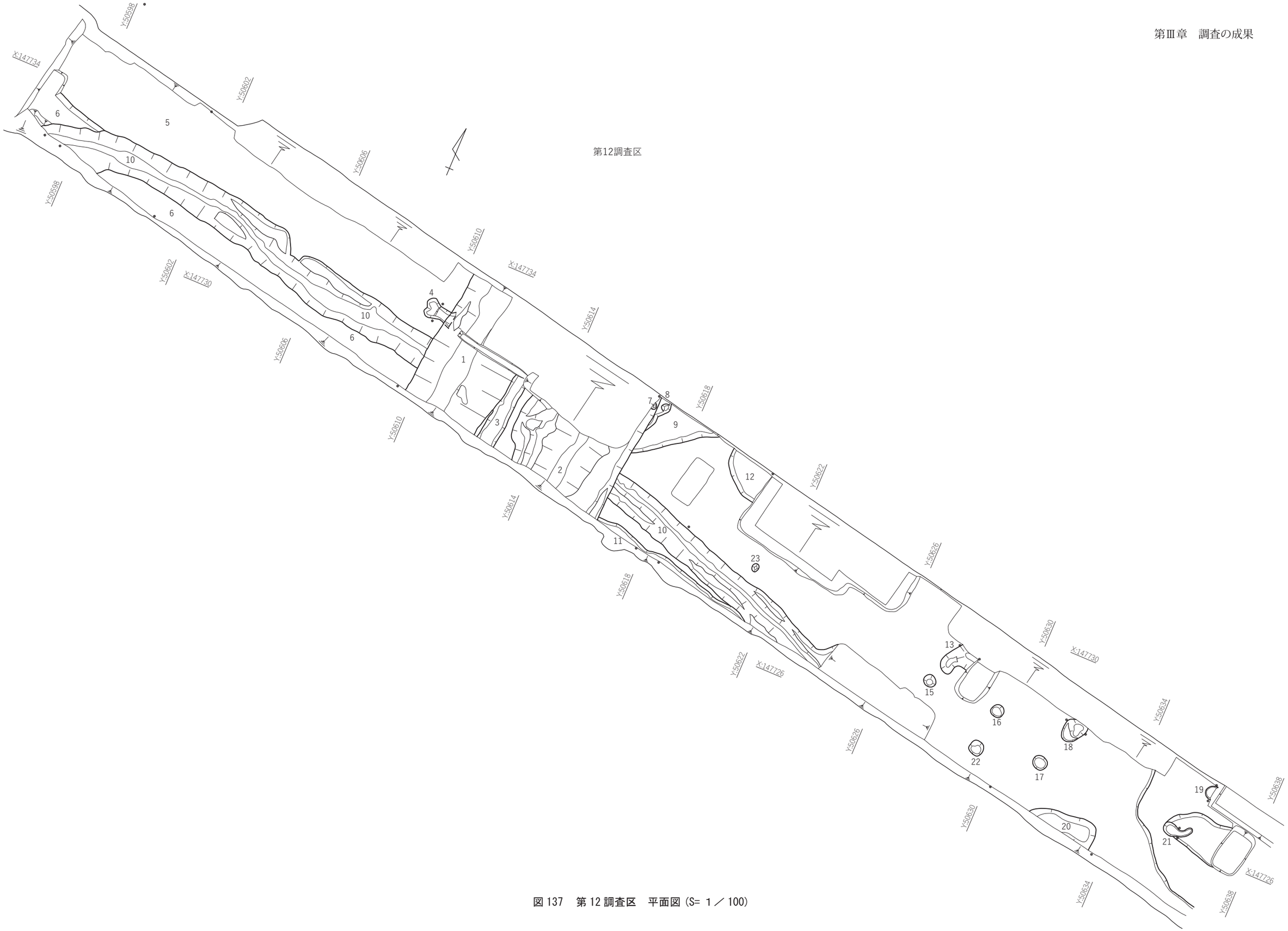


図 137　第 12 調査区　平面図 (S= 1 ／ 100)

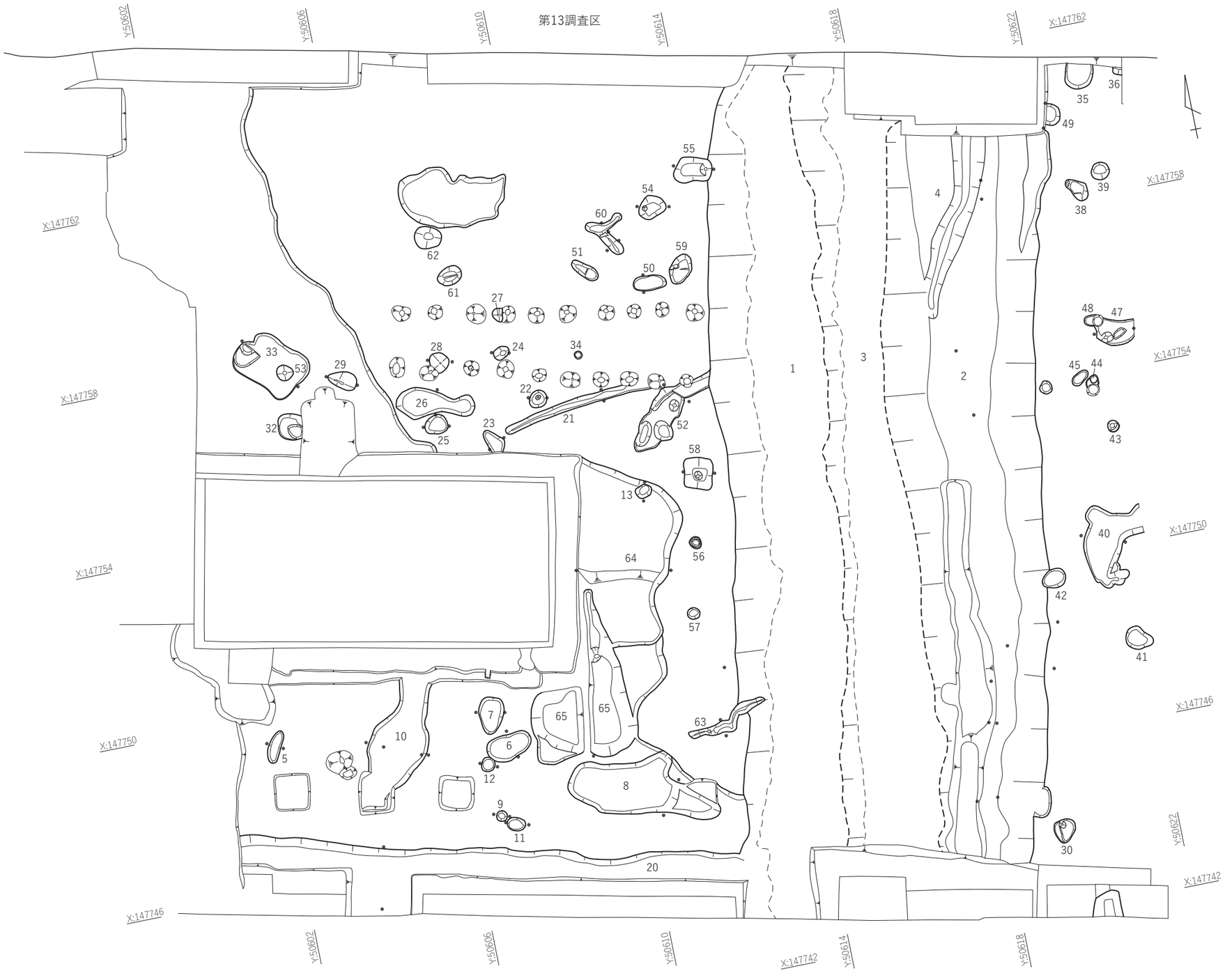


図 138　第 13 調査区　平面図 (S= 1 ／ 100)

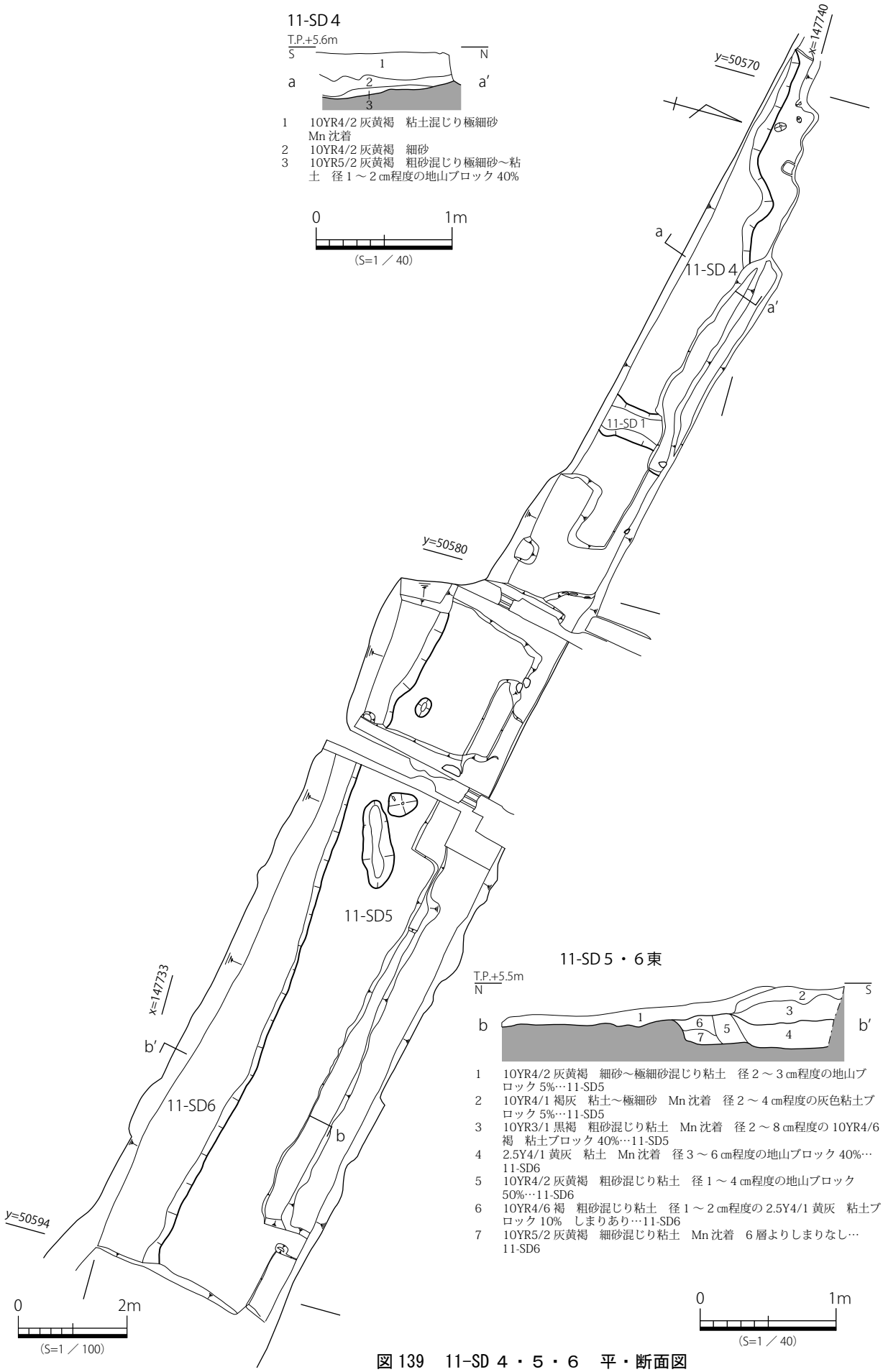
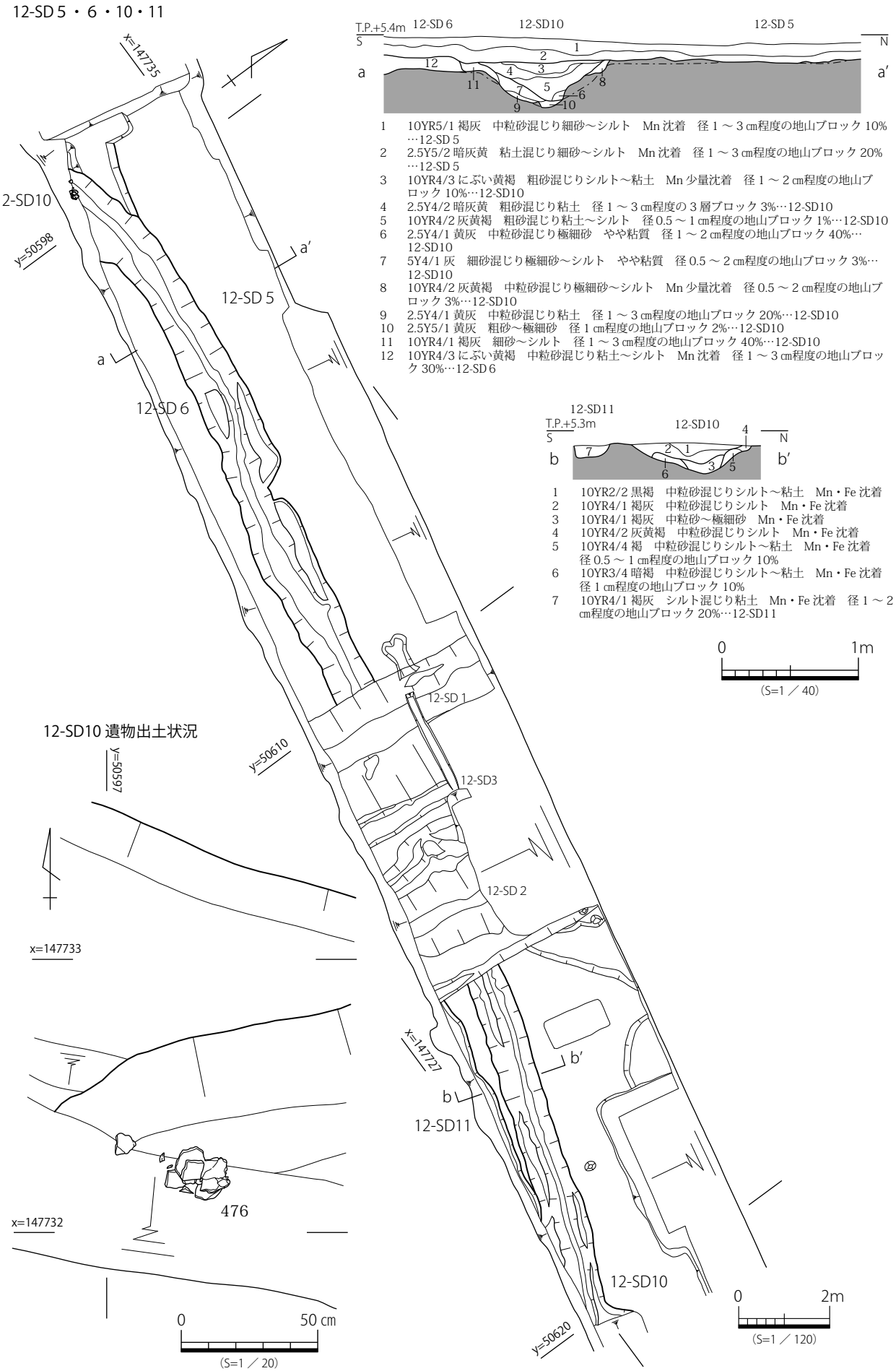


図 139　11-SD ４・５・６　平・断面図

12-SD５・６・10・11



1　10YR5/1 褐灰　中粒砂混じり細砂～シルト　Mn 沈着　径１～３㎝程度の地山ブロック 10%…12-SD５
2　2.5Y5/2 暗灰黄　粘土混じり細砂～シルト　Mn 沈着　径１～３㎝程度の地山ブロック 20%…12-SD５
3　10YR4/3 にぶい黄褐　粗砂混じりシルト～粘土　Mn 少量沈着　径１～２㎝程度の地山ブロック 10%…12-SD10
4　2.5Y4/2 暗灰黄　粗砂混じり粘土　径１～３㎝程度の３層ブロック 3%…12-SD10
5　10YR4/2 灰黄褐　粗砂混じり粘土～シルト　径 0.5 ～１㎝程度の地山ブロック 1%…12-SD10
6　2.5Y4/1 黄灰　中粒砂混じり極細砂　やや粘質　径１～２㎝程度の地山ブロック 40%…12-SD10
7　5Y4/1 灰　細砂混じり極細砂～シルト　やや粘質　径 0.5 ～２㎝程度の地山ブロック 3%…12-SD10
8　10YR4/2 灰黄褐　中粒砂混じり極細砂～シルト　Mn 少量沈着　径 0.5 ～２㎝程度の地山ブロック 3%…12-SD10
9　2.5Y4/1 黄灰　中粒砂混じり粘土　径１～３㎝程度の地山ブロック 20%…12-SD10
10　2.5Y5/1 黄灰　粗砂～極細砂　径１㎝程度の地山ブロック 2%…12-SD10
11　10YR4/1 褐灰　細砂～シルト　径１～３㎝程度の地山ブロック 40%…12-SD10
12　10YR4/3 にぶい黄褐　中粒砂混じり粘土～シルト　Mn 沈着　径１～３㎝程度の地山ブロック 30%…12-SD６

12-SD11
T.P.+5.3m
S
N
12-SD10
b
b′
1
2
3
4
5
6
7

1　10YR2/2 黒褐　中粒砂混じりシルト～粘土　Mn・Fe 沈着
2　10YR4/1 褐灰　中粒砂混じりシルト　Mn・Fe 沈着
3　10YR4/1 褐灰　中粒砂～極細砂　Mn・Fe 沈着
4　10YR4/2 灰黄褐　中粒砂混じりシルト　Mn・Fe 沈着
5　10YR4/4 褐　中粒砂混じりシルト～粘土　Mn・Fe 沈着　径 0.5 ～１㎝程度の地山ブロック 10%
6　10YR3/4 暗褐　中粒砂混じりシルト～粘土　Mn・Fe 沈着　径１㎝程度の地山ブロック 10%
7　10YR4/1 褐灰　シルト混じり粘土　Mn・Fe 沈着　径１～２㎝程度の地山ブロック 20%…12-SD11

0　1m
(S=1 ／ 40)

図 140　12-SD５・６・10・11　平・断面図

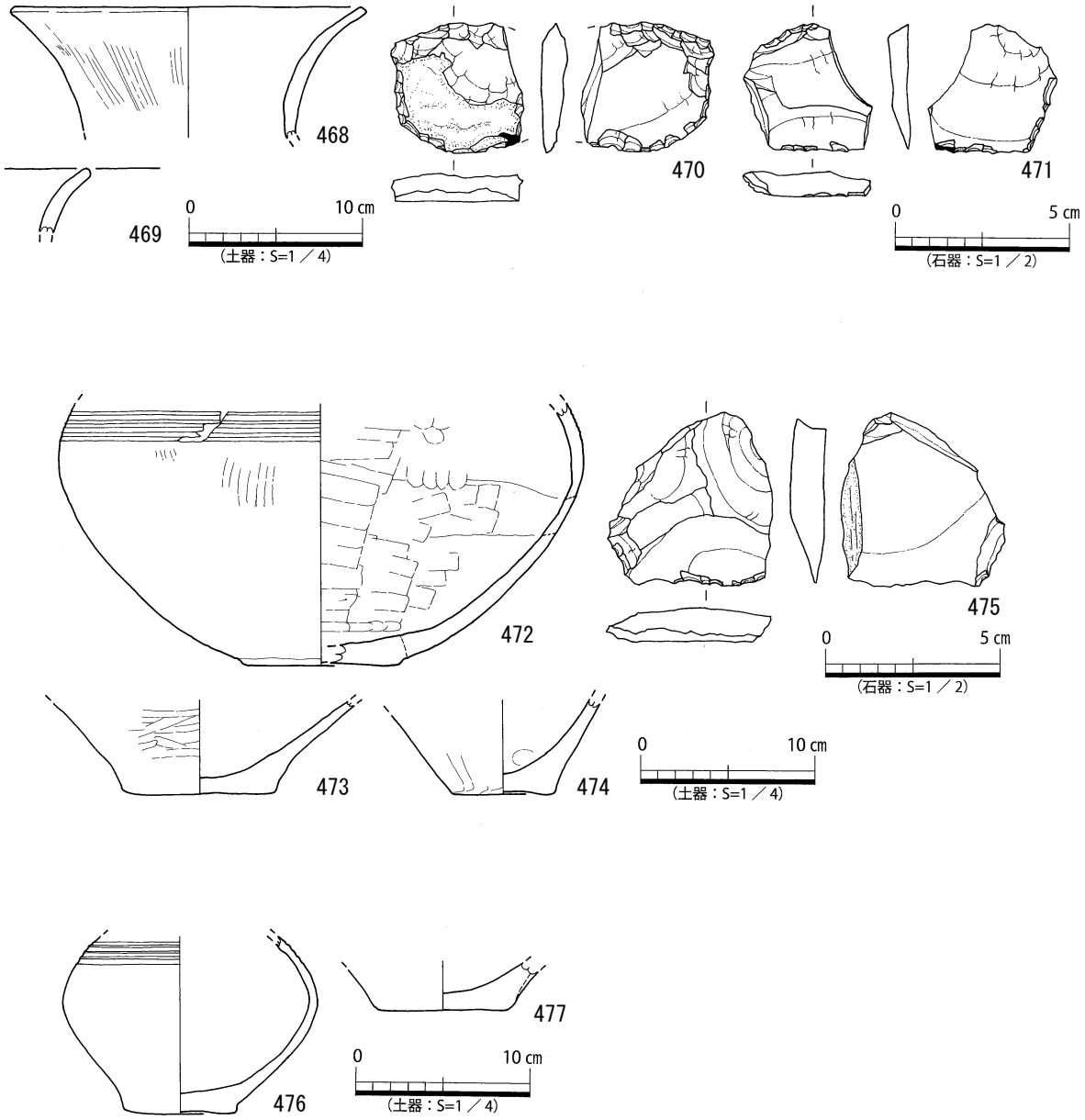


図 141　11・12-SD ５・12-SD ６・10　出土遺物実測図

12 ― SD10（図 140・141）

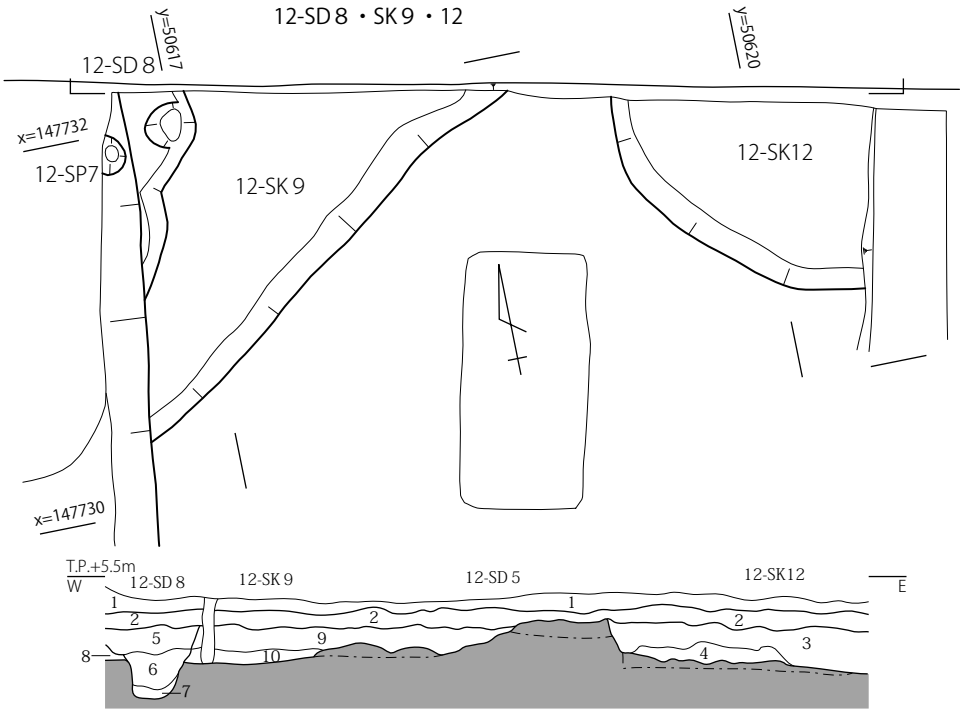
第 12 調査区西側～中央で検出した溝状の遺構である。12-SD ５の下層で検出した。東西にゆるく湾曲し、攪乱と 12-SD １・２・３に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-77°-W、検出面の標高は 5.20 mである。

長さ約 22.50 mを検出し、幅約 1.10 ～ 0.87 m、深さ約 0.33 ～ 0.22 mを測る。断面形状はＶ字形に両肩テラスである。

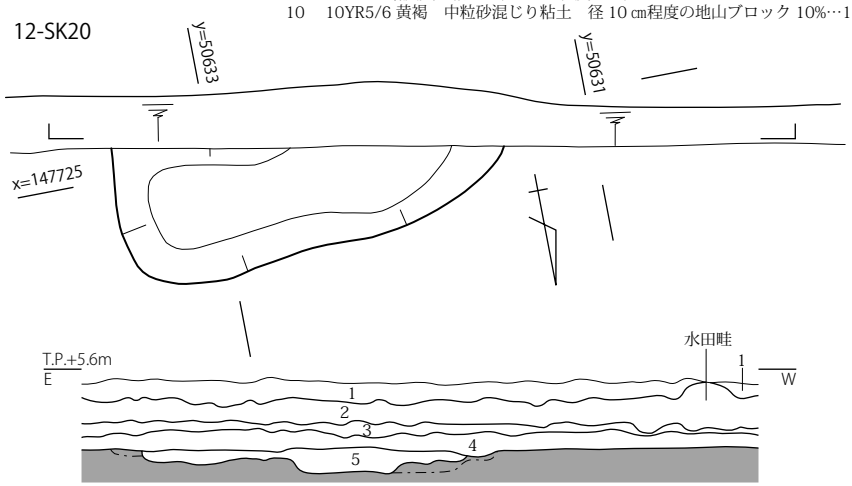
埋土は a-a' 断面で９層に分層でき、上層がにぶい黄褐粗砂混じりシルト～粘土と暗灰黄粗砂混じり粘土、灰黄褐粗砂混じり粘土～シルト、黄灰中粒砂混じり極細砂である。下層が灰細砂混じり極細砂～シルトと灰黄褐中粒砂混じり極細砂～シルト、黄灰中粒砂混じり粘土、黄灰粗砂～極細砂、褐灰細砂～シルトである。

b-b' 断面では６層に分層でき、堆積状況から、浚渫が行われたと考えられる。上層が黒褐中粒砂混じりシルト～粘土と褐灰中粒砂混じりシルト、下層が褐灰中粒砂～極細砂、下層溝肩が灰黄褐中粒砂混じりシルトと褐中粒砂混じりシルト～粘土と暗褐中粒砂混じりシルト～粘土である。

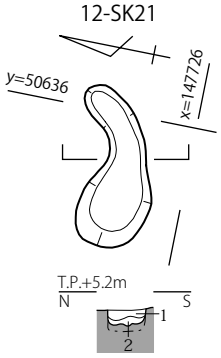
遺物は弥生土器壺（476）、弥生土器壺底部（477）が出土した。そのほか図化できなかったが弥生土器



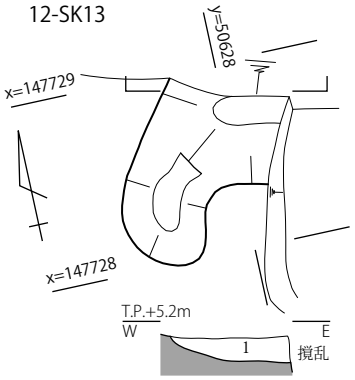
1　10YR4/2 灰黄褐　粘土　径１㎝程度の地山ブロック 2%…水田層
2　10YR5/2 灰黄褐　シルト～粘土　径 10 ㎝程度の地山ブロック 5%…12-SD５
3　2.5Y5/2 暗灰黄　粘土　径５㎝程度の地山ブロック 8%…12-SK12
4　2.5Y6/2 灰黄　粘土　３層に比べて粘性強　径３～５㎝程度の地山ブロック 2%…12-SK12
5　2.5Y4/2 暗灰黄　粘土　径５㎝程度の地山ブロック 10%…12-SD8
6　10YR4/3 にぶい黄褐　粘土　８層に比べて粘性強　ほぼ地山土で構成…12-SD８
7　10YR5/2 灰黄褐　粘土　径３㎝程度の地山ブロック 3%…12-SD８
8　10YR4/3 にぶい黄褐　粘土…12-SK９
9　2.5Y5/2 暗灰黄　粘土　径 10 ㎝程度の地山ブロック 10%…12-SK９
10　10YR5/6 黄褐　中粒砂混じり粘土　径 10 ㎝程度の地山ブロック 10%…12-SK９



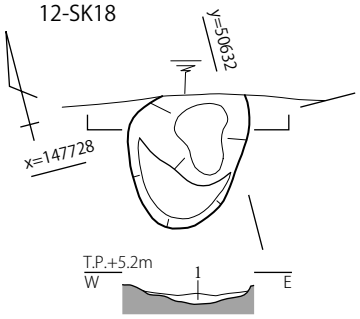
1　5Y5/2 灰オリーブ　細砂～極細砂　Mn 少量沈着　炭化物含む…洪水砂
2　5Y6/2 灰オリーブ　細砂～シルト混じり粘土　Mn 少量沈着　炭化物含む…水田層
3　2.5Y4/2 暗灰黄　細砂混じりシルト～粘土　Mn・Fe 少量沈着　径１～２㎝程度の地山ブロック 20%…12-SD５
4　10YR4/2 灰黄褐　粗砂混じりシルト～粘土　Mn 少量沈着　径１㎝程度の地山ブロック 7%…12-SD６
5　2.5Y4/3 オリーブ褐　中粒砂混じりシルト～粘土　Mn 沈着　Fe 少量沈着　径１㎝程度の地山ブロック 10%…12-SK20



1　10YR4/2 灰黄褐　細砂混じりシルト～粘土　Mn 少量沈着　径１㎝程度の地山ブロック 10%
2　10YR5/2 灰黄褐　シルト～粘土　Mn 少量沈着　径１～２㎝程度の地山ブロック 30%



1　2.5Y5/1 黄灰　シルト～粘土　Mn・Fe 沈着　径１～２㎝程度の地山ブロック 10%



1　2.5Y5/2 暗灰黄　粘土混じりシルト　Mn・Fe 少量沈着　径１～２㎝程度の地山ブロック 20%

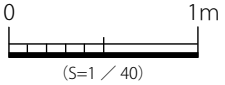


図 142　12-SD８・SK９・12・13・18・20・21　平・断面図

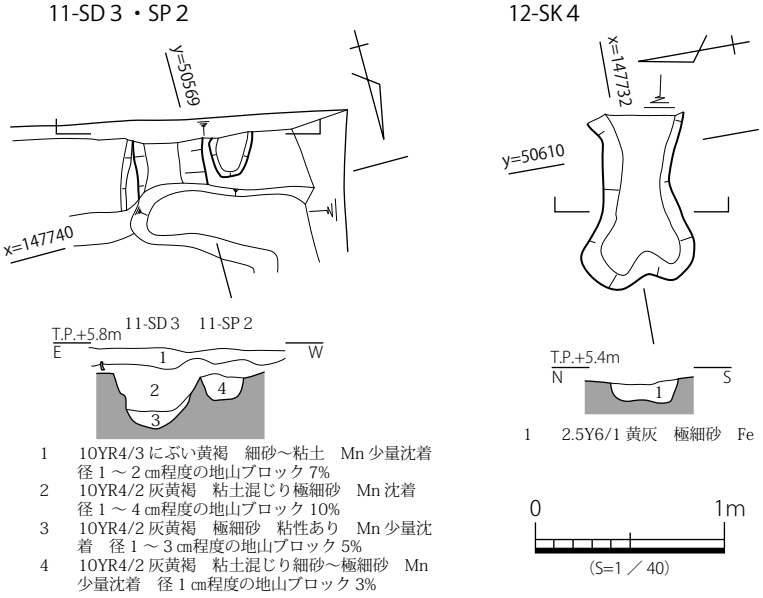


図 143　11-SD ３・SP ２・12-SK ４　平・断面図

甕（前期）・弥生土器片、サヌカイト剥片が出土した。

出土遺物の年代から、弥生時代前期と考えられる。

12 － SK20（図 142）

第 12 調査区東側で検出した土坑である。12-SD ５・６に切られる。調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は楕円形である。主軸方位 N-87°-E、検出面の標高は 5.20 m である。

長軸約 2.06 mを検出し、短軸約 0.70 m、深さ約 0.12 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土はオリーブ褐中粒砂混じりシルト～粘土の単層である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

遺構の切り合い関係から、弥生時代前期と考えられる。

12 － SD ８（図 142）

第 12 調査区中央で検出した溝状の遺構である。攪乱と 12-SD ２・５に切られ、12-SK ９を切る。調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-23°-E、検出面の標高は 5.10 mである。

長さ約 1.10 mを検出し、幅約 0.37 m、深さ約 0.23 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は３層に分層でき、上層が暗灰黄粘土とにぶい黄褐粘土、下層が灰黄褐粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から、弥生時代後期末以前と考えられる。

12 － SK ９（図 142）

第 12 調査区中央で検出した土坑状の遺構である。12-SD ２・５・８に切られる。調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は三角形である。主軸方位 N-53°-E、検出面の標高は 5.30 mである。

長軸約 2.55 mを検出し、短軸約 1.40 m、深さ約 0.20 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は３層に分層でき、上層がにぶい黄褐粘土と暗灰黄粘土、下層が黄褐中粒砂混じり粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明であるが、切り合い関係から、弥生時代後期末以前と考えられる。

12 － SK12（図 142）

第 12 調査区中央で検出した土坑である。攪乱と 12-SD ５に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は楕円形

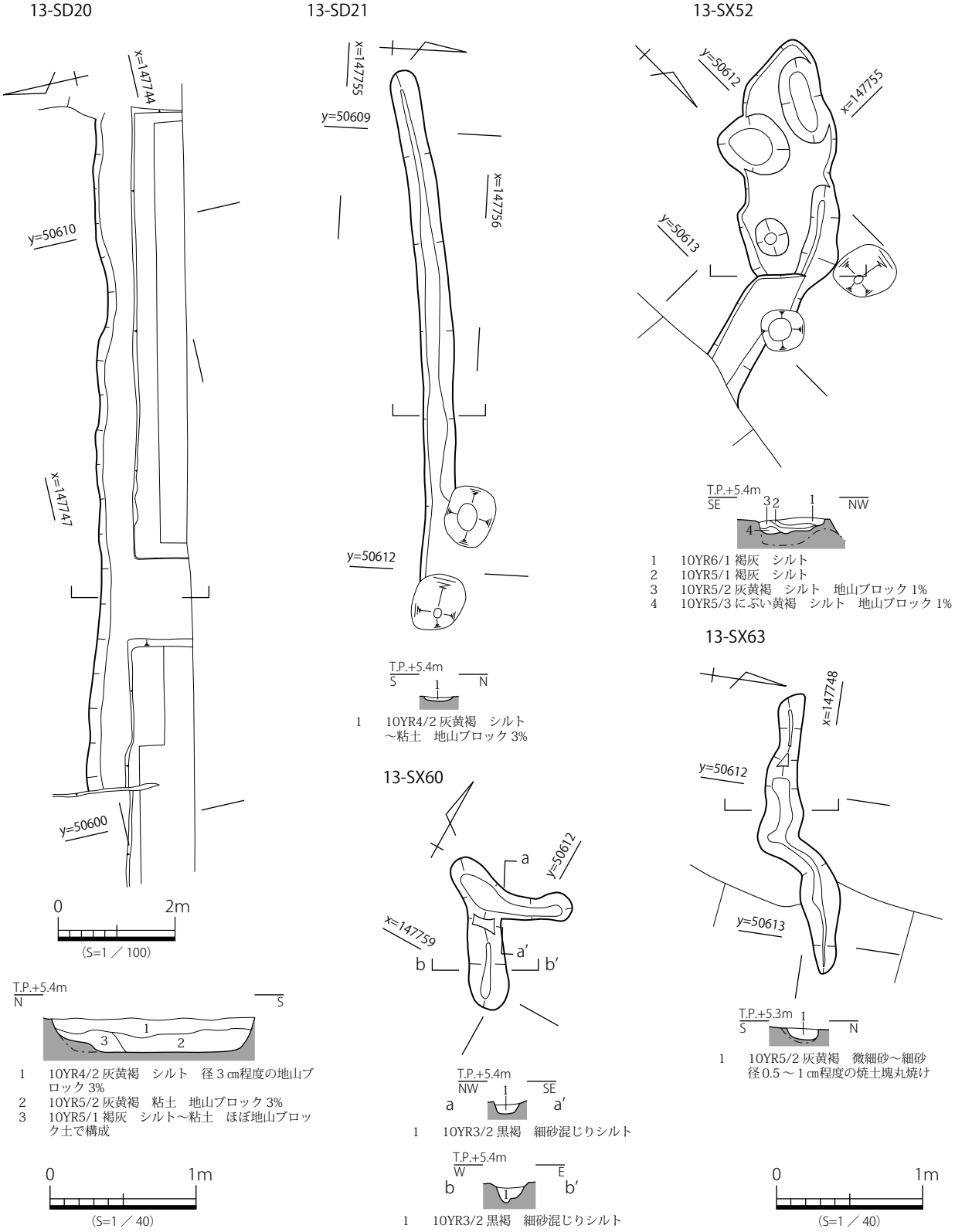


図 144　13-SD20・21・SX52・60・63　平・断面図

である。主軸方位 N-41°-W、検出面の標高は 5.25 mである。

長軸約 1.63 mを検出し、短軸約 1.07 m、深さ約 0.20 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は２層に分層でき、上層が暗灰黄粘土、下層が灰黄粘土である。

遺物が出土していないため､時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から、弥生時代後期末以前と考えられる。

11 － SP ２（図 143）

第 11 調査区西端で検出したピット状の遺構である。調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は楕円形である。主軸方位 N-13°-E、検出面の標高は 5.65 mである。

長軸約 0.23 mを検出し、短軸約 0.21 m、深さ約 0.13 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は灰黄褐粘土混じり細砂～極細砂の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

11 － SD ３（図 143）

第 11 調査区西端で検出した溝である。北に直行し、攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-7°-E、検出面の標高は 5.65 mである。

長さ約 0.30 mを検出し､幅約 0.36 m､深さ約 0.30 mを測る。断面形状はゆるい V 字形である。

埋土は２層に分層でき、灰黄褐粘土混じり極細砂と灰黄褐極細砂である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため、詳細な時期は不明である。

12 － SK ４（図 143）

第 12 調査区中央で検出した土坑と考えられる遺構である。12-SD 1 に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整形である。主軸方位 N-80°-W､検出面の標高は 5.35 mである。

長軸約 0.92 mを検出し、短軸約 0.60 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は黄灰極細砂の単層である。

遺物が出土していないため､時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から、室町時代以前と考えられる。

12 － SK13（図 142）

第 12 調査区東側で検出した土坑である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整形である。主軸方位 N-35°-E、検出面の標高は 5.15 mである。

長軸約 1.00 mを検出し、短軸約 0.70 m、深さ約 0.14 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は黄灰シルト～粘土の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

12 － SK18（図 142）

第 12 調査区東側で検出した土坑である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は楕円形である。主軸方位 N-33°-E、検出面の標高は 5.15 mである。

長軸約 0.74 mを検出し、短軸約 0.60 m、深さ約 0.30 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は暗灰黄粘土混じりシルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

12 － SK21（図 142）

第12調査区中央で検出した土坑状の遺構である。平面形状はひょうたん形である。主軸方位 N-80°-E、検出面の標高は 5.10 mである。

長軸約 0.86 mを検出し、短軸約 0.38 m、深さ約 0.08 mを測る。断面形状は方形である。

埋土は２層に分層でき、上層が灰黄褐細砂混じりシルト～粘土、下層が灰黄褐シルト～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

13 － SD20（図 144）

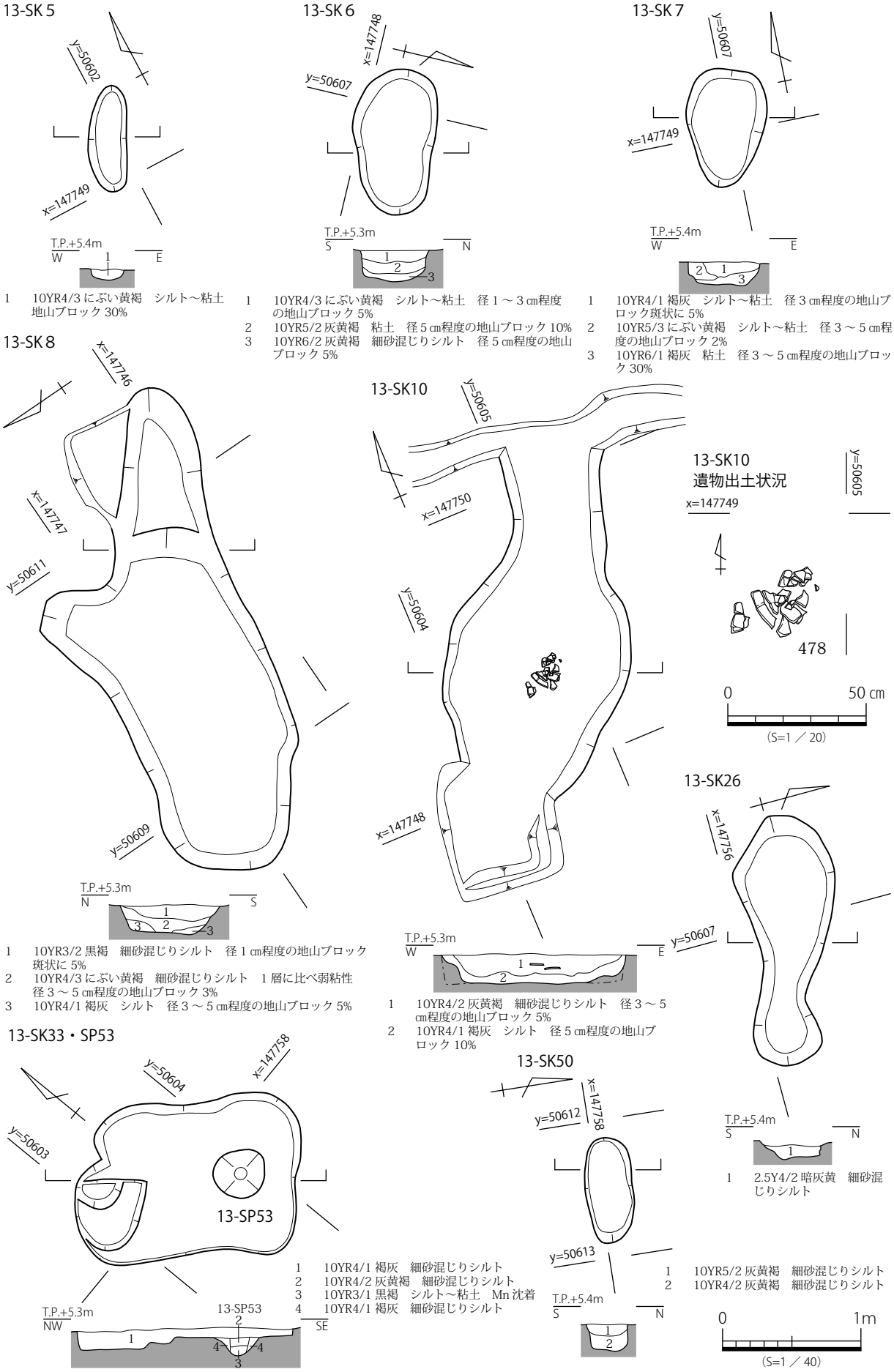
第 13 調査区西側南端で検出した溝状の遺構である。東西に直行し、攪乱と 13-SD 1 に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。第 10 調査区では検出できなかった。主軸方位 N-77°-W、検出面の標高は 5.25 mである。

長さ約 11.40 mを検出し、幅約 1.40 m、深さ約 0.22 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は３層に分層でき、上層が灰黄褐シルト、下層が灰黄褐粘土と褐灰シルト～粘土である。

遺物は土師器片？が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

遺構の切り合い関係から、室町時代以前と考えられる。



1　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト～粘土　地山ブロック 30%

1　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト～粘土　径１～３㎝程度の地山ブロック 5%
2　10YR5/2 灰黄褐　粘土　径５㎝程度の地山ブロック 10%
3　10YR6/2 灰黄褐　細砂混じりシルト　径５㎝程度の地山ブロック 5%

1　10YR4/1 褐灰　シルト～粘土　径３㎝程度の地山ブロック斑状に 5%
2　10YR5/3 にぶい黄褐　シルト～粘土　径３～５㎝程度の地山ブロック 2%
3　10YR6/1 褐灰　粘土　径３～５㎝程度の地山ブロック 30%

1　10YR3/2 黒褐　細砂混じりシルト　径１㎝程度の地山ブロック斑状に 5%
2　10YR4/3 にぶい黄褐　細砂混じりシルト　１層に比べ弱粘性　径３～５㎝程度の地山ブロック 3%
3　10YR4/1 褐灰　シルト　径３～５㎝程度の地山ブロック 5%

1　10YR4/2 灰黄褐　細砂混じりシルト　径３～５㎝程度の地山ブロック 5%
2　10YR4/1 褐灰　シルト　径５㎝程度の地山ブロック 10%

1　2.5Y4/2 暗灰黄　細砂混じりシルト

1　10YR4/1 褐灰　細砂混じりシルト
2　10YR4/2 灰黄褐　細砂混じりシルト
3　10YR3/1 黒褐　シルト～粘土　Mn 沈着
4　10YR4/1 褐灰　細砂混じりシルト

1　10YR5/2 灰黄褐　細砂混じりシルト
2　10YR4/2 灰黄褐　細砂混じりシルト

図 145　13-SK ５・６・７・８・10・26・33・50・SP53　平・断面図

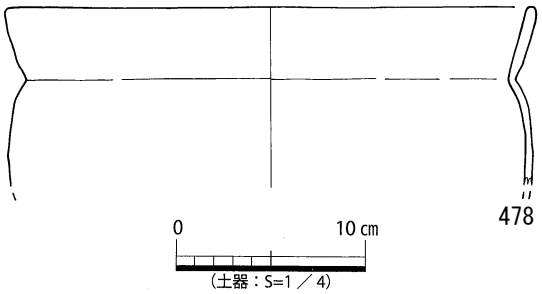


図 146　13-SK10　出土遺物実測図

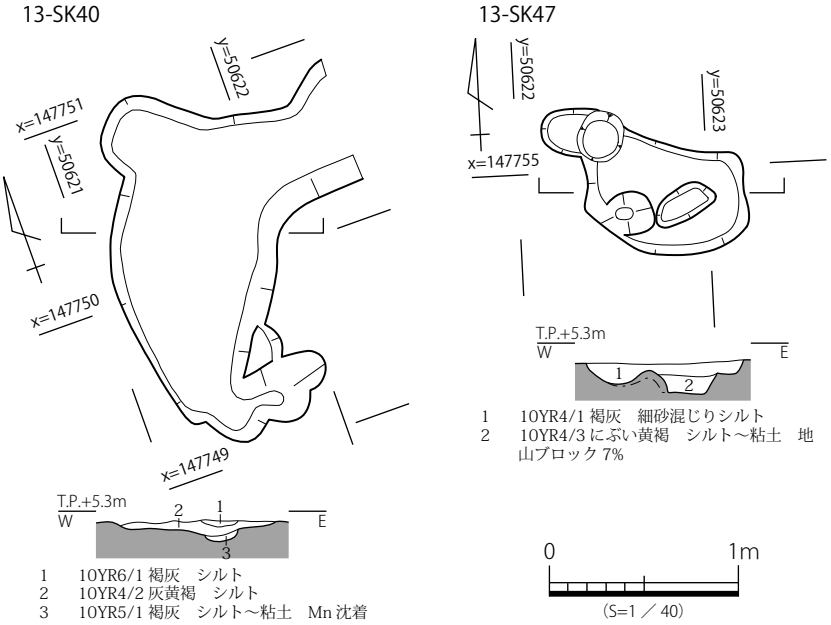


図 147　13-SK40・47　平・断面図

13 ― SD21（図 144）

第 13 調査区中央で検出した溝である。東西に直行し、攪乱に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-82°-E、検出面の標高は 5.25 mである。溝の主軸方位から、10-SD8・SK43 と同一の溝の可能性もある。

長さ約 3.45 mを検出し、幅約 0.20 m、深さ約 0.02 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は灰黄褐シルト～粘土の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

13 ― SX52（図 144）

第13調査区中央で検出した性格不明遺構である。北東から東に屈曲し、攪乱と 13-SD 1 に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-45°-E → N-75°-E、検出面の標高は 5.25 mである。

長さ約 2.40 mを検出し、幅約 0.46 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は方形である。

埋土は 4 層に分層でき、上層が褐灰シルト、下層が灰黄褐シルトとにぶい黄褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

遺構の切り合い関係から、室町時代以前と考えられる。

13 ― SX60（図 144）

第 13 調査区中央北側で検出した性格不明遺構である。分岐点と思われる。主軸方位 N-55°-E → N-68°-E → N-30°-E、検出面の標高は 5.25 mである。

長さ約 0.87 ＋ 1.05 mを検出し、幅約 0.17 ～ 0.23 m、深さ約 0.08 ～ 0.12 mを測る。断面形状は方形、逆台形である。

埋土は単層で、黒褐細砂混じりシルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

13 － SX63（図 144）

第 13 調査区中央南側で検出した溝状の遺構である。東→北→東に屈曲する。主軸方位 N-87°-E → N-18°-E → N-75°-E、検出面の標高は 5.25 mである。

長さ約 1.92 mを検出し、幅約 0.20 m、深さ約 0.07 mを測る。断面形状は方形である。

埋土は灰黄褐微細砂～細砂の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

13 － SK ８（図 145）

第 13 調査区中央南側で検出した土坑状の遺構である。検出した平面形状は不整形である。主軸方位 N-65°-W、検出面の標高は 5.25 mである。

長軸約 3.54 mを検出し、短軸約 1.40 m、深さ約 0.22 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は３層に分層でき、上層が黒褐細砂混じりシルト、中層がにぶい黄褐細砂混じりシルト、下層が褐灰シルトである。

遺物は土師器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

13 － SK10（図 145・146）

第 13 調査区南西側で検出した土坑状の遺構である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整形である。主軸方位 N-30°-E、検出面の標高は 5.25 mである。

長軸約 2.50 mを検出し、短軸約 1.32 m、深さ約 0.22 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は２層に分層でき、上層が灰黄褐細砂混じりシルト、下層が褐灰シルトである。

遺物は土師器甕（478）が出土した。出土遺物の年代から、古墳時代と考えられる。

13 － SK ５（図 145）

第 13 調査区南西側で検出した土坑状の遺構である。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-28°-E、検出面の標高は 5.25 mである。

長軸約 0.77 mを検出し、短軸約 0.24 m、深さ約 0.07 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土はにぶい黄褐シルト～粘土の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

13 － SK ６（図 145）

第 13 調査区南西側で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-79°-E、検出面の標高は 5.25 mである。

長軸約 1.05 mを検出し、短軸約 0.60 m、深さ約 0.22 mを測る。断面形状は方形である。

埋土は３層に分層でき、上層がにぶい黄褐シルト～粘土、中層が灰黄褐粘土、下層が灰黄褐細砂混じりシルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

13 － SK ７（図 145）

第 13 調査区南西側で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-18°-E、検出面の標高は 5.25 mである。

長軸約 0.85 mを検出し、短軸約 0.58 m、深さ約 0.17 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は３層に分層でき、上層が褐灰シルト～粘土とにぶい黄褐シルト～粘土、下層が褐灰粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

13 － SK26（図 145）

第 13 調査区中央西側で検出した土坑状の遺構である。検出した平面形状はひょうたん形である。主軸方位 N-75°-W、検出面の標高は 5.30 mである。

長軸約 1.80 mを検出し、短軸約 0.75 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は暗灰黄細砂混じりシルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

13 － SK33（図 145）

第 13 調査区中央西側で検出した土坑状の遺構である。検出した平面形状は不整方形である。主軸方位 N-42°-W、検出面の標高は 5.20 mである。

長軸約 1.60 mを検出し、短軸約 1.16 m、深さ約 0.12 mを測る。断面形状は不整形である。下層から 13-SP53 を検出した。

埋土は褐灰細砂混じりシルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

13 － SK40（図 147）

第 13 調査区中央東側で検出した土坑状の遺構である。第 18 調査区で検出できなかったため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整

形である。主軸方位 N-1°-E、検出面の標高は 5.25 mである。

長軸約 1.93 mを検出し、短軸約 1.34 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は３層に分層でき、上層が褐灰シルトと灰黄褐シルト、下層が褐灰シルト～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

13 ― SK47（図 147）

第 13 調査区中央東側で検出した土坑状の遺構である。攪乱に切られるが、検出した平面形状は不整方形である。主軸方位 N-85°-W、検出面の標高は 5.20 mである。

長軸約 0.86 mを検出し、短軸約 0.60 m、深さ約 0.16 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は２層に分層でき、上層が褐灰細砂混じりシルト、下層がにぶい黄褐シルト～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

13 ― SK50（図 145）

第 13 調査区中央北側で検出した土坑である。検出した平面形状は楕円形である。主軸方位 N-7°-E、検出面の標高は 5.25 mである。

長軸約 0.75 mを検出し、短軸約 0.33 m、深さ約 0.19 mを測る。断面形状は方形である。

埋土は灰黄褐細砂混じりシルトの２層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

中央東工区

中央東工区は、第 16 ～ 18 調査区である。

16 － SX ３（図 151）

第 16 調査区東側～中央で検出した性格不明遺構である。攪乱と 16-SK20 に切られ、16-SK35・36、16-SP16・17・19・27・29 ～ 32・34・42 を切る。調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整形である。主軸方位 N-70°-W、検出面の標高は 5.15 mである。

長軸約 13.05 mを検出し、短軸約 1.60 m、深さ約 0.18 mを測る。断面形状は逆台形である。16-SX4 との関係は不明である。

埋土は暗灰黄細砂混じりシルトの単層である。

遺物は弥生土器片、サヌカイト剥片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

出土遺物の年代から、弥生時代と考えられる。

16 － SX ４（図 151・155）

第 16 調査区東側～中央で検出した性格不明遺構である。調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は方形である。主軸方位 N-78°-W、検出面の標高は 5.15 mである。

長軸約 10.30 mを検出し、短軸約 0.66 m、深さ約 0.33 mを測る。断面形状は段付椀状である。

埋土は３層で、上層が黒褐シルト～粘土、中層が褐灰粘土、下層が褐灰細砂混じりシルト～粘土である。

遺物は石鏃（479）、弥生土器片、焼土塊、サヌカイト剥片が出土した。出土した土器が細片のため詳細な時期は不明である。

出土遺物の年代から、弥生時代と考えられる。

16 － SK １（図 152）

第16調査区東側で検出した土坑状の遺構である。調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整方形である。主軸方位 N-21°-E、検出面の標高は 5.25 mである。

長軸約 1.70 mを検出し、短軸約 1.13 m、深さ約 0.26 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は２層に分層でき、上層が黄灰シルト～粘土、下層が褐灰粘土である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

出土遺物の年代から、弥生時代と考えられる。

16 － SK ２（図 152）

第 16 調査区西側で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-65°-W、検出面の標高は 5.20 mである。

長軸約 0.76 mを検出し、短軸約 0.45 m、深さ約 0.21 mを測る。断面形状は方形である。

埋土は３層に分層でき、上層が黒褐シルト～粘土、下層が褐灰粘土である。埋土の観察から、下層は一時期に埋め戻された可能性が高い。

遺物は弥生土器片、サヌカイト剥片が出土したが、細片のため、詳細な時期は不明である。

出土遺物の年代から、弥生時代の遺構と考えられる。

16 － SK35（図 152）

第 16 調査区中央で検出した土坑である。16-SX ３の下層で検出した。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整方形である。主軸方位 N-48°-E、検出面の標高は 4.90 mである。

長軸約 1.02 mを検出し、短軸約 0.90 m、深さ約 0.09 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は褐灰粘土の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明であるが、切り合い関係から、弥生時代と考えられる。

16 － SK ９（図 152）

第16調査区東側で検出した土坑状の遺構である。16-SX49 を切る。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は三角形である。主軸方位 N-65°-E、検出面の標高は 5.05 mである。

長軸約 1.05 mを検出し、短軸約 0.68 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は褐灰シルト～粘土の単層である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

出土遺物の年代から、弥生時代と考えられる。

16 － SK45（図 152・155）

第16調査区中央で検出した土坑状の遺構である。16-SX ３・４に切られ、調査区外に延びるため、全

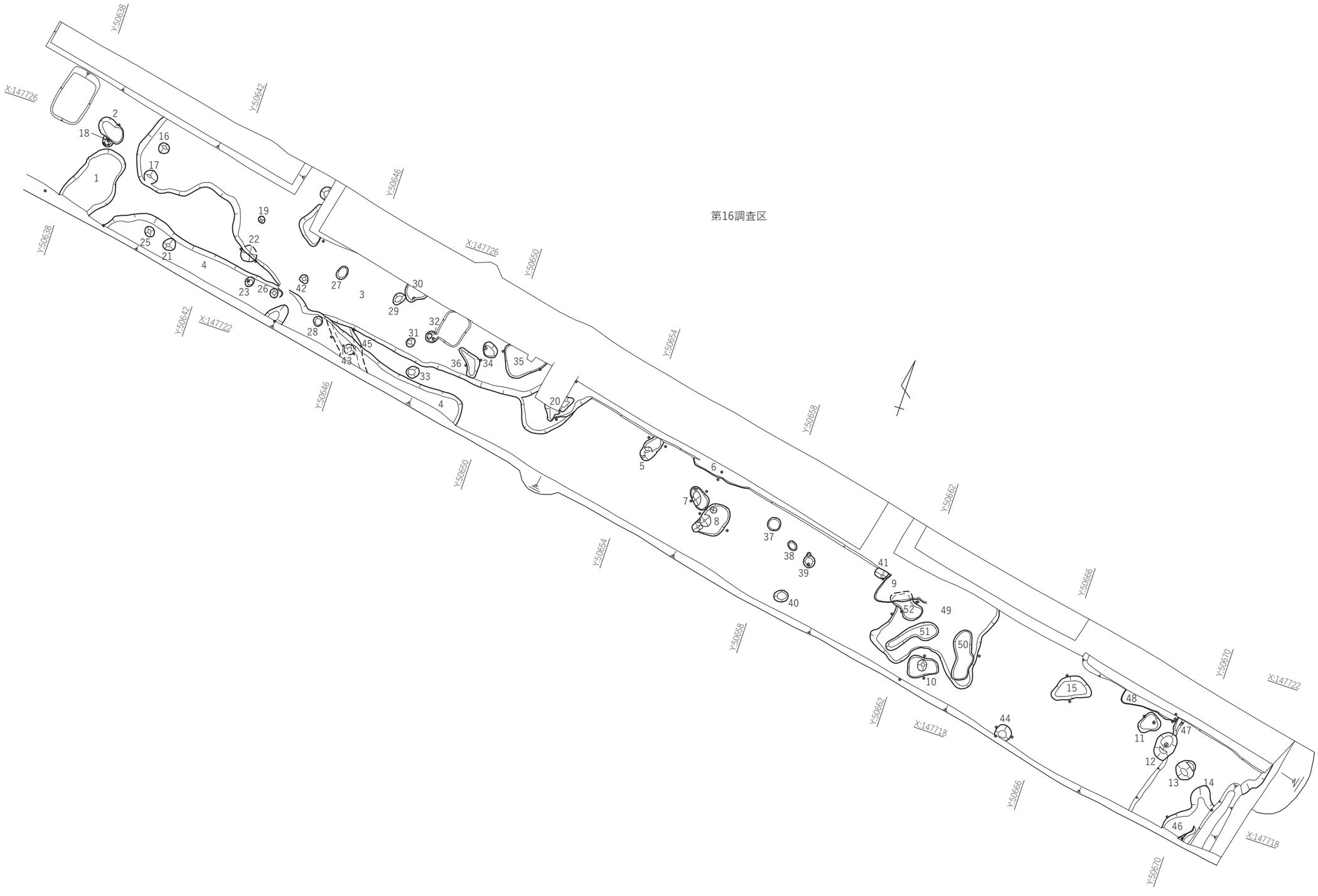


図 148　第 16 調査区　平面図 (S= 1 ／ 100)

図 149　第 17 調査区　平面図 (S= 1 ／ 100)

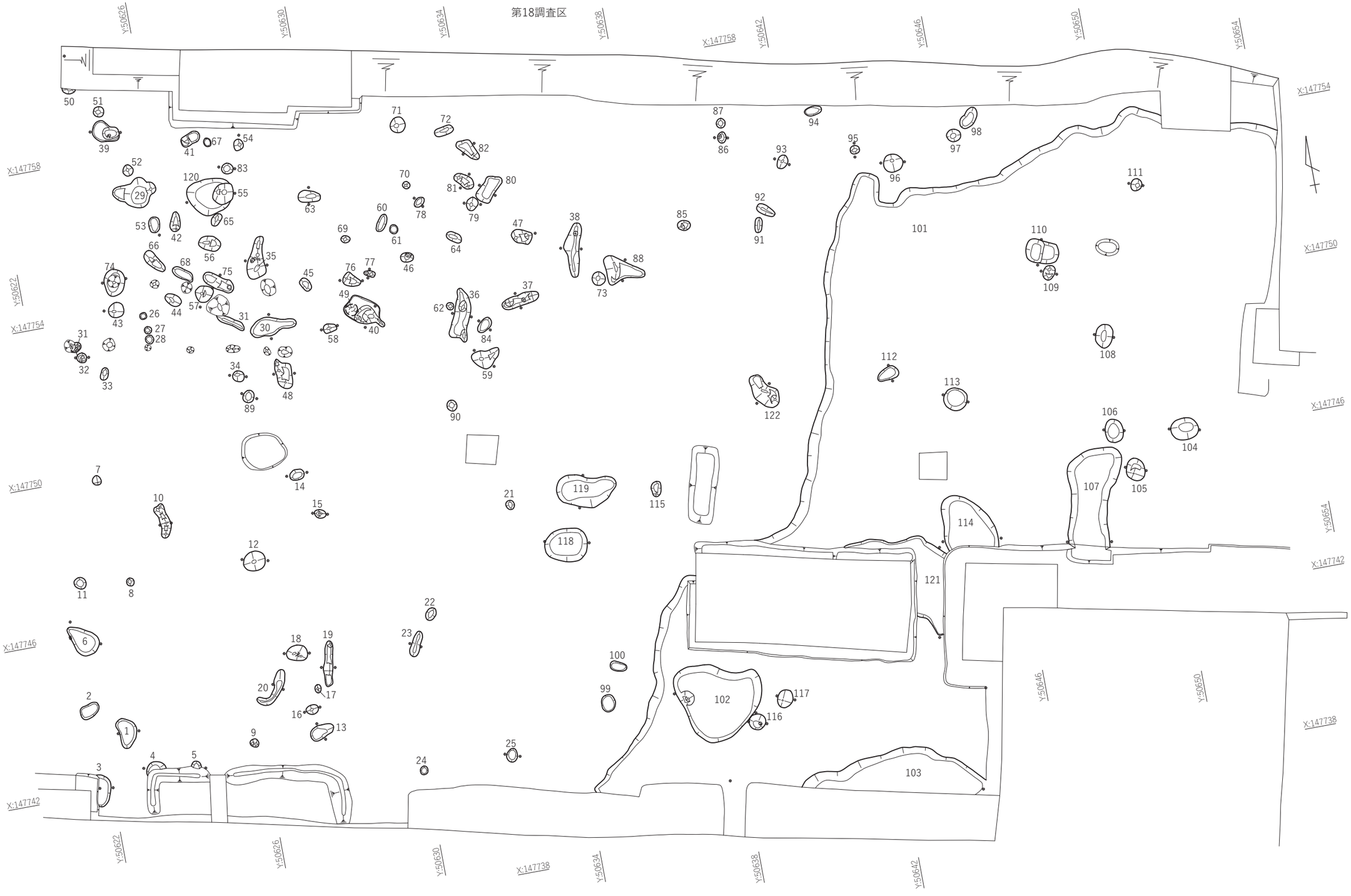


図 150　第 18 調査区　平面図 (S= 1 ／ 100)

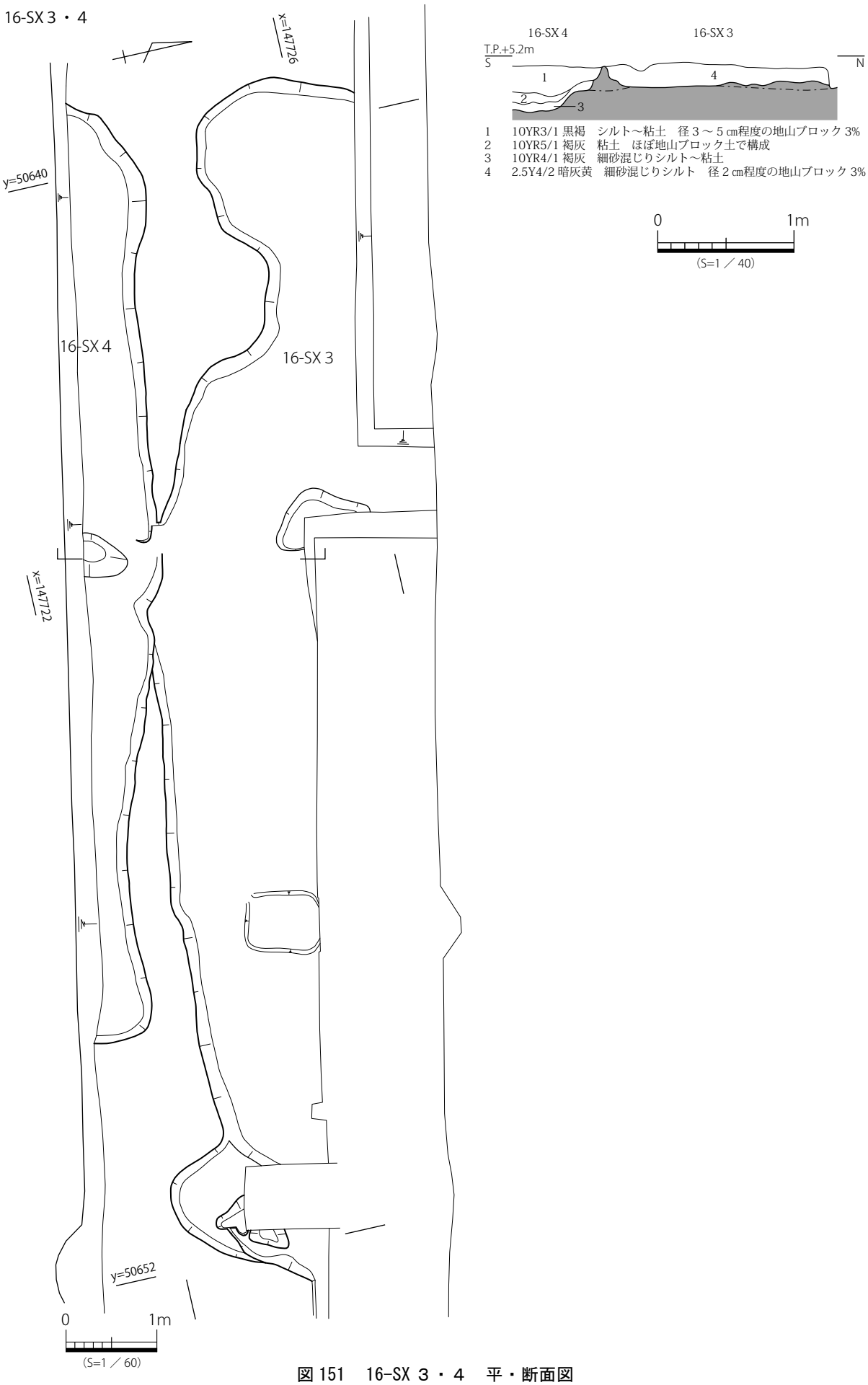
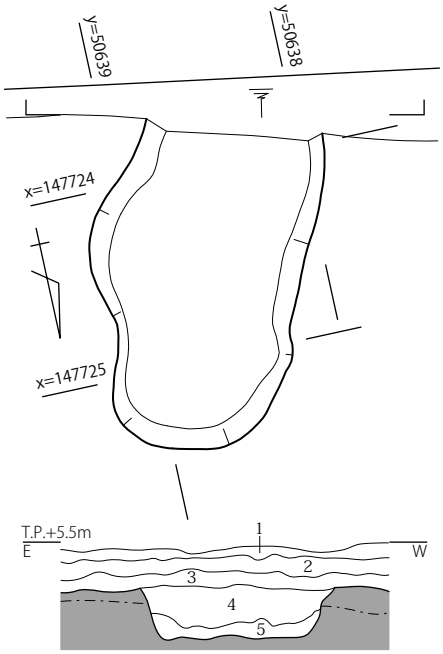


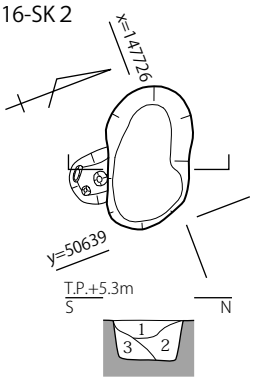
図 151　16-SX ３・４　平・断面図

16-SK 1



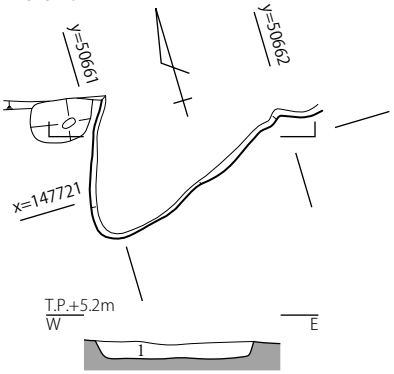
1　2.5Y6/2 灰黄　細砂
2　2.5Y5/2 暗灰黄　細砂混じりシルト　炭化物含む…水田層
3　2.5Y5/1 黄灰　シルト…水田層
4　2.5Y4/1 黄灰　シルト～粘土　径３～５㎝程度の黒褐色シルトブロック 3%
5　10YR4/1 褐灰　粘土

16-SK 2



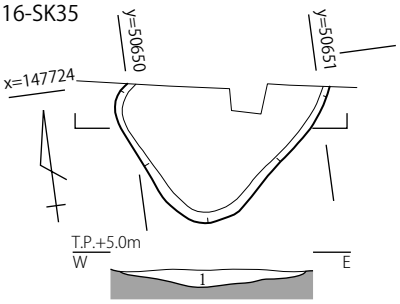
1　10YR3/1 黒褐　シルト～粘土　径 1 ㎝程度の地山ブロック 3%
2　10YR4/1 褐灰　粘土　径 5 ㎝程度の地山ブロック 5%
3　10YR5/1 褐灰　粘土　地山ブロック土で構成

16-SK 9



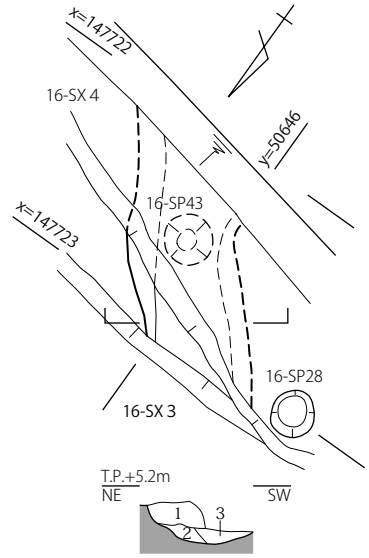
1　10YR5/1 褐灰　シルト～粘土　ほぼ地山ブロック土で構成　土器片含む

16-SK35



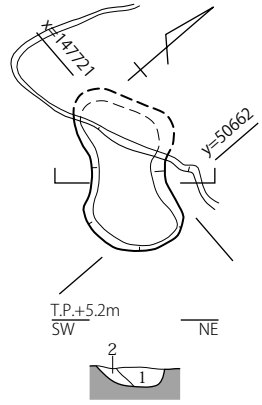
1　10YR5/1 褐灰　粘土　径３㎝程度の地山ブロック 5%

16-SK45



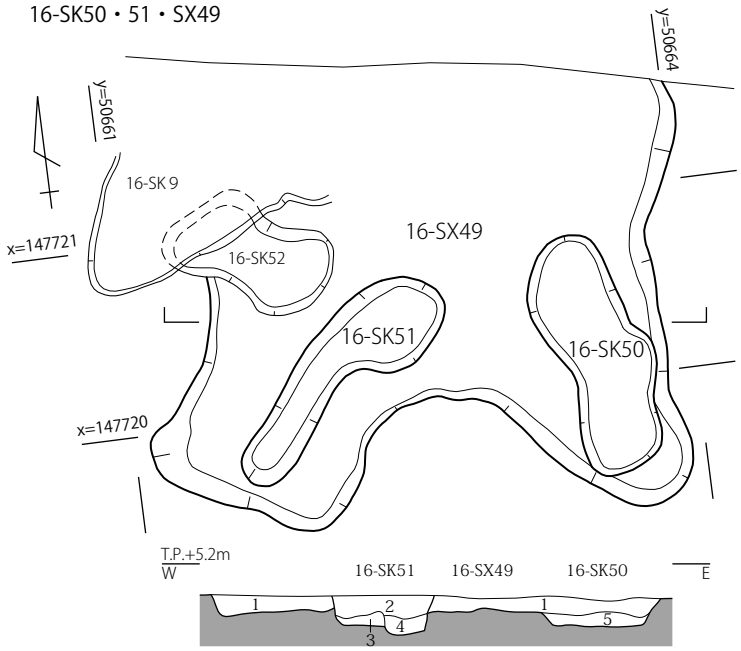
1　2.5Y4/2 暗灰黄　シルト　径３～５㎝程度の地山ブロック 10%　炭化物含む
2　2.5Y5/2 暗灰黄　細砂混じりシルト　径１～２㎝程度の地山ブロック斑状に 2%
3　2.5Y5/1 黄灰　シルト～粘土　径５～10 ㎝程度の地山ブロック　ほぼ地山土で構成

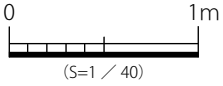
16-SK52



1　2.5Y4/1 黄灰　シルト　径１～２㎝程度の地山ブロック 3%
2　2.5Y5/2 暗灰黄　シルト～粘土　地山ブロック 5%　炭化物含む

16-SK50・51・SX49





1　10YR4/1 褐灰　シルト～粘土　径３～５㎝程度の地山ブロック 10%　炭化物含む…16-SX49
2　2.5Y3/2 黒褐　シルト～粘土　灰色シルトブロック 3%　焼土塊含む
3　2.5Y5/2 暗灰黄　細砂混じりシルト　径５㎝程度の地山ブロック 10%
4　10YR4/1 褐灰　シルト～粘土　径３～５㎝程度の地山ブロック 3%
5　2.5Y4/1 黄灰　シルト　ほぼ地山ブロック土で構成…16-SK50

図 152　16-SK １・２・９・35・45・50・51・52・SX49　平・断面図

体の形状は不明であるが、検出した平面形状は平行四辺形である。主軸方位 N-40°-W、検出面の標高は 5.10 mである。

長軸約 1.16 mを検出し、短軸約 0.58 m、深さ約 0.21 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は３層に分層でき、上層が暗灰黄シルト、下層が暗灰黄細砂混じりシルトと黄灰シルト～粘土である。

遺物は石鏃（480）、弥生土器片、サヌカイト剥片が出土したが、土器が細片のため詳細な時期は不明である。

出土遺物の年代から、弥生時代と考えられる。

16 － SX49（図 152）

第16調査区東側で検出した性格不明遺構である。攪乱と 16-SK ９・51 に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整形である。主軸方位 N-36°-E、検出面の標高は 5.05 mである。

長軸約 2.80 mを検出し、短軸約 2.70 m、深さ約 0.11 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は褐灰シルト～粘土の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から、弥生時代の可能性が高い。

16 － SK50（図 152）

第16調査区東側で検出した土坑状の遺構である。16-SX49 の下層で検出した。平面形状は不整方形である。主軸方位 N-11°-W、検出面の標高は 4.95 mである。

長軸約 1.29 mを検出し、短軸約 0.46 m、深さ約 0.08 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は黄灰シルトの単層である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

遺構の切り合い関係から、弥生時代の遺構の可能性が高い。

16 － SK52（図 152）

第16調査区東側で検出した土坑状の遺構である。16-SK ９・SX49 に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状はひょうたん形である。主軸方位 N-57°-W、検出面の標高は 4.95 m である。

長軸約 0.86 mを検出し、短軸約 0.50 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は２層に分層でき、黄灰シルトと暗灰黄シルト～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から、弥生時代と考えられる。

16 － SK20（図 153）

第 16 調査区中央で検出した土坑状である。16-SX ３を切る。中央で攪乱に切られて遺構が分断されるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整形である。主軸方位 N-44°-E、検出面の標高は 5.20 mである。

長軸約 1.25 mを検出し、短軸約 0.60 m、深さ約 0.24 mを測る。断面形状は逆台形に北肩は段状である。

埋土は２層で、黒褐シルト～粘土と暗オリーブ褐粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から、弥生時代以降と考えられる。

16 － SK51（図 152）

第16調査区東側で検出した土坑状の遺構である。16-SX49 を切る。検出した平面形状はひょうたん形である。主軸方位 N-47°-E、検出面の標高は 5.05 mである。

長軸約 1.38 mを検出し、短軸約 0.49 m、深さ約 0.21 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は３層に分層でき、上層が黒褐シルト～粘土、下層が暗灰黄細砂混じりシルトと褐灰シルト～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から弥生時代以降と考えられる。

16 － SK ５（図 153）

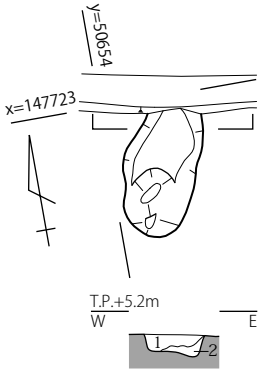
第16調査区中央で検出した土坑状の遺構である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は楕円形である。主軸方位 N-19°-E、検出面の標高は 5.05 mである。

長軸約 0.68 mを検出し、短軸約 0.40 m、深さ約 0.11 mを測る。断面形状は方形である。

埋土は暗褐シルト～粘土の２層である。

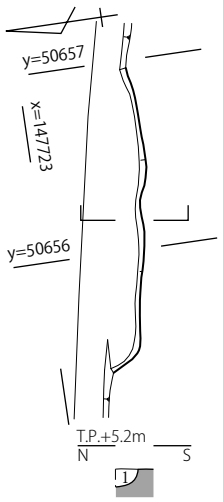
遺物が出土していないため、時期は不明である。

16-SK 5



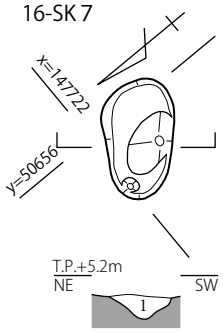
1　10YR3/3 暗褐　シルト～粘土　径 5 ㎝程度の地山ブロック 5%
2　10YR3/3 暗褐　シルト～粘土　径 1 ㎝程度の地山ブロック 3%

16-SK 6



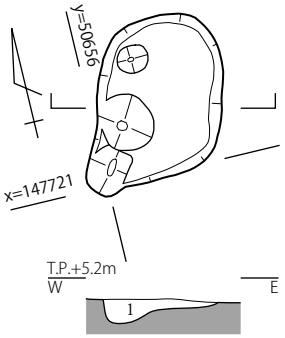
1　10YR4/1 褐灰　粘土　径 5 ㎝程度の地山ブロック 5%

16-SK 7



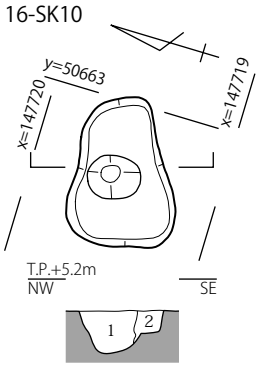
1　10YR5/1 褐灰　シルト～粘土　ほぼ地山ブロック土で構成

16-SK 8



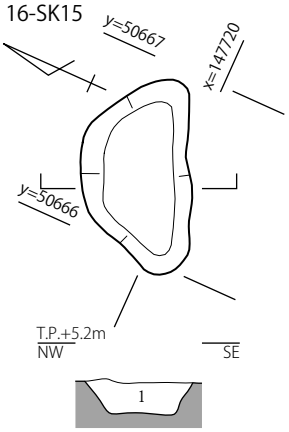
1　10YR5/1 褐灰　シルト～粘土　ほぼ地山ブロック土で構成

16-SK10



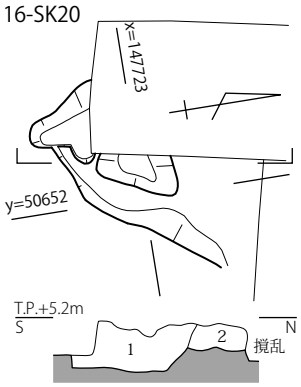
1　10YR4/1 褐灰　粘土　径 5 ㎝程度の地山ブロック 5%
2　10YR5/1 褐灰　シルト～粘土　ほぼ地山ブロック土で構成

16-SK15



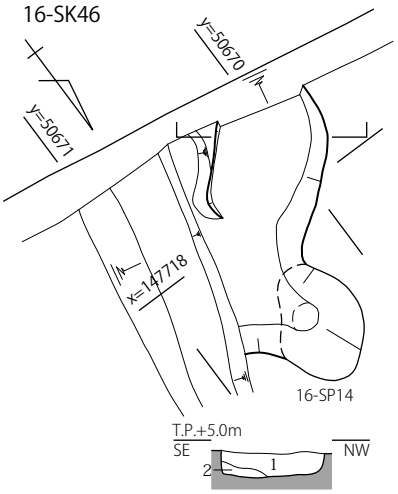
1　10YR5/3 にぶい黄褐　細砂混じりシルト　ほぼ地山ブロック土で構成

16-SK20



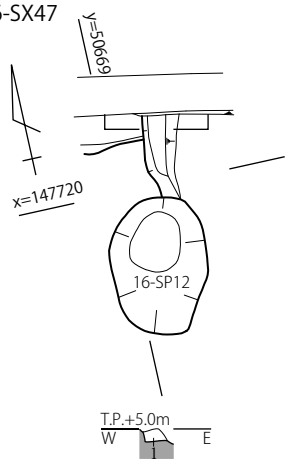
1　10YR3/2 黒褐　シルト～粘土　径 1 ㎝程度の地山ブロック斑状に 1%
2　2.5Y3/3 暗オリーブ褐　粘土

16-SK46



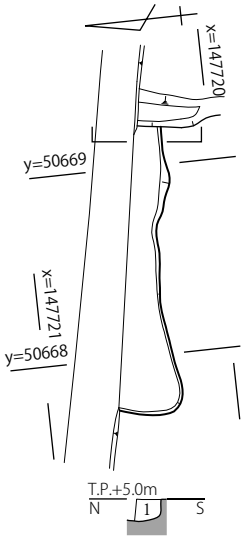
1　2.5Y4/2 暗灰黄　シルト　径 3 ～ 5 ㎝程度の地山ブロック 5%
2　2.5Y5/1 黄灰　粘土　径 5 ㎝程度の地山ブロック 10%

16-SX47



1　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト　径 1 ～ 2 ㎝程度の地山ブロック斑状に 10%

16-SK48



1　10YR4/2 灰黄褐　細砂混じりシルト　径 1 ～ 2 ㎝程度の地山ブロック斑状に 5%

0　1m
（S=1 ／ 40）

図 153　16-SK ５・６・７・８・10・15・20・46・48・SX47　平・断面図

16 － SK ６（図 153）

第16調査区中央で検出した土坑状の遺構である。大部分を攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は棒状である。主軸方位N-82°-W、検出面の標高は 5.05 mである。

長軸約 1.56 mを検出し、短軸約 0.12 m、深さ約 0.09 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は褐灰粘土の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16 － SK ７（図 153）

第16調査区中央で検出した土坑状の遺構である。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-48°-W、検出面の標高は 5.10 mである。

長軸約 0.64 mを検出し、短軸約 0.38 m、深さ約 0.12 mを測る。断面形状はＶ字形である。

埋土は褐灰シルト～粘土の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16 － SK ８（図 153）

第 16 調査区中央で検出した土坑である。平面形状は不整円形を呈する。主軸方位 N-43°-E、検出面の標高は 5.10 mである。

長軸約 1.06 mを検出し、短軸約 0.68 m、深さ約 0.13 mを測る。断面形状は椀状に東肩はゆるやかである。

埋土は褐灰シルト～粘土の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16 － SK10（図 153）

第 16 調査区東側で検出した土坑である。平面形状は洋ナシ形を呈する。主軸方位 N-76°-E、検出面の標高は 5.05 mである。

長軸約 0.80 mを検出し、短軸約 0.58 m、深さ約 0.22 mを測る。断面形状は逆台形に段落ちである。

埋土は２層に分層でき、褐灰粘土と褐灰シルト～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16 － SK15（図 153）

第 16 調査区東側で検出した土坑である。平面形状は台形を呈する。主軸方位 N-65°-E、検出面の標高は 5.00 mである。

長軸約 1.02 mを検出し、短軸約 0.58 m、深さ約 0.28 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土はにぶい黄褐細砂混じりシルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16 － SK46（図 153）

第16調査区東端で検出した土坑状の遺構である。攪乱と 16-SP14 に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整方形である。主軸方位 N-48°-E、検出面の標高は 4.95 mである。

長軸約 1.44 mを検出し、短軸約 0.60 m、深さ約 0.12 mを測る。断面形状は方形である。

埋土は２層に分層でき、暗灰黄シルトと黄灰粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16 － SX47（図 153）

第16調査区東側で検出した性格不明遺構である。攪乱と 16-SP12 に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-2°-W、検出面の標高は 5.00 mである。

長軸約 0.43 mを検出し、短軸約 0.13 m、深さ約 0.07 mを測る。断面形状は方形である。

埋土は単層で、にぶい黄褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16 － SK48（図 153）

第16調査区東側で検出した土坑状の遺構である。攪乱と 16-SX47 に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は方形である。主軸方位 N-89°-E、検出面の標高は 5.00 mである。

長軸約 1.53 mを検出し、短軸約 0.33 m、深さ約 0.11 mを測る。断面形状は方形である。

埋土は灰黄褐細砂混じりシルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16 － SP22（図 154）

第 16 調査区東側で検出したピットである。16-SX ３の下層で検出した。平面形状は円形である。主軸方位不明、検出面の標高は 5.10 mである。

長軸約 0.42 mを検出し、短軸約 0.41 m、深さ約 0.28 mを測る。断面形状はＶ字形である。

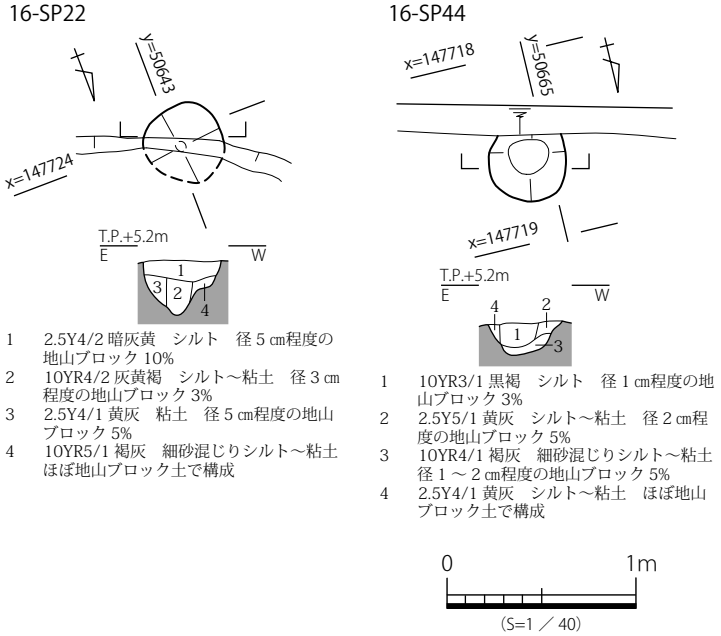


図 154　16-SP22・44　平・断面図

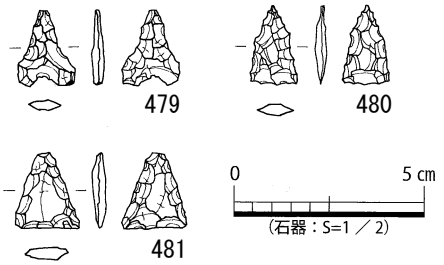


図 155　第 16・17 調査区 SK・SX　出土遺物実測図

埋土は４層に分層でき、覆土の下層で柱痕が確認できた。埋土は覆土が暗灰黄シルト、柱痕が灰黄褐シルト～粘土、掘方が黄灰粘土と褐灰細砂混じりシルト～粘土である。

遺物は弥生土器片？が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

遺構の切り合い関係から、弥生時代と考えられる。

16 － SP44（図 154）

第 16 調査区東側で検出したピットである。16-SX ４の下層で検出した。調査区外に延びるが、検出した平面形状は円形である。主軸方位不明、検出面の標高は 5.00 mである。

長軸約 0.41 mを検出し、短軸約 0.35 m、深さ約 0.17 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は４層に分層でき、柱痕が確認できる。埋土は柱痕が黒褐シルト、掘方が黄灰シルト～粘土と褐灰細砂混じりシルト～粘土、黄灰シルト～粘土である。

遺物は弥生土器片？が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

17 － SK １（図 156）

第 17 調査区南東炭で検出した土坑である。調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整形である。主軸方位 N-62°-W、検出面の標高は 4.90 mである。

長軸約 2.25 mを検出し、短軸約 1.73 m、深さ約 0.26 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は４層に分層でき、上層がにぶい黄細砂～極細砂、下層が黄褐粘土混じり極細砂と黄灰細砂、灰黄シルト～粘土である。

遺物は須恵器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

出土遺物の年代から、古墳時代以降と考えられる。

17 － SK41（図 156）

第 17 調査区中央で検出した土坑である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は三角形である。主軸方位 N-70°-W、検出面の標高は 5.10 mである。

長軸約 2.28 mを検出し、短軸約 1.14 m、深さ約 0.44 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は３層に分層でき、上層がにぶい黄褐シルト、中層が灰黄褐細砂混じりシルト、下層が灰黄褐シルト～粘土である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

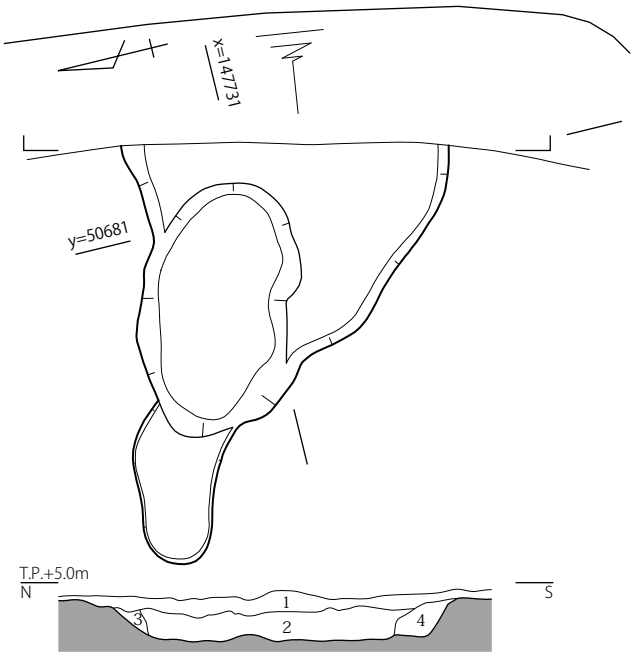
17 － SK ９（図 156）

第 17 調査区中央で検出した土坑である。平面形状はひょうたん形を呈する。主軸方位 N-36°-E、検出面の標高は 5.05 mである。

長軸約 1.85 mを検出し、短軸約 1.00 m、深さ約 0.24 mを測る。断面形状は椀状である。

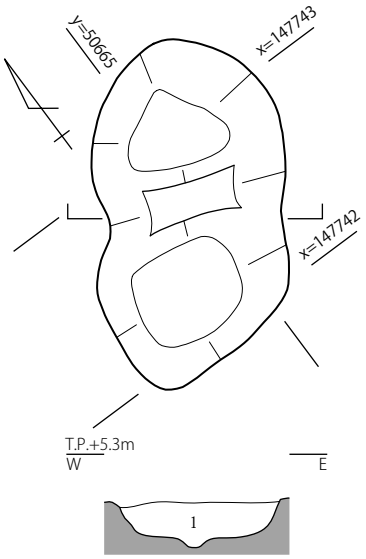
埋土は褐灰粘土混じりシルトの単層

17-SK 1



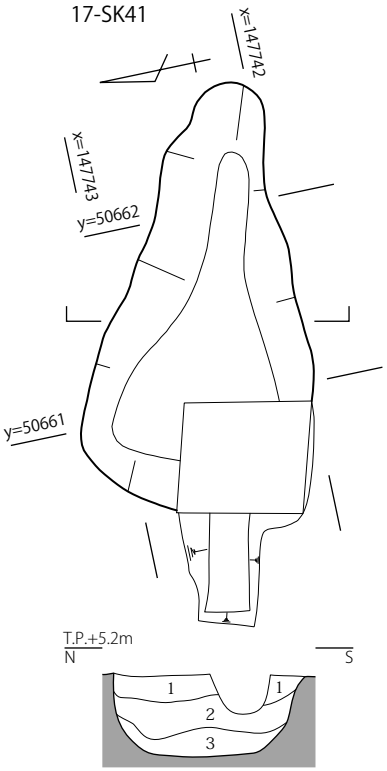
1　2.5Y6/3 にぶい黄　細砂～極細砂　径 1 ㎝程度の地山ブロック 2%…洪水砂
2　2.5Y5/3 黄褐　粘土混じり極細砂　Mn 沈着　径 3 ～ 6 ㎝程度の灰色粘土ブロック 30%　径 2 ～ 4 ㎝程度の灰黄褐色粘土ブロック 7%　炭化物含む
3　2.5Y6/1 黄灰　細砂　Mn 沈着　径 1 ～ 2 ㎝程度の地山ブロック 7%
4　2.5Y7/2 灰黄　シルト～粘土　Mn 沈着　径 1 ㎝程度の地山ブロック 5%

17-SK 9



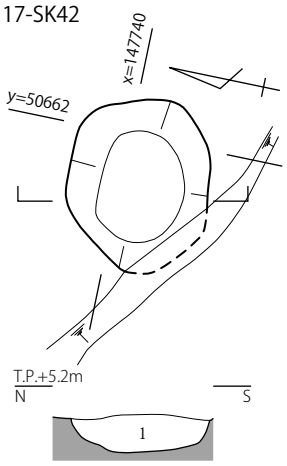
1　10YR5/1 褐灰　粘土混じりシルト　Mn 沈着　10YR3/1 黒褐　シルト～粘土ブロック 40%　10YR7/6 明黄褐粘土ブロック 7%

17-SK41



1　10YR4/3 にぶい黄褐　シルト　径 3 ㎝程度の地山ブロック 5%　炭化物含む
2　10YR5/2 灰黄褐　細砂混じりシルト　ほぼ地山ブロック土で構成　炭化物含む
3　10YR4/2 灰黄褐　シルト～粘土　ほぼ地山ブロック土で構成　炭化物含む

17-SK42

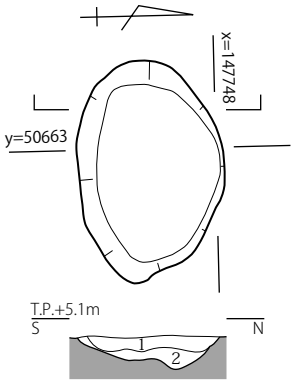


1　10YR4/2 灰黄褐　シルト　径 5 ～ 10 ㎝程度の地山ブロック含む　径 3 ～ 5 ㎝程度の黒褐色シルトブロック土で構成

(S=1 ／ 40)

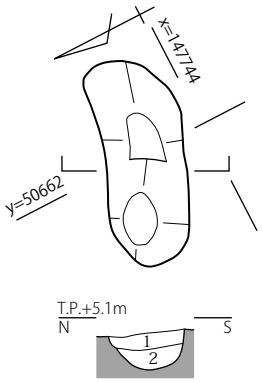
図 156　17-SK 1・9・41・42　平・断面図

17-SK11



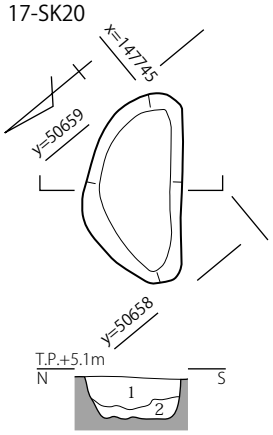
1　10YR3/1 黒褐　シルト混じり粘土　Mn 沈着　径 1 ～ 2 ㎝程度の地山ブロック 10%　炭化物含む
2　10YR4/1 褐灰　粘土　Mn・Fe 少量沈着　径 1 ～ 3 ㎝程度の地山ブロック 10%

17-SK14



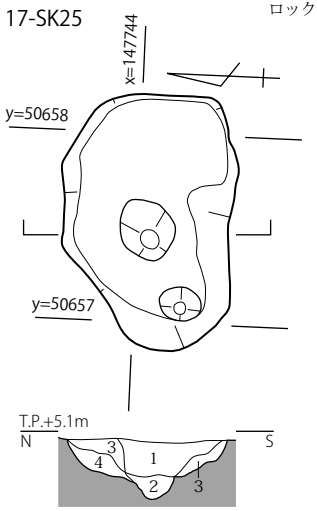
1　2.5Y5/1 黄灰　シルト混じり粘土　Mn 少量沈着　黒褐色シルト～粘土ブロック 20%　径 1 ～ 2 ㎝程度の地山ブロック 5%
2　2.5Y6/1 黄灰　シルト混じり粘土　Mn 沈着　径 1 ～ 3 ㎝程度の地山ブロック 20%

17-SK20



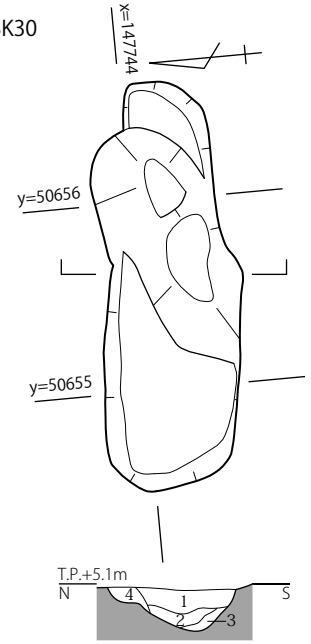
1　10YR3/1 黒褐　シルト　径 3 ～ 5 ㎝程度の地山ブロック 5%
2　10YR4/1 褐灰　粘土　ほぼ地山ブロック土で構成

17-SK25



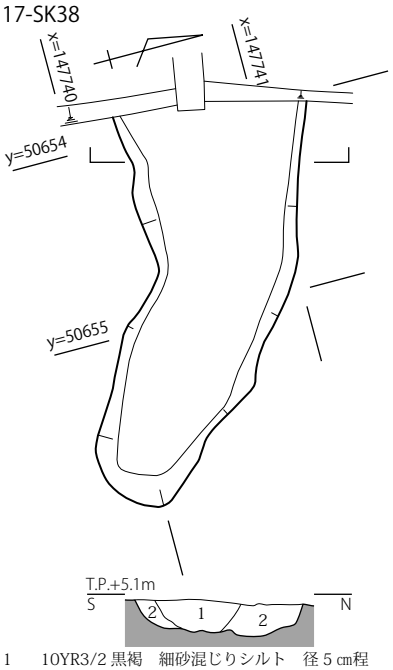
1　10YR3/2 黒褐　シルト　径 1 ～ 3 ㎝程度の地山ブロック 3%
2　10YR3/1 黒褐　細砂混じりシルト　径 1 ㎝程度の地山ブロック斑状に 5%
3　10YR4/2 灰黄褐　シルト　径 3 ㎝程度の地山ブロック 20%
4　10YR4/1 褐灰　シルト　径 3 ㎝程度の地山ブロック 2%

17-SK30



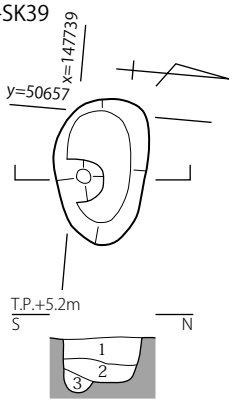
1　10YR3/1 黒褐　シルト　径 1 ～ 3 ㎝程度の地山ブロック 3%　炭化物含む
2　10YR4/1 褐灰　シルト～粘土　径 5 ㎝程度の地山ブロック 3%
3　2.5Y5/2 暗灰黄　粘土　地山ブロック 30%
4　10YR4/2 灰黄褐　細砂混じりシルト　径 1 ～ 2 ㎝程度の地山ブロック 5%

17-SK38



1　10YR3/2 黒褐　細砂混じりシルト　径 5 ㎝程度の地山ブロック 3%
2　10YR3/2 黒褐　シルト　地山ブロック 10%

17-SK39



1　10YR3/2 黒褐　シルト　径 1 ～ 3 ㎝程度の地山ブロック 10%
2　10YR4/1 褐灰　粘土　ほぼ地山ブロック土で構成
3　10YR5/1 褐灰　細砂混じりシルト

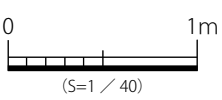


図 157　17-SK11・14・20・25・30・38・39　平・断面図

である。

遺物は弥生土器片(前期)が出土した。

出土遺物の年代から、弥生時代前期以降と考えられる。

17 ― SK42（図 156）

第 17 調査区中央で検出した土坑である。攪乱に切られるが、平面形状は円形を呈する。主軸方位 N-85°-W、検出面の標高は 5.05 mである。

長軸約 0.93 mを検出し、短軸約 0.76 m、深さ約 0.19 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は灰黄褐シルトの単層である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

17 ― SK11（図 157）

第 17 調査区中央北側で検出した土坑である。17-SX101 を切る。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-85°-W、検出面の標高は 5.00 mである。

長軸約 1.17 mを検出し、短軸約 0.77 m、深さ約 0.18 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は２層で、上層が黒褐シルト混じり粘土、下層が褐灰粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から、弥生時代前期以降と考えられる。

17 ― SK14（図 157）

第 17 調査区中央で検出した土坑状の遺構である。17-SX101 を切る。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-71°-W、検出面の標高は 5.05 mである。

長軸約 1.10 mを検出し、短軸約 0.44 m、深さ約 0.20 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は２層に分層でき、上層が黄灰シルト混じり粘土、下層が黄灰シルト混じり粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から弥生時代前期以降と考えられる。

17 ― SK20（図 157）

第 17 調査区中央西側で検出した土坑である。17-SX101 を切る。平面形状は半円形を呈する。主軸方位 N-50°-W、検出面の標高は 5.05 mである。

長軸約 1.00 mを検出し、短軸約 0.52 m、深さ約 0.22 mを測る。断面形状は方形である。

埋土は２層に分層でき、上層が黒褐シルト、下層が褐灰粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から弥生時代前期以降と考えられる。

17 ― SK25（図 157）

第 17 調査区中央西側で検出した土坑である。17-SX101 を切る。平面形状は不整方形を呈する。主軸方位 N-73°-E、検出面の標高は 5.05 mである。

長軸約 1.38 mを検出し、短軸約 0.92 m、深さ約 0.30 mを測る。断面形状は椀状に段落ちである。

埋土は４層に分層でき、上層が黒褐シルトと灰黄褐シルト、下層が黒褐細砂混じりシルトと褐灰シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から弥生時代前期以降と考えられる。

17 ― SK30（図 157）

第 17 調査区中央西側で検出した土坑である。17-SX101 を切る。平面形状は不整方形を呈する。主軸方位 N-84°-W、検出面の標高は 5.10 mである。

長軸約 2.16 mを検出し、短軸約 0.70 m、深さ約 0.21 mを測る。断面形状はＶ字形に北肩がゆるやかである。

埋土は４層に分層でき、黒褐シルトと褐灰シルト～粘土、暗灰黄粘土、灰黄褐細砂混じりシルトである。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

遺構の切り合い関係から弥生時代前期以降と考えられる。

17 ― SK38（図 157）

第 17 調査区南西側で検出した土坑状の遺構である。17-SX101 を切る。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は三日月形である。主軸方位 N-62°-W、検出面の標高は 5.05 mである。

長軸約 2.19 mを検出し、短軸約 1.00 m、深さ約 0.17 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は２層に分層でき、黒褐細砂混じりシルトと

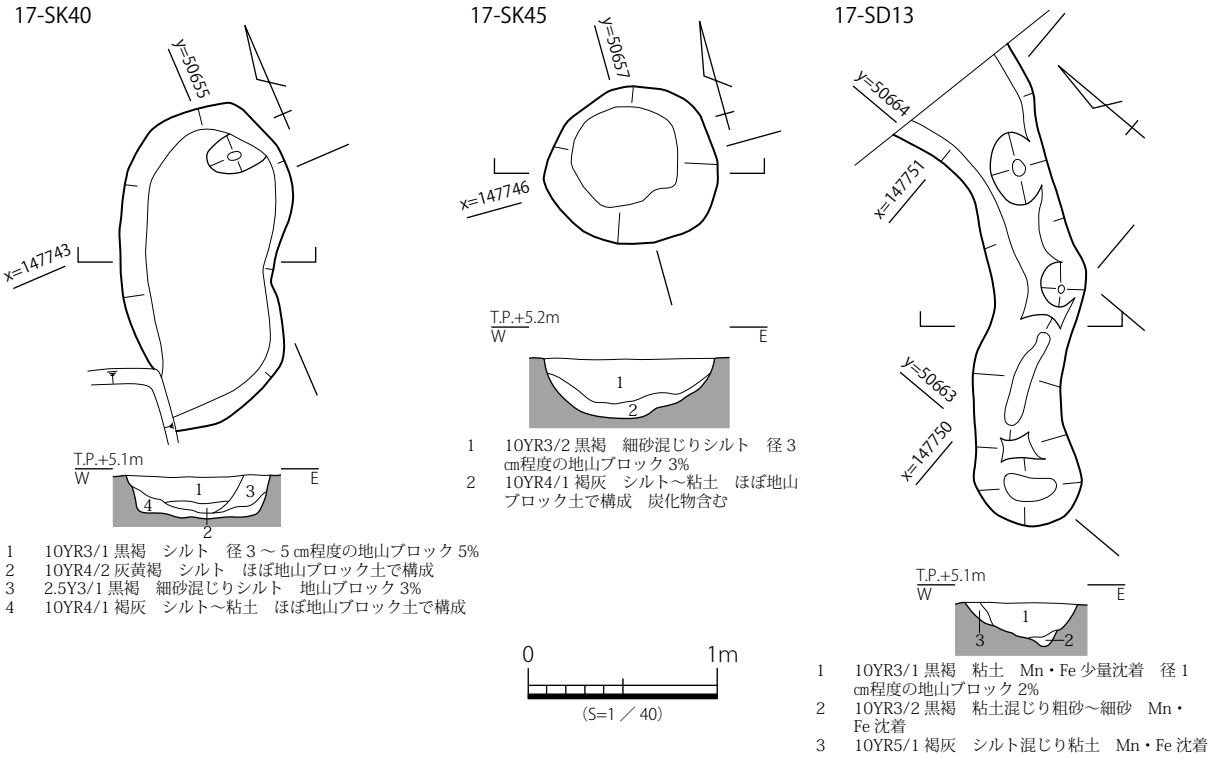


図 158　17-SK40・45・SD13　平・断面図

黒褐シルトである。

遺物が出土していないため､時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から弥生時代前期以降と考えられる。

17 － SK39（図 157）

第 17 調査区南西側で検出した土坑である。17-SX101 を切る。検出した平面形状は楕円形である。主軸方位 N-88°-W､検出面の標高は 5.10 mである。

長軸約 0.77 mを検出し、短軸約 0.50 m、深さ約 0.28 mを測る。断面形状は方形に段落ちである。

埋土は３層に分層でき、上層が黒褐シルト、中層が褐灰粘土、下層が褐灰細砂混じりシルトである。

遺物が出土していないため､時期は不明であるが、切り合い関係から弥生時代前期以降と考えられる。

17 － SK40（図 158）

第 17 調査区中央西側で検出した土坑である。17-SX101 を切る。攪乱に切られるが、検出した平面形状は楕円形である。主軸方位 N-33°-E、検出面の標高は 5.05 mである。

長軸約 1.76 mを検出し、短軸約 0.89 m、深さ約 0.22 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は４層に分層でき、上層が黒褐シルトと灰黄褐シルト、上層土坑肩が黒褐細砂混じりシルト、下層が褐灰シルト～粘土である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

遺構の切り合い関係から弥生時代前期以降と考えられる。

17 － SK45（図 158）

第 17 調査区中央西側で検出した土坑である。17-SX101 を切る。平面形状は円形を呈する。主軸方位 N-75°-W、検出面の標高は 5.05 mである。

長軸約 0.92 mを検出し、短軸約 0.83 m、深さ約 0.31 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は２層に分層でき、上層が黒褐細砂混じりシルト、下層が褐灰シルト～粘土である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

遺構の切り合い関係から弥生時代前期以降と考えられる。

17 － SD13（図 158）

第 17 調査区中央北端で検出した溝状の遺構であ

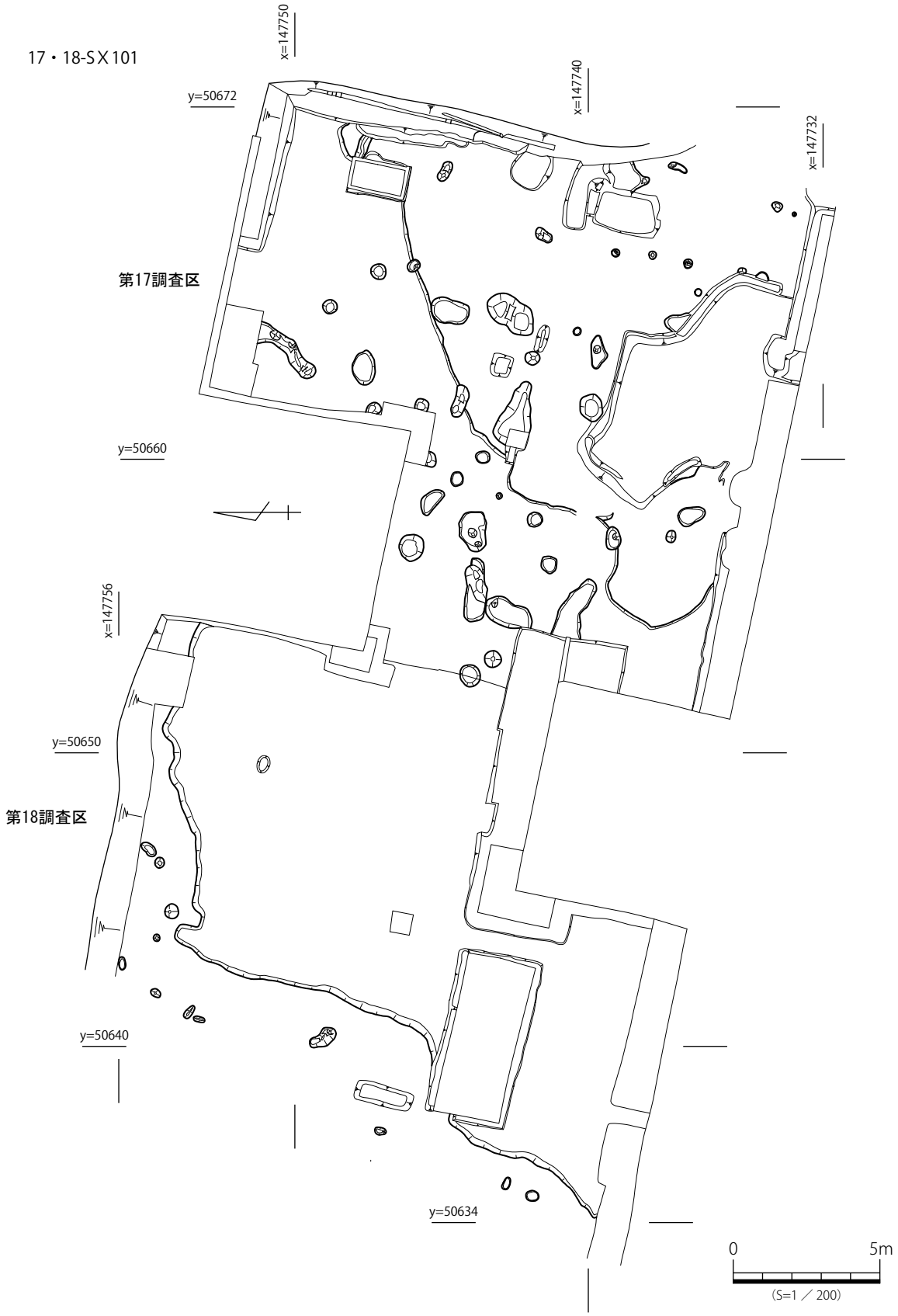


図 159　17・18-SX101　平面図

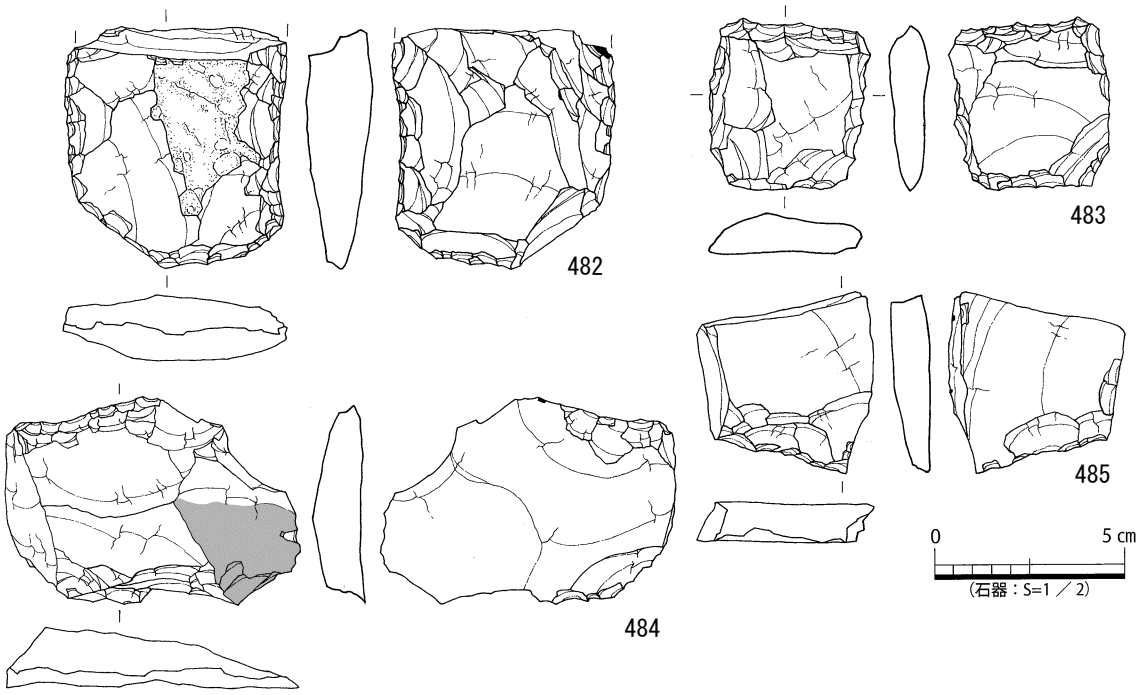


図 160　17-SX101　出土遺物実測図

る。17-SX101 を切る。北東に蛇行し、攪乱に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-36°-E、検出面の標高は 5.00 mである。

長さ約 2.40 mを検出し、幅約 0.58 m、深さ約 0.23 mを測る。断面形状は椀状に段落ちである。

埋土は３層に分層でき、上層が黒褐粘土、下層が黒褐粘土混じり粗砂～細砂、上層溝肩が褐灰シルト混じり粘土である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

遺構の切り合い関係から弥生時代前期以降と考えられる。

17・18 ― SX101（図 159・160）

第 17 調査区西側、第 18 調査区東側で検出した性格不明の流路状の遺構である。包含層の可能性が考えらえる。攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-56°-E、検出面の標高は 5.15 mである。

長軸約 24 mを検出し、短軸約 20 m、深さ約 0.15 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は、黒褐中粒砂混じりシルト～粘土と黒褐シルト～粘土である。

遺物は 17-SX101 から打製石斧（482）、楔形石器（483 ～ 485）が出土したほか、図化できなかったが弥生土器片、サヌカイト剥片が出土した。

出土遺物の年代から、弥生時代後期以降と考えられる。

17 ― SK59（図 161）

第 17 調査区中央北側で検出した土坑である。17-SX101 下層で検出した。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は楕円形である。主軸方位 N-83°-W、検出面の標高は 4.95 mである。

長軸約 2.44 mを検出し、短軸約 1.20 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は褐灰シルト～粘土の単層である。

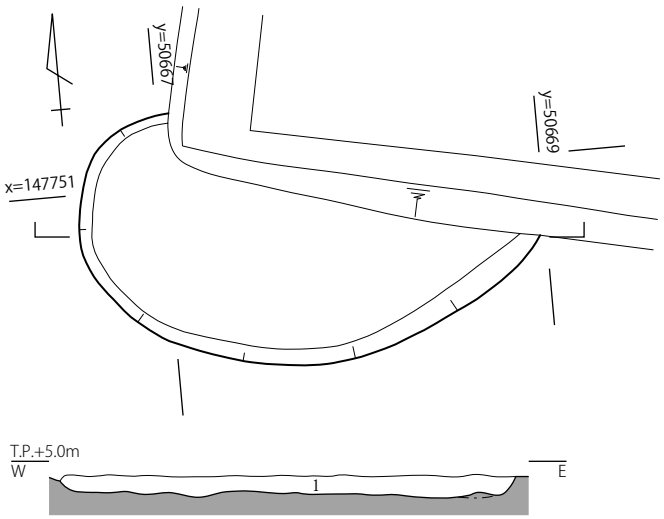
遺物が出土していないため、時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から弥生時代後期以前と考えられる。

17 ― SK60（図 161）

第 17 調査区中央北側で検出した土坑である。17-SX101 下層で検出した。17-SK11・SP48 に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は楕円形である。主軸方位 N-22°-W、検出面の標高は 5.10 mである。

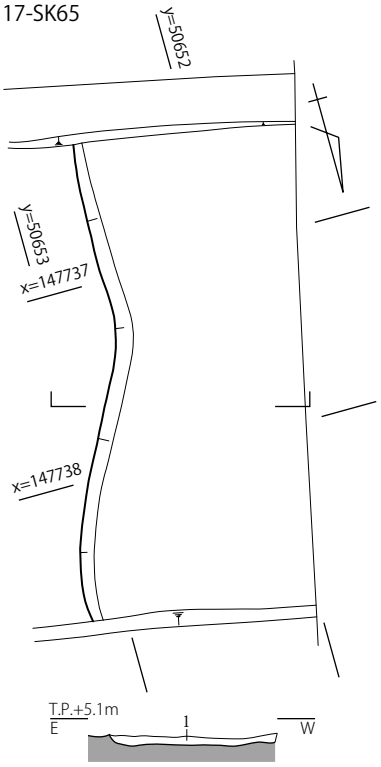
長軸約 1.75 mを検出し、短軸約 1.50 m、深さ約 0.18 mを測る。断面形状は逆台形である。

17-SK59



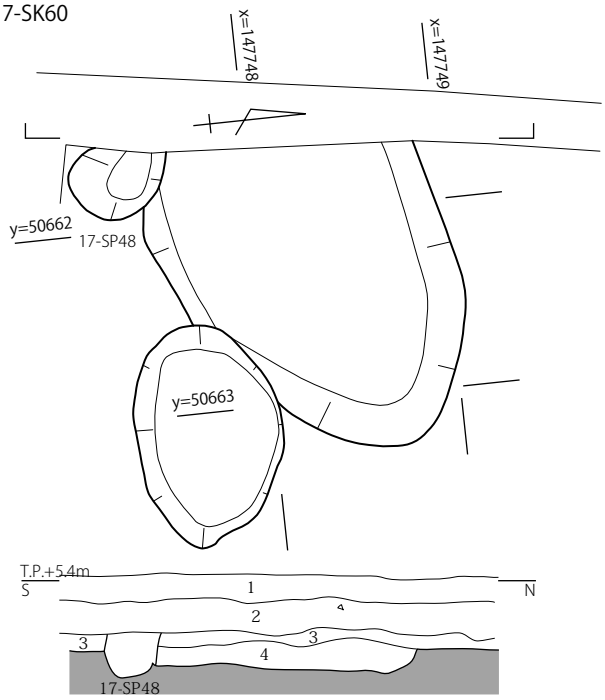
1　10YR4/1 褐灰　シルト～粘土　Mn・Fe 沈着　径 1 ～ 3 ㎝程度の地山ブロック 10%

17-SK65



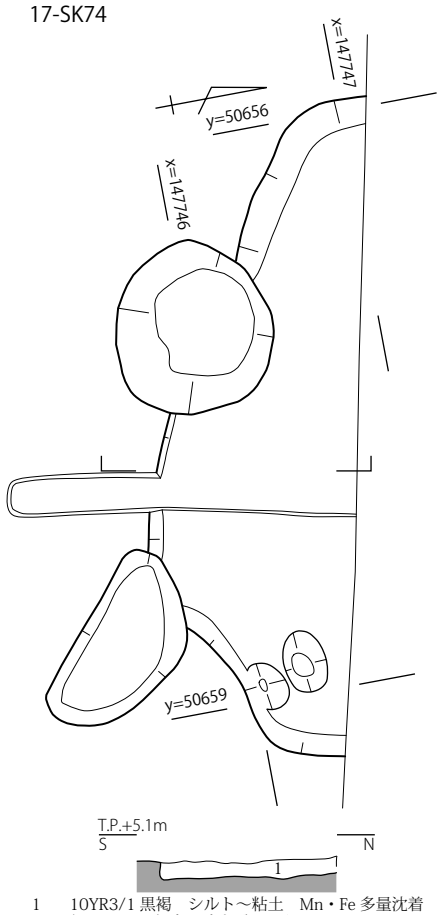
1　2.5Y4/1 黄灰　中粒砂混じりシルト～粘土　Mn・Fe 沈着　径 2 ～ 4 ㎝程度の地山ブロック 30%

17-SK60



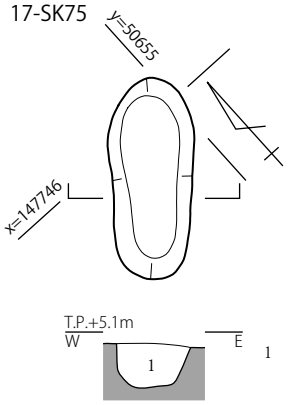
1　10YR7/6 明黄褐　細砂…洪水砂
2　2.5Y6/1 黄灰　中粒砂混じり粘土…水田層
3　10YR4/4 褐　シルト混じり粘土　Mn 少量沈着　Fe 沈着…包含層
4　10YR4/1 褐灰　細砂混じりシルト～粘土　Mn・Fe 沈着　径 1 ～ 2 ㎝程度の地山ブロック 3%…17-SK60

17-SK74



1　10YR3/1 黒褐　シルト～粘土　Mn・Fe 多量沈着　径 1 ～ 3 ㎝程度の地山ブロック 30%

17-SK75



1　10YR3/1 黒褐　シルト～粘土　Mn・Fe 沈着　黄灰色粘土ブロック 15%　地山ブロック 7%

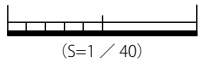


図 161　17-SK59・60・65・74・75　平・断面図

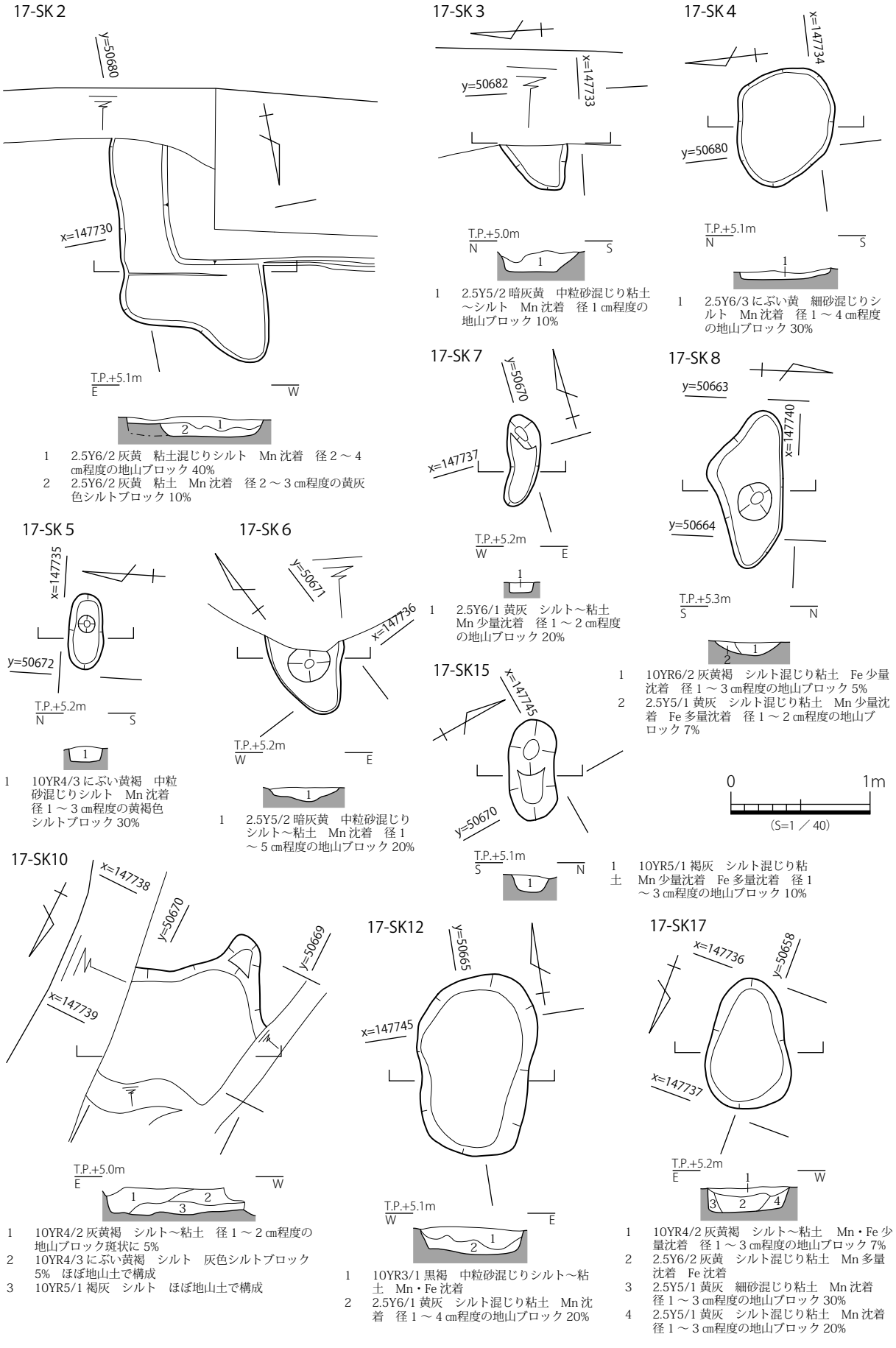


図 162　17-SK ２・３・４・５・６・７・８・10・12・15・17　平・断面図

埋土は褐灰細砂混じりシルト～粘土の単層である。

遺物はサヌカイト剥片が出土したが、それ以外の遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

遺構の切り合い関係から弥生時代後期以前と考えられる。

17 － SK65（図 155・161）

第 17 調査区南西隅で検出した土坑状の遺構である。17-SX101 下層で検出した。攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は方形である。主軸方位 N-14°-E、検出面の標高は 5.00 mである。

長軸約 2.52 mを検出し、短軸約 1.23 m、深さ約 0.05 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は黄灰中粒砂混じりシルト～粘土の単層である。

遺物は石鏃（481）、弥生土器？片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

遺構の切り合い関係から弥生時代後期以前と考えられる。

17 － SK74（図 161）

第 17 調査区中央北側で検出した土坑である。17-SX101 下層で検出した。17-SK20・45 に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整方形である。主軸方位 N-70°-W、検出面の標高は 4.95 mである。

長軸約 3.50 mを検出し、短軸約 1.10 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は方形である。

埋土は黒褐シルト～粘土の単層である。

遺物は弥生土器片？が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

遺構の切り合い関係から弥生時代後期以前と考えられる。

17 － SK75（図 161）

第 17 調査区中央西側で検出した土坑である。17-SX101 に切られる。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-43°-E、検出面の標高は 5.05 mである。

長軸約 1.05 mを検出し、短軸約 0.45 m、深さ約 0.23 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は黒褐シルト～粘土の単層である。

遺物が出土していないため､時期は不明であるが、遺構切り合い関係から弥生時代後期以前と考えられる。

17 － SK ２（図 162）

第 17 調査区南東隅で検出した土坑である。攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整方形である。主軸方位 N-5°-E、検出面の標高は 4.90 mである。

長軸約 1.40 mを検出し、短軸約 1.05 m、深さ約 0.14 mを測る。断面形状は逆台形に東肩が段状である。

埋土は２層に分層でき、上層が灰黄粘土混じりシルト、下層が灰黄粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

17 － SK ３（図 162）

第 17 調査区南東隅で検出した土坑状の遺構である。調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は三角形である。主軸方位 N-53°-E、検出面の標高は 4.90 mである。

長軸約 0.45 mを検出し、短軸約 0.40 m、深さ約 0.15 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は暗灰黄中粒砂混じり粘土～シルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

17 － SK ４（図 162）

第 17 調査区南東隅で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-58°-W、検出面の標高は 4.85 mである。

長軸約 0.90 mを検出し、短軸約 0.70 m、深さ約 0.06 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土はにぶい黄細砂混じりシルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

17 － SK ５（図 162）

第 17 調査区南東側で検出した土坑状の遺構である。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-88°-E、検出面の標高は 4.95 mである。

長軸約 0.54 mを検出し、短軸約 0.25 m、深さ約 0.11 mを測る。断面形状は方形である。

埋土はにぶい黄褐中粒砂混じりシルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

17 － SK ６（図 162）

第 17 調査区中央南側で検出した土坑である。調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は三角形である。主軸方位 N-4°-W、検出面の標高は 4.95 mである。

長軸約 0.70 mを検出し、短軸約 0.54 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は皿状である。

埋土は暗灰黄中粒砂混じりシルト～粘土の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

17 － SK ７（図 162）

第 17 調査区中央南側で検出した土坑状の遺構である。検出した平面形状は三日月形である。主軸方位 N-25°-E、検出面の標高は 4.95 mである。

長軸約 0.66 mを検出し、短軸約 0.24 m、深さ約 0.07 mを測る。断面形状は方形である。

埋土は黄灰シルト～粘土の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

17 － SK ８（図 162）

第 17 調査区中央で検出した土坑である。平面形状は不整方形を呈する。主軸方位 N-83°-W、検出面の標高は 5.05 mである。

長軸約 1.13 mを検出し、短軸約 0.53 m、深さ約 0.09 mを測る。断面形状は皿状である。

埋土は２層に分層でき、灰黄褐シルト混じり粘土と黄灰シルト混じり粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

17 － SK10（図 162）

第 17 調査区中央で検出した土坑状の遺構である。攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整形である。主軸方位 N-64°-E、検出面の標高は 4.90 mである。

長軸約 1.20 mを検出し、短軸約 1.00 m、深さ約 0.19 mを測る。断面形状は方形である。

埋土は３層に分層でき、上層が灰黄褐シルト～粘土とにぶい黄褐シルト、下層が褐灰シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

17 － SK12（図 162）

第 17 調査区中央で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-20°-E、検出面の標高は 5.00 mである。

長軸約 1.32 mを検出し、短軸約 0.84 m、深さ約 0.19 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は２層に分層でき、上層が黒褐中粒砂混じりシルト～粘土、下層が黄灰シルト混じり粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

17 － SK15（図 162）

第 17 調査区中央で検出した土坑状の遺構である。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-57°-W、検出面の標高は 5.00 mである。

長軸約 0.72 mを検出し、短軸約 0.33 m、深さ約 0.11 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は褐灰シルト混じり粘土の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

17 － SK17（図 162）

第 17 調査区南西側で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-20°-W、検出面の標高は 5.10 mである。

長軸約 0.93 mを検出し、短軸約 0.62 m、深さ約 0.17 mを測る。断面形状は方形である。

埋土は４層に分層でき、上層が灰黄褐シルト～粘土、下層が灰黄シルト混じり粘土と黄灰細砂混じり粘土、黄灰シルト混じり粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

17 － SK29（図 163）

第 17 調査区中央南側で検出した土坑状の遺構である。大部分を攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は三角形である。主軸方位 N-32°-W、検出面の標高は 5.10 mである。

長軸約 1.14 mを検出し、短軸約 0.29 m、深さ約 0.15 mを測る。断面形状は V 字形である。

埋土は暗灰黄細砂混じりシルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

17 － SK43（図 163）

第 17 調査区中央南側で検出した土坑状の遺構である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は三角形である。主軸方位 N-14°-W、検出面の標高は 5.00 mである。

長軸約 0.90 mを検出し、短軸約 0.57 m、深さ

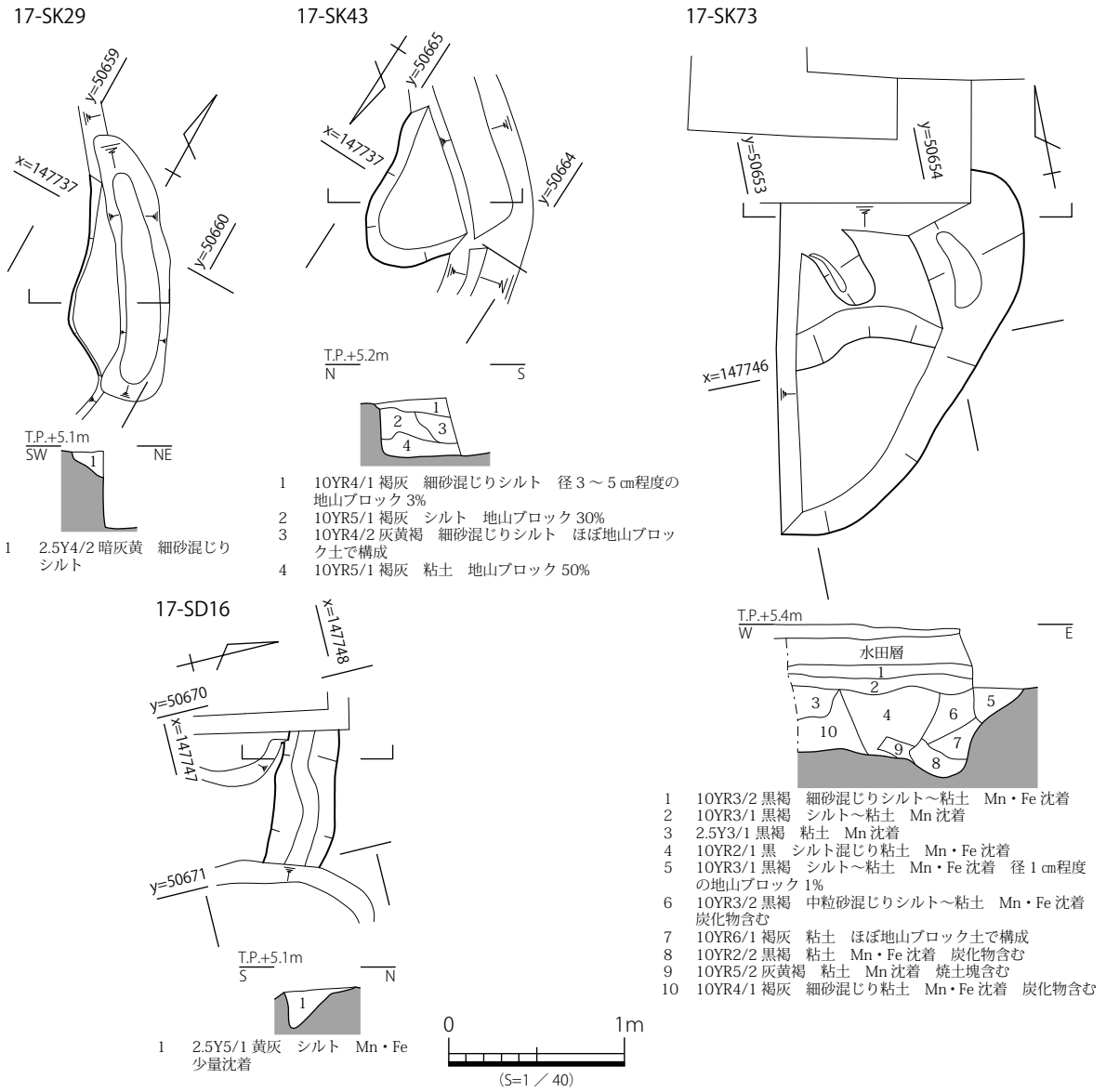


図 163　17-SK29・43・SD16・SK73　平・断面図

約 0.33 mを測る。断面形状は方形である。

埋土は 4 層に分層でき、上層が褐灰細砂混じりシルト、中層が褐灰シルトと灰黄褐細砂混じりシルト、下層が褐灰粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

17 － SD16（図 163）

第 17 調査区北東側で検出した溝状の遺構である。東西にやや蛇行し、攪乱に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-71°-W、検出面の標高は 5.00 mである。

長さ約 0.76 mを検出し、幅約 0.40 m、深さ約 0.20 mを測る。断面形状は V 字形に北肩がゆるやかである。

埋土は黄灰シルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

17 － SK73（図 163）

第 17 調査区中央西端で検出した土坑状の遺構である。17-SX101 下層で検出した。攪乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は楕円形である。主軸方位 N-43°-E、検出面の標高は 5.05 mである。

長軸約 2.37 mを検出し、短軸約 1.42 m、深さ

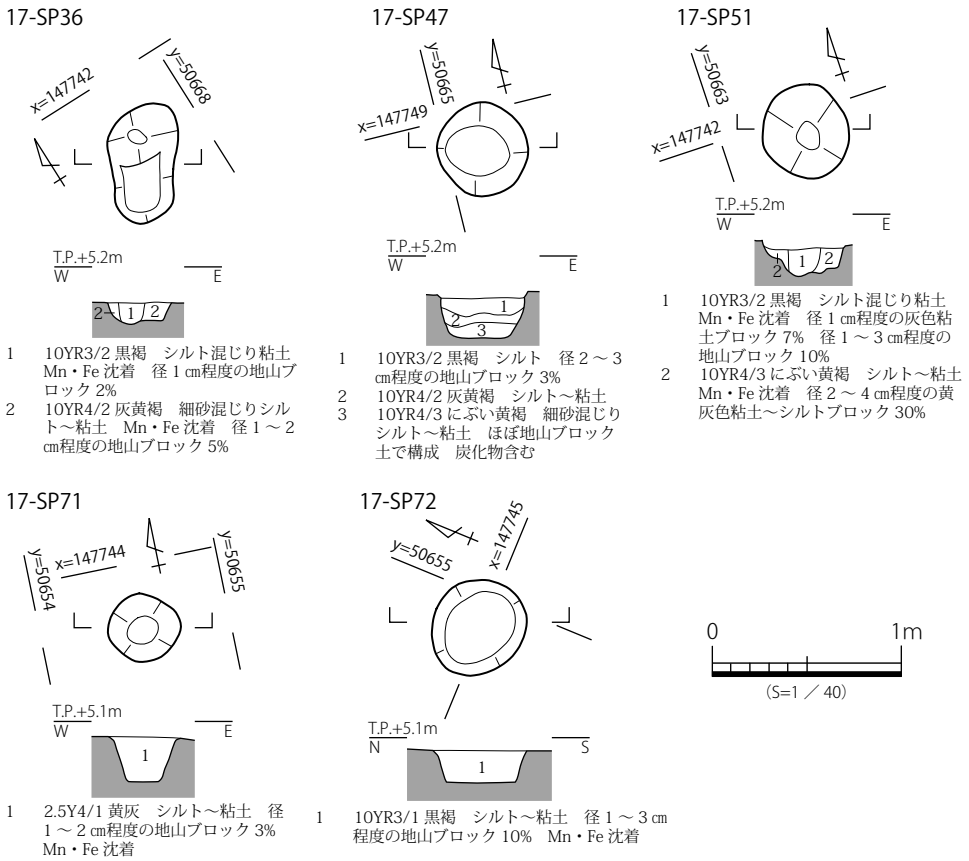


図 164　17-SP36・47・51・71・72　平・断面図

約 0.47 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は８層に分層でき、埋土はブロック状に不規則に堆積しており、埋土の観察から風倒木痕と考えられる。

遺物は弥生土器片、サヌカイト剥片、結晶片岩剥片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

遺構の切り合い関係から弥生時代前期以前と考えられる。

17 － SP36（図 164）

第 17 調査区中央で検出したピットである。検出した平面形状は楕円形である。主軸方位 N-36°-E、検出面の標高は 5.00 mである。

長軸約 0.64 mを検出し、短軸約 0.38 m、深さ約 0.11 mを測る。断面形状は逆台形に段落ちである。

埋土は２層に分層でき、柱痕が確認できる。埋土は柱痕が黒褐シルト混じり粘土、掘方が灰黄褐細砂混じりシルト～粘土である。

遺物はサヌカイト剥片が出土したが、その他時期の判明する遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

17 － SP47（図 164）

第 17 調査区中央北側で検出したピットである。17-SX101 を切る。平面形状は円形を呈する。検出面の標高は 5.00 mである。

長軸約 0.50 mを検出し、短軸約 0.49 m、深さ約 0.24 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は３層に分層でき、上層が黒褐シルト、中層が灰黄褐シルト～粘土、下層がにぶい黄褐細砂混じりシルト～粘土である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

遺構の切り合い関係から弥生時代前期以降と考えられる。

17 － SP51（図 164）

第 17 調査区中央で検出したピットである。平面形状は円形を呈する。検出面の標高は 5.05 mである。

長軸約 0.50 mを検出し、短軸約 0.46 m、深さ約 0.18 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は２層に分層でき、柱痕が確認できる。埋土は柱痕が黒褐シルト混じり粘土、掘方がにぶい黄褐シルト～粘土である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

17 － SP71（図 164）

第 17 調査区中央西側で検出したピット状の遺構である。17-SX101 下層で検出した。17-SK30 に切られるが、平面形状は円形を呈する。主軸方位 N-47°-E、検出面の標高は 5.00 mである。

長軸約 0.36 mを検出し、短軸約 0.36 m、深さ約 0.34 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は黄灰シルト～粘土の単層である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

遺構の切り合い関係から弥生時代前期以前と考えられる。

17 － SP72（図 164）

第 17 調査区中央西側で検出したピットである。17-SX101 下層で検出した。平面形状は円形を呈する。主軸方位 N-69°-W、検出面の標高は 5.05 m である。

長軸約 0.53 mを検出し、短軸約 0.48 m、深さ約 0.17 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は黒褐シルト～粘土の単層である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

遺構の切り合い関係から弥生時代後期以前と考えられる。

18 － SK30（図 166）

第 18 調査区中央西側で検出した土坑である。平面形状は不整形である。主軸方位 N-89°-E、検出面の標高は 5.20 mである。

長軸約 1.20 mを検出し、短軸約 0.48 m、深さ約 0.07 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は黄灰シルトの単層である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

18 － SK40（図 166）

第 18 調査区中央北側で検出した土坑と考えられる遺構である。18-SP49 を切る。平面形状は不整形である。主軸方位 N-49°-W、検出面の標高は 5.15 mである。

長軸約 1.11 mを検出し、短軸約 0.64 m、深さ約 0.16 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は２層に分層でき、褐灰細砂混じり粘土と褐灰シルト～粘土である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

18 － SX10（図 165）

第 18 調査区中央西側で検出した溝状の遺構である。北に湾曲する。主軸方位 N-4°-E、検出面の標高は 5.20 mである。

長さ約 0.89 mを検出し、幅約 0.21 m、深さ約 0.05 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は黒褐シルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

18 － SX19（図 165）

第 18 調査区南西側で検出した溝状の遺構である。北に直行する。主軸方位 N-11°-E、検出面の標高は 5.20 mである。

長さ約 1.18 mを検出し、幅約 0.20 m、深さ約 0.04 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は褐灰粘土の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

18 － SX20（図 165）

第 18 調査区南西側で検出した溝状の遺構である。西から北に屈曲する。主軸方位 N-73°-W → N-33°-E、検出面の標高は 5.20 mである。

長さ約 1.00 mを検出し、幅約 0.20 m、深さ約 0.15 mを測る。断面形状は方形である。

埋土はにぶい黄褐シルト～粘土の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

18 － SX31（図 165）

第 18 調査区中央西側で検出した溝状の遺構である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるである。主軸方位 N-54°-W、検出面の標高は 5.20 mである。

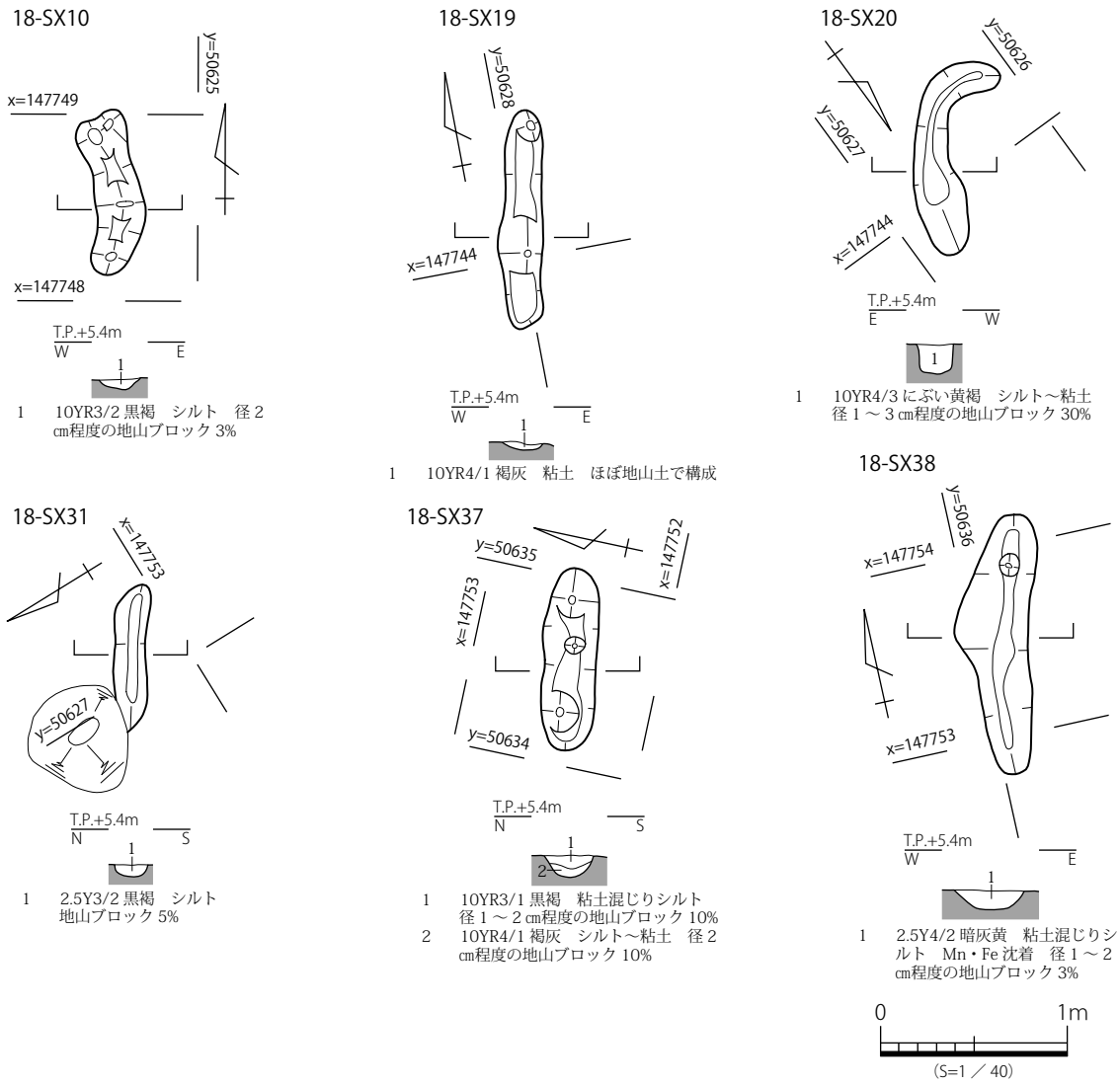


図 165　18-SX10・19・20・31・37・38　平・断面図

長軸約 0.80 mを検出し、短軸約 0.17 m、深さ約 0.06 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は黒褐シルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

18 － SX37（図 165）

第 18 調査区中央北側で検出した溝状の遺構である。主軸方位 N-82° -E、検出面の標高は 5.20 mである。

長軸約 0.98 mを検出し、短軸約 0.30 m、深さ約 0.12 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は２層に分層でき、上層が黒褐粘土混じりシルト、下層が褐灰シルト～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

18 － SX38（図 165）

第 18 調査区中央北側で検出した溝状の遺構である。主軸方位 N-13° -E、検出面の標高は 5.20 mである。

長軸約 1.40 mを検出し、短軸約 0.40 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は暗灰黄粘土混じりシルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

18 － SK 1（図 166）

第 18 調査区南西側で検出した土坑である。平面形状は半円形を呈する。主軸方位 N-90° -E、検出面の標高は 5.25 mである。

長軸約 0.78 mを検出し、短軸約 0.46 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は逆台形である。

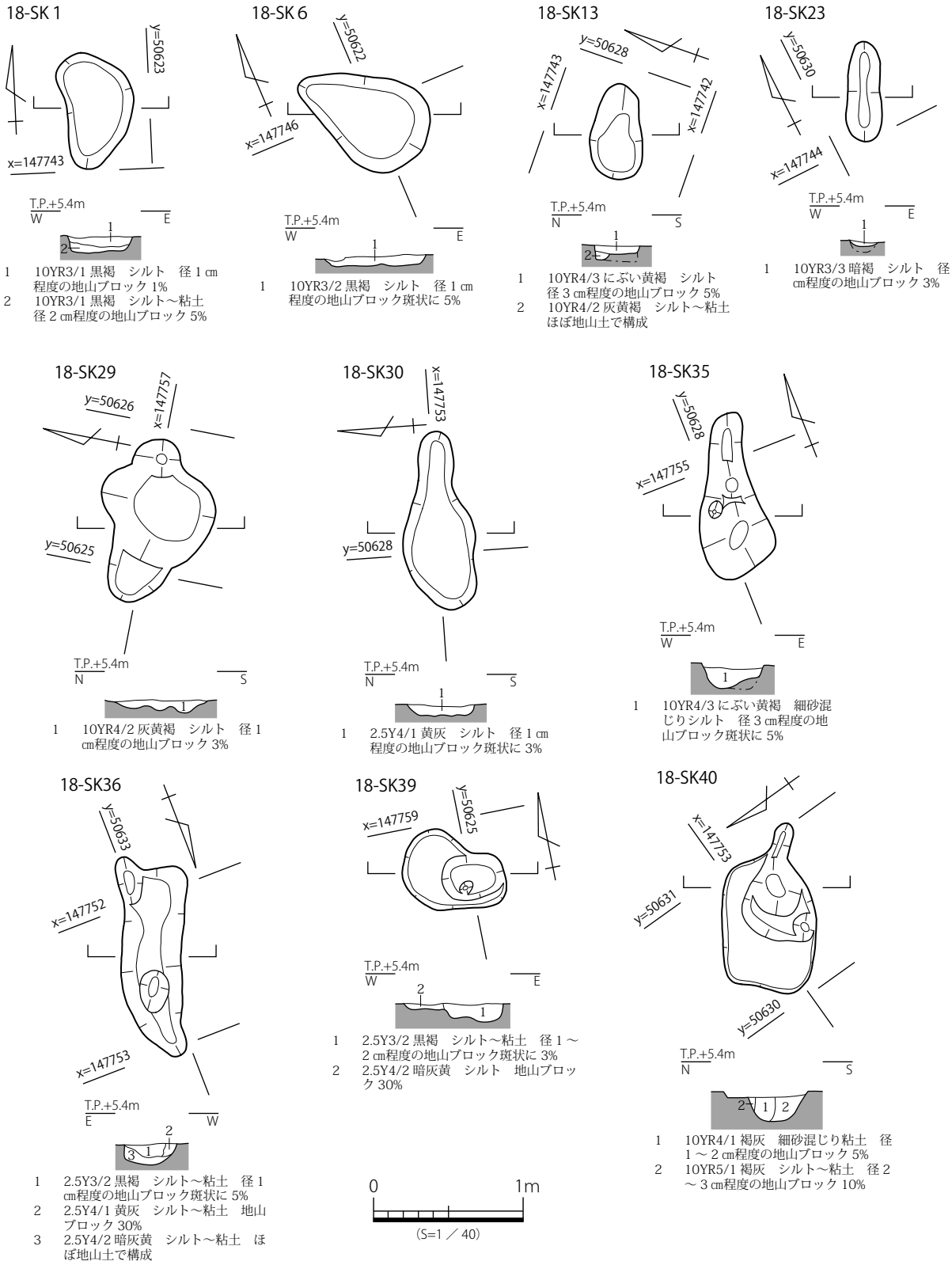


図 166　18-SK 1 ・ 6 ・ 13 ・ 23 ・ 29 ・ 30 ・ 35 ・ 36 ・ 39 ・ 40　平・断面図

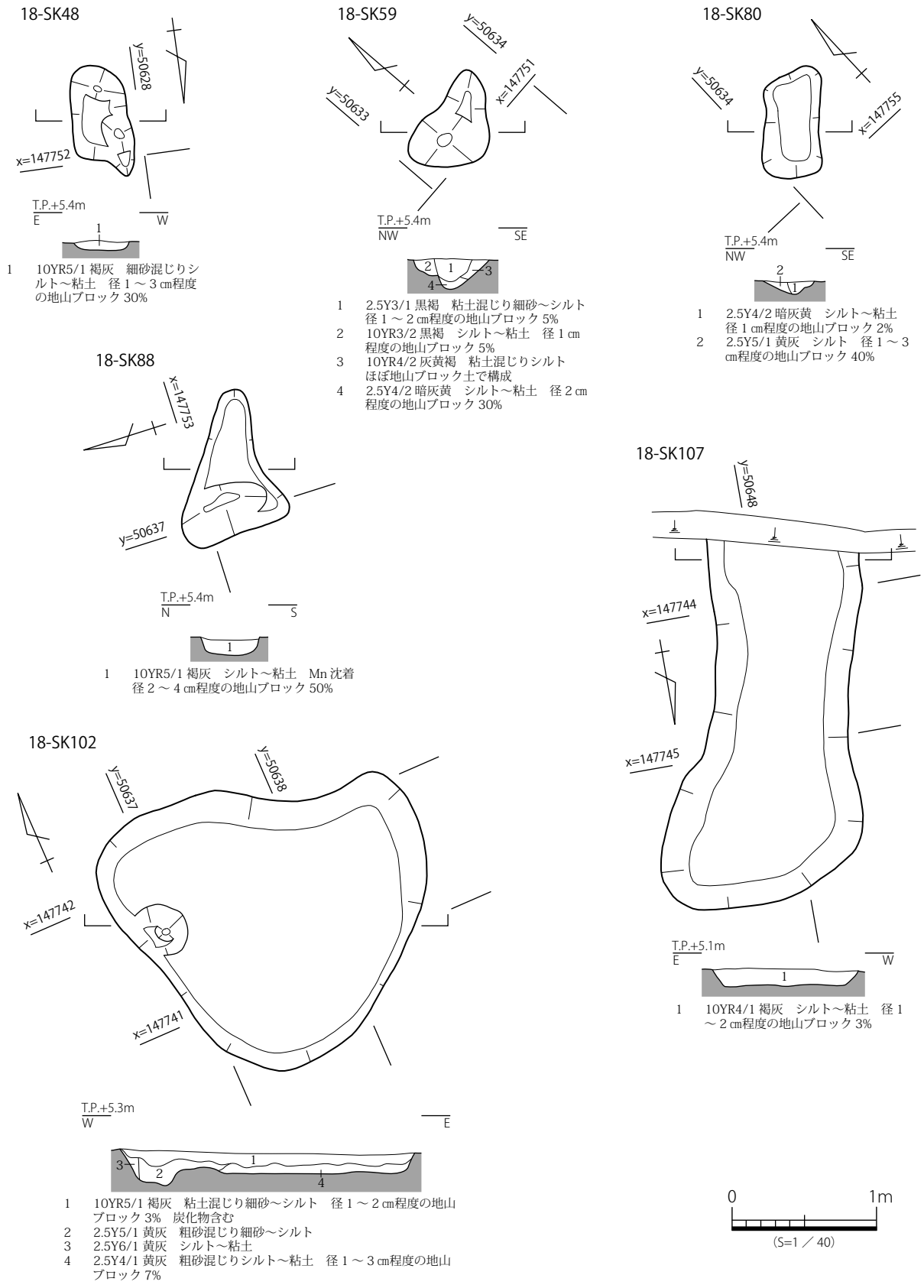


図 167　18-SK48・59・80・88・102・107　平・断面図

埋土は２層に分層でき、上層が黒褐シルト、下層が黒褐シルト～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

18 － SK ６（図 166）

第 18 調査区南西側で検出した土坑である。第 13 調査区と第 18 調査区の調査区境で検出した。第 13 調査区では 13-SK31 とした遺構である。平面形状は滴形を呈する。主軸方位 N-40° -W、検出面の標高は 5.20 mである。

長軸約 0.93 mを検出し、短軸約 0.62 m、深さ約 0.07 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は黒褐シルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

18 － SK13（図 166）

第 18 調査区南西側で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-15° -W、検出面の標高は 5.20 mである。

長軸約 0.65 mを検出し、短軸約 0.35 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は方形に段落ちである。

埋土は２層に分層でき、上層がにぶい黄褐シルト、下層が灰黄褐シルト～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

18 － SK23（図 166）

第 18 調査区中央南側で検出した土坑と考えられる遺構である。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-29° -E、検出面の標高は 5.15 mである。

長軸約 0.67 mを検出し、短軸約 0.18 m、深さ約 0.03 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は暗褐シルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

18 － SK29（図 166）

第 18 調査区北西側で検出した土坑である。平面形状は不整形である。主軸方位 N-85° -W、検出面の標高は 5.20 mである。

長軸約 1.11 mを検出し、短軸約 0.48 m、深さ約 0.08 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は灰黄褐シルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

18 － SK35（図 166）

第 18 調査区北西側で検出した土坑状の遺構である。平面形状はひょうたん形を呈する。主軸方位 N-22° -E、検出面の標高は 5.20 mである。

長軸約 1.11 mを検出し、短軸約 0.50 m、深さ約 0.16 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土はにぶい黄褐細砂混じりシルトの単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

18 － SK36（図 166）

第 18 調査区中央で検出した土坑状の遺構である。平面形状は不整形である。主軸方位 N-23° -E、検出面の標高は 5.20 mである。

長軸約 1.27 mを検出し、短軸約 0.45 m、深さ約 0.14 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は３層に分層でき、上層が黒褐シルト～粘土と黄灰シルト～粘土、下層が３暗灰黄シルト～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

18 － SK39（図 166）

第 18 調査区北西側で検出した土坑である。平面形状はひょうたん形を呈する。主軸方位 N-75° -W、検出面の標高は 5.20 mである。

長軸約 0.68 mを検出し、短軸約 0.54 m、深さ約 0.12 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は２層に分層でき、黒褐シルト～粘土と暗灰黄シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

18 － SK48（図 167）

第 18 調査区中央西側で検出した土坑である。平面形状は不整形である。主軸方位 N-9° -W、検出面の標高は 5.20 mである。

長軸約 0.80 mを検出し、短軸約 0.41 m、深さ約 0.06 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は褐灰細砂混じりシルト～粘土の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

18 － SK59（図 167）

第 18 調査区中央北側で検出した土坑である。平面形状は歪な三角形を呈する。主軸方位 N-88° -E、

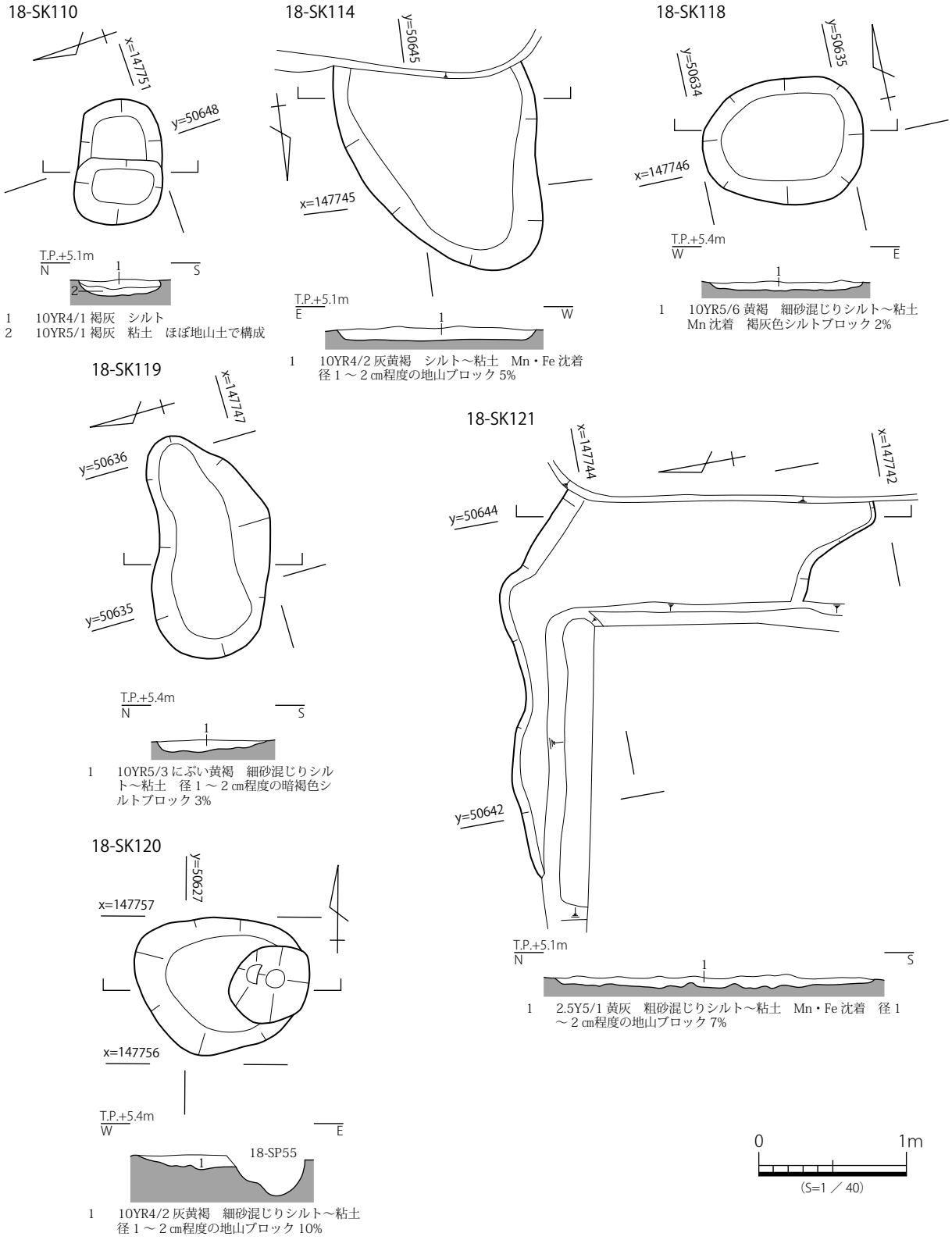


図 168　18-SK110・114・118・119・120・121　平・断面図

検出面の標高は 5.20 mである。

長軸約 0.72 mを検出し、短軸約 0.45 m、深さ約 0.21 mを測る。断面形状は逆台形に段落ちである。

埋土は 4 層に分層でき、上層が黒褐粘土混じり細砂～シルトと黒褐シルト～粘土、灰黄褐粘土混じりシルト、下層が暗灰黄シルト～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

18 － SK80（図 167）

第 18 調査区中央北側で検出した土坑である。平面形状は隅丸方形を呈する。主軸方位 N-43°-E、検出面の標高は 5.20 mである。

長軸約 0.76 mを検出し、短軸約 0.40 m、深さ約 0.08 mを測る。断面形状はゆるいＶ字形である。

埋土は 2 層に分層でき、暗灰黄シルト～粘土と黄灰シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

18 － SK88（図 167）

第 18 調査区中央北側で検出した土坑である。平面形状は三角形を呈する。主軸方位 N-58°-W、検出面の標高は 5.20 mである。

長軸約 1.12 mを検出し、短軸約 0.68 m、深さ約 0.12 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は褐灰シルト～粘土の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

18 － SK102（図 167）

第 18 調査区中央南側で検出した土坑である。18-SX101 下層で検出した。平面形状は不整形である。主軸方位 N-45°-W、検出面の標高は 5.05 mである。

長軸約 2.18 mを検出し、短軸約 2.12 m、深さ約 0.24 mを測る。断面形状は逆台形に段落ちである。

埋土は 4 層に分層でき、上層が褐灰粘土混じり細砂～シルト、下層が黄灰粗砂混じり細砂～シルトと黄灰シルト～粘土、黄灰粗砂混じりシルト～粘土である。

遺物は弥生土器片、サヌカイト剥片が出土した。また須恵器片が 1 点出土したが、周辺の遺構出土遺物と切り合い関係等を検討した結果、周辺の攪乱からの混入の可能性が高いといえる。

18 － SK107（図 167）

第 18 調査区南東側で検出した土坑状の遺構である。18-SX101 の下層で検出した。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整方形である。主軸方位 N-12°-E、検出面の標高は 5.00 mである。

長軸約 2.55 mを検出し、短軸は約 1.33 m、深さは約 0.12 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は褐灰シルト～粘土の単層である。

遺物は弥生土器片、サヌカイト剥片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

遺構の切り合い関係から弥生時代後期以前と考えられる。

18 － SK110（図 168）

第 18 調査区中央東側で検出した土坑である。18-SX101 下層で検出した。平面形状は隅丸方形を呈する。主軸方位 N-69°-W、検出面の標高は 5.00 mである。

長軸約 0.85 mを検出し、短軸約 0.58 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は方形である。

埋土は 2 層に分層でき、上層が褐灰シルト、下層が褐灰粘土である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から弥生時代後期以前と考えられる。

18 － SK114（図 168）

第 18 調査区南東側で検出した土坑である。18-SX101 の下層で検出した。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は楕円形である。主軸方位 N-28°-W、検出面の標高は 4.95 mである。

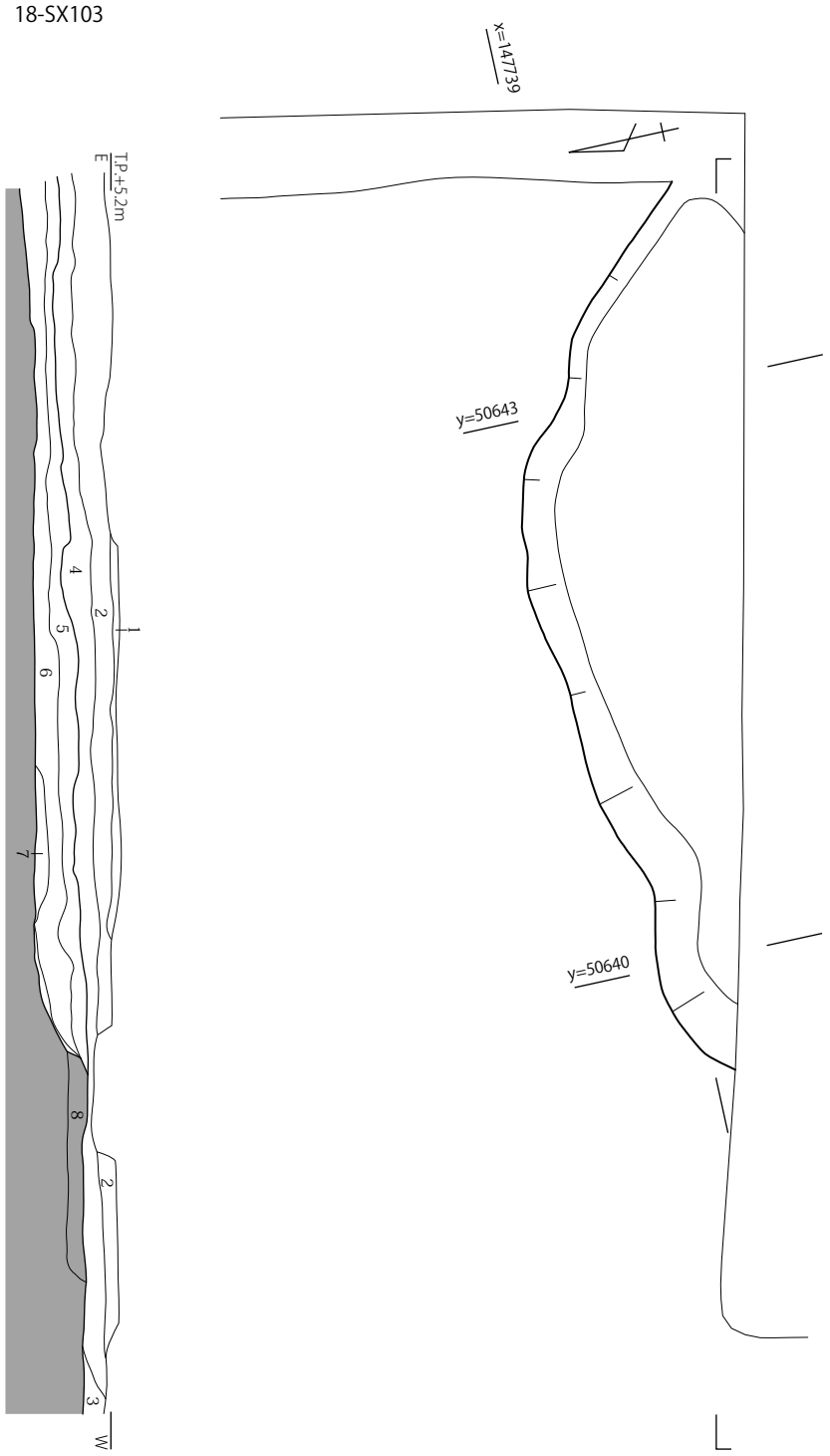
長軸約 1.80 mを検出し、短軸約 1.34 m、深さ約 0.09 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は灰黄褐シルト～粘土の単層である。

遺物が出土していないため､時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から弥生時代後期以前と考えられる。

18 － SK121（図 168）

第 18 調査区中央東側で検出した土坑である。18-SX101 下層で検出した。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不



1　2.5Y4/2 暗灰黄　シルト～粘土　地山ブロック 50%
2　2.5Y4/1 黄灰　粘土混じりシルト　Mn 沈着　径 1 ～ 2 ㎝程度の地山ブロック斑状に 5%
3　2.5Y3/2 黒褐　中粒砂混じりシルト～粘土　Mn・Fe 沈着…18-SX101
4　10YR3/2 黒褐　シルト～粘土　径 1 ㎝程度の地山ブロック 2%…18-SX101
5　2.5Y3/1 黒褐　粘土混じり極細砂～シルト…18-SX103
6　10YR4/1 褐灰　シルト～粘土　径 1 ～ 2 ㎝程度の地山ブロック 2%…18-SX103
7　2.5Y7/4 浅黄　シルト～粘土　ほぼ地山土で構成…18-SX108
8　2.5Y6/1 黄灰　粘土混じりシルト　Mn・Fe 沈着…包含層

0　1m
（S=1 ／ 40）

図 169　18-SX103　平・断面図

整形である。主軸方位 N-76°-W、検出面の標高は 4.95 mである。

長軸約 2.60 mを検出し、短軸約 2.14 m、深さ約 0.08 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は黄灰粗砂混じりシルト～粘土の単層である。

遺物が出土していないため､時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から弥生時代後期以前と考えられる。

18 ― SK118（図 168）

第 18 調査区中央で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-80°-W、検出面の標高は 5.15 mである。

長軸約 1.09 mを検出し、短軸約 0.85 m、深さ約 0.07 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は黄褐細砂混じりシルト～粘土の単層である。

遺物は土師器片？が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

18 ― SK119（図 168）

第 18 調査区中央で検出した土坑である。検出した平面形状は不整方形である。主軸方位 N-88°-W、検出面の標高は 5.15 mである。

長軸約 1.54 mを検出し、短軸約 0.80 m、深さ約 0.08 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土はにぶい黄褐細砂混じりシルト～粘土の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

18 ― SK120（図 168）

第 18 調査区北西側で検出した土坑である。18-SP55 に切られるが、平面形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-78°-W､検出面の標高は 5.20 mである。

長軸約 1.13 mを検出し、短軸約 0.93 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は灰黄褐細砂混じりシルト～粘土の単層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

18 ― SX103（図 169）

第 18 調査区中央南側で検出した性格不明遺構である。18-SX101 の下層で検出した。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は不整形である。主軸方位 N-81°-W、検出面の標高は 5.05 mである。

長軸約 4.70 mを検出し、短軸約 1.15 m、深さ約 0.20 mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は３層に分層でき、上層が黒褐粘土混じり極細砂～シルト、下層が褐灰シルト～粘土と浅黄シルト～粘土である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

遺構の切り合い関係から弥生時代後期以前と考えられる。

18 ―柵列 1（図 170）

第 18 調査区北西側で検出した柵列状の遺構である。４間で 18-SP43 ～ 47 で構成する。主軸方位は N-90°-E、検出面の標高は 5.20m である。芯芯間距離は 2.7 ～ 1.2m を測る。

柱穴は円形と隅丸方形を呈し、直径約 0.52 ～ 0.33m、深さ約 0.15 ～ 0.08m を測る。断面形状は逆台形と椀状と不整形である。18-SP43・46・47 には柱痕が確認できる。

すべての遺構で遺物が出土していないため、時期は不明である。

18-SP43 は円形を呈し、直径約 0.40 m、深さ約 0.13 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は４層に分層でき、柱痕が確認できる。埋土は柱痕が黒褐細砂混じりシルト～粘土、掘方が褐灰細砂混じりシルトと褐灰細砂～シルト、灰黄褐粘土混じりシルトである。

18-SP44 は楕円形を呈し、長径約 0.45m、短径約 0.28m、深さ約 0.10m を測る。断面形状は椀状である。埋土は灰黄褐シルト～粘土の単層である。

18-SP45 は隅丸方形を呈し、長辺約 0.35 m、短辺約 0.23 m、深さ約 0.08 mを測る。断面形状は不整形である。埋土は灰黄褐細砂混じりシルト～粘土の単層である。

18-SP46 は楕円形を呈し、長径約 0.33 m、短径約 0.25 m、深さ約 0.08 mを測る。断面形状は椀状である。埋土は２層に分層でき、灰黄褐細砂～シルトと褐灰粘土混じり細砂～シルトである。

18-SP47 は隅丸方形を呈し、長辺約 0.52 m、短辺約 0.34 m、深さ約 0.15 mを測る。断面形状は不整形である。埋土は４層に分層でき、柱痕が確認

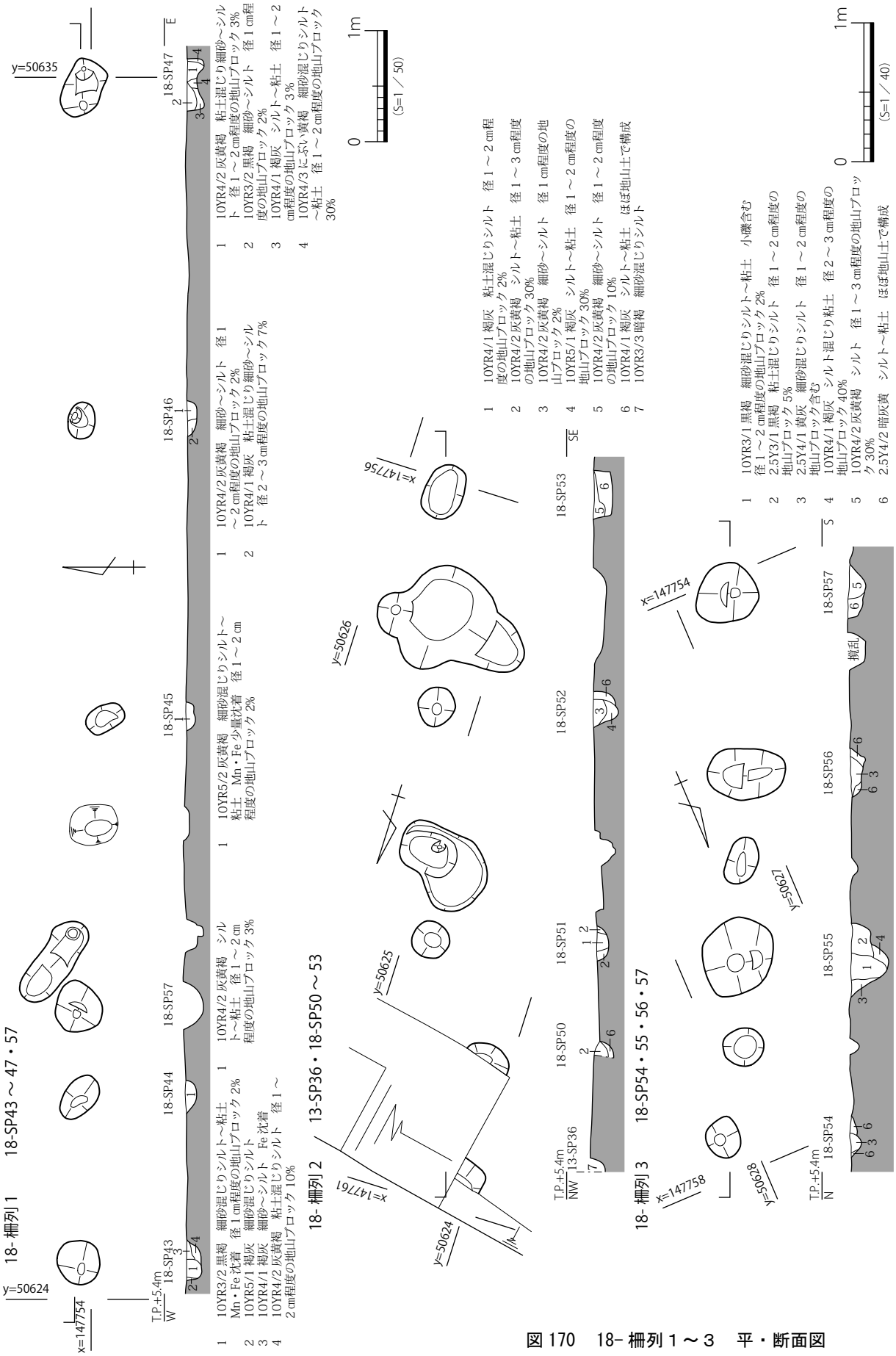


図 170　18- 柵列１～３　平・断面図

できる。埋土は柱痕が灰黄褐粘土混じり細砂～シルト、掘方が黒褐細砂～シルトと褐灰シルト～粘土、にぶい黄褐細砂混じりシルト～粘土である。

18 ー柵列２（図 170）

第 18 調査区北西側で検出した柵列状の遺構である。４間で 18-SP50 ～ 53 と 13-SP36 で構成する。主軸方位は N-15°-W、検出面の標高は 5.20 ～ 5.25m である。芯芯間距離は 1.65 ～ 0.90m を測る。

柱穴は円形と隅丸方形を呈し、直径約 0.40 ～ 0.13m、深さ約 0.18 ～ 0.09m を測る。断面形状は逆台形と椀状と方形である。18-SP51 には柱痕が確認できる。

すべての遺構から遺物が出土していないため、時期は不明である。

13-SP36 は隅丸方形を呈し、長径約 0.20 m、短径約 0.17 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は暗褐細砂混じりシルトの単層である。

18-SP50 は攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した遺構は半円形を呈する。長径約 0.33 m、短径約 0.13 m以上、深さ約 0.14 m を測る。断面形状は椀状である。埋土は２層に分層でき、上層が灰黄褐シルト～粘土、下層が褐灰シルト～粘土である。

18-SP51 は円形を呈し、直径約 0.27 m、深さ約 0.09 mを測る。断面形状は椀状である。埋土は２層に分層でき、柱痕が確認できる。埋土は柱痕が褐灰粘土混じりシルト、掘方が灰黄褐シルト～粘土である。

18-SP52 は円形を呈し、直径約 0.26 m、深さ約 0.18 mを測る。断面形状は U 字形に段落ちである。埋土は３層に分層でき、灰黄褐細砂～シルトと褐灰シルト～粘土である。

18-SP53 は楕円形を呈し、長径約 0.40 m、短径約 0.28 m、深さ約 0.13 mを測る。断面形状は方形である。埋土は２層に分層でき、上層が灰黄褐細砂～シルト、下層が褐灰シルト～粘土である。

18 ー柵列３（図 170）

第 18 調査区北西側で検出した柵列状の遺構である。３間で 18-SP54 ～ 57 で構成する。主軸方位は N-25°-E、検出面の標高は 5.20m である。芯芯間距離は 1.30 ～ 1.25m を測る。

柱穴は円形と楕円形を呈し、直径約 0.60 ～ 0.25m、深さ約 0.26 ～ 0.08m を測る。断面形状は逆台形と椀状と V 字形に南肩段状である。18-SP54・55・56 には柱痕が確認できる。

すべての遺構から遺物が出土していないため、時期は不明である。

18-SP54 は楕円形を呈し、長径約 0.30 m、短径約 0.25 m、深さ約 0.08 mを測る。断面形状は浅い皿状に段落ちである。埋土は２層に分層でき、柱痕が確認できる。埋土は柱痕が黄灰細砂混じりシルト、掘方が暗灰黄シルト～粘土である。

18-SP55 は楕円形を呈し、長径約 0.60 m、短径約 0.50 m、深さ約 0.26 mを測る。断面形状は V 字形に南肩テラスである。埋土は４層に分層でき、柱痕が確認できる。埋土は柱痕が黒褐細砂混じりシルト～粘土、掘方が黒褐粘土混じりシルトと黄灰細砂混じりシルト、褐灰シルト混じり粘土である。

18-SP56 は楕円形を呈し、直径約 0.56 m、短径約 0.37 m、深さ約 0.10 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は２層に分層でき、柱痕が確認できる。埋土は柱痕が黄灰細砂混じりシルト、掘方が暗灰黄シルト～粘土である。

18-SP57 は円形を呈し、直径約 0.46m、深さ約 0.11m を測る。断面形状は椀状である。埋土は２層に分層でき、灰黄褐シルトと暗灰黄シルト～粘土である。

18 ー SP63（図 171）

第 18 調査区北西側で検出したピットである。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位 N-78°-W、検出面の標高は 5.15 mである。

長軸約 0.57 mを検出し、短軸約 0.30 m、深さ約 0.14 mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は３層に分層でき、柱痕が確認できる。柱痕が黒褐粘土混じりシルト、掘方が褐灰シルト～粘土と黄灰シルト～粘土である。

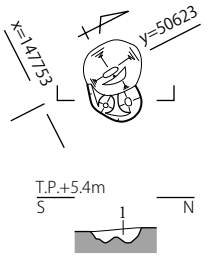
遺物が出土していないため、時期は不明である。

18 ー SP75（図 171）

第 18 調査区北西側で検出したピットである。攪乱に切られるが、検出した平面形状は楕円形である。主軸方位 N-53°-W、検出面の標高は 5.20 mである。

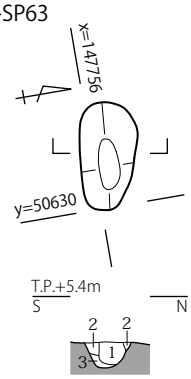
長軸約 0.84 mを検出し、短軸約 0.31 m、深さ

18-SP31



1　10YR4/2 灰黄褐　シルト　地山ブロック 3%

18-SP63

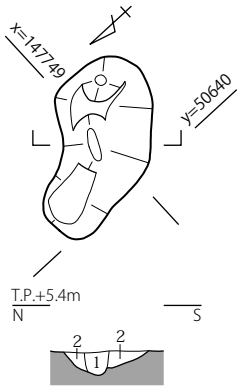


1　10YR3/1 黒褐　粘土混じりシルト　径１～２㎝程度の地山ブロック 2%
2　10YR4/1 褐灰　シルト～粘土　径１～２㎝程度の地山ブロック 20%
3　2.5Y4/1 黄灰　シルト～粘土　ほぼ地山土で構成

18-SP75

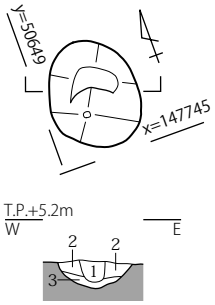
1　2.5Y4/2 暗灰黄　細砂混じりシルト　Mn・Fe 沈着径１㎝程度の地山ブロック 2%
2　2.5Y4/1 黄灰　細砂混じりシルト　径１～３㎝程度の地山ブロック 10%
3　10YR5/1 褐灰　シルト～粘土　ほぼ地山土で構成

18-SP122

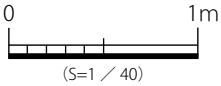


1　10YR3/3 暗褐　粘土混じりシルト　径１～２㎝程度の地山ブロック 3%
2　10YR4/2 灰黄褐　シルト～粘土　径１～３㎝程度の地山ブロック 10%

18-SP105



1　10YR4/1 褐灰　シルト　径１㎝程度の地山ブロック斑状に 3%
2　10YR4/2 灰黄褐　シルト　径３㎝程度の地山ブロック 5%
3　10YR5/2 灰黄褐　細砂混じりシルト　ほぼ地山土で構成



（S=1／40）

図 171　18-SP31・63・75・105・122　平・断面図

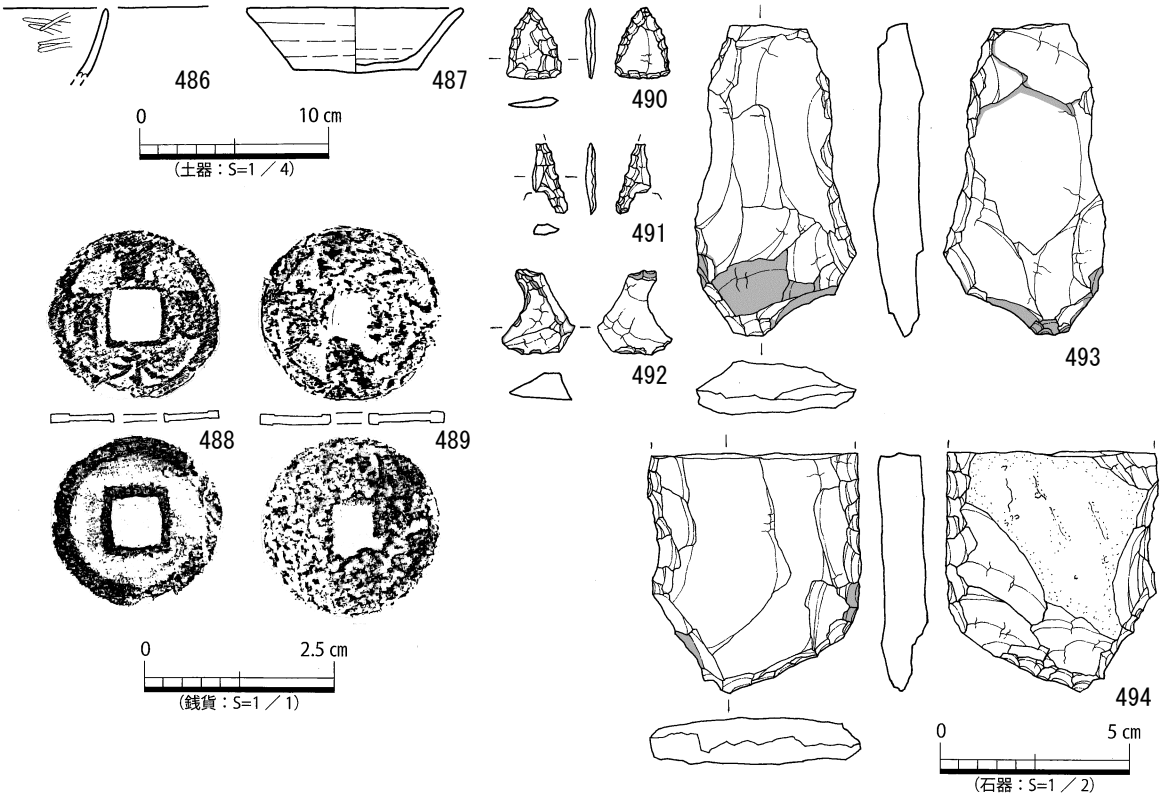


図 172　中央工区　出土遺物実測図

約 0.13 mを測る。断面形状は椀状に段落ちである。

埋土は３層に分層でき、柱痕が確認できる。柱痕が暗灰黄細砂混じりシルト、掘方が黄灰細砂混じりシルトと褐灰シルト～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

18 ― SP31（図 171）

第 18 調査区中央西側で検出したピットである。攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、検出した平面形状は楕円形である。主軸方位 N-58°-E、検出面の標高は 5.20 mである。

長軸約 0.30 mを検出し、短軸約 0.21 m、深さ約 0.05 mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は灰黄褐シルトの単層である。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

18 ― SP105（図 171）

第 18 調査区中央東側で検出したピットである。18-SX101 下層で検出した。検出した平面形状は楕円形である。主軸方位 N-5°-W、検出面の標高は 5.00 mである。

長軸約 0.60 mを検出し、短軸約 0.48 m、深さ約 0.14 mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は３層に分層でき、柱痕が確認できる。柱痕が褐灰シルト、掘方上層が灰黄褐シルト、掘方下層が灰黄褐細砂混じりシルトである。

遺物は弥生土器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

遺構の切り合い関係から弥生時代後期以前と考えられる。

18 ― SP122（図 171）

第 18 調査区中央で検出したピットである。平面形状はひょうたん形を呈する。主軸方位 N-33°-W、検出面の標高は 5.15 mである。

長軸約 1.00 mを検出し、短軸約 0.50 m、深さ約 0.12 mを測る。断面形状はゆるいＶ字形である。

埋土は２層に分層でき、柱痕が確認できる。柱痕が暗褐粘土混じりシルト、掘方が灰黄褐シルト～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

遺構外出土遺物（図 172）

10- 精査で火打石（492）、12- 撹乱から土師器杯（487）、13- 撹乱から銭貨（寛永通宝）（488）、銭貨（乾隆通宝）（489）、十円玉（昭和 39 年）、17- 撹乱から五円玉（昭和 23 年）、13- 包含層から石鏃（490）、17- 包含層から打製石斧（494）、黒色土器 A 椀口縁部（486）、18- 包含層から石鏃（491）、打製石斧（493）が出土した。

高松市埋蔵文化財調査報告第 201 集
栗林小学校校舎等建設事業等に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

栗林田中遺跡
―第 1 分冊―

平成 31 年 3 月 31 日　発行
編　集 / 発　行　高松市教育委員会
高松市番町一丁目 8 番 15 号
印　刷　藤田印刷株式会社
高松市北浜町 4 番 5 号